
東方幻想斬

春夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想斬

【Nコード】

N1351T

【作者名】

春夏

【あらすじ】

藍染との闘いで死神の力を失った黒崎一護。ルキアと別れ幽霊も見えなくなった一護はある日の夜に、いつも通りに自分の家の自室で寝ていた。そして、目を覚ました黒崎一護は見知らぬ世界にいた。その世界の名は幻想郷：外の世界とは強力な結界（博麗大結界）で遮断された世界。その為、外の常識が一切通用せず、外の世界とは異なった文明である。その幻想郷で黒崎一護はどう生き抜くのか。BLEACHと東方projectの二次創作です。キャラ崩壊な上に駄文です。それでも良い方は見てください。

第1斬 【序章 黒崎一護消失】（前書き）

初めまして春夏です。初投稿です。駄文ですがよろしくお願ひします。

第1斬 【序章 黒崎一護消失】

静寂な夜、暗い部屋の中に月明かりだけがその部屋を少し明るくする。

月明かりのおかげでベッドの上に眠る一人の男の姿を確認することができる。

だが寝ているので確認できるのはオレンジの髪ということと、15歳ほどの少年ということだけだ。だが、それだけで分かる。

彼が黒崎一護

元死神代行であり世界を護った男。

けど今、黒崎一護の死神の力は藍染を倒すために消失した。最後の月牙天衝？無月？を使う代償として死神の力の全てを失ったのだ。

あれから一ヶ月経った。

ルキアと別れ幽霊も見えなくなった普通の高校生。

幽霊の見えない生活、普通の生活に一護は憧れていた。

そして、一護は憧れていたものになった。

だが、自分は本当にそんな生活に憧れていたのか？と自分でも疑問に思っている。

そんな気持ちをみんなに隠し、自分の気持ちに嘘を憑きながら一ヶ月経つ。

突然に、一護は部屋から静かに消えていった。

いや、消えたのでは無く落ちたのだ。

唐突の事に何が起きたのか全く分からない。

一護はそのまま起きることなく静かに部屋から姿を消した。

そして、その光景を一護の部屋の窓の外から一人の女性が少し真剣な面持ちで見っていた。

なぜ、その女性が真剣な面持ちで一護の消える瞬間を見ているのかは分からない。

その女性は静寂な夜、一人呟く。

「幻想郷を護って下さいね。黒崎一護君」

女性は居ない一護に勝手に頼み込んだ。

何を頼んだのかは謎のまま、女性は姿を消した。

そして、数時間後に一護は別世界で目を覚ます。

第2斬 【謎の森にて】（前書き）

第2話 とりあえず完成です。
暇な方は見ていってください。

第2斬 【謎の森にて】

黒崎一護は仰向けのまま目を覚ました。

普通なら最初に目に映る光景は部屋の天井なのに、なぜか綺麗な青空だった。

一護は仰向けのまま首を横にし周りを見る
そして一護が見たものは見知らぬ森だった。
寝起きの一護は上半身を起こし取りあえず呆然と森を眺める。

（あれ…何処だここ？）

目が覚めてきた一護は現状を理解する為に頭をフルに使う。

（…って、どうなってんだよ一体！？昨日は家でいつも通りベットで寝てたはずだぞ！それなのに起きたら森の中って…もしかして親父の悪戯…つなわけないか）

一護は立ち上がり周りを見渡す。

（家の近所にこんな深い森なんて有ったか？）

一護は空座町の風景を思い出す。

だが、やはりこんな深い森など記憶には無かった。

（もしかして、空座町の外か？何で俺がこんな森に？…取りあえず人を探して此処が何処なのかを聞かねえと）

一護は森の中を縦横無尽に歩き出した。

歩いている最中、一護はなぜ目を覚ましたら自分が見知らぬ森の中

に居たのかを不思議に思っていた。

なぜなら一護は寝る前の記憶がはっきりしているからだ。
それなのに起きたら訳の分からない森の中。

誘拐：いや、有り得ない。

たしかに昨日はカーテンを閉めて寝なかったが、窓はちゃんと鍵を
掛けてから寝た。

もし誘拐だとしても俺を見張る誘拐犯も居ないし、監禁もされてい
ない。

だったら一体：

その時、不意に森の奥から何かの歩く音がした。

「！人か？」

一護は恐る恐る足音のした方に近づいていく。

逃げる…という術はもうできない。

一護が人の足音だと思ったそれは人ではなく、漫画や映画などでし
か見たことのない異形の化物だった。

人間を優に超える体格のデカさ。

両手の指先には鋭く尖った長い爪。

そして何より人間と違うのは身体を全て覆う茶色い毛と獣の顔。

まるで狼の化物だ。

その化物は獲物を見つけたような眼で一護を見る。

(！？虚…いや、これは虚じゃねえ！？)

それは虚では絶対有りえなかつた。

なぜなら一護には霊力が無く虚を見る事はできないからだ。それに

虚には有るはずの胸の孔と仮面がその異形の化物にはドコにも無いからである。

「じゃあねえ！」

一護はズボンのポケットに有った代行証を取り出した…勿論何も起こらない。

(！しまった！いつもの癖で…死神にはもう成れねえんだった！)

死神代行の時の一護なら代行証を握っただけで死神になれたが、今の一護は霊力が無く死神にはなれない。

化物は鋭い牙が沢山生えた口を開き凄まじい咆哮を上げた。

そして化物は自分の鋭い両手の爪で一護に襲い掛かった。

一護は一瞬焦りを見せたが化物の攻撃を難なく避ける。

化物は避けられた事に驚いたのか少し動揺する。

再び化物は両手の爪で一護に襲い掛かるが、一護は全ての攻撃を避ける。

一護は死神時代、仲間を護る為に鍛え上げた身体と反射神経を活かしているのだ。

だが相手は人間ではない異形の化物だ。

普通の人間の一護には勝ち目は無く体力が衰え始める。

(くそ…！そろそろ身体の限界だ。今の俺じゃこいつには勝ち目はねえ。どうすりゃ…)

体力が衰え、避けるのがやっとに成った途端に一護は足元の木の根に気づかず片足を躓き背中から地面に倒れこんだ。

化物はその隙をつき、手の爪で一護を突き刺そうとした。

(やべえ…やられる！)

一護は終わりかと思つた瞬間、目の前に誰かが現れた。そいつは変わった巫女装束を着ている。

袖がついておらず、白色の袖を別途腕に括りつけ、肩と腋の部分を露出している。

しかも下は袴ではなくスカート。

もはや本当に巫女さん何ですか、という巫女装束である。

その謎の巫女は一護を爪から何らかの力で護り、一瞬にして化物を倒してしまった。

一護は上体を起こし目を丸くする。

「…あんたは、一体…？」

背中を向けている謎の巫女に問いかける。

あのデカく頑丈な身体の化物を自分より小さい少女が一瞬にして倒してしまった。

一護は驚くしかなかった。

そして謎の巫女は一護の方に振り向き一護の質問に答える。

「博麗 霊夢」

霊夢との出会いが一護の運命を大きく変える事になる。

第3斬 【悪夢との出会い】（前書き）

今回の話はキャラ崩壊がありそうので少し怖いです。

第3斬 【霊夢との出会い】

「で、あんたの名前は？」

霊夢という巫女は一護の名前を聞いてきた。

人の名前を聞いていて自分の名前を言わないのは無礼だと思った一護は質問に答える。

「黒崎一護」

一護は名前を言うと同時に立ち上がる。

霊夢は立ち上がった一護の身体をじろじろ見始めた。

「な、何だよ？」

初めて会った奴に自分をじろじろ見られて気分を悪くしない人はいない。

今は私服を着ているので見られてもそう恥ずかしくないが、寝ていて此処に来たので現在は裸足だ。

そして霊夢は何か分かったかのように一護の眼を見て言う。

「…あんた、外来人ね」

「…外来人？」

唐突に意味の分からない事を言われて少し困惑する。

霊夢はやっぱりねというような顔をして口を開く。

「外から幻想郷に入って来た人の事よ。率直に言っと、あんたは自

分の住んでいる世界から、この幻想郷に不運にも幻想入りしてしま
ったっていう事」

霊夢はいきなり一護に訳の分からない説明をし始めて、一護の頭が
こんがらかる。

「ちょっとまって！」

一護は霊夢の理解できない説明を止める。

「いきなり幻想郷とか訳分かんねえ事、言われても理解できねえよ。
一から話してくれねえか？」

「な、何よ偉そうに！何で私があんたの為にそこまで…」

「頼む」

一護は真っ直ぐな眼で霊夢を見て頼み込む。

霊夢はその真っ直ぐな眼に負けたのか、仕方なく言う事にした。

「仕方ないわね。じゃ一から説明するからよく聞くように」

「ああ。さんきゅ」

一護は一言礼を言う。

霊夢は近くに有った切り株に腰を下ろす。

一護はそのまま地面に座り込む。

それから、霊夢は一護に幻想郷の大間かな説明を話した。

そして数十分後、ようやく霊夢の説明が終わった。

「どう、分かった？」

「ああ、大体は。つまり、この幻想郷とかいう世界は博麗大結界っていう結界で、俺が住む世界とは完全に隔離された世界って訳だな」

「まあ、そんなとこね」

「すげえな。だからこんな妖怪とか居るのか」

一護は倒れている妖怪を見る。

「あんたも凄いわよ。こんな状況を簡単に受け入れるなんて」

「!...あ、ああ。そうだな」

一護の表情が少し暗くなる。

霊夢はそんな一護の表情を見て少し気にする。

「どづしたの？」

「...!あ、いや、何でもねえよ。まあ俺は何でも受け入れ安い性格なんだ」

霊夢は「そお」とだけ答えた。

黒崎一護は元々死神代行で死後の世界？尸魂界？や？地獄？、現世と尸魂界の狭間に存在する？虚圏？にも行った事があるのだ。

今さら、幻想郷とかいう場所に来ても、それ程までに動揺はしない。

「で、幻想郷から外の世界に戻る方法は？」

一護は今、一番聞きたいことを質問した。

「え？」

「あなたなら出来るだろ。さっきの説明が正しかったら」

霊夢は黙りこみ、俯く。

一護は何か悪いことを聞いたのかと思い、少し困惑する。

「お、おい。急にどうしたんだよ？」

「…き…ない」

霊夢は自分にしか聞こえない位の声で何かを言った。

一護は少しだけ聞こえたので尋ねる。

「何て言ったんだ？」

「…できない…帰せないの。この幻想郷から、あなたの世界に」

一護はそれを聞き動揺する。

「…な、どついう事だよ…？」

「分からない。一昨日までは結界に何の異常も無かったんだけど、昨日…結界に原因不明な異常が起きて、博麗大結界がまるで誰かに

操られているような感じがするの。いつもなら任意に結界を緩めたりできたのに」

「いいのか、勝手に結界を緩めて…」

一護は最後の霊夢の言葉に啞然とする。

「とにかく私はこの異変を解決しないといけないのよ。博麗の巫女として！」

霊夢はいきなり立ち上がりガッツポーズを取る。

一護はそれを見て微笑む。

そして一護も立ち上がり口を開く。

「じゃあねえ。俺も手伝ってやるよ。その異変の解決に」

霊夢は一護のその言葉に一瞬茫然自失した。

「…あ、あなたなんか足手まといになるからいいわよ！」

「別にいいだろ。それに、その異変が解決しねえと俺は帰れねえんだし。手伝ってやるつつつてんだから、有り難く聞き入れるよ。俺は絶対に足手まといにならねえから」

霊夢は目を丸くし、そしてため息をつき答える。

「分かったわ。あなたがそこまで言っんなら手伝わしてあげる」

「ああ。じゃあ改めて」

一護は片手を霊夢に差し出す。

「よろしくな、霊夢」

「いちいちこそよろしく、一護」

霊夢は片手を差し出された一護の手に持っていき握手を交わした。

後、一護と霊夢はあらゆる異変に立ち向かう事になる。

第4斬 【博麗神社へ】（前書き）

文才が欲しいなと思いつつながら書きました。

東方神霊廟の製品版を早くプレイしたいです（今の願望）。

第4斬 【博麗神社へ】

黒崎一護は博麗霊夢と共に博麗大結界に起きた異変を解決する事となった。

その後、一護は霊夢が住む博麗神社で世話になることになり、霊夢の案内により向かった。

数十分後、ようやく一護は博麗神社の鳥居をくぐり到着した。

一護は到着すると同時に両手を膝に付き、顔を下へ向けた。

一護の息は荒く、ポタポタと顔から汗が地面に零れ落ちている。まるで長距離走を終えた陸上選手のようにだ。

そこへ、清々しい顔をした霊夢が疲れ果てた一護に声を掛ける。

「…大丈夫？」

当然大丈夫じゃない一護に分かりきった質問をした。

一護は自分の前に立つ霊夢に向かって顔を上げる。

「大丈夫な訳ねえだろ！」

一護は怒り混じりの声で答える。

「テメエが急に飛んで行くから、俺はその後を全速力で走って追わねえといけなかったんだよ！」

数十分前、博麗神社で世話になる事が決定した後…。

「それじゃ、博麗神社に案内するからついて来て」

「ああ」

一護が答えると同時に、霊夢は一護に背中を向けた。その瞬間、霊夢の身体がふわりと浮く。

「!…」

一護は霊夢が浮いた事に少し驚く。

「…お、おい…オマエ…」

一護は霊夢に声を掛けようとした瞬間、霊夢が空高く飛んだ。そして霊夢はそのまま神社の方へ飛んでいった。

「!あ、コラ! テメエ待ちやがれ! 飛んで案内するなんて聞いてねえぞ!」

一護の制止する声が聞こえないのか、霊夢は飛行を止めない。

一護は舌打ちすると、「あの野郎ッ」と一言吐き捨て、上空を飛んでいる霊夢の後を走って追った。

「あゝそれは…悪かったわね。」

霊夢は頭をポリポリ掻きながら一言、心にもない詫びを入れた。

「デメエ、ちゃんと謝れよ…!」

「ここが私の住む博麗神社よ」

霊夢は一護の言葉を完全に無視し、自分の神社を紹介する。

一護はこれ以上言っても無駄だと思い、博麗神社を見た。

「デケエな。」

一護の言う通り、なかなか大きい神社で、あまり参拝客が来ないのか賽銭箱が少し寂れている。

「ええ。大きいのはいいんだけど…」

瞬間、霊夢の表情が暗くなる。

一護は横目で霊夢の暗くなった表情を見て

「どうした、霊夢？」

気になったんで聞く。

「…お賽銭…」

小声で答えた霊夢に一護は、「は？」と答える。

どうやら一護には聞こえなかったらしい。

「お賽銭が…全然入ってないのよ…」

一護に聞こえるように言った霊夢はもつと暗くなる。

「賽銭が入ってねえって、それって参拝者が来てねえって事だろ」

一護は平然と賽銭が入ってない理由を答えた。

霊夢は痛いところを突かれたのか、一護を殺気混じりの眼で睨み付ける。

霊夢の睨み殺すような眼に恐怖を感じた一護は一言謝る。

「わ、悪い」

一護は取りあえず、賽銭の事については触れないでおこうと心に誓った。

そして一護は話題を変えようと、空を仰ぎ見る。

空から地を照らす太陽の位置を見て、ちょうど昼頃だと推測した。

「そついや、朝から何も食ってねえな」

一護がそつ呟くと霊夢に聞こえたのか答える。

「そついえば、そろそろ昼時ね。昼食にしましょうか」

いつの間にか機嫌が直っていた霊夢が昼食を提案する。

一護も腹が減っていたので、その提案に賛成した。

それよりも一護は霊夢の機嫌が直っていて安堵していた。

一護は霊夢と居間で食事を終えた。

霊夢は食器を洗い終え居間へ戻った。

「で、一護は今からどうするの？」

霊夢は縁側に座っている一護に問いかける。

一護は後ろに立つ霊夢の方に振り向き少し考え込む。

「あゝそうだな。じゃあ早速で悪いけど？弾幕？ってのを教えてくれねえか？」

「いきなりね」

一護は森の中で弾幕ごっここと能力について教わった。

弾幕ごっこことというのは弾幕を使った戦い。

何か白黒着けたい時などに、よく行われるらしい。

弾幕を出し、対象の相手を撃ち落とせば勝利という簡単なルール。

さらに、そこで使用されるのが“スペルカード”というもので、発動することによって特別な弾幕が撃てる。

弾幕やスペルカードは自分の能力によって大きく反映される。

だけど普通の人間は能力も無ければ、弾幕も出せない。

だが、霊夢は俺には素質があると言った。

「頼む。俺に弾幕の出し方を教えてくれ。異変を解決するには必要なんだから」

「だったら、まずは一護の能力が何なのかを調べないとね」

「俺の能力…？」

一護は自分の能力が何なのかを考えたが、もちろん分かるはずがな

い。

（俺の能力って何だ？霊力を失ってから斬魄刀も無くなって、唯一残ったのがこの代行証）

一護はズボンのポケットから代行証を取り出しそれを見つめた。

霊夢はその代行証を見て何かに気付いたのか微笑んだ。

「一護、あなたの能力は…」

「霊夢！遊びに来たぜ！」

霊夢は小声で何かを言おうとした時、テンションの高い声が空から聞こえてきた。

そのテンションの高い声のせいで、霊夢の小声は掻き消される。

一護は声のした方を見ると、箒に乗った少女が自分の前に空から降りてきた。

ウェーブのかかった金髪の髪に魔女を連想させる黒い衣服。

スカート部分には白のエプロンを着けている。

頭には黒い魔女のようなとんがり帽子。

片手には先程乗っていた箒。

どこからどう見ても、魔女のような格好だ。

年齢は霊夢と同じくらいだろう。

「…って、お前誰だ？」

魔女のような女は一護を見て聞く。

「お、俺は黒崎一護。訳あって博麗神社で世話になってる。あなた

は？」

急に誰？と言われてしまったので、何故か慌てる様にして答えた。そして、一護も魔女のような女と同じ質問をする。

「私は霧雨 魔理沙。見ての通り魔法使いだぜ」

「魔法使い…あの御伽話とかに出てくる…」

「ちょうどいいところに来てくれたわね魔理沙」

一護の話を霊夢は遮ぎり、靴を履いて縁側から出た。

「何がちょうどいいんだ、霊夢？」

魔理沙は霊夢の方を見て聞く。

霊夢は微笑み口を開いた。

「今から一護と弾幕ごっこをしてもらおうわ」

この突然な霊夢の発言により、一護の能力が覚醒する事になる。

第4斬 【博麗神社へ】（後書き）

他の皆様の後書きを見ると、書いていない自分がむなしいと思っただので次回から何か書きます。

第5斬 【弾幕ごっこ】（前書き）

ようやく第5話を書けました。

正直かなり疲れました。

テスト前なのに何をしているんだらう俺は…

第5斬 【弾幕(っっ)】

俺、黒崎一護は霊夢につれられ博麗神社から少し離れた平原にやってきた。

裸足じゃ嫌なので博麗神社に置いていたボロい草履を履いている。今、俺と魔理沙は広い平原の真ん中辺りで向き合っている。

霊夢は俺ら二人から少し離れた場所に有る丁度良い大きさの石に座っている。

そして俺は今、霊夢に言いたい事が一つ合った。それは…

「おい霊夢。弾幕を出せない一護とじゃ勝負にならないぜ。」

魔理沙が俺の言いたい事を代弁してくれた。

「いいのよ、それで」

霊夢は他人事のように答える。

「いいわけねえだろ！」

一護の怒声が静かな平原に響く。

「弾幕の出せねえ俺がどうやって魔理沙と戦うんだよ！まさか実戦で弾幕を覚えるなんて無茶…」

「そつよ」

霊夢の一言に一護は一瞬絶句する。

まさかと思つて言つた事が当たつたのだ。
たしかに一護は口で説明するより実戦で教えた方が覚えが早いだろ
う。

しかし、今の一護は普通の人間。

弾幕ごつことはいえ当たり所が悪ければ死ぬ事だつてある。

今までは死神の力で、どれだけ強い衝撃でも耐えてきたが、今では
不可能。

その事は一護が一番理解している。
理解した上で

「…分かつたよ。たしかに俺はそっちの方が向いてそつだ」

一護は了承した。

「分かつたんなら、とつとと始めなさい」

この霊夢の発言により弾幕勝負が始まつた。

「いいぜ。一護がやる気なら私もそれに乗つてやるぜ！」

魔理沙は持つていた筈に跨り、一護がどう足掻いても届かない位置
まで飛んだ。

「！あ、おい！飛ぶなんて卑怯だぞ！」

「何言つてんの。飛ぶのは基礎だぜ」

一護は飛んでいる魔理沙を見上げながら、すぐさま攻略法を考えた。

「行くぜ一護」

一護が考えている中、魔理沙はカードを取り出した。

「魔符『ミルキーウェイ』！」

魔理沙がスペルの発動を宣言した瞬間、魔理沙から星型の弾幕が一護に向かって無数に発射された。

「！何！？」

一護は咄嗟の判断力で大地を駆け走りなんとか避け切った。

一秒でも駆け出すのに遅れたら、終わっていたであろう。

（あれがスペルカードってやつか。まるで死神が使う鬼道みたいだな）

「おー避けたか。いいねえ、そこなくっちゃ」

魔理沙は自分の弾幕を避けた一護に感心し新たなカードを取り出した。

「次行くぜ一護」

「チツ、またスペルかよ」

一護は不服そうに舌打ちし言った。

魔理沙は聞こえなかったのか、気にせずスペルを唱えた。

「星符『メテオニックシャワー』！」

魔理沙から無数の星型の弾幕が一直線に一護に向かって発射された。

一護はそれをまた逃げるように避け切った。

今の一護にはそれしかできない。

一護は弾幕を出せないから反撃する事が出来ず、逃げて避けるという選択肢しかないからだ。

それに対し傍観者の霊夢は

「ちょっと、逃げてばっかいないで戦いなさいよ！情けないわね！」

一護に向かって罵声を浴びせる。

「うるせーよ！つうか見てるだけならヒントぐらいよこせよ！こんなもんノーヒントで出せるわけねえだるうが！」

一護はイラッときたのか霊夢に反論する。

「！な、なんで私が…ッ」

霊夢が反発しようとした時、魔理沙が口出しする。

「そうだぜ霊夢。ヒントくらい言ってやれよ。これじゃあ、一護がボロボロになるだけだぜ」

魔理沙が一護の味方をしてくれた。

「…わ、分かったわよ。じゃあヒントだけ教えてあげる」

魔理沙の押しに負けたのか霊夢が一護に渋々ヒントを言うことになった。

「一護、あんたにとって今、一番身近なものって何？」

「俺にとって今、一番身近なもの…?」

一護は霊夢の言ったヒントを口に出して復唱する。

「そうよ。それが一護の能力を覚醒させてくれるわよ」

「俺の能力…」

「能力が分かれば自然と弾幕も使えるようになるわ」

(身近なもの…つまり俺がいつも身につけているもの…?)

一護は自分の身近なものを考えているので、足が止まっている。それを見た霊夢が魔理沙に向かって口を開く。

「魔理沙！何休んでいるのよ。早く弾幕を撃ちなさい。修行にならないでしょう！」

「お、おう」

(いつから修行なんて大層な事になったんだ?)

魔理沙は心の中で疑問の言葉を呟く。

そして再びカードを取り出した。

「魔符『ミルキーウェイ』！」

魔理沙は最初に使用したのと同じスペルを発動した。

一護は考え事から魔理沙のスペルの発言に気付き再び逃げながら弾幕を避ける。

「くそっ…考える時間くらいくれよ!」

一護は小声で強く言った。

もちろん自分以外誰にも聞こえることはない。

そして一護は魔理沙の弾幕から逃げながら、自分のズボンのポケットに入っている?ある物?に気付く。

(まさか…いや、もうコレしか考えられねえ)

一護はズボンのポケットの中から代行証を取り出した。

それこそ、今の一護にとっては一番身近なものだと判断したからだ。だが、まだ問題がある。

それを使って、どうするのかだ。

(…どうする…!身近なものが代行証しかねえのは分かったが、でもどうやって、それで俺の能力が分かるんだ!?どうやって使うんだ!?)

「一護、あなたの誇りは何?」

「!?!…俺の、誇り…」

一護は霊夢からの唐突な質問に少し困惑する。

「例えば、そうね…。一護と初めて会った時から感じてはいたんだけど、あんた今まで数々の戦いを勝ち抜いて来たでしょう」

「!?!?何で、分かるんだよ…!」

一護は話してもいないはずの事を言われ目を丸くする。

「当たり前でしょ。あなたの眼を見れば簡単に分かるわよ。私を誰だと思ってるの?」

「…で、何が言いてえんだ?」

「あなたは自分の力に誇りを持った事はあるのかってことよ」

「誇り…」

「私かなぜ、あなたと一緒に異変の解決を試みたか分かる?…私はあなたから沢山の自分の力に対する誇りを感じたからよ!」

「…」

一護は口を閉じ、目を瞑った。

「…霊夢、攻撃はしなくて良いのか?」

いつの間にか攻撃を中断している魔理沙は霊夢に向かって言う。

「ええ。ちょっとまってなさい。ようやく一護の能力が覚醒しそうだから」

霊夢は期待の眼差しで一護を見る。
それに続き魔理沙も一護を見る。

（俺が自分の力…即ち、死神の力に誇りを持った時のこと…）

一護は今までの戦いや仲間や護りたいもの等を思い出していた。

（そんなもん…）

そして…

（数え切れねえよ…！！）

そう思った瞬間、一護の持っている代行証から黒い物質が現れた。

（！？）

一護はそれを見て驚愕した。

もやもやしていて、まるで霊圧のような感じだ。

それが代行証を中心にでかい卍型のような形になっていた。

これでは、まるで一護が使っていた斬魄刀の

「…斬月の…鏢…！？」

一護は自分の能力を霊夢の助言をもとに遂に覚醒させたのであった。

第5斬 【弾幕ごっこ】（後書き）

<次回予告>

一護「ようやく俺の能力が覚醒したな」

霊夢「誰のおかげか分かってるわよね」

一護「え、ああ。もちろんだ」

霊夢「明日から掃除、洗濯、その他の雑務を全てやってもらうから」

一護「…はい」

魔理沙「人使い荒いな霊夢は。つうか次回予告になってないぜ」

第6斬 【一護の能力】（前書き）

ようやく一日目が終わりです。

第6斬 【一護の能力】

「これは、斬月の鏢!？」

一護の持つている代行証から黒い霊圧が現れ、代行証を中心に黒い霊圧が卍型の形に変わった。

霊夢も魔理沙もそれを見て驚いている。

「なあ、霊夢。あれが一護の能力なのか？」

魔理沙は一護の持つている代行証を指差して聞く。

「恐らくね」

「何で、霊夢はあれが一護の能力を引き出す物って分かったんだ？」

再び霊夢に聞く。

「神社で一護があの変なドクロを持ったとき少し妙な力を感じたのよ。まるであのドクロに宿る魂を引き出したようなね」

「魂を引き出す…よく分からないぜ」

魔理沙は理解できず首を傾げた。

「それだけじゃないわ。一護はあんたの弾幕を避けて逃げている時も、一護のスピードは一瞬だけ人間の出せる速度を優に超えていたわ。その時、一護の足元を見たら神社の時と同じ力を感じたの」

「それって地面の魂を引き出しているような力か？」

「その通りよ。魔理沙も知っているでしょう。魂っていうのは生物だけじゃなくて、水や椅子、土や畳、その他の道具なんかも宿るってことぐらい」

「ああ。知ってるぜ」

「一護はまるでその魂を引き出して操っているようにみえたの。地面の場合は地面の魂を引き出して速力の補助をさせて速いスピードを出したりとか」

「うーん、成る程。少し分かってきたぜ」

魔理沙は理解したかのように頷く。

「あのドクロの変化も原理は同じはずよ。もしそうなら、一護の能力は差詰め？物質に宿る魂を操る程度の能力？ってところかしらね」

「物質に宿る魂を操る…か」

魔理沙は一護の能力に興味を示したのか、目をキラキラさせている。

「魔理沙、続きといこうぜ」

一護は卍型の代行証を構え言う。

「ああ、良いぜ。私も早く能力を覚醒させた一護と戦いたいからな
！」

魔理沙はカードを取り出しスペルを唱えた。

「魔空『アステロイドベルト』！」

魔理沙を中心に先程のミルクィウェイのような星型の弾幕が展開された。

だがミルクィウェイとは弾幕の発射される数が圧倒的に違う。

「喰らうかよ！」

隙間が殆ど無い弾幕を一護は並外れた動体視力と反射神経で避ける。そして、一護は地面の魂を引き出して反発力の補助をさせ高く跳んだ。

綺麗に弾幕の隙間を通り、届くはずのない魔理沙の位置まで行った。

「うお……！」

魔理沙は自分の位置まで届きそうな一護に驚き、上昇する。

「逃がすかよ！」

一護は上昇する魔理沙を見て、透かさず卍型の代行証をブーメランを投げるような感じで魔理沙に向かって投げた。

「ーやば」

魔理沙は負けたと思い目を閉じた。

瞬間、魔理沙の額にコッソンという音と同時に代行証が当たった。

魔理沙は「いたっ」と素っ頓狂な声を反射的に出す。

そして目を開き、最初に見たのは普通の状態に戻っている代行証だ

った。

その代行証が地面に向かって落ちていつている。

一護もその代行証を追うように地面に向かって落ちていつている。

「あれ、何で全然痛くないんだ？」

魔理沙は額を摩りながら疑問を呟いた。

一護は地面に着地すると同時に地面に落ちた代行証の方に向かって走った。

一護が代行証を拾うと同時に再び代行証から黒い霊圧が現れ卍型の形に変わった。

(俺が掴んでる間だけ鐳の形の霊圧が出るのか…)

なぜ投げたはずの代行証の攻撃が魔理沙に全く効かなかったかという、一護が魔理沙に向かって代行証を投げた瞬間、代行証から出ている黒い霊圧が消えたからである。

(そもそも)

一護は卍型の代行証を地面に突き刺した。

だが突き刺した力によって少し地面が窪んだだけで、斬れたという感覚は無かった。

(この鐳にそういう力は無えか。そりゃそうだ。鐳で相手が斬れねえのなんて当たり前だ)

魔理沙は一護が考えている隙を狙いスペルを唱えた。

「星符『メテオニックシャワー』」

星型の弾幕が一護に向かって発射される。

「！うおっ…！」

一護は驚くも紙一重で避ける。

「危ねえ！ギリギリだったぜ」

一護は言い終わると代行証を持っていない方の手で代行証を自然に触れた。

その瞬間、黒い霊圧が一瞬揺らいだ。

一護はそれに驚き何かを思い出そうとした。

（今の感覚は…！）

魔理沙もその一瞬の揺らぎを見落とさず、それを調べる為に再びスperlを唱えた。

「星符『メテオニックシャワー』」

さつきと同じ星型の弾幕が一護に向かって襲い掛かる。

一護はそれから逃げる事無く、逆に魔理沙に攻撃を仕掛ける体勢に入った。

魔理沙は逃げない一護を見て、一護が何をするのかを調べる為に一護を凝視した。

（いける。今の感覚は確かに、月牙天衝の感覚！）

一護は代行証を持つ手の上から、もう片方の手で重ね持ち、投げるのではなく魔理沙に向かって月牙天衝を放つような感覚で両腕を振った。

その瞬間、黒い霊圧だけが歯車のように回転し、卍の部分の羽が回転翼になった。

回転翼の数は六枚。

それが魔理沙に向かって飛んでいった。

発射された弾幕は全てそれに掻き消されていく。

魔理沙は驚きの余り避けるのを一瞬忘れ、当たる寸前で避けた。

「危なかったぜ。今は」

「チツ、当たったと思ったのに……」

(けど、今ので感覚は覚えた。次は当てる)

一護は再び構える。

それを見た魔理沙は何やら手の平サイズの何かを取り出した。

「何だ、それは？」

一護は魔理沙が持っている物を見て聞く。

「ミニ八卦炉っていうマジックアイテムだぜ」

(マジックアイテムって、魔法道具って事か。あれで一体何するつもりだ?)

「いくぜ一護。今から出すスペルはさっきのように、そう簡単には消せないぜ」

その言葉に一護は代行証を持つ力が一段と強まった。はったりだろうが、はったりじゃなかるうが一護はこれが最後の激突だと直感したのだ。

「準備は良いか一護」

「ああ。いつでもいいぜ」

二人は睨み合い、場の空気が静まる。まるで西部劇の決闘前のような雰囲気だ。

そして魔理沙が先に口を開いた。

「恋符…！」

「うおおおおっ！」

魔理沙はスペルを唱え、一護は代行証を強く握り締める。そしてお互いが最後の技を出そうとした瞬間

「そこまでよ…！」

霊夢が制止の声を上げる。

それを聞いた二人は静止する。

「今日はこちらまでよ。二人ともお疲れ様」

霊夢は立ち上がり、弾幕ごっここの終了を告げ二人の方に歩み寄る。

「おい、霊夢。何で良いところで止めるんだよ。せつかく面白くなってきたのに」

魔理沙は最後の激突を止めた霊夢に文句を言う。

「何言ってるの。今のでお互いの技を激突させたら二人共どうなっていたのか分からないのよ」

「それは承知の上だぜ」

「あんたが承知の上でも、それで一護が大怪我したら誰が介抱すると思ってるの？それに今回の弾幕ごっこは一護の能力を調べる為に行ったことよ」

「まあ、そうだけど…」

これ以上言っても勝てないと思った魔理沙は口を閉じた。
そして霊夢は一護に近づき

「一護。あんた、自分の能力が何なのかを理解してんじゃないの？」
能力のことを聞く。

「ああ。だいたい」

霊夢はやっぱりというような顔をする。
そして霊夢は一護の能力を憶測だけと言う事にした。

「？物質に宿る魂を操る程度の能力？…で合ってるかしら？」

「物質に宿る魂を操る…。ああ、俺もそう思う」

一護も霊夢と同じ能力を推測していた。

霊夢は息をつき一護に背を向け

「分かったわ。さあ、帰るわよ。今日は疲れたわ」

と言い歩き出した。

「ああ。そうだな」

一護も疲れたのかすぐに同意した。

そして一護は霊夢の後ろについて歩き出した。

魔理沙も箒から降り歩き出した。

こうして弾幕ごっこは幕を閉じた。

夜、晩御飯を食べて風呂に入った後すぐに霊夢から寢室を借り、敷いていた布団の中に入り目を閉じた。

一護は暗い部屋の中で今日の出来事を振り返っていた。

いきなり幻想郷という世界に幻想入りして、妖怪や弾幕に能力、そして空を飛ぶ霊夢や魔理沙。

普通の世界では有りえない事ばかり起きた。

俺はそれに順応できたが、心配な事が有る。

それは自分の住む世界の事だ。

遊子や夏梨、石田やチャドや井上、たつき、ケイゴ、水色、他のやつ等が俺を心配することだ。

それが心配で仕方なかった。

その事を霊夢に言っと、霊夢は幻想郷には色んな能力を持っている奴が居るから、きつと？時？という能力を操って此処に来る前に戻せる奴が居るかもしれない、という曖昧な答えが返ってきた。

まあ、今はいくら心配しても帰ることができないから無駄だ。

とりあえず、一刻も早くこの異変を解決しねえとな。

一護は今日のことを振りかえ終えると、寝息を立ててすぐに眠りに就いた。

第6斬 【一護の能力】（後書き）

<次回予告>

一護「ようやく一日が終わったな」

霊夢「ええ。長かったわ」

魔理沙「そっぴや一護の今日の着替えはどうしたんだ？」

一護「…え？」

魔理沙「風呂上りの着替えはどうしたんだって事だぜ」

一護「…聞かないでくれ」

〔東方図鑑〕

二人が昼食を取っている時の会話

「そっぴや霊夢が飛んで神社の案内している時、妖怪とは遭遇しなかったな」

「一護は飛んでいる霊夢を追いかける為に足で走っていた時のことを思い出す。」

「運が良かったんじゃないの？」

霊夢はごはんを食べながら答える。

「そっぴなもんなのか」

「まあ、暇で仕方ないときは問答無用で妖怪退治をするけどね」
その言葉になぜか剣八を連想してしまった一護。

そして一護は自分と剣八の関係を思い出し答えを出す。

「…ああ、何で妖怪が出なかったか少し分かった気がするぜ」

第7斬 【おふくろへの不快感】 (前書き)

何か全然先に進んでないような。

第7斬 【おふくろへの不快感】

朝、一護は自分のベットの所で目を覚まし、上半身を起こした。外からは朝日が差し込み、小鳥の鳴く声が気持ちよく聞こえてくる。

だが、その小鳥の鳴き声を殺すような、でかい足音がこちらに走って来る。

一護は既に予測していた。

この足音が誰のもので、今から何をしてくるのかを。

瞬間、部屋のドアが強く開き

「グッモーニンツ！ イッチゴーツ！！」

父親の一心が、跳び蹴りを繰り出してきた。

一護はそれを、苦もなくヒョイツとかわす。

一心はそのまま部屋の窓を突き破り、窓の外に落ちてった。

「ったく、朝っぱらから何やってんだよ親父は」

一護は落ちてった一心より壊れた窓を心配する。

「おにいちゃん！ ごはんできてるから、下りてきてー！」

下の階から妹の遊子の声が聞こえてくる。

どうやら朝食ができたらしい。

一護は制服に着替え、リビングに向かう。

リビングに入ると既にもう一人の妹の夏梨が朝食を取っていた。

一護はおはよう、と言つたために口を開こうとした瞬間、再び一護の背後から一心が現れ、「息子よ！ 油断したな！！」と言い襲い掛か

ってきた。

一護は振り返らず、冷静に襲い掛かってきた一心に肘打ちを腹にぶち込む。

一心は「グバアッ!!」と濁った声を上げ、床に沈んだ。そして一護はそのまま食卓についた。

「はい、お兄ちゃん」

一護の前に、遊子がごはんのみそ汁の椀を置く。

「ありがとう、遊子」と声をかけて、一護は箸を手に取った。

「お父さんも早く食べちゃって、片付かないから」

床に倒れている一心に、遊子が言う。

一心は渋々立ち上がり食卓についた。

こうして黒崎家の朝が始まった。

全員が朝食を終え、三人は各々の学校に向かう準備をした。

「さあ、娘たち！ダンディーなダディにいつてきますのハグをしておくれ！」

大きく両手を広げた一心を見向きもせず、子供たちは準備をする。

「うっつ…！母さぁーん！この頃思春期なのか娘たちが冷たいよお
おおお！」

ポスターサイズに引き伸ばされた妻の真咲の遺影にすがりつく一心。それを見た一護は一心に向かって口を開く。

「うるせえな。遊子達がテメエに冷たいのは今に始まったことじゃねえだろ！」

一護が止めの言葉を出す。

「毎朝毎朝、本当に親父は…」

一護が真咲の遺影を見た瞬間、目の前がぼやけて来た。立ち眩みがし、立っていられなくなり膝を床についた。その一護の姿に遊子も夏梨も一心も無関心だった。まるでそこに一護だけがないような感じだ。

(何だよ一体！？どうしちまったんだよ！身体が動かねえ！)

その時、一護の目の前に一人の女性が現れた。

一護はその女性を知っている。

いや、知っていて当たり前の女性。

一護はその女性が居なければ、その女性に護られていなければ、今頃この世界には居ない。

それ程、一護にとっては大切な人。

でも、その女性はもうこの世界には存在しないはずの人。なぜなら、その女性は一護を護る為に死んだのだから。

一護はその女性を凝視する。

そして、一護は確信したように口を開く。

「おふくる…！」

一護の意識はここで途絶えた。

…夢…か…

一護は布団の中で目を覚ます。

いつもとは違う部屋。

「…そうか。此処は俺の部屋じゃねえんだったな」

一護は寝起きでボ〜としていたのか、自分の部屋と勘違いしてしま
った。

ぼんやりとした頭のまま、のそりと布団の上に身を起こす。

夢の中におふくろが出てきた。

別に出てきても、それ程気にはしないけど、何だろう…この不快感
は。

おふくろを見て不快な気分になった事など一度も無いはずだ。

それなのに、この感覚は一体…。

自分でも腹が立ってきた。

おふくろに対する自分に対してだ。

「一体、何だっつてんだよ…あの夢は…!?!」

小声で強く言う一護。

そこに霊夢が部屋の襖を開けて入ってきた。

「あら、起きてたの。」

どうやら霊夢は俺を起こしに来たらしい。

一護は夢の事を忘れ、霊夢に向かって朝の挨拶をする。

「ああ。おはよう霊夢」

「おはよう。朝食ができたから居間に来て」

霊夢はそう言うと居間に向かった。

一護は起き上がり、布団を部屋の隅に畳んで置く。
そして、居間へと向かった。

居間に入ると既に霊夢が食事をとっていた。

少しくらい待っていてくれても良いんじゃないかねえのかと内心思う。

一護は食卓についた。

一護は飯を頬張り飲み込む。

そして今日の予定を聞いた。

「今日はどうすんだ？」

霊夢は口の中の食物を飲み込み答える。

「そうねえ。まずはあなたの着物を買に行かないとね。香霖堂ならあなたの着ているような服もあるかもね」

霊夢が一護の着ている服を見ながら言う。

「俺今、金持ってねえぞ」

一護は唐突にこの幻想郷に来たので金など持ち合わせていない。
つつか現世の通貨が通じるかも分からねえけど。

「心配ないわ。こうみえても異変を解決することにお金を稼いでいるから。案外裕福な暮らししてるのよ」

(寶銭箱の中は乏しいけどな)

と、一護は心の中で思う。

間違っても口には出さない。

「それじゃあ、朝食が済んだら行くわよ」

「ああ」

一護と靈夢は再び朝食を食べ始める。

朝食を食べ終わり、靈夢が片付けを終えるまで一護は外で待っていることにした。

(…靈夢は飛んでいくって言ってたけど、また走らせれるのかな…?)

一護はまた全力で走らされる事を少し心配した。そして、不図一護はある事を思い出した。

(そういや、死神は空気中の靈子を足元に集めて空中に立っているんだよな。俺もそうだったけど。…まさか俺の能力を使えば同じ事が可能なのかもしれねえ)

一護はそれを試みた。

霊夢は片付けが終わり、一護が待つ外へと向かう。
靴を履き縁側から外に出た霊夢は目を疑った。

霊夢が見た光景とは、一護が空中に立っている姿だった。

「い、一護、あんたどうやって？」

霊夢は目を見開きながら聞く。

「ん、何そんなに驚いてんだよ。俺の能力を使えば当然だろ？」

「能力…まさか、空気中の魂を操って…」

「ああ。空気中の魂に地面を作ってもらって、俺がその上に立つてんだよ。」

一護は簡単に答える。

「それに空気中の魂を操れば、跳躍増幅＋加速もできる。これで霊夢に置き去りにされずにすむぜ」

「置き去りとは酷い言いがかりね。そんな事した覚え無いけど」

しれっと答える霊夢。

「テメエ、忘れたとは言わせねえぞ」

低い声で言う一護に対し霊夢は聞いていないのか、霊夢の身体がふわりと浮いた。
そして口を開く。

「それじゃあ、香霖堂に向かうわよ」

どうせ俺の言うことは聞かねんだよな、と思った一護は「ああ」と答え飛んでいく霊夢についてった。

第7斬 【おふくろへの不快感】（後書き）

<次回予告>

霊夢「あんたの夢だけで半分以上使ったわね」

一護「仕方ねえだろう。夢見が良いんだよ俺は」

霊夢「そういう問題なの？」

一護「他に何かあるってんだよ？」

霊夢「じゃあ今度は私の夢の話で一話分使おうかしら」

一護「…何で対抗意識持つてんだよ」

〔東方図鑑〕

「つたく、めんどくせえな」

一護はただっ広い神社の廊下掃除をしていた。

「手伝ってやるうか？一護」

そこに魔理沙がやって来た。

「良いのか？」

「良いぜ。一瞬で掃除を終わらせてやるぜ」

そっついミニ八卦炉を取り出した。

「お、おい。何するつもりだ!？」

「恋符『マスタースパーク』!」

瞬間、ミニ八卦炉から超極太レーザーが発射された。

まさか、こんな形であの時見れなかったスペルが見れるとは。

「綺麗になつたぜ!」

と、親指を立てて言うてくる。

…土地ごと綺麗にしてどうする…!!

心の中でツツコムしかできない一護であった。

第8斬 【香霖堂】（前書き）

深夜に書いたので、かなり眠いです。

第8斬 【香霖堂】

青空の下、一護と霊夢は空中を飛んでいた。

二人は現在、香霖堂に向かっている。

霊夢は普通に空中を飛んでいるが、一護は空中を駆け飛んでいる。まるで死神のようだ。

（まさか、一日でここまで能力を使いこなすなんてね…少し驚いたわ）

霊夢はチラッと一護を見てそう思う。

一護は霊夢のちら見を見逃さなかったのか、気になったんで問う。

「何だよ霊夢？」

「何でも無いわよ」

霊夢は一護の方を少し振り向き答えた。

一護は釈然としないまま口を噤む。

それから空を仰ぎ見た。

（…暖かいな…）

今、気付いた。

気温が暖かい…いや、少し暑いぐらいか。

（外の世界とは季節が違うのか？）

一護は内心疑問に思ったが

「そろそろ着くわよ一護」

霊夢の言葉にその事を脳の奥に仕舞い込んだ。

一護と霊夢は地面に着地した。

「此処が香霖堂よ」

目の前にやや小さい雑貨店のような店がある。

店前には外の世界に有るような物が置かれている。

古い看板や道路標識、軽トラ、カーネル・サンダーズ像まで置いてある。

(…不気味だな)

一護は店前の物を見て思う。

そして一護は一通り見渡した後、口を開く。

「つーか、これ全部外の世界の物だろ!？」

「あら、言っただけでなかったかしら? 香霖堂は幻想郷の物以外にも外の世界の物も扱っているのよ」

「初耳だ」

一護はきっぱりと言う。

「とりあえず、中に入るわよ」

その言葉に二人は店内に入った。

店の中は店と呼ぶには余りにも煩雑に物が散りばめられており、本当に商売する気あるのかと疑いたくなる店内である。

奥のほうにカウンターが有り、一人の男性と一人の少女が話している。

どうやら、一護と霊夢には気付いていないようだ。

（客が入ったのに店員は何の挨拶も無しかよ。大丈夫なのか、この店？）

一護は店に対して少し不満を覚える。

と、よく見ると男性と話している少女に見覚えがある。
つていうか昨日会った…

「霖之助さん、ちょっと良い？」

霊夢はカウンターの方に歩み寄り、男性に声を掛ける。

どうやら男性の名前は霖之助というらしい。

霊夢の声にカウンターの二人がようやく一護と霊夢に気付く。

「やあ、いらつしやい」

男性がここの店員みたいだ。

白髪のショートボブにアホ毛。

黒と青のツートンカラーをしたつなぎのような服装で、首には黒いチョーカーを付けている。

片方の少女は目を見開き

「お、ライムとイチゴ!」

「誰がライムとイチゴだ!!」

魔理沙のむかつくボケに霊夢と一護はツッコム。
男性と喋っていたのは魔理沙だった。

「ん、君は?」

男性は一護の方を見て聞く。

「あつ、俺は黒崎一護。あんたは?」

「僕は森近 霖之助。そうか、君が魔理沙が言っていた黒崎一護君か」

魔理沙は既に霖之助に一護の事を話していたらしい。
ちゃんと事実だけを話したのかは不明だが。

「さて、どんな物が入用だい?」

「男物の服と下着」

女性の前であまり下着という単語は使いたくないなと思った一護。

「それなら、あっちの方の棚にあるよ」

霖之助は指差す。

「どうも」

一護は霖之助の指した方の棚に向かう。

棚には外の世界でよく見る服が陳列している。

とりあえず一護は陳列されている服や下着を見渡す。

色んな種類の服が沢山有り、サイズが合いそうな服を手取る。
そこに霊夢が近づいてくる。

「どう、似合いそうな有った？」

霊夢が一護の傍らに立って聞く。

「いや、ただだけど。とりあえず四着くらい有ったら良いか？」

「そつね。で、どんなのにするの？」

霊夢も一護と一緒に棚に陳列されている服を見る。

「そつだな。動きやすい服なら何でも良いや」

「動きやすい服ねえ」

霊夢は動きやすい服を探し出す。

どうやら手伝ってくれるみたいだ。

その間に一護は下着を探す。

これだけは手伝ってもらうと恥ずかしいので早めに選ぶ。

数十分後、一護は数枚の服と下着を持ちカウンターに向かった。

香霖堂は普通の店と違って商品を価格交渉し値段を決める。

一護にはそれほど交渉術は無いが、幻想入りしてしまった一護の為に値段を安くしてくれた。

「ありがとな、霖之助さん」

安くしてもらった事に対し霖之助にお礼を言う。

「どういたしまして。また来てください」

「ああ」

一護と霊夢は店を出て行った。

魔理沙は棚に置いてある服を見ている。

「改めて見ると色んな着物があるな」

魔理沙は色々な服を見ながら感心したように言う。

「そうだね。で、君はいつになったら帰るんだい」

霖之助は眼鏡を人差し指と中指でクイツと少し上げて聞く。

「おお、なんか凄い着物発見だぜ」

魔理沙は霖之助の話を無視し棚の奥から一着の着物を取り出し広げた。

それは全身黒い着物で、セットになるように下には純白の長襦袢がある。

それはまるで…

「おっと、そういや今日は人里で用事があるんだったぜ」

魔理沙は不図、思い出したかのように言った。

素晴らしい着物を棚に置き「じゃあな香霖」と言い店から出て行った。

「まったく、慌ただしいな」

霖之助は出ていく魔理沙を見ながら呟いた。

霖之助は魔理沙が無造作に置いた着物を見た。

(そういえば、この着物…いつから此処に有るんだっけ?)

黒い着物を手に取り考えた。

だが、思い出すのが面倒になったので着物を畳んで棚に戻した。

そして今日は特に何も無く一日が過ぎ去った。

第8斬 【香霖堂】（後書き）

<次回予告>

一護「次回は何かうるせえ鴉が出てくるらしいぜ」

霊夢「それは困るわね。登場する前に退治しないと」

一護「まあ別に構わねえけどな」

?「あやややや、止めて下さいよ!」

〔東方図鑑〕

「にしても下着なんて殆ど無えな」

一護は香霖堂の服が陳列している棚を見て言った。
現在は下着を探している。

「下着なら良いのがあるよ」

霖之助は一護に近づき言う。

「ホントっすか」

「ああ。君にはこれが似合うだろ!」

途端に霖之助は着ていた服を脱ぎだした。

「って、何してんだよ!？」

一護は顔を赤らめ言う。

禪一丁になつた霖之助は色違い禪を三つ出した。

「この禪にしたまえ。今なら赤禪、白禪、黒禪の三色セットだ!」

「結構です!」

一護はきつぱりと断つた。

第9斬 【動き出す異変】（前書き）

最近、3daysや11eyesにはまっていて、小説がなかなか書けない。

11eyes-Resona Forma-が終わらない。

Rewriteが発売する前にクリアしなくてはいけない。

BLEACHのキャラブックも、もうすぐ発売だ。

第9斬 【動き出す異変】

どうして…私は…閉じ込められてるの？

どうして…私は…一人なの？

どうして…私は…私じゃなくなるの？

私って…何なの？

私は…

一護は布団の中で目を覚ました。
重い上半身を布団から起こし、背伸びする。

何だったんだ？ 今の夢は？

一護は夢の内容が気になった。

誰かが俺に何かを問いかけてきていた。
思い出そうにも少ししか思い出せない。

「私は…」の続きが分からない。
一体何を言っていたんだ？

夢の内容を鮮明に憶えている方がおかしい。

一護は重い体を布団から起き上がらし、縁側に出た。
縁側から外に出て、井戸に向かう。

井戸で汗ばんだ顔を冷たい水で洗い目を覚ます。

一護は空を仰ぎ見た。

雲一つ無い快晴。

濡れた顔に暖かい風が吹き付ける。

気持ち良い。

この暑い気温の中、井戸の水は最高に気持ち良い。

だけど、心が落ち着かない。

あの妙な夢のせいだ。

おふくろの夢とは違った妙な夢。

この夢は自分に何らかの形で降りかかるだろうと一護は感じていた。と、その時…

「一護！顔洗ったんなら、さっさと居間に来てくれない？朝食できてるから」

霊夢が縁側から一護に言う。

一護は霊夢の方に振り向き「ああ。分かった」と答える。

一護は考えるのを止め、居間に向かった。

朝食を食べ終わった一護は縁側に座り、空を見上げていた。

そこに御盆を持った霊夢が一護の横に座る。

お盆の上にはお茶の入った湯呑みが二つあり、一つを一護に差し出す。

一護は「さんきゅう」と礼を言い湯呑みを受け取る。
一護は湯呑みの茶を一口啜ると口を開いた。

「なあ、結界の異変の正体は分かったのか？」

一護は博麗大結界の異変の事を聞く。

「全くよ。いくら調査しても全然原因が分からないわ」

「そうか」

一護は湯呑みの中のお茶を見る。

湯呑みのお茶に自分の曇った顔が映る。

「朝から暗いわね。何かあったの？」

霊夢は一護の表情を見て少し心配する。

「ん、いや何でも無えよ」

「そう、なら良いわ」

漠然と答える一護。

霊夢はそんな一護の答えをあまり気にせず答えた。

沈黙

お互い話す事無く縁側に座っている。

そんな沈黙に一護は耐え切れず口を開こうとする。

この沈黙は一護のせいなのに。

一護が口を開こうとした…その時

強い風が二人に吹雪いた。

「痛…ッ！」

一護は風により舞った砂埃が目に入り、両目を両手でこする。

「ちょっと文、砂埃を上げないでくれるかしら」

「アハハハ。すみません」

霊夢以外の声が聞こえた。

両目が開けられないので姿は見えないが確実に霊夢とは違う声。

一護は潤んだ目を開けた。

そこには一人の少女が目の前に立っていた。

服装はシンプルに黒いフリルの付いたミニスカートと白いフォーマルな半袖シャツ、赤い靴は底が天狗のゲタのように高くなっている。黒のボブの髪型で、その頭の上には赤い山伏風の帽子をかぶっている。

首からはカメラを掛けている。

「…誰だお前？」

少女が一護の方を向き答える

「あ、私は鴉天狗の射命丸 文です。新聞記者をしています。以後お見知りおきください」

文はペコリと頭を下げ自己紹介をした。

「ど、どうも…」

一護も反射的に頭を下げる

「…ん、お前、妖怪か？」

一護は鴉天狗という単語を聞いてそう思ったので口にした。

「はい。妖怪の山に住む鴉天狗です」

一護はそれを聞いて少し驚いた。

妖怪は初日に遭ったような奴ばっかだと思っただが、こういう奴も居るのかと。

「じゃあ、もう一つ聞け。此処に何しに来たんだ？仕事は新聞記者って言ったろ。こんなところに遊びに来て良いのか？」

「心外ですね。遊びに何て来てませんよ。取材しに来たんです」

文は真顔で答える。

どうやら取材に来たようだ。

でも何を…

「あなたが幻想入りした黒崎一護さんですね」

「！…何で知ってたんだ？」

「それは、魔理沙さんから聞いたからです」

魔理沙が文に教えたようだ。

「あいつ、色んな奴に話してんな」

「そのようね」

一護の言葉に霊夢が答える。

「では単刀直入に申し上げます。黒崎一護さん、ちよつと取材と撮影に協力してもらえませんか？」

「いや、そういうのは悪りいけど…」

「取材させてくれませんかと後程、大変な事になりますよ」

一護が断ろうとした瞬間、文が何やら脅迫染みた事を言った。

「な、何だよ。大変な事って…？」

「さあ、何でしょうね」

文が悪い笑みを浮かべる。

「チツ、分かったよ。受けりゃあいんだる受けりゃあ」

一護は不服そうに舌打ちし、嫌々取材を受ける事にした。

「ありがとうございます」

文はお礼を言うと同時に懐からペンとメモ帳を取り出した。

「知らないわよ。どうなっても」

霊夢は小声で何か言っただけで部屋の中へと戻って行った。

一護はそれを聞き取れず、文の取材を受け始めた。

それから数十分後

「ご協力、感謝します。それでは、これで私は失礼しますね」

「ああ」

文は背から黒い翼を出した。

「では、また」

そついい文は飛んで行った。

それと同時に霊夢が縁側に現れた。

「終わったの？」

「ああ。少し不安だけどな」

一護は霊夢の方を振り向いて言う。

顔には少し疲れの色が見える。

「そう、明日は変な意味で楽しみね」

「？」

一護は靈夢の言葉が理解できずに一日を有意義に過ごした。

次の日の朝、いつも通り居間に行き靈夢と共に朝食を食べ始めようとする。

と、朝食に箸をつける前に靈夢が？文々。新聞？という新聞を渡してきた。

「これに昨日の取材内容が載ってるわよ」

「ん、どれどれ」

一護は少し興味有り気に新聞を受け取る。
受け取った新聞を一通り見渡す。

一護の表情が固まる。

「な、な、何勝手な事書いてんだあの女！！」

一護は怒りを加えた絶叫の声を上げた。

新聞に書かれていた事とは

「黒崎一護氏は幻想郷にやって来た戦闘狂。異常なほど好戦的で戦闘になると凶悪な笑みを浮かべる黒崎一護氏で、あの博麗の巫女と互角以上の戦いを行ったと匿名の人物から証言も受けています。黒崎一護氏は取材の時、一言こう言い残しています。強えエ奴はかかって来やがれ！！」

強いヤツ大募集！！」

「俺は剣八じゃねーぞ!!」

一護の脳裏に狂気な笑みを浮かべる剣八が現れる。
あんな奴と一緒にされたくない。

「あの野郎！次会ったら弾幕勝負でブツ飛ばす！」

一護はそつ心に誓った。

その新聞は他の処にも行き渡っている。

ある暗い館では

「フッフ、面白い子が来たようね。少しくらいは楽しめるかしら？」

「はい、お嬢様」

多数の幽霊が浮遊している広大な庭では

「凄い人が来たわね」

「幻想郷が混乱しなければ良いのですが」

竹林にある屋敷では

「あら、この人は…あなたの話していた人じゃない？」

「…！バカな、なぜこいつが…？」

ある山の上の神社では

「また天狗が勝手なことを書いたんでしょっか？」

「別にそうであっても私達には関係ないわ」

ある地底では

「いいね〜、強いヤツ大募集か」

「ハア〜面倒なこつた。何でこいつが幻想郷に居んだよ」

「あんたの知り合いかい？」

ある寺では

「おもしろい子が来よつたな。ここまできると運命やで」

「あら、あなたの知り合い？」

「ボクが話した、おもしろい子ですわ」

各々、何か動きを起こそうとしている。
そして遂に異変が起こり始める。

第9斬 【動き出す異変】（後書き）

<次回予告>

一護「あの野郎、取材した事一つも書いてねえじゃねえか」

霊夢「他には何が書いてあるの?」

一護「後はそれ程大した事は書いてねえな。学級新聞みてえだ」

霊夢「その程度よ。その新聞は」

一護「…助かった」

〔東方図鑑〕

「ん、霊夢の事も書いてあるぜ」

一護は文々。新聞を見ながら言った。

「え、何て書いてあるの?」

一護は一息おき

「いや、見ねえ方がいいぞ」

と言う。

「良いから見せなさい」

新聞を一護から奪い取って見る。

「博麗霊夢氏は黒崎一護氏に丸められベタ惚れか!? 今後の文々。

新聞に期待!!」

と書かれている。

霊夢は勢いよく新聞を真つ二つに破る。

「あの天狗… して して焼き鳥にして食ってやるわ…!!」

霊夢の顔が般若のように恐ろしくなっている。

「…俺が手を下す前に終わりそうだな」

第10斬 【紅い霧】（前書き）

ようやく異変解決です。

テストが終わった後の漢検のテストはかなり疲れたです。

第10斬 【紅い霧】

そこは暗く窓も無く家具すら殆ど無い石造りの酷く寂しい部屋。まるで罪人を入れておく牢獄のようだ。

そこに床に体育座りをして顔を伏せている一人の少女がいる。悲しんでいる…なぜかそう思える。

一体なぜ悲しんでいるのか、一体なぜそう思うのか…俺にも分からない。

ただそう感じるからだ。

その少女は不図、顔を上げこちらを向いてきた。

顔は部屋が暗いせいであまり見えない。

少女は俺に向かって口を開いた。

「私を…助けて…お願い…」

その少女は俺に助けを求めてきた。

なぜ、俺に助けを求めるのか分からない。

そして、何で助けを求めているのかも分からない。

「…お前の、名前は？」

俺はなぜか少女の名前を無意識に聞いてしまった。

少女は名前を聞かれたことに少し驚いていた。

そして少女は小さく口を開き言った。

「フランドール・スカーレット」

俺の意識はここで途絶えた。

朝：夏の陽射しが幻想郷を覆う。

また妙な夢を見た。

起きたばかりだというのに疲れを感じる。

一護は夢のことを気にせず、いつも通りの朝をむかえる。

朝食を食べ終えた一護は弾幕の練習に勤しむ。

すでにスペルカードを多少は使えるようになってる。

弾幕の練習をする一護を霊夢は縁側からお茶を飲みながら見る。

「こんな短期間で弾幕をここまで使いこなすなんて凄いじゃない」

霊夢は一護の弾幕を見て少し感心する。

一護の弾幕の色は黒くて丸い。

「でも不気味な弾幕ね」

「うるせーよ」

一護はカードを取り出しスペルを唱えた。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周りに黒い三日月状の小さい弾幕が無数に展開された。
それを全て上空に放った。

その弾幕は上空に行くと弾幕同士、被弾し爆発した。

「よし、こんなもんか」

一護は消えた弾幕を見ながら言った。

(…本当に凄いわ。ここまで成長率が高いと恐怖すら覚えるわ)

霊夢は湯呑みを置き、立ち上がった。

「それじゃ、私と実戦演習でもしようか？」

一護はその言葉に一瞬、面食らう。

「少し、一護の力を試してみたくてね。良いでしょ？」

霊夢はお札を出して言った。

この状況は断つても意味が無いことを既に理解している一護は「ああ、良いぜ」と言い、承知した。

一護も霊夢とどれくらい渡り合えるのか、気になっていたので好都合だった。

一護はスペルカードを出し構えた。

そこで不図、一護は神社の方を一瞥した。

それを見た霊夢は察したように口を開いた。

「家には結界を張ってあるから心配しなくて良いわよ」

「…ん、そうか」

一護は心の内を読まれ少し驚いた。

そして安心した。

「じゃあ本腰で行くぜ、霊夢」

「ええ、どこからでも掛かってきなさい」

一護は霊夢の目を見据え、スペルを唱えた。

「黒符『天幻月牙』！」

一護と霊夢の弾幕勝負が始まった。

同時刻：ある薄暗い部屋にて、一人の少女と一人の女性が居た。

部屋はかなり広く、備えられている家具は素人目でもかなり高価な物と分かる。

少女は椅子に腰を掛け、女性はその前に立っている。

「咲夜、計画の準備は出来ているかしら？」

少女は上から目線で咲夜という女性に聞く。

「はい、お嬢様。いつでも実行に移せます」

咲夜という女性は答える。

「そう。じゃあ、命令通りに動いてね」

「はい。畏まりました」

咲夜は少女に向かって頭を下げると、その場から姿を消した。少女は一人になり静けさが戻った部屋でボソツト呟いた。

「あわよくば、奴等を引き摺り出せるかもしれないわ」

そついうと再び部屋に静寂が戻った。

博麗神社では一護と霊夢が縁側に居た。

一護は縁側に座っているが上半身は仰向けに倒れている。霊夢も縁側に座っている。

「クソ…ッ、やっぱまだ勝てねーか」

一護は悔しそうに言う。

「当たり前よ。幻想郷に来て、弾幕を覚えたばっかの奴に私が負ける訳ないでしょ」

霊夢は当然のように答えた。

一護の成長率が高いとはいえ、霊夢は妖怪退治のエキスパート。今の一護では到底勝ち目は無い。

「でも、強かったわよ。そこらの妖怪じゃ太刀打ちできないくらい」

霊夢は隣に居る一護を見て言う。

「そつか」

一護は微笑んで答えた。

その時だった。

急に、一瞬にして紅い霧が博麗神社を、空を全て覆い尽くしたのだ。
った。

紅い霧が夏の太陽を隠し、陽射しが消えた。

一護と霊夢はその光景に驚愕する。

「…何だ、こりゃ…？ どうなってるんだよ一体？」

一護は立ち上がり空を、周りを見る。

同様に霊夢も立ち上がり周りを見る。

「この霧から妖力を感じるわ。これは、妖怪の仕業ね」

一護はその言葉に目を丸くする。

「妖怪の仕業…だと!？」

「ええ、そうよ」

「まさか、結界の異変に関係してるんじゃない…」

一護は横に立つ霊夢を見て聞く。

「分からないわ。だけど、原因を突き止めるのが巫女の仕事だから、
今から異変解決に臨むわ」

「ああ、俺も行くぜ」

一護の眼があの時の眼に無意識になっていた。
死神時代の眼。

決戦を前にした一護の眼に。

久しぶりに帰ってきた気分になった一護は笑っていた。
霊夢はそれを見て微笑んだ。

「分かったわ。じゃあまずは、あっちの裏の湖が怪しいから、そこ
から調べに行くわよ」

「ああ」

一護と霊夢は紅い霧の異変解決に向かった。

第10斬 【紅い霧】（後書き）

<次回予告>

霊夢「にしても何で紅い霧なんかにしたのかしら？」

一護「いきなり何、言い出すんだよ」

霊夢「別に紅じゃなくても青や黄色い霧にした方が良いじゃない。

紅い霧なんて雰囲気的にも最悪だし、不気味で下卑た色だわ」

一護「お前に巫女装束を着る資格はねえ！」

〔東方図鑑〕

「！うおっ！霊夢!？」

一護は霊夢を見て驚く。

「な、何よ急に？」

霊夢は一護の方を向き聞く。

その姿は完全に霧の色と巫女装束の色が同化している。

おかげで今の霊夢は顔と腕と足首しか見えない。

「いや、何でもねえ…」

「つたく、いきなり大声出さないでよ」

霊夢はそういい飛んで行く。

一護はその後を追い、霊夢の姿を見る。

（傍から見ると首と腕だけが飛んでる幽霊みたいだな。気持ち悪くなってきた）

第11斬 【食と弾】（前書き）

体育大会の予行練習で完全に日焼けしてしまった。

その日に書きました。

第11斬 【食と弾】

今、幻想郷は紅い霧に覆われており、太陽の陽射しも遮られている。おかげで不気味な上、肌寒い。

一護と霊夢はその異変を解決するべく調査に向かっている。

霊夢の勘では湖の方向が怪しいらしく二人は現在、湖に向かうため薄暗い森を歩いている。

そんな中、一護はある事を思い出し口を開いた。

「今さらなんだけどよ霊夢」

一護は前を歩く霊夢に声を掛けた。

「何？」

霊夢は後ろを歩く一護の方を振り向く。

「お前、親はどうしたんだ？ 博麗神社で見かけたことねえけど」

霊夢はその事を聞かれた途端、口を閉ざし俯いた。

一護は急な事に少し面喰らい戸惑った。

霊夢の表情が少し悲しんでいるように見えたのだ。

「わ、悪いい。何か聞いちゃいけないこと、聞いちゃまったか…」

一護は戸惑ったすえ、謝った。

「良いわよ、別に。気にしてないから」

霊夢は表情を戻し、一護の問いに答える。

「私の両親は、もう此処には居ないの」

その言葉に一護は少し悪意を感じた。

触れてはいけない物に触れてしまった感覚。

「…此処には居ないって、どういう意味だ？」

「そのままの意味よ。私の両親は居ないの」

霊夢は淡々と言った。

親が居ないというのは幻想郷に居ないのか、それとも、この世に居ないのか…どちらかだ。

「私の母親は…」

霊夢が小声で何かを言おうとした瞬間、二人の目の前に一人の少女が現れた。

金髪のショートボブに深紅の瞳。

その左側頭部には赤いリボンが結ばれており、身長は低めで、白黒の洋服を身につけ、スカートはロングである。

その少女が両手を広げて現れたのである。

「…誰だ、テメエ？」

一護は少し睨みつけて言う。

「私は宵闇の妖怪、ルーミア。あなたは食べてもいい人間なのか？」

何やら、自己紹介をした後にとんでもない事を言い出した少女。

「ダメなんじゃねえのか…!」

一護はとりあえず冷静に言い返す。

「えーダメなのー」

ルーマリアはあからさまに残念な顔をする。

「ああ、すまねーな」

一護はそついうと足早にその場から立ち去る。

霊夢は一護に追い越されると「ちよつと、一護まちなさい」と言い、一護の後を追おうとする。

「イチゴ…!」

ルーマリアは小さく呟き、食べ物の一ツゴを想像した。
その結果…

「やっぱり食べてもいい人間なんじゃない!!」

ルーマリアが一護と食べ物のイチゴを何故か勘違いして大声と共に追ってきた。

一護はそれに気付くと逃げるように走る。

霊夢も一護と同じ速度で走る。

「何で追ってくんだよあいつ!?!」

一護は後ろから追ってくるルーミアを見て言った。

「多分、一護とイチゴを間違えたんじゃない？」

「嫌な間違いだなオイッ！」

瞬間、後ろから弾幕が飛んできた。

一護と霊夢は即座にそれを横に躲す。

「食べさせるー！」

ルーミアが大口を開けて一護に襲い掛かってきた。

「マジかよ。こうなりゃ弾幕勝負で決着つけてやる！」

一護と霊夢は立ち止まり素早く後ろに振り返り見る。

「それじゃ、こいつは一護に任せるわよ」

霊夢は二人から離れた。

一護は弾幕を張り、一旦ルーミアとの距離をとる。

ルーミアは弾幕を出してくると思わず、紙一重で空中に飛び避ける。

「わ〜びっくりしたあ。まさか弾幕を出してくるなんてね」

ルーミアは一護が弾幕を出してくるとは想像していなかった為、少し驚いた表情をしている。

「悪いな。弾幕を出せるのはテメエだけじゃねえぜ」

一護は手のひらに握り拳程の大きさの弾幕を見せて言った。

「俺を食べたけりゃ、俺を倒してからにしろ」

「分かったわ。お望み通りあなたを倒してから、ごはんにするわ」

ルーミアはカードを取り出しスペルを唱える。

「月符『ムーンライトレイ』」

ルーミアを中心に輪っか状に広がる弾幕と二本のレーザーが放たれた。

一護はそれを全て苦もなく避ける。

ルーミアはそれを見て目を丸くする。

「どっした？ この程度じゃ俺には勝てねえぜ」

一護は余裕な笑みを浮かべながら言った。

ルーミアは少し狼狽えたが、再びスペルを唱えた。

「夜符『ナイトバード』！」

ルーミアを中心に左右交互に翼状のような感じで弾を撒き散らした。

「だから、この程度じゃ俺には勝てねえって言ってんだろ！」

一護はカードを取り出しスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護の周りに黒い三日月状の弾幕が展開された。
一護はそれを飛んでくる弾幕に向かって放った。
それによりルーミアが放った弾幕は全て相殺した。

「嘘…でしょ…」

信じられない光景に目を疑うルーミア。

「次で決めるぜ、ルーミア」

一護は最後の弾幕を展開した。

「私が、食べ物を目の前にして、負けるもんかぁー！！」

ルーミアが激昂した。

その途端、ルーミアを中心に黒い闇が現れた。

「!?!」

さすがの一護もそれには驚いた。

そして、一瞬で一護は闇に包まれ見えなくなった。

「…何も見えねえ」

一護の視界は闇に奪われてしまった。

「私は？闇を操る程度の能力？があるの。この能力を使うと私の周りに闇を発生させることができるのよ」

「成程な。それがお前の能力って訳か」

一護はルーミアの能力を理解した。

「どう？ 形勢逆転でしょ。これであなには私に弾幕を当てる事はできないわよ！」

「ああ。たしかに視覚は使えねえが、お前の居場所くらい分かるぜ！」

一護は弾幕を展開し、一点の場所に向かって放った。

その瞬間「うああああああ！！」という、ルーミアの叫び声がし、闇が消えていった。

消えた闇から一護と倒れ伏しているルーミアが現れた。

「終わったな」

一護は倒れているルーミアを見て言った。

ルーミアは残る力で顔を上げ一護を見て小さく口を開いた。

「どうして、私の、居場所が分かったの…?」

「そんなの簡単だ。視覚は封じれても聴覚までは封じる事はできねえだろ。だからお前がぺちゃくちゃ喋ってる間に声のする方を探ってたんだよ」

一護は簡単に説明する。

ルーミアは理解したように微笑み気絶した。

霊夢は戦い終えた一護のそこに行く。

「終わったようね。じゃ、先に進みましょうか」

「ああ…ちょっと待ってくれ」

一護は倒れているルーミアに歩み寄った。

霊夢は一護がした事に少し疑問を持った。

「どっつする気？一護」

一護は気絶しているルーミアを背負っていたのだ。

さっきまで一護を喰おうとしていた妖怪を一護が背負っている。

「このまま放っておけねえだろ。一応、目を覚ますまで面倒みんだよ」

「どっついう神経してるのかしら、あんたは」

霊夢は頭を掻きながら溜め息混じりに言った。

だが、霊夢は一護の事が少し解った。

一護は優しい。

敵にも味方にも優しいのだ。

多分、私が見た人間の中で、これほど優しい人間は居なかっただろうと霊夢は思っていた。

「ほら、とっつと行くぜ霊夢」

ルーミアを背負った一護が霊夢を追い越す。

「あ、ちょっと待ってよ！」

霊夢は我に帰り一護の横に並んで歩いた。

第11斬 【食と弾】（後書き）

<次回予告>

一護「次回もまたうるさい奴が出るみたいだぜ」

霊夢「そういう奴は口を開かせる前に打ち落とさないとね」

？「今回はこの最強のあたいが大活躍するわよ！！」

霊夢「果たしてその計画は旨くいくかな？」

〔東方図鑑〕

「ねえ、一護。本当にそいつ大丈夫なの？」

霊夢は一護が背負っているルーミアを見て言った。

「どうやら、いきなり襲い掛かってくるか心配ならしい。」

「心配すんな。こいつだっっていきなり噛み付いたりしねえよ」

「そお、なら良いんだけど」

霊夢はあまり納得せず口を閉じた。

その瞬間、一護の肩にルーミアが齧り付いた。

「痛ええええ！！」

「大丈夫、一護！」

一護はルーミア引き離す。

「こいつ気絶しながら齧り付きやがった」

「かなり食欲旺盛らしいわね」

「ごはん…ムニヤムニヤ」

ルーミアは何かを食べる夢を見ているようだった。

第12斬 【バカな妖精】（前書き）

しんどすぎて後書きが書けなかった。

明日は学園祭でしんどくなりそう。

第12斬 【バカな妖精】

一護と霊夢の前にルーミアが現れた時くらいの時刻。

魔法の森という常に禍々しい妖気で溢れており、人間はおろか妖怪ですら近づかない森に一軒の家がある。

そこにあの魔法使いの少女、霧雨 魔理沙が住んでいる。

「何だ、この紅い霧は？」

魔理沙は家から外に出て、外の異様な光景に気付く。

「これは、異変か。だったら霊夢も動き出しているな。私もこうしちゃいられないぜ」

魔理沙はいつものものの筈に跨り、どこかへ飛んでいった。

そして現時刻（一護がルーミアを背負った時）へ

「月が出始めたわね」

霊夢は空を見上げて言った。

空にはたしかに月が出ていた。

だが、月は紅い霧のせいで黄色に輝く事はなく、紅色に輝いていた。

「ああ、そうだな」

一護も空を見上げ紅い月を見た。

「急いごうぜ、霊夢。何か嫌な？感じ？がする」

そういつと一護はそそくさとルーミアを背負いながら歩いていく。

「ちよっ、どうしたのよ一護!？」

霊夢は訳も分からず足早に歩く一護についていく。

一護は紅い月を見て嫌な感じがしたのだろうか…？
それとも…

「私の気配を察したか」

木の陰から一人の影が現れ二人の向かった先を見ていた。
既に二人の姿は無く紅い霧と森の木々だけが視界に映る。

「成程：面白い。黒崎一護、やはり君を？幻想郷に導いて正解だったよ？」

一人の影が紅い霧に溶け込むように姿を消した。

「湖か…」

一護と霊夢はようやく湖に着いた。

広大な湖らしく向こう岸が紅い霧のせいで見えない。

「ここからは飛んで行くわよ」

霊夢は体を浮かせて言う。

「ああ」

一護も空気中の魂を使い空中に立つ。

その瞬間、一護に目掛けて何かが飛んできた。

一護は咄嗟にその何かを避ける。

「…誰だ!？」

一護は飛んできた方向に向かって言った。

「あたいの縄張り入ろうなんて100億光年早いわよ!」

「光年は距離の単位だバカ!」

思わずツツコム一護。

「バ、バ、バカですつてえええ!この最強のあたいに向かって!!」

最強? なにやら意味の分からない怒声だ。

そして紅い霧から一人の少女が二人の前に現れた。

髪は水色で、ふわふわのウェーヴがかかったセミショートヘアに青い瞳。

背中には氷の結晶に似た大きな羽を六枚持ち、頭の後ろに青い大きなリボンを付けている。

服装は白のシャツの上から青いワンピースを着用し、首元には赤いリボンが巻かれている。

その少女が一護に人差し指を向け口を開く。

「よくも、あたいに対してバカって言ったわね！ 後悔させてあげるんだから！」

少女は氷の弾幕を展開した。

「バカにバカって言って何が悪いんだよ」

「またバカって言ったわね！ もう許さないんだから！！」

バカな少女は展開していた氷の弾幕を放ってきた。
一護はそれを跳躍し避ける。

「テメエ、危ねえじゃねーか！」

「あたいにバカって言うからよ。今すぐあなを冷凍保存してやるわ！」

どうやらバカと言われる事が相当嫌いならしい。
と、そこに一人の少女がバカな少女の前に割り込んできた。

「チルノちゃん！ 落ち着いて。今はそんなことしている場合じゃないよ」

いきなりバカな少女の前に現れた少女が仲裁に入ってくれた。

少女は髪色は緑、左側頭部をサイドテールにまとめ、黄色いリボンをつけている。服は白のシャツに青いワンピースを着用している。

首からは黄色いネクタイを付け、背中には虫とも鳥ともつかない縁のついた一对の羽が生えている。

「このツンツン頭が悪いのよ！ あたいのことを何回もバカバカって言うから！」

「え…？」

緑の髪の少女がこちらを向いてきた。

「あ、えっと、私は大妖精っていいいます」

大妖精と名乗った少女はペコリと頭を下げる。

「あ、俺は黒崎一護」

一護は反射的に自分の名を言った。
どうやら大妖精という少女はそのバカな少女と違って礼儀正しいようだ。

「ほら、チルノちゃんも自己紹介して」

大妖精は小声でバカな少女に自己紹介するように言う。

「嫌だ！ こんな奴に自己紹介なんてしたくないわ」

「ハア、チルノちゃん…」

大妖精は溜息をつく。
自己紹介しなくても、もうバカな少女の名前は大妖精のおかげでチルノって分かった。

「そんなことより、こいつを早く冷凍保存したいのよ！ どいてくれる大ちゃん」

「だから」

「良いぜ。できるもんならやってみるよ、バカ」

一護が大妖精とバカな少女チルノとの会話に割って入り、大妖精の発言を制止し、チルノを少し挑発する。

チルノは「カッチーン」と言い氷の弾幕を展開する。

「もう完全パーフェクトに怒ったわ。あんななんか一瞬で海の藻屑にしてやる！」

「残念だな。此処は海じゃねーぞバカ」

「きーっ！ あたいは難しいことが大ッ嫌いなのよ！」

「それって遠回しに自分はバカですって言っているようなもんだぜ」

「くらえー！」

チルノは一護の言葉を聞かなかったことにし氷の弾幕を発射してきた。

一護は能力で高速移動し氷の弾幕を回避した。

一護はそのまま霊夢のどこに行き、背負っているルーミアを預ける。

「ちよつとの間、こいつを任せるぜ」

「早くしてね。こんな茶番」

霊夢は溜息混じりに言う。

「ああ」

一護は高速移動でチルノの前に行く。

大妖精は二人を止めるのは無理と判断したのかチルノから離れていく。

「いくぜ」

一護は手のひらに小さい弾幕を出す。

「そんな弾幕であたいを倒そうなんて100億万年早いわよ！」

バカなことをいうチルノがカードを取り出す。

「氷符『アイシクルフォール』！」

チルノがスペルを唱えた瞬間、氷柱型の弾幕が横に広がり一護の方に飛んでいった。

一護は氷柱型の弾幕を全て掻い潜りチルノの目の前に行く。

「正面がから空きだぜ」

一護は手のひらに出しておいた小さい弾幕をチルノにぶつける。

チルノは「くっ！」と、少し苦悶の声を上げ後退る。

「どうした？ 威張ってたわりに全然弱いじゃねえか」

「今のはほんの腕試しよ！ 次からは本気で行くからね！」

チルノは再びカードを取り出しスペルを唱える。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノを中心に無造作に弾幕がばら撒かれる。

「がむしゃらに弾幕を放つても当たんねえぞ」

一護は無造作に放たれた弾幕を避ける。

「この最強のあたいがそんなことする訳ないでしょ」

瞬間、チルノの放った弾幕が全て凍て付いて固まった。

「何!?!」

一護は自分の周りで凍て付いた弾幕を見る。

どうやら、このスペルは移動の邪魔及び移動不可にする弾幕のようだ。

今、一護は完全に凍て付いて固まった弾幕に囲まれており移動がほぼ不可能の状態にある。

「最強のあたいは抜かり無しよ！」

チルノは止めの弾幕を一護に向かって大量に放ってくる。

一護は微動だにせずチルノの放ってきた弾幕に飲まれ爆発した。爆風が起こり一護の姿が確認できない。

「やっぱり、あたいつたら最強ね！」

チルノは一護に勝って嬉しいのか、かなりの笑顔だ。その瞬間、爆発で起きた煙がまるで扇風機に掻き消されるかのよう
に消えていった。

「え、何!？」

チルノから笑顔が消え、驚愕したように口と目を大きく開いた。

「何勝った気でいんだ。俺は負けちゃいねえぜ」

一護は片手に代行証を持ち黒い霊圧で卍型の形にしている。

「何よ…それ？」

チルノは少し後退りながら聞く。

一護はスペルカードを出し答える。

「こいつは、俺の最強のスペルだ。黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒になり代行証に吸収された。

一護がチルノに向かって代行証を振った瞬間、卍型の霊圧が歯車の
ように回転しチルノ目掛けて飛んでいった。

「最強のあたいが負ける訳がないのよ!!」

チルノは飛んでくる月牙天衝に精一杯弾幕を放つ。

だが、チルノの放つ弾幕では月牙天衝を止める事はできずにそのま
まチルノに向かう。

「そんな…あたいが…」

チルノが当たると思い目を瞑る。
が、何も起こらない。

痛みを感じないどころか、当たっていない…どうして？

チルノはゆっくりと目を開ける。

その瞬間、チルノのおでこに何か小さいものが当たった。

「いたっ」

チルノは額を摩り前を見る。
そこには一護が立っていた。

「俺の勝ちだぜ」

「何を、したの？」

チルノは額に何をしたのかを聞く。

「でこピン」

一護は答える。

「どうやら額にでこピンをされたらしい。」

「どうして当てなかったの？」

なぜ月牙天衝を当てなかったのかを聞く。

「月牙を当てなくても、今のでこピンで勝負はついてたからだ。そ

「うちの方が痛くなくて良いだろ」

「そんな理由で。あたいはあんたを」

「あんたじゃねえ、黒崎一護だ」

一護はチルノの言葉を遮り自分の名を名乗る。

「黒崎一護……」

「そつだ。忘れんなよバカ」

チルノはバカというセリフにイラッとするが抑える。

「バカじゃなくてチルノよ！」

「そつか…分かった、チルノ」

一護はようやくチルノとちゃんと言った。

チルノは自分の名前を言ってくれて少し嬉しそうな顔をした。

「勝負はこれで終わりで良いな」

「え、う、うん」

これにてチルノとの弾幕勝負は終わった。

一護は霊夢の方に行く。

霊夢は空中じゃなく陸に居る。

そこに、もう一人、気絶していたルーミアが起きていた。

「遅かったわね一護」

下りてくる一護を見て言う霊夢。

「ああ。ちよつとな」

一護は霊夢とルーミアの前に着地し答える。

そして、一護は霊夢の横に立つルーミアを見る。

「やっと目え覚ましたのか…え」と

一護はルーミアの名前を忘れてしまったらしい。

「ルーミアなのだ。忘れないでほしいのよ」

ルーミアは頬を膨らまし答える。

「悪いルーミア。此処にどうして居るかは霊夢から聞いてるか？」

「うん。一護が気絶した私のことを介抱してくれたって」

霊夢はちゃんと事情を説明してくれたらしい。

「ありがとう！」

ルーミアは一護に礼を言った。

「ああ。どういたしまして」

一護はルーミアの礼に応えた。

その時、二人の少女、チルノと大妖精が三人のもとにやって来た。

「どうしたんだ二人とも？」

一護は二人に向かって聞く。

「一護もあの館を調べに来たの？」

チルノは何やらよく分からない事を聞いてくる。

「館ってなんだよ？」

「この湖の向こうに島が有って、そこに一つの紅い館があるんです」

大妖精が一護の質問に答えた。

「紅い館…ね」

霊夢が呟く。

「かなり怪しいわね」

「ああ」

一護と霊夢が湖の方を見る。
だが紅い霧で見えない。

「凄い強い妖力を感じて、私もチルノちゃんも近づけないの」

大妖精が少し怯えた表情で言う。

チルノは黙っている。

「そうか、ありがとな。教えてくれて」

一護は二人に礼を言う。

と、チルノが一護の前に立ち口を開いた。

「行くの？」

チルノが心配そうに聞いてくる。

一護は微笑み、手をチルノの頭に乗せる。

「心配すんな。ちょっと調べに行くだけだ」

チルノの顔が少し赤くなる。

「もたもたしてないで行くわよ一護」

霊夢は既に空中に浮いている。

「ああ。ルーミア、お前とは此処でお別れだ」

一護はルーミアの方を見て言う。

ルーミアは少し寂しそうな表情になる。

「別にずっと会えねえ訳じゃねえんだ。この異変が解決したら、いつでも会えるからな」

「ほ、本当！ 絶対だよ！」

「ああ、約束する」

一護はそついい三人に背を向け飛んだ。

「じゃあなチルノ、ルーミア、大妖精」

一護は三人に別れを言い、霊夢と共に紅い館に向かって飛んで行った。

第13斬 【門番の女性との死闘】（前書き）

ようやく13話が書けました。

自分では結構文字数が長くなったと思います。

ちゃんと書けていれば良いですが。

今週のジャンプはBLEACHが表紙でかなりカッコいいです！
物語も徐々に進み始めてきましたし。

第13斬 【門番の女性との死闘】

一護と霊夢はチルノと大妖精の情報をもとに島にある紅い館を目指している。

二人は現在、湖上を飛んでいる。

「そっぴや、チルノは一護もって言ってたけど、他にも誰か向かったのかな？」

一護はチルノがあの時言っていた事を思い出す。確かにあの時チルノは一護も、と言っていた。即ち、他にも誰かが紅い館に向かったという事だ。

「多分ね。私たち以外にも、この異変の正体を突き止めようとしている奴がいてもおかしくないわ」

「そうか…っーか大丈夫なのか、そいつ？」

一護は紅い館に向かった人を心配する。

「大丈夫でしょ。これほどの異変に立ち向かおうとする人物は中々の強者よ」

断言する霊夢に少しほっとする一護。

「多分ね」

「多分かよ！」

霊夢の一言に一護の緊張感が無くなった。

そして数分後、一護と霊夢は目的の紅い館の前までやってきた。

一護と霊夢は紅い館の前にある茂みに隠れている。

緑の生い茂る森の中に紅い館はあり、かなり立派な洋館で、紅い色調をしており、時計台もある。

その紅い館の門の前に一人の女性が立っている。

華人服とチャイナドレスを足して2で割ったような淡い緑色を主体とした衣装。

髪は赤く腰まで伸ばしたストレートヘアに側頭部を編み上げてリボンをつけて垂らしている。

目の色は青がかった灰色。

緑色の帽子を被っており、それに付いている星型の飾りには「龍」と一文字書かれている。

その女性が此処の門番みたいだ。

「何で隠れる必要があるんだよ」

茂みに隠れている一護が小声で霊夢に言う。

「一護…」

同じく茂みに隠れている霊夢が小声で言う。

「この紅い霧の原因はあの紅い館で間違いないわ」

霊夢は紅い霧の原因がこの紅い館だと言う。

「何で分かんだよ」

「あそこから紅い霧と同じ妖力を感じるの。あの館の誰かが犯人と
思っただけ」

理由を簡略に説明する。

「だったら隠れてねえで、とっととその犯人を見つけ出して、この
霧を消してもらおうぜ」

「…それもそうね」

一護と霊夢は茂みから出た。

これじゃあ何の為に茂みに隠れていたか分からない。
何で隠れていたんだろう？

門番の女性はまるで一護と霊夢が隠れていたことを知っていたかの
ように静かに二人に目を向ける。

「ようやく出てきましたか小島共」

どうやら知っていたようだ。

「小島とはいい言われようね」

霊夢は女性に向かって言う。

「一護、ここは私に任せて先に」

霊夢が何かを言おうとした時、一護は弾幕を鉄の門に向かって放った。

咄嗟のことで女性も反応できずに門が一護の弾幕によって壊された。

「霊夢！ 先に行け、こいつは俺がやる！」

「分かったわ！」

状況に流された霊夢は紅い館に一足先に入っていった。

「ま、待ちなさい！」

門番の女性が紅い館の敷地内に入った霊夢を追おうとする。

「させるかよ！」

一護は弾幕を女性と霊夢の間に放ち、道を鎖す。
弾幕の衝撃で凄まじい砂煙が舞う。

「あゝあ、また咲夜さんに怒られちゃう」

酷くガツカリする女性。

「悪いな。ちょっとの間、付き合ってもらっぜ」

一護は自分の周りに弾幕を展開する。

「致し方ありません。良いですよ。私は華人小娘の紅 美鈴。この紅魔館の門番です」

女性は自分の名を名乗り構えた。

武道や拳法には詳しくないが、かなり隙の無い構えである。

「俺は黒崎一護。テメエを倒す男だ」

「そうですか。では、いざ尋常に参ります!」

そういうと、美鈴は地面を蹴り一気に一護に向かってきた。

(速い!)

一護は後方に高く跳び美鈴から距離をとる。

美鈴は直ぐ様、地面を再び強く蹴り一護の方に跳ぶ。

「くそ…っ!」

一護は展開しておいた弾幕を向かってくる美鈴に放つ。

「無駄です!」

美鈴は気合いの入った声を上げ、体術、突きや蹴りで一護の弾幕をかき消した。

「何!??」

一護は自分の弾幕を体術だけで消された事に驚愕する。

「はっ!」

美鈴は横蹴りを一護に向かって繰り出す。

一護は肘でそれを防ぐが、あまりの蹴りの力に地面にふき飛ばされる。

一護は地面に強く叩き付けられ、衝撃で砂煙が一護を覆い尽くす。美鈴はカードを取り出しスペルを唱える。

「彩符『彩雨』！」

様々な色の弾幕が雨のように一護の落下地点に降り注いだ。それにより倍の砂煙が舞った。

美鈴は地面に着地し砂煙の方を見る。

「終わりですか」

美鈴は少しガツカリしたように言う。

そして、美鈴は背を向け紅魔館の方に歩いていく。

「黒符『月霊幻幕』！」

砂煙から三日月状の弾幕が現れ、美鈴に向かって飛んでいった。美鈴は直ぐ様振り返り、弾幕を避ける。

美鈴は砂煙の方を再び見る。

「まだ、終わっちゃいねえぜ」

その瞬間、砂煙が消え去った。

そこには額から血を流しているが平然と立っている一護がいる。

「やるじゃねーか。ちょっと驚いたぜ」

「体だけは頑丈らしいですね。ですが、次で止めをさします」

美鈴は再び構える。

一護はカードを出しスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開される。

「来やがれ！」

「言われなくても！」

美鈴は地面を蹴り一護に向かった。

一護は美鈴に向かって三日月状の弾幕を放つ。

「効きませんよ！ そんな微弱な弾幕は」

美鈴は一護の弾幕を突きや蹴りでかき消す。

一護はその美鈴の行動を凝視した。

そして一護は口を開いた。

「成程な。分かったぜ」

その一護の台詞に美鈴は動きを止める。

「…何がですか？」

美鈴は何が分かったのかが気になったらしい。

「テメエ、腕や足に何か纏ってやがるな」

一護は微笑みながら答える。

「!？」

美鈴は目を見開く。

「その纏っている力で俺の弾幕を消しているんだろ？ 力だけで弾幕を消せる訳ねえからな」

「…そうです。私の能力は？ 気を使う程度の能力？。私は自分に宿る気操る事ができるんです」

美鈴は自分の能力とその説明をする。

「気…か」

一護はボソツと呟く。

「では続きといきますよ」

美鈴は一護に向かって駆け出す。

一護は無数の弾幕を張る。

それにより一護の姿が弾幕に遮られ見えなくなった。

「こんなもの、一瞬で潰せますよ！ 華符『破山砲』！」

美鈴は一瞬でスペルを唱えると、美鈴の左拳に凄まじい気が集まった。

その拳を弾幕に向かって一突きした瞬間、全ての弾幕がかき消され

た。

だが、一護の姿を遮っていた弾幕を消しても一護の姿は無かった。

(いない！ 一体どこに!?)

「ここだ」

不図、背後から声が聞こえてきた。

美鈴が後ろを振り向いた瞬間、そこには一護が空中で美鈴に向かって大きく足を振りかぶっている一護の姿だった。

これは蹴り。

それも、かなり強力な。

美鈴は間一髪でその蹴りを避け距離をとる。

「…今のは、危なかつたです」

流石の美鈴も少しやばかつたみたいだ。

「やっぱり避けられたか。けど次は本気で当てるぜ」

一護は少し余裕の笑みを浮かべる。

それを聞いた美鈴は構え直し、口を開く。

「私もあなたの力に敬意を表し、今から本気でいきます」

お互い、相手の目を見据え一護が先に動いた。

「黒符『月霊幻幕』!」

一護はスペルを唱え三日月状の弾幕を無数に展開する。

それと同時に美鈴は高く跳躍しカードを取り出しスペルを唱える。

「華符『芳華絢爛』！」

美鈴を中心に360度全体にまるで花が咲くかのように弾幕を無数に放ってきた。

一護は自分に降ってくる弾幕を三日月状の弾幕を当て相殺する。

美鈴はある程度放つと弾幕を止め一護に向かって急降下した。

「虹符『烈虹真拳』！」

美鈴はスペルを唱えると左拳に気を込める。

一護は降り注ぐ弾幕を防ぎながら、美鈴がこちらにやってくるのを見る。

「やべえ…！」

一護は降り注ぐ弾幕を防ぐので手一杯なので美鈴の攻撃を防ぐのは至難。

仕方なく横に高速で跳ぶ。

それをしたせいで、美鈴の弾幕を何発か被弾する。

だが、それで良かった。

横に跳んでいなかったら美鈴の烈虹真拳の気による突きの乱打をくらい、完全にノックアウトしていたらろう。

「今のを避けましたか。けど、何発か弾幕が当たり、ダメージを受けたようですね」

「ハッ、この程度、どうってことねえよ」

一護はカードを取り出す。

「次は俺が攻めさせてもらっせ」

一護はスペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』！」

スペルを唱えると同時に美鈴の周りの空間から三日月状の弾幕が美鈴を取り囲むように現れた。

「なっ！」

空間から現れた弾幕が美鈴に向かって一斉に放たれた。

美鈴はそれをもろに受けてしまった。

一護は攻撃を休めることなく弾幕を無数に放つ。

「幻符『華想夢葛』！」

美鈴は即座にスペルを唱えた。

美鈴を中心に青い弾幕がばら撒かれる。

両者の弾幕がぶつかり合い相殺する。

（くそ、もう一度だ！）

一護は再びスペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』！」

再び美鈴の周りの空間から三日月状の弾幕が美鈴を取り囲むように

現れた。

「そんなものはもう通じませんよ！ 彩華『虹色太極拳』！」

美鈴がスペルを唱えると同時に太極図の円図のような渦巻き状の形の波がゆっくりと広がった。
それが一護の弾幕を消し去った。

「!?!」

「星気『星脈地転弾』！」

美鈴は一瞬で一護の前に行きスペルを唱えた。
美鈴は気を練り上げ巨大な七色の気弾を作る。

「!?!しまっ」

一護は避けるのを遅れ両腕をクロスし自分の前に出す。
身を縮め防御の態勢になる。

一護は巨大な気弾をくらい後方にふっ飛んだ。

「これで終わりですね」

流石にもう終わりと思った美鈴は目を瞑る。
そして一護を見ないように後ろを向く。

「…まだ、だ」

一護はフラフラになりながら立ち上がった。
服も体もかなりボロボロだ。

「どうして、立ち上がるんですか？」

美鈴は一護に背中を向けながら聞く。

「まだ、負けるわけにはいかねんだよ!!」

一護は強く言う。

「彩符『彩光乱舞』」

美鈴はスペルを唱えた。

その瞬間、色んな色に輝く弾幕が一護に向かって放たれた。

「くっ！」

一護は崩れそうな体を頑張って動かす。

高く跳び、どうにか避ける一護。

美鈴は一護の方を振り向く。

「よく、その身体で避けましたね。でも……」

美鈴は弾幕を一護に向かって放った。

一護は跳び避ける。

(ダメだ！ このままだと、やられる！ こうなったら最後だ)

一護はポケットから代行証を出した。

そして能力を使い卍型の黒い霊圧が代行証を纏った。

それを飛んでくる弾幕の方向に向け、卍型の霊圧を代行証から離さず
に歯車のように高速回転させた。
それにより、弾幕は一護に当たることなく防げた。

(よし、これなら防げる)

その瞬間だった。

《一護、何もたまたしてんだよ》

一護の頭にあの聞き覚えのある声がした。

《俺と代われ、そうすればそんな奴ブツ倒してやる!》

この声は…存在しないはずの人物の声。

そう、内なる虚の一護だ。

霊圧を失った一護に内なる虚がいるわけがない。

幻聴だと思った一護は頭を振り前を見る。

美鈴は弾幕を止める。

「そろそろ諦めたらどうですか？ 力の差は歴然です。これだけ力の差を見せつけられて、まだ、私を倒せると思っているんですか？」

「…力の差か…。前にも同じ事を言った奴がいたな」

一護はウルキオラとの戦いを思い出す。

そして、一護はゆっくりと地面の上に下り、口を開く。

「テメエが俺より強かったら、俺が諦めると思ってたのか？」

一護はあの時言ったことと同じことを言う。
その言葉に美鈴は目を丸くした。

「俺はテメエを倒すぜ…紅　美鈴」

美鈴は少し黙り込み、ゆっくり口を開いた。

「では、その言葉が本当かどうか、見せてもらいますね」

美鈴はそっぴいスペルカードを取り出した。

「華符『彩光蓮華掌』」

スペルを唱え、構える美鈴。

一護もカードを出しスペルを唱える。

「いくぜ…黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒になり代行証に吸収される。

そして一護は有りつ丈の力を代行証に注いだ。
卍型の部分が超高速で回っている。

それを見た美鈴が驚愕する。

（まさか、これ程の力がまだ残っているとは…!!）

美鈴は一護の目を見据え、駆け出した。

一護も代行証を持ちながら美鈴の方に駆け出す。

そして両者が激突した。

凄まじい爆発音と突風が起きた。

すぐに両者がすれ違い、お互い立ち尽くす。

美鈴は立ち尽くす中、口から血が流れた。

「…まさか、この私が、負けるなんてね。お見事です…黒崎一護」

美鈴は負けを宣言し、そのまま地面に倒れ、意識を失った。

「…悪い、霊夢。俺も、ここまでみてえだ」

美鈴が倒れた後、一護もそのまま地面に倒れた。

そんな中、霊夢は紅い館の奥の方まで進んでいた。

第13斬 【門番の女性との死闘】（後書き）

<次回予告>

一護「結構長い戦いだっとな」

美鈴「そうですね。っていうか、私達二人とも倒れてしまいましたけど、どうなるんでしょう?」

一護「そうだな。俺たち一体どうなるん…」

霊夢「あんた達、もう楽屋に戻ってて良いわよ」

一護&美鈴「えええー!!!」

〔東方図鑑〕

「そついや幻想郷の連中って二つ名とかあるんだろ?」

一護は霊夢に二つ名のことを聞く。

「ええ。あるわよ」

「霊夢にもあるのか」

「そりゃあるわよ」

「ふ〜ん、そうか」

「何、あんたも二つ名が欲しいわけ」

霊夢は一護の顔を覗き込む。

「い、いらねえけど」

凶星だ。

「心配いらないわよ。私が考えておいたから」

「な、何!?!」

「もう文にも言っておいたから」

あの野郎に言ったのか…

「何て言っただんだ!?!」

「さあ、どうせ文にもっと面白くされるわよ」

「面白いのは前提かよ teme!」

第14斬 【メイドとの激戦と本探し】（前書き）

急展開です。

二話に分けようと思いましたが、どう分けたら良いのかわからなかったので止めました。

最近またクレヨンしんちゃんを見始めました。

昔見たクレヨンホラー劇場が今見ても案外怖いです。

第14斬 【メイドとの激戦と本探し】

女の相手を一護に任せた霊夢は一足先に紅い館の中に侵入していた。

紅い館の中にある家具はどれもこれも高価な物で、壁や絨毯が全て赤色に統一されている。

霊夢を迎撃しようと襲い掛かってくるメイド姿の妖精は、適当に弾幕を当て気絶させた。

「…にしても広いわね。この館は」

霊夢は向かってくる妖精メイドを倒しながら呟いた。たしかに、この館はかなりの広さだ。

と、霊夢の前に妖精ではないメイドが一人現れた。

「あなたが報告に入っていた侵入者ね」

メイドは霊夢の目を見据え言った。

「…あんたは？」

「この紅魔館のメイド長、十六夜 咲夜よ」

その頃、一護は思ったより体力の回復が早く、既に立ち上がった。た。

だが、身体は美鈴との戦いでボロボロになっており、ほぼ立っていないのがやっとの状態だ。

「…早く、霊夢に追いつかねえと」

一護はフラフラな足取りで紅魔館の入り口に向かう。
今にも倒れそうだ。

「そんな体でどうするつもりだ一護」

不意に自分の後ろから聞き覚えのある声がした。

「その声は…」

一護は振り向き様に言い、声の主を見る。

「よお、一護」

声の主は魔理沙だった。

魔理沙は片手を上げ微笑む。

「魔理沙、何でお前がここに…？」

「決まってるだろ。この紅い霧の異変を解決しにきたんだぜ」

魔理沙は一護に歩み寄りながら答える。

「どうやら、チルノが言っていた自分たち以外にこの館に向かった人物は魔理沙のようだ。」

「でも、到着に少し時間掛かりすぎじゃないか？」

「そんな疑問を心に呟きながら、今しなければいけない事を思い出す。」

「そつだ、早く霊夢のここに行かねえと」

一護は再び紅魔館に向かおうとする。

「待てよ一護」

魔理沙が一護の行動を制止する。

「さつきも言ったけど、そんな体じゃ勝てる戦いも勝てないぜ」

「ああ、分かってる。けど、立ち止まるわけにもいかねえんだよ」

一護は真っ直ぐ魔理沙の眼を見て言う。

魔理沙は一護の眼を見て溜め息をつき口を開く。

「分かったぜ。一護がその気なら、私から良い物をプレゼントしてやるぜ」

魔理沙はそういつと、懐から何やら怪しい紙包みを取り出す。

紙包みを広げると小さい丸薬っぽい物が出てきた。

「何だよ、それ？」

一護はその丸薬っぽい物を怪しい眼で見る。

「これはこの前、私がキノコを素に作った回復薬だぜ」

この丸薬は回復薬らしい。

結構ありきたりである。

だが、この状況で回復薬はかなり有り難い。
これさえ飲めば再び全快で戦線復帰できるのだから。

「ありがとな、魔理沙」

一護は丸薬を受け取り、口に入れた。
自分でも何の疑いも無しに飲み込んだことを少し不思議に思った。
今はそれほど切羽詰まっているのだ。

「効き始めるのに少し時間が掛かるが、効果は抜群だぜ」

「ああ、じゃあ行こうぜ」

「おう！」

一護と魔理沙は紅魔館の中に入っていった。

「外も中も代わり映えしねえな。不気味だ」

一護は館の中の赤い空間を見て感想を言った。

「でも、広いぜ。これだけ広ければ、どこかに蔵書ホールがありそ
うだぜ」

魔理沙は何やら期待の眼で館の中を見渡している。

「とりあえず進むぜ。さっきから胸騒ぎがしやがる」

一護は早く先へ進みたいようだ。
二人は適当に奥へ奥へと歩き出す。

歩いている途中に所々でメイド姿の妖精が気絶している。
どうやら霊夢が倒していったようだ。
と、魔理沙が一護の肩を掴んできた。

「どうした？ 魔理沙」

一護は後ろを歩く魔理沙の方に振り向く。

「あそこに行ってみないか？」

魔理沙は自分たちからみて横の方を指差す。
そこには地下へと続く階段がある。

「あそこから強い魔力を感じるんだぜ。もしかしたら、紅い霧の犯人かもしれないぜ？」

「地下か……」

一護の脳裏に何かが蘇る。

そう、夢だ。

あの暗い部屋の、あの少女の夢。

「分かった」

一護はあの夢と何か関係していると思い、地下に行くことにした。

二人は地下に到着すると、何やら一つの扉を見つけた。

「部屋か…」

「開けようぜ」

「ああ」

二人は何の警戒心もなく扉を開けた。

扉の先には凄い数の本棚がある。

部屋はかなり広いが、ほとんど本棚で埋め尽くされている。

本棚一杯に数多くの本が並べられている。

そこらの図書館よりも圧倒的に本が多い。

一生掛かっても読めないくらい。

「すげえ数の本だな」

一護は感心したように言う。

「す、すげー！ 本が一杯あるぜ！」

魔理沙の目が眩しいくらい輝いている。

魔理沙は本棚に並べられている本を見渡す。

「後で、何冊か借りていこ」

「私が見ず知らずの人に本を貸すと思っているの？」

ふと、どこからか知らない人の声がした。

一護と魔理沙は声のした方を見る。

そこには一人の少女が空中に浮いていた。

長い紫髪のをリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服を着ている。

さらにその上から薄紫の服を着、ナイトキャップをかぶっている。

また服の各所に青と赤のリボンがあり、帽子には三日月の飾りが付いている。

その少女が二人を見据えている。

「あなた達が小悪魔が言っていた侵入者ね」

「…テメエがこの館の主か？」

一護は少し睨みつけて聞く。

「違う。私はこの館の主ではないわ。館の主なら自室にいると思うわよ」

「じゃあ、外の紅い霧の犯人は多分ここの主か」

一護は小声で呟いた。

「その主の場所を教えてはくれねーか？」

一護は館の主の場所を聞き出そうとする。

敵の主の居場所を敵から聞きだせる訳ないが、聞いてみる。

「良いわよ」

予想外の答えが返ってきた。
何と了解してくれたのだ。

「ただし、条件があるわ」

まあ、こうなるだろうと思っていた一護は条件を聞く。

「この沢山の蔵書の中から、ある一冊の本を見つけ出してほしいの」

「…その本の名前は？」

「？初代魔術師ダルク・マグス？の書いた本よ」

「何いいいい！！」

魔理沙が本の著者を聞いて凄じ驚いた。

一体何に驚いたんだ？

「あの、ダルク・マグスの書いた本が有るのか！？」

魔理沙の目が輝くどころか星が飛び出している。

ん、ダルク…どっかで聞いたことあるな。

まあいいや。

「ええ。今それを小悪魔にも探してもらってるから、あなた達も一緒に探してちょうだい」

「ああ。その人の本を見つけたら良いんだな」

「良いぜ良いぜ。絶対見つけてやるぜ」

魔理沙は本探しだというのにうきうきしている。

「そついや、自己紹介がまだだったな。俺は黒崎一護、よろしく」

一護は悪い人じゃなさそうなので自分の名前を名乗る。

別にさっきの女性（紅 美鈴）が悪い人というわけではない。

「私は霧雨魔理沙だ。よろしくだぜ」

一護に続いて魔理沙も名前を名乗る。

「私はパチュリー・ノーレッジ。この大図書館の主よ」

その頃、霊夢はメイド長の十六夜咲夜と弾幕勝負をしていた。

銀髪のボブに両方のもみあげ辺りから、先端に緑色のリボンをつけたみつあみを結っている。

服装は青と白を基調としたメイド服であり、頭にはカチューシャを装備している。

「奇術『ミスディレクション』」

咲夜はスペルを唱えると無数のナイフの弾幕を広範囲に放ってきた。

「夢符『封魔陣』」

霊夢もスペルを唱え青白い結界を展開し、ナイフの弾幕から身を守った。

そして、霊夢は新たなカードを取り出しスペルを唱える。

「霊符『夢想封印』！」

複数の光弾を咲夜に向かって発射した。

「…無駄ですよ」

咲夜はそういうと、その場から姿を消した。

（消えた！？）

瞬間、霊夢の後方に咲夜が現れた。

霊夢は気配に気づき、後ろに振り返る。

「幻在『クロツクコープス』」

咲夜がスペルを唱えた瞬間、霊夢の周りにいつの間にかナイフの弾幕が現れ、飛んできていた。

（いつの間に！？）

霊夢は即座にナイフの弾幕を避けるが、三本ほど腕や足に刺さる。刺さった腕や足から血が流れた。

霊夢はナイフを抜き取り、放り投げる。

「あなた、一体何をしたの？」

「私が教えるとしても。もう一度、自分の目で確認してみてください。」

咲夜は少し挑発じみたことを言う。

「それもそうね」

霊夢は再びカードを取り出しスペルを唱える。

「霊符『夢想封印』」

複数の光弾が咲夜に向かって放たれるが、さっきと同じように霊夢の後方に行き避ける。

(まただ!? さっきと同じで、消えて移動した)

霊夢は直ぐ様、咲夜の方に弾幕を放つ。

咲夜は再び消え、次は霊夢の頭上にいた。

「幻世『ザ・ワールド』」

咲夜がスペルを唱えた瞬間、霊夢の周りに無数のナイフが展開された。

「チェックメイトですね、侵入者。そういえば、まだあなたの名前を聞いていませんでしたね。まあ、どっちでもいいですけど!」

そういつと咲夜は展開していた無数のナイフを霊夢に一斉発射した。

「夢符『封魔陣』!」

霊夢はスペルを唱え結界を張った。

同時刻、一護は大図書館でパチュリーに頼まれた本を探していた。

「こんな大量の本から一冊の本を探し出すのって、結構きついな」

「そうですね」

一護の横に一人の女性がいる。

赤い長髪で頭と背中には悪魔然とした羽が生えており、白いシャツに黒色のベスト、ベストと同色で膝丈より長いスカートで、ネクタイを着用している。

この女性がパチュリーが言っていた小悪魔。大図書館で司書をしているらしい。

既に一護と魔理沙との自己紹介は終えている。

「これじゃあ、自分で館の主の部屋を探した方が早いかな」

一護は本棚の本を見ながら呟いた。

「最後にどこに置いたか憶えてねえのか？」

一護は小悪魔に聞く。

ちなみに魔理沙は別の本棚を探している。

「すみません。それが全然憶えていなくて」

「そうか…。まさか…」

一護は何かが分かったのか再び口を開いた。

「なあ、パチユリーがいつも本を読んでる机ってどこにある？」

「え、あつちですけど」

小悪魔は横の方を指差した。

「そうか。さんきゅう」

一護は小悪魔が指差した方向に向かった。

(俺の勘が正しけりゃ、本の場所は…)

霊夢は咲夜のナイフの弾幕を封魔陣で何とか防いだ。
が、霊夢の体力はほとんど残っていない。

「今のを、よく防ぎ切りましたね」

咲夜は感心したように言う。

「けど、もう体力切れですわね」

霊夢は少し口元を緩めた。
そして微笑み、口を開く。

「あなたの能力が分かったわ」

その言葉を聞いた咲夜は少し顔つきが鋭くなる。

「…言ってみなさい」

「あなたの能力は時間を操る程度の能力…で、当たってるかしら？」

それを聞いた咲夜は驚く。

そう、当たっていたのだ。

「正解よ。私の能力は？時間を操る程度の能力？。私は時を操れるの」

「大層な能力ね」

「当てたことには驚きましたが、当てたところで攻略法が分からなければ意味ありませんよ」

咲夜はカードを取り出す。

「これで本当の最後です。メイド秘技『殺人ドール』」

咲夜がスペルを唱えると無数のナイフが発射された。

霊夢はスペルカードを取り出す。

「このスペルはあまり好きじゃないんだけど、そんなことも言っていられないみたいだわ」

（この状況で奥の手があるっていうの!?!）

有利な状況の咲夜は少し警戒する。
そして、霊夢はスペルを唱えた。

「『夢想天生』！」

「マジかよ」

一護と小悪魔はパチュリーの読書机を探っていたら、目的の本を見つけてしまった。

綺麗な装丁の本で、かなり高価な本に見える。

「良かったです。見つかった。でも、どうして黒崎さんはここにど
分かったんですか？」

「簡単だ。簡単すぎて説明したくねえよ」

つてな訳で省略。

と、そこにパチュリーと魔理沙が来た。

「ようやく見つかったようね」

パチュリーは小悪魔が持つ本を見て言う。

「ああ。じゃあ、約束通りこの館の主の部屋を教えてください」

「ええ、分かっているわ。レミィの部屋は」

同時刻、その館の主の部屋では一人の少女と一人の男性が向き合っていた。

暗くて表情が分からない。

「まさか、本当にあなたが現れるなんてね」

「私はただここに寄っただけだよ。レミリア・スカーレット」

第14斬 【メイドとの激戦と本探し】（後書き）

<次回予告>

一護「ようやく次回、俺が戦うぜ」

霊夢「もついいんじゃない？ あんたずくと戦ってたんだし」

一護「残る敵は後一人なんだ。ここはビシツと決めねえとな」

霊夢「でも台本では後数回あんたは戦うことになっているわよ」

一護「台本なんて有ったのかよ」

〔東方図鑑〕

一護は椅子に座りながら台本を読んでいた。

「マジかよ。まだ紅血鬼篇だけでも数回戦いがあるじゃねえか」

一護は台本を睨みつけるように見ている。

「私は後一回くらいしか戦いが無いから楽屋で休んどくわね」

霊夢はそういい去った。

「くそ、主人公だからってこれはきつすぎるぜ。原作でも修行で戦ってんのに、ここでもこんなに戦わなくちゃいけねえのかよ。もはや出張レベルじゃねーよ」

そこに魔理沙がやってきた。

「あんま危ない発言すんなよ一護。ちなみに私も後一回くらいしか戦わないぜ」

「デメエは一回も戦ってねえだろ！」

第15斬 【紅魔館の主】（前書き）

既に昨日書き終えていた話です。

今度、友達と東方スカイアリーナ・幻想郷空戦姫をプレイすることになったんですが、面白いのかな？

第15斬 【紅魔館の主】

一護はパチュリーから館の主の部屋を聞き出し、一人で向かっていった。

魔理沙は大図書館で調べたいことがあるってことで、あそこに残った。

魔理沙の回復薬が異常な程効いたおかげで、体の傷や疲れがほとんど無くなっている。

だが、魔理沙がいうには、この回復薬には副作用があるらしい。

その副作用はいつ起きるか分からなく、副作用で起こる作用は全身が麻痺し一時的に体が動かなくなるらしい。

だが、今はそんなことを気にしている暇は無い。

一刻も早く館の主の部屋に行かなくては。

と、一護が紅い廊下を走っていると、ボロボロになっている霊夢が壁にもたれ掛かって座っている姿を見つけた。

「霊夢！」

一護が霊夢に駆け寄る。

一護の声に霊夢は反応した。

どつやら気絶はしていないようだ。

「一護……」

霊夢は顔を上げ答える。

一護は霊夢に駆け寄り、霊夢の傍らに屈む。

「大丈夫か？」

一護は霊夢の顔を覗き見る。

「ええ、何とかね。それより一護、早くあなたは先に進みなさい。知っているんでしょう、犯人の部屋」

霊夢は一護を見て言う。

「ああ、分かった。ここで待っているよ。すぐ戻るからな」

一護はそういい館の主の部屋に向かった。

その頃、館の主の部屋では

「本当に寄っただけなの」

少女は訝しそうな目で聞く。

「…いや、一つ、ここにというより、ここに侵入した者に用があつてね」

男性は本当のことを答える。

「侵入者に？ どうして？」

「私の計画の終着点が侵入者の一人、黒崎一護に手伝ってもらわないといけないからだよ」

「…」

少女は一瞬黙り込み再び口を開く。

「今のところ確認されているのは虚無、破壊、孤独、そして蛇…」

少女はなにやら理解できないことを言い出す。

「よく御存知だね。だが、まだそれだけじゃあない。死神に破面、正直言つて彼らに興味はない」

男性はそれに答える。

「彼らをどうするかは君が決めると良い。ゲームは難易度が高い方が面白いからね」

男性は微笑む。

「良いわ。受けてたつわよ。でも、その前に私が黒崎一護を殺してしまつたらどうする？」

少女は睨み付けるように言う。
だが、男性は表情を変えない。

「君では、彼を殺すのには力不足だよ」

「！何ですって…」

少女は少し苛立つ。
その瞬間だった。

部屋の扉が強く開けられたのだ。

「邪魔するぜ」

入ってきたのは黒崎一護だった。

一護が入ると同時に男性は姿を消した。

暗い部屋だが、ちょうどいい具合に紅い月が部屋を照らし出した。

一護は少女を確認すると口を開く。

「テメエがこの館の主だな？」

一応確認する。

「そうよ。私が紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ」

紅魔館の主は自分の名を名乗る。

水色の混じった青髪に真紅の瞳。

ピンクのナイトキャップを被っている。

ナイトキャップの周囲は赤いリボンで締めている。

衣服は、帽子に倣ったピンク色。太い赤い線が入り、レースがついた襟。三角形に並んだ三つの赤い点がある。両袖は短くふっくらと膨らんでおり、袖口には赤いリボンを蝶々で結んである。左腕には赤線が通ったレースを巻いている。

小さなボタンで、レースの服を真ん中でつなぎ止めている。

腰のところは赤い紐で結んでいる。その紐はそのまま後ろに行き、先端が広がって体の脇から覗かせている。

スカートは踝辺りまで届く長さ。これにもやはり赤い紐が通っている。

背中には大きな悪魔のような翼が生えている。

パツと見、悪魔か吸血鬼を連想させる。

「さあ、あなたも名乗りなさい。侵入者」

レミリアは一護の目を見据えて言う。

「俺は黒崎一護。この紅い霧はあんたの仕業か？」

一護は少し睨みつけるように言う。

「そつだとしたら…どうする気？」

レミリアは楽しそうに答える。

「どうやら、紅い霧の犯人はレミリアのようだ。」

「今すぐ、紅い霧を消せ」

一護はレミリアに紅い霧を消すように言う。

「嫌よ。この紅い霧があれば、私の嫌いな日の光りを見ずに済むからね」

「勝手な事言ってんじゃねえぞ」

一護は眉間にしわを寄せる。

「だったら、私を倒してみなさい。一発でも私に弾幕を当てたら、紅い霧を消してあげるわ」

一発でも当てたら勝ち。

完全に舐められている。

「上等だ！ 一発どころか何十発も当ててやるよ！」

「やってみなさい人間」

一護はカードを取り出しスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開され、一斉にレミリア目掛けて放つ。

レミリアは飛んでくる弾幕を見て呟く。

「ぬるいわね」

レミリアもカードを取り出しスペルを唱える。

「冥符『紅色の冥界』」

レミリアの周りに紅い弾幕が無数に現れ、それが一護の弾幕を全て掻き消す。

レミリアの周りに弾幕が無くなったのを見た一護は、二枚目のスペルを唱えた。

「黒符『天幻月牙』！」

レミリアの周りの空間から三日月状の弾幕が現れ、レミリア目掛けて一斉に放たれた。

「遅いわよ」

レミリアは一瞬で自分の立ち位置から、一護の後方に移動した。

一護は後ろを振り向くのに少し遅れてしまう。

「必殺『ハートブレイク』」

一護が後ろを振り向いた瞬間、紅い槍がこちらに向かって飛んできた。

それを避けることができず、紅い槍が左肩に貫通する。

「く…っ！」

一護は一瞬、苦悶の声を上げた。

「まだまだいくわよ。呪詛『ブラド・ツェペシュの呪い』」

レミリアは休む暇を与えずスペルを唱える。

紅い弾幕がレミリアを中心に無数に現れ、それが右往左往と動く。

一護は左肩を右手で支えながら弾幕を避け続ける。

「弾幕に気がいきすぎよ。夜符『バッドレディスクランブル』」

レミリアがスペルを唱えると、背後の壁に高く飛びつき紅いオーラを纏い、回転しながら一護に向かって体当たりを仕掛けた。

「しま…っ！」

一護がレミリアの体当たり気付いた時には既に遅く、レミリアによる体当たりを受けてしまった。

それにより一護は、後方に勢いよく吹っ飛ばされた。

一護はレミリアの部屋のでかい出窓を突き破り、外まで飛ばされる。

「がはっ！」

一護は能力を使い空中に立つが、一護の口から血が勢いよく出る。

「くそ…っ！」

一護は外からレミリアの部屋を見るが、レミリアの姿が無い。

（！どこ行きやがった！？）

一護が横、下を見るがいない。

「じじよ」

一護がレミリアを探していると、不意に後ろから声がした。

一護は振り返り、声のした方を見る。

そこには、紅い霧と紅い月を背景にレミリアの姿があった。

「テメエ、いつの間に」

「あなたが遅すぎるのよ」

レミリアは微笑みながら答える。

「チッ」

一護は舌打ちをする。

「最初の威勢はどうしたの？ それとも、もう諦める？」

レミリアは一護を見下したように言う。

「まだ諦めねえよ」

一護はポケットから代行証を取り出し、いつも通り、黒い霊圧を卍型のように纏わせる。

「何それ？」

レミリアは一護の代行証を見て聞く。

「自分で確かめろよ」

一護は少し余裕の笑みを浮かべる。

「だったら、確かめさせてもらおうわ。神術『吸血鬼幻想』」

レミリアはスペルを唱える。

レミリアから六つの大弾が放たれ、それに続いて通常の弾幕が無数に放たれた。

一護はそれを見ると、カードを取り出しスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒になり、代行証に吸収される。

一護は代行証をレミリアに向かって振った瞬間、卍型の霊圧が歯車のように回転しレミリア目掛けて飛んだ。

レミリアが放った弾幕はそれに次々と掻き消されていった。

(！？?バカな！)

レミリアはその光景を見て目を丸くする。

流石のレミリアも自分の弾幕が、一発の一護の放った月牙に負けるとは思わなかったらしい。

レミリアはそれを横に避ける。

「まだまだ！ 黒斬『月牙天衝』！！」

一護は再び月牙を放つ。

「調子に乗らないでよ。紅符『スカーレットマイスタ』」

レミリアはそれに対抗するようにスペルを唱えた。

レミリアから大弾、中弾、小弾の順番で弾幕が無数に放たれる。だが、月牙はそれをも掻き消していく。

「嘘でしょ」

レミリアは驚愕する。

一護はその隙を狙い、もう一枚スペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』！」

レミリアの周りに三日月状の弾幕が現れる。

それを見たレミリアは我に返り、間一髪のとこで避ける。

「チッ、もうちよいだったのに」

一護は悔しそうに呟く。

「今のは危なかったわ」

レミリアは一護に向かって言った。

「けど、次は本気でいくわよ」

レミリアはこの戦いを楽しく感じ始めていた。

「ああ、全力できやがれ！」

一護もいつの間にか戦いを楽しく感じてきていた。

その時だった。

代行証の黒い霊圧が一護を包み始めたのだ。

「!!!!?」

レミリアも一護もそれに驚く。

「!...何だ...!!? 代行証が...!!」

黒い霊圧が一護の右腕を完全に包んでしまった。

第15斬 【紅魔館の主】（後書き）

<次回予告>

一護「まさか館の主がガキなんて思わなかったぜ」

レミリア「まさか、あなたみたいながキが侵入者だったなんてね」

一護「何だとテメエ、もう一遍言ってみやがれ!!」

レミリア「何度でも言っただけよ、ガキ。それに私はガキではないわ。500年以上生きているからね」

一護「ハッ、体躯も胸も小学生と変わんねーじゃねえか」

レミリア「！何ですって!!」

〔東方図鑑〕

一護は今回の話を振り返っていた。

外も赤、館の中も赤、レミリアの弾幕も赤、ついでに霊夢の衣服も赤。

「赤ばっかだな」

一護はポツリと呟いた。

と、そこにレミリアが来た。

「良いじゃない。あなたもイチゴで赤い食物なんだから。合点がい
くわ」

「俺はイチゴじゃなくて一護だ!!」

一護はレミリアのセリフにツッコんだ。

第16斬 【死神の力】（前書き）

ようやく紅血鬼篇が終わりに近づいてきました。
だいたい、後3話くらいかな。

今週のジャンプで一護が凄い姿になりましたね。
これからはあの姿なのかな？

第16斬 【死神の力】

「はっ、はっ、はっ、はっ」

一護の息が荒くなっていく。

一護は黒い霊圧に包まれた右腕を左手で掴む。

「…!？」

レミリアは一護を凝視する。

今、目の前で自分の理解できないことが起きているのだ。

「はっ、はっ…うおおおおおアアアアアア!!!」

一護は右腕を支えながら叫んだ。

その頃、魔理沙は倒れている霊夢を廊下で見つけ、一護と同じ回復薬を飲ませた。

「あんたまで、この館に来ていたなんてね」

霊夢は横に座る魔理沙に言う。

現在、霊夢と魔理沙は壁にもたれ廊下に座っている。

「当然だろ。私も異変の解決が好きなんだぜ」

魔理沙は大図書館からパクツた、否借りた本を読みながら答えた。

っていうか、いつから私は異変の解決が好きな人間になったの？

「さつき、一護の霊力が異常に変化したの感じた？」

霊夢は俯き聞く。

それを聞かれた魔理沙は本から顔を上げ、前を見た。

「ああ、感じたぜ。急激に一護の霊力が上昇していきやがったぜ」

魔理沙が珍しく真顔で答える。

それ程、今の一護の身に起きている事は前代未聞の現象みたいだ。

「一体何が起きているんだ？」

魔理沙は霊夢の方を見て聞く。

「分からないわ。一護のもとに行かないとね」

「…じゃあ行こうぜ。気になって仕方ないぜ」

「ええ」

二人は立ち上がり、奥に進んでいった。

同時刻、湖の畔にチルノ、ルーミア、大妖精がいた。

三人は湖の先、一護と霊夢が向かった方向を見ている。

「大丈夫かな、一護？」

ルーミアが一護の心配をしている。
自分を介抱してくれた相手を心配するのは当然だ。

「大丈夫に決まってるよ！ この最強のあたいに勝ったのに負ける訳ないじゃない！」

チルノが胸を張って答える。
その様子を大妖精は微笑みながら見る。

「そ、そーなのかー」

ルーミアはハッキリしない様で頷く。

「チルノちゃんも心配なんじゃないの？ 一護さんのこと」

大妖精がチルノを見て言う。

それを聞いたチルノは心の内を読まれたかのように顔を赤らめた。

「な、何で分かったの！？」

チルノは焦り口調で聞く。

どうやら、心の内は大妖精に見事に読まれたらしい。

「チルノちゃんとは長い付き合いだもん。それくらい分かるよ」

大妖精はにつこりと微笑む。

そして大妖精は二人に向かって口を開く。

「行きたいんじゃないんですか？ 一護さん達のとこに」

そのセリフにチルノとルーミアは顔を見合わせる。
そして、二人は気持ちを共有し大妖精の顔を見て

「「うん」「

と頷く。

「その姿は何？」

レミリアは一護を見て聞く。

さっきまでの笑みは消え、少し一護に対して警戒心を強くしている。

「俺にもよく分かんねえけど、力が上がっている事は自分でもよく分かる」

今の一護の姿は完全に死神が着ている死覇装の姿である。

一護の右腕には黒い霊圧が纏わっていて右腕が見えない。

そう、今の一護の姿は死神と同じである。

「続きといこうぜ、レミリア」

一護は左手でカードを取り出しスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開される。

それを見たレミリアは目を見開く。

(さっきまでの弾幕より、圧倒的に強力になっている！)

レミリアはカードを取り出しスペルを唱える。

「『紅色の幻想郷』！」

レミリアから紅い大弾が幾つか発射された。

その大弾の軌道上に紅い弾幕が現れる。

一護は展開しておいた三日月状の弾幕を発射する。

一護の弾幕とレミリアの弾幕がぶつかり合い相殺する。

レミリアは弾幕がぶつかり合っている隙を狙い、一護の背後に一瞬で移動する。

一護の背後に行くと、手に紅いオーラを纏わせ、一護に向かって手を突き上げる。

一護は即座に振り返り、右腕の黒い霊圧でそれを弾く。

「!?!何…!!」

レミリアは自分の打撃を防がれたことと、それに反応したことに驚く。

今までなら、一護はレミリアの速度に反応できなかったが、それがいとも簡単にできてしまったのだ。

「黒符『天幻月牙』」

一護はレミリアの攻撃を弾いた瞬間、スペルを唱えた。

レミリアの周りの空間から三日月状の弾幕が現れる。

レミリアはそれを見て直ぐ様スペルを唱える。

「……くっ！ 紅符『不夜城レッド』！」

刹那、レミリアを包むように赤い十字架が立ち込んだ。

一護は咄嗟の行動で赤い十字架から逃れた。

一護の弾幕はその赤い十字架によって消される。

レミリアは赤い十字架を消すと、即座にスペルを唱える。

「運命『ミゼラブルフェイト』！」

レミリアから多数の鎖の形状をした赤いオーラが発射される。

一護はその鎖を躲すが、鎖が一護を追跡し始める。

多数の鎖に追跡される一護は高速移動で避ける。

一護はその鎖を避け続けるが、一護の逃げ場を多数の鎖が減らしていく。

そして、遂に多数の鎖が一護を囲み完全に捉えた。

「これでお終いな」

レミリアが勝利を確信したのも束の間、一護は黒い霊圧を全身に纏い全て防ぐ。

「……？そんな、このスペルまで防がれるなんて……！」

レミリアは自分の目を疑った。

今の一護は死神代行の時と同じ位の力があるのだ。

「そろそろ終わりにしようぜ、レミリア」

一護が右手をレミリアに向けて言う。

「次で最後だ」

一護はそういつと右腕を構える。
それを見たレミリアは微笑む。

「分かったわ。次で最後にしましょう」

レミリアはカードを取り出しスペルを唱える。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

レミリアのカードが紅い粒となり、それがレミリアの左手にいき、
槍を形成し始めた。

槍は赤く、とてつもない大きさだ。

威力は多分、本気でいかないとやばい位だ。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護もスペルを唱える。

カードが光の粒となり右腕に吸収される。

「いくぜレミリア」

一護はレミリアの目を見据え言った。

「ええ、良いわよ。一護」

レミリアは槍を構え言った。

そして両者、最後の力を振り絞り一護は右腕から死神時代に放っていた月牙天衝を、レミリアは槍を片手で素早く投げた。

月牙と神槍が激突する。

凄まじい激突音と突風が起きる。

天に赤いオーラと黒い霊圧が立ち上がった。

互角だと思っていたレミリアは完全に油断してしまっていた。

一護の月牙が微小ながら生きていたのだ。

その月牙がレミリアに直撃した。

一護は死覇装の姿から、元の服装に戻っていた。

レミリアの服がボロボロになっている。

「…一発、当たってしまったわね」

レミリアは自分の服を見て言う。

「私の負けよ。黒崎一護」

レミリアは負けを宣言した。

「約束通り、霧は消すわ」

「…勝ったん…だな」

一護は微笑み呟いた。

一護対レミリアの弾幕勝負は一護の勝ちで幕を閉じた。

それから、数十分後。

「お嬢様、ご無事ですか!？」

メイド長の咲夜が扉を開けて入ってきた。

咲夜は顔や手に包帯と絆創膏を付けている。

霊夢と戦った後、咲夜はどうやらボロボロになったメイド服の着替えとケガの治療を済ませたみたいだ。

部屋にはレミリアと一護が向き合って話している。

「あら、咲夜。どうしたの？ そんなに慌てて」

レミリアは咲夜の方に振り返り聞く。

ちなみにレミリアの衣服は現在ボロボロである。

一護は上半身裸で左肩の部分に包帯を巻いている。

その二人の姿を見た咲夜は赤面する。

「な、あなた、一体お嬢様と何のプレイを!？」

咲夜が滅茶苦茶狼狽している。

何か最悪な誤解をしているみたいだ。

「よ、よくも私のお嬢様に、あんなことやそんなことやこんなことまでしてくれたわね!」

いきなり訳の分からないことを言い出す。

咲夜は銀製のナイフを数本取り出し、一護を睨みつけて言う。

「いつから私はあなたの物になったの？」

レミリアは小さく呟いた。

今の咲夜には一護に対する殺気が凄まじい。

「な、何変な誤解してんだよ！？俺がこんなガキに、んな事する訳ねえだろ！見間違いにも程があるぜ」

一護は咲夜に必死で誤解を解こうとする。

「ガキ……」

レミリアは俯きながら呟いた。

「おい、レミリア！お前もこいつに何とか言っておくれ！」

一護はレミリアに助けを求める。

咲夜は一護に向かってナイフを投げつける。

一護は逃げるように避ける。

「危ねえな！当たったらどうすんだ！？」

一護は壁に刺さったナイフを見て言う。

「心配には及びません。当たっても肉が裂け、血が噴出するだけです」

咲夜は平然と答える。

「一々答えなくてもいいのに。」

「それが危ねーって言ってんだよ！」

「護は咲夜を怒鳴りつけた後、レミリアの方を見る。」

「おめえも早くこいつを止めろよ！ お前の従者なんだろ！」

「護はレミリアに咲夜を止めるように言う。」

「そうね…分かったわ」

レミリアは俯きながら答える。
なぜか声が震えている。

「咲夜！ 少し痛めつけてあげなさい」

あれ、聞き違えたかな？

レミリアがナイフ女を刺激するようなことを言ったよつな。

「はい、お嬢様。少し痛めつけますね」

レミリアは咲夜を刺激することを言ったらしい。

咲夜はナイフを構える。

「おい、待て！ ナ이프が一発でも当たったら痛いどころか致命傷もんだぞ！」

「問答無用です」

咲夜はナイフを投げつけてくる。

「うおおおおお！」

一護は逃げながらナイフを避け続ける。

「レミリア！ テメエ、何てこと言いやがる！」

ナイフから逃げながら一護はレミリアに向かって叫ぶ。
レミリアは一護の言葉を無視する。

その時、レミリアの部屋に霊夢と魔理沙が入ってきた。

「一護、大丈夫！？」

霊夢は入ってくるなり、そう叫んだ。

「大丈夫じゃねー！ このナイフ女をどうにかしてくれ！」

一護は霊夢に向かって言う。

その様子を見た霊夢は溜め息をつき、仕方なく一護を助けることにした。

それから数分後、ようやく茶番劇が治まり全員が落ち着いていた。

一護はこれまでの事を全て霊夢と魔理沙に話した。

咲夜の変な誤解も解いた。

ついでに霊夢もあの魔理沙の回復薬を飲んだことを聞いた。

副作用のことは聞いた上で飲んだのかな？

「じゃあ、この紅い霧は明日までに消えるのね？」

霊夢はレミリアに紅い霧のこと聞いた。

「ええ、そうよ」

レミリアは答える。

「それじゃあ、これで異変解決ね。帰ろうか？ 一護」

霊夢は異変が解決したので家に帰ろうとする。

「待ってくれ、霊夢」

一護は霊夢を止める。

「何よ？ まだ何か用事があるの？」

「ああ、ちよつとな」

一護はレミリアの方を見る。

「レミリア・スカーレット…お前の名前を聞いた時、ある人物を思い出したんだ」

一護はレミリアに向かって言う。

「ある人物？」

レミリアは首を傾げる。

「お前、フランドール・スカーレットって知ってるか？」

一護がそれを言った瞬間、レミリアと咲夜が目を丸くした。

「…どうして、あなたが私の妹の名前を!？」

「!?!お前の、妹…だと…!」

そのセリフに一護も驚愕した。

夢の中に出てきた少女がレミリアの妹だったのだ。

第16斬 【死神の力】（後書き）

<次回予告>

一護「ようやく館の主の倒して後はExtraのボスだけか」

?「それはどうか。まだ他にもいるかもしれないよ」

一護「誰だか知らねーが、今の俺の体力的に後一戦が限界だぜ」

?「君の考えがどれだけ浅はかなものなのか直ぐに分かせて上げるよ」

第17斬 【狂気の少女】（前書き）

結構長くなりました、17話です。

後書きは時間が無かった為、後ほど更新します。

第17斬 【狂気の少女】

一護の夢の中で助けを求めていた少女、フランドール・スカーレットはレミリアの妹だった。

一護はその後、レミリアからフランの事を聞いた。

フランは495年間、現在も地下室に幽閉されているらしい。

495年も生きている理由は吸血鬼だから。

フランが幽閉されている理由は三つ。

一つ目は何をするにも手加減ができない。

二つ目はフランの能力の危険制。

三つ目は気が狂れているから。

この三つ目が一番の理由みたいだ。

フランはちょっとした刺激で狂人になってしまう。

ちょっとした弾幕ごっこでも相手の血を一滴残さず吹き飛ばしてしまつくらい危ない。

もはや殺戮者だ。

一護はそれを踏まえた上で、その地下室の前まで五人でやってきた。最初はレミリアにも霊夢にも反対されたが、一護の長い説得により承諾してくれた。

地下室の扉はかなり頑丈で、鍵が無かつたら開けるのは不可能のようだ。

咲夜は懐からその部屋の鍵を取り出す。

それを見たレミリアはもう一度、一護に忠告をする。

「本当に良いのね？ フランが発狂したら、私でも止められないわ

よ

「ああ、分かっている。けど、俺は行かなきゃなんねえんだ。あいつが俺に助けを求めてんだからよ」

一護は扉を見ながら言う。

一護の目には迷いが無い。

それを聞いたレミリアは、もう何を言っても無駄だと判断し引き下がる。

咲夜は鍵を使いロックを解除する。

「ここからは俺一人で行く。お前らはここで待っていてくれ」

そういい、一護は重い扉を開け、部屋の中へと入っていった。

一護が入ると扉がゆっくりと閉まる。

それを確認した一護は部屋の中を見渡す。

夢の中で見た部屋と同じ。

窓もなく、明かりもなく、家具もほとんど無い、暗い牢獄のような部屋。

暗闇に一護の目がなれてきた時、一人の少女の姿を見つけた。

少女は体育座りをし、俯いている。

これも夢と一緒にだ。

一護は少女にゆっくりと歩み寄る。

少女は一護の気配を感じたのか、顔を上げ一護の方を見る。

フランは薄い黄色の髪をサイドテールにまとめ、その上からナイトキャップを被っている。

瞳の色は真紅で服装も真紅を基調としており、半袖とミニスカート

を着用。

背中からは、一對の枝のようなものに七色の結晶がぶら下ったような特殊な翼が生えている。

見た目は10歳未満の幼女。

狂人には全く思えない。

フランが一護の姿を確認すると、ゆっくりと口を開く。

「あなたは、誰？」

「黒崎一護」

一護はフランの目を見て答える。

「黒崎…一護。どうして、ここにいるの？」

フランはなぜ、ここにいるのかを聞いてくる。

そりゃそうだ。

自分が幽閉されている部屋にこんな平然とした少年がいる訳がない。

「フラン、お前を助けに来たぜ」

フランは唐突に名乗ってもいない自分の名前を言われ驚く。

いや、それよりも助けに来た…というセリフの方がそれを上回る程に驚いていた。

見ず知らずの人がいきなり自分の事を助けに来たと言い出すんだ。驚いて当然である。

「…どうして、私を助けに？」

「お前が俺に助けを求めて来たんじゃないかねえのか？」

そのセリフにフランは目を丸くする。

「私がいつ、どうやって、あなたに助けなんて求める事ができたの？」

当然の質問である。

こんな牢獄の中で幽閉されている中で人に助けを求める事なんて出来る筈が無い。

「夢だ」

だが、一護はその質問に答えた。

「夢？」

フランが怪訝な表情になる。

「ああ、お前は俺の夢の中で俺に助けを求めたんだ」

「私が夢の中で助けを求めた……」

フランが少し疑惑の目で一護を見る。

「おいおい、そりゃねえぞ。じゃあ聞かせ」

一護は人差し指と中指の二本を立てフランに向ける。

「この牢獄に残るか、ここから出て自由になるか、どっちか選べ」

一護は二者択一を迫った。

それにフランは狼狽える。

「わ、私は、ここから、出たい…」

フランは小さい声で言った。

出たいと。

「でも、私がここから出るとお姉様や他の人たちに迷惑がかかるの」

フランは少し悲しそうに言う。

それを見た一護は溜め息をつき口を開く。

「分かった。だったら、俺が今からお前と遊んでやる」

一護の訳の分からないセリフにフランは困惑する。

「お前の好きな遊びは何だ？」

「…弾幕(じつこ)」

フランはボソリと答えた。

一護はやっぱりと言う表情だ。

「いいぜ。じゃあ、ルールは…」

一護が勝ち負けに条件をつけようとした瞬間だった。

一護の頬を弾幕が切り裂いた。

凄まじい速度だった為、避けることができなかった。

「ルールなんていらぬよ。一護が悪いんだからね。私を刺激するから」

フランの目が血のように赤く光り出し、細長くなった。

そして秀囲気も表情も一変した。

さっきのフランとは完全に別人と化したように、狂気に満ちた表情になっている。

「イチゴ、簡単二壊レナイデネ」

声のトーンまで少し変わっている。

フランが狂気の笑みを浮かべ、スペルを唱える。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

フランから巨大な炎の剣が現れ、フランはそれを握ると高く飛び、

一護に向かって振り下ろした。

一護は即座に代行証を手に取り、黒い霊圧で体を覆う。

それにより、一護の姿は死神のようになった。

フランの炎の剣が一護の黒い霊圧に激突した。

「アハハハハ！！ 私ヲ楽シマセテネ、イチゴ！」

フランは無邪気な子供のように笑う。

その頃、地下室の扉の前で一護を待つ四人は一護とフランの力を感じ

じた。

「始まったようね」

レミリアが呟く。

「一護がフランの運命をどう変えるのかしら？」

レミリアは誰に聞くでもなく言う。

「お嬢様、何か見えたのですか？」

咲夜はレミリアによく分からない事を聞く。

「何も。でも、私の能力も100%当たる訳じゃないから分からないわ」

「なあ、お前の能力って何なんだ？」

魔理沙がレミリアの能力を聞く。

レミリアは隠す必要は無いだろうと思ひ答える。

「私の能力は？運命を操る程度の能力？。能力の説明は面倒だから省くわよ」

能力名は言ってくれたけど、能力説明が無しじゃ全然分かんない。

「何にせよ、私たちは今、待つことしかできないのよ」

「胸が痛むぜ」

「うおおおおおー!!」

一護は右腕の黒い霊圧を刀状にし、フランの炎の剣を受け止めている。

一護はそのままフランの炎の剣を弾き返す。

フランは炎の剣を弾き返された事により、一瞬の隙ができる。

一護はその一瞬の隙を見逃さず、スペルを唱えた。

「黒符『月霊幻幕』!」

一護は無数の黒い三日月状の弾幕をフランに向かって放った。それに続いてフランもスペルを唱える。

「禁弾『スターボウブレイク』!」

フランから無数の弾幕が一護に降り注ぐように落ちてきた。そのせいで、一護の放った弾幕が全て、フランの弾幕により相殺された。

「スゴイ! スゴイヨイチゴ! 私、今メチャクチャ楽シイ!」

フランは本当に楽しそうに言う。

「そいつは良かったな」

一護は微笑みながら答える。

「ソレジャア、イチゴ。コレナント、ドウカナ？」

フランは炎の剣を消し、スペルを唱える。

「禁忌『フォーオブアカインド』！」

フランがスペルを唱え終わると、フランが四人に分身した。

「分身…だと…!?」

一護はフランの分身に驚愕する。

一人でも厄介なのにそれが四人に増えたのだ。

しかも一護は美鈴、レミリアと戦った後で霊力もそろそろやばい。

「イクヨ！ イチゴ！」

四人のフランから無数の弾幕が放たれた。

今の一護では長期戦はきつい。

それは、一護も気付いている。

だから、この弾幕ごっこは一瞬で終わらせるしかない。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護の周りに無数の三日月状の弾幕が現れる。

一護はそれを放たず、周りに展開したまま一番左端のフランに向かって跳んだ。

自分に向かってくる弾幕は全て周りに展開した弾幕に被弾させ相殺した。

一護は自分の周りに展開しておいた弾幕を盾にしているのだ。

「考エタネ、イチゴ。デモ、コウサレタラドウスル？」

左端のフランがスペルを唱える。

「禁忌『恋の迷路』！」

フランから弾幕がぐるぐると回される感じで無数に放たれる。これは一護の展開している弾幕だけじゃ防ぎきれない。

「だったら、黒斬『月牙天衝』！」

一護はスペルを唱え、月牙を左端のフランに向かって撃ち放った。

「アハハハハ！ ソレデ私ノ弾幕ヲ防ゲルト思ッテルノ！？」

フランがバカにするように笑う。

だが、すぐにフランから笑いが消え、目が見開く。

一護の月牙がフランの放った弾幕を掻き消していくのだ。

「ソナナ、嘘デシヨ…！」

一護の月牙がフランに激突し、フランが消えた。

その光景に残り三人のフランが驚く。

一護は透かさず空中を蹴り、残り三人のフランのもとに向かう。

それを見たフランは油断せずに三人でスペルを唱える。

「『禁忌』カゴメカゴメ』…！」

刹那、一護の周りに緑弾が縦や横や斜めに籠目状に並び一護を完全に捕らえる。

一護は移動を止め、身動きが取れない状況になる。

それを見た三人のフランは黄色い大弾を一護に向かって放つ。

「しま…っ！」

一護がカードを取り出した時、黄色い大弾が一護に被弾した。衝突すると同時に、爆煙が舞い一護の姿が見えなくなる。

「終ワリカナ？ イチゴ」

フランがそう呟いた瞬間、一人のフランの周りに三日月状の弾幕が現れた。

フランは驚くも、逃げるのに遅れ三日月状の弾幕がフランを襲った。全て被弾したフランが煙が消えるように無くなった。

「ヤッパリ、マダナノネ」

その時、一護が爆煙を霊圧で吹き消し、姿を現した。額から血が流れており、かなりのダメージを喰らったようだ。

「危なかったぜ。霊圧を纏って防いでなかったら、今頃この弾幕ごっこは終わってた」

どうやら霊圧を体全体に覆い身を守ったようだ。だが、フランの弾幕の威力が強かったのか、全てを防ぎきるのとは不可能だったみたいだ。

けど、フランは残り二人になった。

「禁忌『レーヴァテイン』」

片方のフランがスペルを唱え、巨大な炎の剣を握る。

「イチゴ、私ネ、今ネ……」

フランは途切れ途切れに言葉を発する。

「楽シイツテ感情ヲ通り越シテ、勝ちタイツテ感情ニ変ワツチャツタ！」

そういうと、炎の剣を持ったフランは一護に向かった。

一護は右腕の黒い霊圧で刀状の武器を形成する。

「私モ忘レチャ嫌ダヨ、イチゴ！」

炎の剣を持っていない、片方のフランがカードを取り出す。

「秘弾『そして誰もいなくなるか?』!」

スペルを唱えると、それを唱えたフランが消え、代わりに無数の弾幕が一護に向かって飛んできた。

炎の剣を持ったフランと無数の弾幕による二重攻撃。

弾幕より先に炎の剣を持ったフランが斬りかかってきた。

一護は霊圧の刀でそれを防ぐ。

「くっ、なんつー力だ……!」

今のフランは楽しさより勝ちたいという感情の方が強い。
その感情のせいで、抑えていた力が全開になっているのだ。

一護が炎の剣を受け止めていると、もう一人のフランが放った弾幕が接近してきた。

それを見た一護は直ぐ様、左手でカードを取り出しスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！！」

フランの攻撃を受け止めている右手の刀から月牙が撃ち放たれた。それにより、フランは月牙と共に後方に勢いよくふっ飛ばされた。それを確認した一護は気を抜かず飛んでくる弾幕を避ける。

フランは月牙を炎の剣で大きく振り掻き消した。
そして、再び一護に向かって飛んだ。

「チツ、もう来やがった！」

「アハハハハ！ ソンナンジャ私二八勝テナイヨ！」

一護は二枚のカードを取り出し、二枚同時にスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！ 黒斬『月牙天衝』！」

一護の周りに三日月状の弾幕が現れ、飛んでくる弾幕をそれで防ぐ。そして月牙をフランに向かって放った。

「ダカラ、ソンナンジャ駄目ダツテ！」

フランは炎の剣で月牙を受け止める。

「まだまだ！ 黒斬『月牙天衝』！」

一護はもう一発フランに向かって月牙を放った。

「！？ナニ…！」

流石のフランも二発も防ぎきる事はできず、月牙に飲み込まれた。そのままフランは月牙と共に消滅した。それと同時に弾幕も止んだ。

「これで、三人…！」

一護は相当疲れきっている。
霊力が残り僅かなのだ。

そして遂に本物のフランが現れた。

「イチゴ、本当ニスゴイヨ。私ヲココマデ苦戦サセルナンテ」

フランは感心している。

今まで、人間とここまで対等に遊んだ事がないからだ。

「デモ、私ノ本気ハコレカラダヨ」

そういうとフランは右手を前に出し、手の平を上に向ける。すると、そこから目玉のような赤い物が現れた。

「何だ、それ？」

一護はそれを見て聞く。

「知ッテル、イチゴ？ 全テノ物質ニ八目トイウ最モ緊張シテイル部分ガアツテ、ソコニカヲ加エレバ簡単ニ物質ヲ破壊デキルツテコト」

「目…だと？」

「ソウヨ。私ハネ、ソノ目ヲ自分ノ手ノ上ニ作ルコトガデキルノ」

よく分からない説明をするフラン。

だが、一護は理解したのか目を見開き、額から汗が流れる。

「まさか、テメエ…！」

「理解ガ早クテ助カルワ、イチゴ」

一護は慌てるようにしてスペルカードを取り出す。

「遅イヨ」

フランは赤い目を出している右手を握った。

「きゅっとしてドカーン」

フランの手が握られた瞬間、一護の体が爆発した。

「ぐあああああ…！！」

一護は苦悶の声を上げ、倒れ伏した。
そして、体中から血が出る。

「…イチゴ、モウ終ワリナノ？」

フランは少し悲しそうに倒れている一護に聞く。
一護に反応が無い。

「ヤツパリ、終ワリナノネ。マタ、私ハ壊シチャツタノネ」

フランは自己嫌悪に陥りだした。
そして、一護に背を向け歩き出した。

「…待てよ」

その声にフランは後ろを見る。
そこには倒れていたはずの一護がゆっくり立ち上がっていた。

「まだ、終わってねえぞ…！」

一護の足元に血が滴っている。
その姿にフランは笑顔を取り戻す。

「ヤツタ！ 壊レテナカツタ！」

危ない発言だが、嬉しそうだ。
一護はその姿を見て口を開く。

「…何で、さつき、悲しそうな顔してたんだ？」

その言葉にフランは目を見開く。
フランから笑顔が消えた。

「お前は、俺に勝ちたいんじゃないのか？」

「カ、勝ちタイヨ……」

フランは小声で答える。

「だったら、何であんな悲しそうな顔すんだよ？」

「ソ、ソレハ……」

フランは一護から顔を背ける。

「お前は、あんな勝ち方を望んでねえんだろ？」

その言葉にフランは目を丸くする。

「そつじゃなきゃ、あんな顔する訳ねえもんな」

フランは背けていた顔を再び一護の方に向ける。

「フラン、お前は自分の力が恐えか？」

「エ……？」

「自分の能力が恐えか？ それとも、自分の狂気が恐えか？」

一護は一気に沢山の事をフランに問いかける。

だが、フランはそれを聞き逃さず聞いていた。

「私ハ…全部恐イ…。ダカラ、ココカラ出タクナカッタ。ココカラ出タラ、私ハ、沢山ノ人ヲ苦シメルカラ」

フランは一護の問いかけに答えた。

それを聞いた一護はゆっくりと口を開く。

「…自分の力が恐けりや、それを抑えるくらい強くなりやいい。自分の能力が恐けりや、それを抑え付けるくらい強くなりやいい。自分の狂気が恐けりや、それすらぶっ潰すまで強くなりやいい。他の連中がそれを信じなくても、俺はお前を最後まで信じるぜ、フラン」

その言葉を聞いたフランは狂気の状態から、いつもの状態に戻る。

「一護、私は…」

フランが何かを言おうとした時、一護がその言葉を無視して先に話し出す。

「お前と弾幕ごっこをして、お前の剣に触れられた時、お前からは悲しさばかりが流れ込んできた」

フランは黙って一護の話聞く。

「お前は…その悲しみから抜け出すために、必死で心の中で願ってたんじゃないのか？ 助けてほしいって」

一護の質問にフランは小さく口を開く。

「…私は…誰かに、助けてほしかったの。でも、何百年願っても、誰も来てくれなかった。だから、私は…」

フランの紅い瞳から涙がこぼれてきた。

「最初に言っただろ。俺はお前を助けに来たんだぜ」

一護はフランに優しく微笑みかける。

それを見たフランも自然と笑顔になっていく。

「行くうぜ、フラン。お前はもう自由だ」

「…う、うん！」

フランが笑顔で答えた。

その瞬間だった。

フランに紫色の弾幕が被弾した。

それによりフランは倒れ、気を失った。

一護は状況を全く理解できなかった。

「フラン！！」

一護は倒れたフランに駆け寄る。

「黒崎一護」

不意に自分の名を呼ばれ、足を止める。

そして、声のした方を見る。

そこには、一人の男が立っていた。

「誰だ… テメエ!？」

「私は刹蘭。君を頂きに来た」

第17斬 【狂気の少女】（後書き）

<次回予告>

ルキア「貴様、私の台詞を使ったな」

一護「ルキア！ べ、別に使っちゃいねえよ」

ルキア「嘘をつけ！ 使っているではないか！」

一護「な、別に良いじゃねえか！ 減るもんでもねえし」

ルキア「貴様、自分で嘘をついている事を白状したな」

一護「え…あ、しまった」

ルキア「たわけ者！！」

ガッツ！

一護「痛っ！ すいませーん」

第18斬 【変貌する少女】（前書き）

今回は駄文な上、更に駄文かもしれない。

これから、後書きは本編を投稿した後に更新することにしました。
タイトル変えました。

第18斬 【変貌する少女】

「俺を頂きに來ただと…!?!」

一護は声を震わして言う。

その一護の動揺している姿を見て刹蘭は微笑んでいる。

刹蘭は深い闇のような漆黒の髪を肩の辺りまで伸ばし、少し癖のある髪型をしている。

瞳の色は董色。

服装は白と黒を基調としており、黒の長ズボンに白い長シャツという至ってシンプルな服装をしている。

「いきなり現れて何ふざけたこと言っただよ…!」

一護は刹蘭に怒鳴った。

怒鳴っても刹蘭は一護を見据え微笑んでいる。

「フランはやつと悲しみから、孤独から抜け出そうとしてたんだぞ！それをテメエは邪魔しやがった!」

刹蘭は目を細め口を開く。

「…それがどうした？ 下らない」

それを聞いた一護は顔が一段と険しくなる。

そしてカードを取り出した。

「テメエ、許さねえ！ 黒符『月霊幻幕』!」

一護がスペルを唱えると、三日月状の弾幕が刹蘭を襲った。だが、刹蘭には全く効いていない。それどころか、服に汚れすら付いていない。

「その体で私に戦いを挑むとは、随分と滑稽に映るぞ。黒崎一護」

刹蘭は一発の弾幕を高速で放ち、一護に当てる。

一護は苦悶の声を上げ、後方に勢いよく飛ばされ壁に激突する。

「心配することはない。頂くといっても今じゃない」

刹蘭は一護にゆっくりと歩み寄る。

「君が死神の力を完全に取り戻した時、君を頂く」

一護は傷だらけの体を壁を支えにゆっくりと立ち上がる。

(くそ…っ！ 今の俺じゃ、こいつに勝ち目はねえ！)

今の一護の体はフランとの戦いでボロボロな上、霊力もほとんど残っていない。

しかも、こいつはフランを不意打ちとはいえ一発の弾幕で倒してしまったのだ。

今の一護では例え全快しても勝てないだろう。

と、その時、地下室の扉が強く開けられた。

刹蘭は歩みを止め、扉の方を見る。

「必殺『ハートブレイク』！」

紅い槍が刹蘭に目掛けて飛んできた。
だが、紅い槍は刹蘭に当たる直前で碎け散った。

「随分出てくるのが遅かったな。レミリア」

地下室にレミリア、霊夢、魔理沙、咲夜が入ってきた。
霊夢と魔理沙が一護の血だらけの姿を確認すると、「一護!」と言い
駆け寄った。

「どうして、あなたが此処にいるのかしら?」

レミリアが刹蘭を睨みつけて聞く。

「少し、黒崎一護に会ってみたかったからだよ」

「本当にそれだけ?」

レミリアが疑惑の目で刹蘭を見る。
どうも、この男のことを信じられないようだ。

「本当だとも。いや、もしかしたら違うかもな?」

刹蘭はわざとらしい軽口を叩いた。

「チッ、本当に人をイラつかせるのが好きみたいね」

レミリアの顔が険しくなる。

「お嬢様、あの男は何者なんですか?」

横に立つ咲夜がレミリアに聞く。
「どうやら、咲夜は男のことを知らないようだ。」

「あなたじゃ聞いても理解できないわよ。それに、私もあの男のこととはほとんど知らないわ」

刹蘭はそのまま二人に背を向け歩き出した。

「どこに行くの?」

レミリアは刹蘭の背中に向かって聞く。

「帰るんだよ。用は済んだことだしね」

刹蘭の姿が徐々に消えていった瞬間

「霊符『夢想封印』!」

複数の光弾が刹蘭目掛けて飛んできた。

(!?!?!このスペルは!)

刹蘭は光弾を見て目を見開いた。
直ぐ様、紫の色の弾幕を当て相殺する。

「逃がさないわよ。あんたには色々喋ってもらいたいことがあるからね」

霊夢はスペルカードを取り出して言った。

「初見の私にか？」

「ええ、そうよ。あんたからは今までに感じた事の無い、嫌な？感じ？がするの。ここで見す見す逃したら、これから先、何か大変な事になりそうな予感がするのよ」

それを聞いた刹蘭は「博麗の血か」と呟いた。
そして、刹蘭は霊夢の方を見て言う。

「良いだろう。私に手傷を一つでも負わせたら、君に？全て？を話そう」

「上等よ！！」

霊夢は持っていたスペルカードを唱える。

「霊符『夢想封印』！」

複数の光弾が再び刹蘭に向かって放たれる。

「またそれか。君のでは無駄だよ」

そっぴい刹蘭は紫の弾幕を展開した。
たしかに、不意について夢想封印を放ったが簡単に相殺された。
だが、今回は違った。

「恋符『マスタースパーク』！」

光弾と一緒に極太レーザーが放たれた。

刹蘭は動揺せずに展開している弾幕だけで二つのスペルを受け止めた。

「私も手伝うぜ霊夢！」

魔理沙が霊夢の横に立ち言った。

「好きにきなさい。誰も私一人でするなんて言ってないから」

そのセリフに魔理沙は少し緊張した。

霊夢はあらゆる妖怪を一人で退治してきた。

例え相手がかんりの強敵でも。

手伝おうかと言っても、手伝わしてもらえなかった。

それは即ち、霊夢には絶対的自信があったからだ。

だが…

それが今、その自信が完全にあの男に消されているのだ。

即ち、あの男は今までにない強敵。

魔理沙は気を引き締め刹蘭を見た。

「獄符『千本の針の山』！」

レミリアのスペルを唱える声が聞こえてきた瞬間、無数のナイフ状の赤い弾幕が刹蘭を襲った。

「私たちも手伝うわよ、咲夜」

「はい、お嬢様」

レミリアと咲夜も戦線に加わる。

これで霊夢&魔理沙&レミリア&咲夜VS刹蘭

一護はその戦いを壁にもたれながら、遣る瀬無い気持ちで見ている。今の一護の体では見ることにしかできないのだ。

「あなたには私も聞きたいことが山程あるんでね。それに…」

レミリアが倒れているフランを一瞥する。

「私の大切な妹を傷つけた罪は重いわよ！」

そのセリフをもとに霊夢たち四人がスペルを唱える。

地下室に閉じ込められているとはいえ、レミリアはフランを大切に思っているようだ。

それから数十分後…

一護は目を疑った。

霊夢たちが完全に押されているのだ。

四人ともかなり疲れているのに対し、刹蘭は息切れ一つしていない。

「その程度か？ 君達の実力は」

刹蘭は少しガツカリしたように言う。

「少し残念だ。君達はもう少しやってくれらと思ってたんだがな」

そして刹蘭は霊夢を見る。

「特に博麗霊夢。君には落胆した。君は君の母親のようにはなれないようだ」

それを聞いた霊夢は目を見開く。

「あなた、何で私の母上を知っているの!？」

霊夢が身を乗り出して聞く。

「何でだって…それは」

刹蘭が質問に答えようとした瞬間、氷の弾幕が刹蘭に目掛けて飛んできた。

刹蘭はそれを軽く避け、飛んできた方を見る。

四人もそれに驚き、同じ方向を見る。

そこには湖で別れた、ルーミア、チルノ、大妖精がいた。

「何で…お前らが…?」

一護も三人の登場に驚く。

そして、チルノが一步前に出て口を開く。

「最強のあたいが最強のタイミングで登場よ!」

最強のタイミング…また意味の分からない言葉だ。

その空気の読まないチルノに対し、霊夢が殺気を放った目つきで睨む。

だが、チルノは全く気付いていない。

レミリア達もそのセリフに、緊張感が少し消えかけていた。

「何だい君達は？」

刹那は微笑みながら聞く。

「あたいは最強の氷精、チルノよ！」

誇らしげに答えるチルノ。

他の二人は普通に名乗る。

「私は大妖精」

「私はルーミア」

刹那、刹那はルーミアという名前を聞いて、目を少し見開く。

「ルーミア…これは偶然だね」

「へ？」

ルーミアは自分の名前を言われ、少し驚く。

その瞬間、刹那はルーミアの前に一瞬で移動し、ルーミアを捕らえる。

「ルーミア！！」

一護は身を乗り出し叫ぶ。

チルノと大妖精はそれを見るなり、刹那に向かって少しだけ弾幕を放つ。

出しすぎたら、ルーミアに当たってしまうからだ。

刹蘭はそれを避けると同時に全員から少し離れる。

「ルーミアを離しやがれ!!」

一護は怒りをもとに立ち上がる。

ルーミアは口元を抑えられ、何も喋れない。

「ちょうどいい。ルーミアを返してほしかったら、時計台の上に来るといい」

刹蘭はそういい、ルーミアと共に姿を消えた。

「くそ…っ!」

一護は怒り任せに歩き出す。

それを見たレミリアが口を開く。

「どこ行く気、一護?」

「決まってるだろ。ルーミアを助けに行く」

「そんな体で?」

「ああ」

それを聞いたレミリアはチルノと大妖精の方を見る。

「その二人。あなた達は一護の味方なんですよ?」

それを聞いたチルノが当たり前のように答える。

「そうよ。最強のあたいが唯一認めた男よ」

「そう、なら一護の援助をお願いできるかしら？ どうせ止めたって効かない男だしね」

「そんなこと、いわれるまでも無いわよ」

チルノと大妖精が一護に駆け寄る。

「それじゃあ、私たちも向かいますようか。 戦闘中はあの二人に一護を任せてね」

そして七人は時計台の上の屋根にやって来た。そこに、ルーミアを捕らえている刹蘭がいた。ルーミアは目を瞑り何の反応も示さない。どうやら、意識を失っているようだ。

「全員で来たのか。良い心がけだ。この状況下、その二人の妖精の力も大切だからな」

「臆病者と言いたいの？」

レミリアが言う。

「そう聞こえたのなら訂正しようか、レミリア・スカーレット」

刹蘭は微笑みながら言う。

この笑みは何かを企んでいるように見える。

「それより、君達に面白い物を見せてあげよう」

刹蘭がルーミアの頭に付けている赤いリボンに触れる。

「さあ、復活の時だ。ルリミア」

そういうと、刹蘭はリボンをルーミアから取った。

その瞬間、ルーミアの体が赤黒く光りだした。

刹蘭はルーミアを解放し、距離を取る。

「何なの一体!？」

霊夢が叫ぶ。

そして、ルーミアから赤黒い光りが消えていき、姿を現した。

その姿に全員驚愕する。

それはルーミアではなかった。

金髪の髪は腰辺りまで伸び、背中には漆黒の翼が生えている。

そのルーミアはフランと同じように狂気の笑みを浮かべている。

「…久しぶりに出てこれたわ。さあ、始めましょう。殺し合いを」

いきなり、とんでもない発言をするルーミアに全員構える。

そして、紅血鬼篇の最後の戦いが始まった。

第19斬 【夜神のルリミア】（前書き）

暑くて全然頭が働かない。

誤字脱字がありましたら教えて下さい。

第19斬 【夜神のルリミア】

「何なんだよ… テメエは…!?!?」

一護が変貌したルーミアの姿を見て目を丸くする。

今のルーミアは、姿も雰囲気も完全に変わっている。

そう、まるで狂気と化したフランと同等、否それ以上の狂気に満ちている。

「彼女はルリミア。幻獄七夢卿セリテムカールタの一人だった女性だよ」

一護の質問に刹蘭が答える。

そして、そのセリフを聞いた霊夢が目を見開いた。

「幻獄七夢卿ですって!?!?」

霊夢が驚愕の声を上げた。

それに全員、霊夢の方を見る。

「どうしたんだよ、霊夢?」

霊夢の様子が気になった一護が聞く。

霊夢は刹蘭を見ながら口を開く。

「…幻獄七夢卿は、私の母上が唯一、恐れていた組織よ」

霊夢が怯えたように答える。

霊夢が怯えた姿なんて見たことがない。

「そうか、やはり博麗 霊羅は君に伝えていたか」

博麗霊羅…どうやら、話の流れからするに、その名が霊夢の母親の名のようだ。

「あんだ、私の母上の名を軽々しく口にしないで！」

霊夢が怒りの形相で言う。

自分の母親の名前を、敵に口にされた事に苛立ったみたいだ。それを聞いたルリミアは霊夢の方を見て口を開く。

「へえ、あんだ博麗霊羅の娘なの？」

「だから、私の母上の名を軽々しく…」

霊夢が再び同じことを言おうとすると、ルリミアが口を開いた。

「で、博麗霊羅は死んだの？」

その一言に霊夢は口を閉ざし、俯いた。どこか悲しげな表情に見える。

「…そう、死んだのね」

ルリミアは霊夢の態度を見て察した。死んだと。

「それはガツカリだわ」

その言葉に霊夢は顔を上げる。

敵であるルリミアが霊夢の母親の死に本気でガツカリしているのだ。

「私が殺すはずだったのに。私を封印して死ぬなんてね」

「どっぴいっこと...?」

「私は博麗霊羅に封印されたのよ。その赤いリボンのお札でね」

ルリミアが刹蘭の持つお札を指差す。

「どうやら、ルリミアは霊羅に赤いリボンのお札で封印されていたらしい。」

「まあいいわ。だったら同じ博麗の者を殺して、私が博麗より上だっつてことを証明させてあげるわ！」

「そういうと、ルリミアの目が覇者の目が変わった。」

全員それを見ると、スペルカードを取り出した。

「さあ、見せてもらおうよ。博麗の血を継ぐ者…そして、黒崎一護」

刹蘭はそう呟くと、持っていた赤いリボン、お札を放り投げた。

ルリミアはスペルカードを取り出し、先にスペルを唱える。

「夜闇『深淵の道』」

ルリミアから黒い弾幕が無数に放たれた。

レミリアと魔理沙はそれを見ると二人でスペルを唱える。

「神術『吸血鬼幻想』！」

「星符『メテオニックシャワー』!」

二つのスペルによる弾幕でルリミアの弾幕を掻き消していく。

「私の弾幕を相殺するとはね。少しは楽しませてくれそうだね」

「隙あります」

刹那、咲夜がルリミアの背後に現れた。

ルリミアが後ろを振り向こうとする。

「遅い! 幻符『殺人ドール』!」

咲夜がスペルを唱えると、大量のナイフがルリミアに放たれた。

ルリミアは避けるのに遅れ、数本のナイフが体に突き刺さる。

ルリミアは一瞬苦悶の声を上げ、後方に高く跳ぶ。

「逃がさないわよ! 霊符『夢想封印』!」

霊夢が止めをさすかのようにスペルを唱えた。

複数の光弾がルリミアを襲う。

ルリミアはそれに目を見開き、光弾に飲まれた。
爆発と共に爆風と爆煙が舞う。

「やったか!？」

「分からないわ」

魔理沙の質問に霊夢が答えた。

そして、爆煙が勢いよく消えた。
それに全員が驚愕した。

ルリミアが無傷で現れたのだ。
刺さったナイフも消えている。

「強いねえ。けど、無駄な体力を使っただけだったね」

ルリミアが不敵な笑みを浮かべて言う。

「どうして、無傷なの？」

レミリアが睨み付けて聞く。

「そうだな、教えてあげよう」

ルリミアが少し悩んだ末、教えることにした。

「私の能力は？夜を操る程度の能力？。私は自分の好きな時に朝から夜に変えたりできるんだよ」

ルリミアが自分の能力を言う。

だが、傷が治ったこととは関係ないように思える。

「その能力であなたの傷が完治したとでも？」

それを聞いたレミリアが怪訝な表情で確認する。

「そつよ」

ルリミアが微笑みながら肯定した。

「けど、能力だけのお陰じゃないわよ。私の特異体質？オレイオス月夜大星？
のお陰でもあるわ」

「月夜大星…？」

「そう。月夜大星とは私のもう一つの異能。夜の間は、私がどれだけ傷を負おうが、死のうが、消滅しようが、直ぐ様元通りに戻すことができるのよ」

月夜大星…その異能が有る限り、夜の間はどれだけ倒そうが意味がないということか。
それに、例え朝まで持ちこたえても、ルリミアの能力で夜に変えられてしまう。

これは、かなり厄介だ。

「さあ、すぐに終わらせて上げるわ」

ルリミアがカードを取り出す。

その瞬間、ルリミア目掛けて黒い弾幕が飛んできた。

ルリミアはそれを軽く躲し、飛んできた方向を見る。
そこには一護が立っていた。

「俺を、忘れてんじゃねえぞ」

どうやら、一護が放ったらしい。

「そうだったわね。でも、その体で何ができるのかしら？」

一護は先の戦いで体も霊力も限界に達している。もう、まともに戦うのは確実に不可能だろう。

「まだ、やれる…！」

強がっているのが、その場の全員に分かった。

「そう、やれるのね。だったら、見せてみなさい。夜触『淫怪の祭』

」

ルリミアの周りに、夜の暗闇から具現化したように複数の黒い触手が現れた。

それが一斉に一護に襲い掛かる。

「最強のあたかも忘れないでよね！」

チルノと大妖精が一護を庇うように前に現れた。

チルノはカードを取り出し、スペルを唱える。

「冷符『瞬間冷凍ビーム』！」

チルノから三本の白いビームが、黒い触手に向かって放たれた。

そして、ビームに当たった触手が凍り付いた。

それを大妖精がクナイのような弾幕を放ち、凍て付いた触手に当て粉砕する。

「ほお、妖精の分際でやるな」

ルリミアが感心したように言う。

「チルノ、大妖精……」

一護が二人の背中を見て呟く。

「一護はあたい達が護るからね！」

チルノが振り向き言う。

護る……その言葉に一護は少しむず痒かった。

いつもは自分が護る立場だったが、こうして護られていると思うと、少し遣る瀬無い気持ちになる。

「ああ、分かった」

一護は答える。

それを聞いたルリミアはカードを取り出し、スペルを唱える。

「夜王剣『終焉ノ裏十字』」

ルリミアの右手に聖者の十字架を变形させたような漆黒の大剣が現れた。

「行くわよ」

ルリミアはそういって大剣を構えた。

全員が倒れるのに、それ程時間が掛からなかった。

ルリミアは一人で七人を倒してしまったのだが、まだ止めは刺していない。

「やっぱり、この程度か。まあ、その体でよくやった方だよ。黒崎一護とやら」

ルリミアが倒れている一護に向かって言う。

一護は既に虫の息だ。

「そんな君は一番先に止めを刺して上げるわ。どうせ、全員殺すんだ。仲間の死に様なんか見たくないだろう？」

ルリミアが一護に歩み寄りながら言う。

それを聞いた一護はゆっくり、絶対に立てない体を無理やり足の力で立ち上がった。

「…俺の仲間、俺が護る…。テメエなんか、殺させる訳ねえだろ…！」

一護は口から血を流しながら言う。
言葉を話すのも、やっとの状態だ。

「…へエ、まだ立つの。護る…さっきまでは妖精ちゃんに護られていたくせに、よく言えるわね」

ルリミアは歩みを止めずに言う。

「うるせえ！ 俺の仲間をこれ以上、傷付けるんじゃない」
刹那、一護の体が崩れ落ちた。
それにルリミアも多少驚く。

(な…何だよ急に…！？ 体が、動かねえ！！)

一護は俯せになりながら、心の中で叫んだ。
そして、一護はあの時の魔理沙から貰った回復薬の副作用の事を思い出した。
副作用は全身が麻痺し、一時的に体が動かなくなる事。
それが、今の一護に起こっているのだ。

(くそ…何で、こんな時に…！！)

一護は体を頑張って動かそうとするが、微動だにしない。

「流石に体がガタにきたみたいね」

ルリミアは一護の前に立ち、倒れている一護を見下ろした。

「それじゃ、バイバイ…黒崎一護」

ルリミアが大剣を一護に向かって振り下ろそうとする。

そして、大剣を振り下ろした。
だが、肉が切り裂く音がしない。
それどころか、血が飛び散ってもいない。

なぜなら、一護がその大剣を片手で掴んでいたからだ。

その姿を見た、ルリミアと刹蘭は目を見開いている。

「何で、私の剣を…!?!」

ルリミアが有り得ないものを見るような目で一護を見る。

「…バカが…言っただろうが…テメエに死なれちゃ、こっちも困る
つてよ…」

一護は俯いたまま、独り言を言う。

その声は一護の物では無いと、ルリミアも刹蘭も気付いた。

「質問を変えようか…君は、誰だい？」

ルリミアが平常心を取り戻して聞く。

「…誰だと…? はっ! 名前なんか、無えよ!」

顔を上げた一護の顔には虚のような仮面が顔半分を被っていた。

第20斬 【虚化一護の暴走】（前書き）

ようやく第二章が終了です。

何か呆気ない終わり方です。

まあ、終わりよければ全てよしってやつかな。

何か、最近 一護とフランって案外お似合いのペアって思う。

第20斬 【虚化一護の暴走】

「名前なんか、無えよ！」

一護はそういうと、黒い霊圧で体を覆った。

ルリミアはそれを見ると、即座に大剣を力尽くで一護から引き離れた。

そして、一護は黒い霊圧を纏い、死神のような姿で現れた。

一護の顔半分には虚の仮面が完全に被っていて、今も顔全体を被うように仮面が徐々に広がっている。

「行くぜえ！」

一護は地面を蹴り、凄まじい速さでルリミアに向かった。

ルリミアはカードを取り出し、スペルを唱える。

「夜闇『フィンスレーゲン』！」

スペルを唱えると同時に、一護の頭上に黒い弾幕が現れ、一護に降り注いだ。

一護はそれを高速移動で避け、一瞬でルリミアの前に移動した。

そして、右腕の黒い霊圧を刀状に変え、ルリミアに向かって振る。

ルリミアは大剣でそれを防ごうとするが、一護の黒い霊圧が大剣ごと斬り碎き、ルリミアの胴体を斜め一閃に斬った。

ルリミアは苦悶の声を上げ、後方に高く跳び距離を取る。

結構深く斬られたらしく、血がポトポトと地面に落ちる。

(バカな…！ 私の剣を斬るなんて…有り得ない！)

ルリミアが砕けた大剣を見ながら思った。

「ははっ！ やっぱりテメエは下手糞だ！ 一護…！ テメエは自分の能力を限界まで引き出せず、いつもボロカスにやられてやがる！ 見せてやるぜ、俺が…！ 本当の能力の使い方ってやつをよ…！！」

一護は右腕を大きく振り、月牙を放った。

ルリミアは後方に高く跳び、月牙を躲す。

(何だ…今のは…？ 威力がまるで違う！)

一護の放った一発の月牙が、紅魔館の屋根の一部を木っ端微塵に破壊した。

ルリミアはその威力に圧倒されていた。

その隙をついた一護は一瞬でルリミアの頭上に移動し月牙を放った。ルリミアは間一髪のところまで月牙を避ける。

(速い！ 動きが全然見えない…！)

一護は休むことなく、月牙をルリミアに放ち続ける。

ルリミアはそれに対抗するべく、スペルを唱える。

「舐めるなよ！ 夜砲『ティフゼークリダ』！」

ルリミアから漆黒の超極太レーザーが月牙に向かって放たれた。

漆黒のレーザーが月牙に激突した。

ルリミアは気合の声を上げ、月牙を掻き消す。

「あははは、やった…」

ルリミアは月牙を掻き消したことに喜んだが、既に一護はルリミアのすぐ後ろにいた。

直ぐ様、後ろを振り向こうとするが、一護は余裕な感じで刀状の霊圧を振る。

血が飛び散る。

ルリミアの右腕が斬り落とされたのだ。

ルリミアは苦悶の声を上げ、左手で右肩を掴む。

「ハア、ハア、ハア…」

ルリミアの息が荒くなる。

そして、一つの疑問に思い当たる。

(なぜ、体が元に戻らない…!?)

そう、今のルリミアの体の傷は元通りに戻らず、残ったまま。

ルリミアの異能：月夜大星オレイオスは夜の間、あらゆる傷は勿論のこと、自分が死のうと、消滅しようと、瞬時に元に戻すことができる。

しかも、自分の能力で夜の間だけという欠点をカバーしている。

だが、一護に与えられた傷が元に戻らないのだ。

「くそ…っ！ あんた、一体何をしたの!？」

ルリミアが険しい顔で一護に聞く。

一護は無表情になり、左手を前に出した。

それを見たルリミアは何かくると思い身構えたが、何もこない。

「…はっ！ 何身構えてんだよ！ もう、遅えよ」

一護はそう言うが何も起きていない。

「何が、遅いつての？」

ルリミアはそういうと、ようやく自分の身に起こっている事が分かった。

それにルリミアが一滴の汗を流す。

（体が動かない…！）

そう、ルリミアの体が全く動かないのだ。
いや、首と手だけは動く。
動かないのは胴体と足だ。

「あなた、一体何をしたの？」

ルリミアが焦りながら聞く。

「質問の多いヤローだな。ガキじゃねえんだから、テメエで考えやがれ！」

そういうと、一護は月牙を放った。
身動きをとれないルリミアは月牙をまともを受けた。

「はははははははははは…！！！」

それを見た一護は高い声で笑った。
そして、ルリミアがボロボロの体で現れた。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

ルリミアはもう立っているのがやっとの状態に見える。
それを見た一護が口を開く。

「何だよ、まだ生きてんのか。しぶてえヤローだ。まあ、もう一発放てばいいだけの話だな！」

一護が止めの一撃を放とうとした瞬間、自分の左手が勝手に一護の仮面を掴み砕いた。

その光景にルリミアも刹蘭も驚いた。

「ぐ…!? く…くそっ！ 放せ…ッ！」

一護は左手を引き離そうとする。

《邪魔すんな、消えろ！》

「邪魔はテメエだ、放せ！ このまま俺にやらせりゃ…勝てるってのが判んねえのか…！」

一護の左手が徐々にメキメキと音をたて、仮面を剥ぎ取っていく。

「くそッ！！ くそっ！！ バカが…ッ！！ ああああああああ
ああああ…！！」

一護の左手が顔の仮面を完全に剥ぎ取った。

仮面は黒い粒子になり消えた。

「はっ、はっ、はっ…ふうっ！」

一護の表情も雰囲気も元に戻った。

「…悪いいな。邪魔が入っちまった。さあ、仕切り直しといこうぜ！」

あれ、どこかで言ったセリフだな…と、思う一護。
と、霊夢が意識を取り戻し、ゆっくりと立ち上がり、一護に歩み寄った。

「…一護、大丈夫？」

「ああ、心配ねえよ」

霊夢が一護の安否を心配してきたので、一護は笑みを浮かべ答えた。
笑みを浮かべれば、取り敢えず安心してくれると思っただ。
だが、霊夢はそんな一護を見て少し表情が曇る。

「無理しないでね。どう見たって大丈夫じゃないから」

「じゃあ何で聞いたんだよ」

霊夢は一護のセリフを無視し、ルリミアの方を見た。

「かなり弱ってるわね」

霊夢はボロボロのルリミアを見て言った。

ルリミアは傷だらけで、大量の出血をしている。
その上、右腕が斬りおとされている。

「あれ、一護がやったの？」

それを聞かれた一護は押し黙る。

自分でもよく分からないのだ。

なぜ、虚の力が戻っているのか。

虚の力は霊圧と共に失ったと思っていた。

だが、内なる虚、あいつが自分の中に戻っているのだ。

一護はまだ絶対的確認が無いため、答えることができない。否、答えたくない。

あんな、自分を他人に教えることなどできない。

「…まあいいわ。あいつはもう虫の息だから一瞬で終わらせるわよ」

「ああ」

一護と霊夢は既に気づいている。

ルリミアは消滅させようが倒すことはできない。

今はどうか分からないが、どうせ消滅しても夜になると復活する。
だから、もう一度こいつを封印するしかない。

一護は剝蘭が放り投げた赤いリボン、お札を一瞥する。

運よく、リボンは屋根の瓦礫に少し埋もれているだけで、破れたり、飛ばされてはいない。

「…霊夢、俺がルリミアを引きつける。お前はリボンを回収して、あいつを封印してくれ」

一護はルリミアに聞こえないように小声で霊夢に言う。
それを聞いた霊夢は頷き、前を見る。

ルリミアは油断せず残り少ない体力でスペルを唱える。

「夜神『闇ノ支配』！」

ルリミアが左手を頭上に上げた瞬間、掌に黒い小さな丸い塊が現れ、それが徐々にでかくなっていく。

一護は右腕に霊圧を込め、ルリミアの目を見据える。

そして、黒い塊が凄まじい大きさになった。

「黒崎一護、あんたのさっきの姿は問わないが、私をここまで苦しめた代償はきつちり払ってもらおうよ」

「やれるもんならやってみろよ」

一護は微笑みながら言った。

「ったく、あんたは、むかつくガキね！」

ルリミアはバカデカイ漆黒の弾を一護に向かって放った。
それと同時に霊夢が動いた。

一護は漆黒の弾を睨みつけ口を開く。

「黒斬『月牙天衝』！！」

一護が今日最後の月牙を自分に向かってくる超大弾に向かって撃ち

放った。

凄まじい激突音と共に、二つの力は一瞬混じりあい凄まじい爆発が起きた。

それによる爆風で屋根の瓦礫が飛んでいく。

霊夢は間一髪のところまで飛び立ちそうになった赤いリボンをキャッチする。

「く…そ…ッ」

ルリミアは完全に体力切れしたのか仰向けに倒れた。

一護も纏っていた霊圧を解き、なんとか倒れそうな体を踏みとどめる。

ルリミアが倒れた、その隙に封印できる。

「ハア、ハア、ハア…霊夢、封印を頼む」

「ええ」

霊夢は仰向けに倒れているルリミアに歩み寄る。

霊夢はルリミアの傍らに立つと、ルリミアと目が合った。

ルリミアは霊夢を見ると、ゆっくりと口を開く。

「本当、あなたは博麗霊羅にそっくりね」

「…何が言いたい訳？」

「別に。ただ、そっくりだなと思って…。けど、性格は父親の方に似ているわね」

ルリミアは少し笑みを浮かべながら、懐かしい思い出を話すかのよう
に言った。

「父上のことも知っているのね」

「まあね」

霊夢は「そう」と言うと、リボンに霊力を込め、封印を開始した。

「最後に言いたいことはある？」

霊夢が封印する直前で聞く。

「そうねえ。だったら一つ、あなたに良い事を教えて上げるわ」

「何？」

「あなたの“父上はまだ生きてる”わよ」

そのセリフに霊夢は驚愕した。

そして霊夢は口を大きく開く。

「どづいつこと！？ 何で私の父上が生きてるっていえるの！？」

「それは自分で確かめなさい。あなたも博麗の巫女でしょ」

「…そうね、そうするわ」

それを聞いたルリミアは微笑んだ。

「じゃあね、博麗の巫女、そして黒崎一護」

ルリミアは一護の方を見て言った。

刹那、ルリミアから青い光が現れ、その光がルリミアを覆い尽くしていく。

そして光が治まると、もとのル・ミアに戻っていた。

体に傷は無く、ぐっすりと眠っている。

「なかなか面白いものを見せてもらったよ。黒崎一護」

戦いを傍観していた刹蘭が一護に向かって言う。

「デメエ…！」

一護は鋭い眼差しで刹蘭を睨む。

「それじゃあ、私はこれで帰るとしよう。黒崎一護、次に会うときはもっと力をつけていてくれよ。そうでないと、面白くない」

刹蘭はそういうと姿を消した。

霊夢と一護はそれを確認すると、倒れている六人を取り敢えずパチユリーののもとに連れてった。

一護はそれを済ますとフランのもとに向かった。

こうして紅い霧の異変は沢山の謎を残したまま幕を閉じた。

一日、紅魔館に泊まった後、一護と霊夢は博麗神社へ帰った。

フランは一護の説得により地下室から完全に開放された。そして、帰る間際に一護はフランと一つの約束をした。

「今度、お姉様たちと遊びに行ってもいい？」

その約束に霊夢は頷き、一護は「ああ」と答えた。いつ遊びにくるかは分からない。

一護と霊夢が博麗神社に到着すると、再び平和な日常が訪れた。

だが、一護たちには直ぐに新たな異変が襲うのだった。

第21斬 【買出し】（前書き）

ようやく9話で出てきた他の幻想入り者を出せました。
少しだけですけど。

新章突入したけど、今回は長引きそうです。

第21斬 【買出し】

昼・昼食を食べ終えた一護は居間で今日の文々。新聞を読んでいた。

「…いつ、撮られたんだ？」

一護は目を細めながら新聞を見ている。

そこには一昨日の紅魔異変のことが書かれていた。

今回は至って普通で、書かれていたことも殆ど事実だ。

ただ、なぜ自分たちが異変を解決したことを知っているんだ？

なぜ、新聞に掲載されている写真が自分とレミリアが戦っている写真なんだ？

そして、この写真はどうやって撮った？

色んな疑問を残したまま一護は新聞を閉じた。

「にしても霊夢の奴遅いな」

霊夢がお茶を汲みに台所に行ったまま戻ってこない。

少し気になった一護は台所に向かった。

そこで、一護はうつ伏せに倒れている霊夢を見つけた。

手や足がびくびくと死にかけのゴキブリみたいに震えている。

「お、おい！ 大丈夫かよ霊夢！？」

一護が霊夢の傍らに座り、霊夢の背中を両手で揺さ振る。

その応答に答えるように、霊夢が顔だけを一護の方に向ける。霊夢の顔は風邪を引いたように赤くなっている。

「一護：体が痺れて…動かないんだけど」

霊夢が弱々しい声音で言う。

そのセリフに一護は不図あることを思い出した。

魔理沙の回復薬だ。

霊夢はあの回復薬を飲んでいる。

あの回復薬は異常に効くが副作用がある。

体が全身麻痺し、動けなくなることだ。

今の霊夢は完全にそれと一致する。

「霊夢、多分それ、魔理沙の薬の副作用だ」

「え？」

この反応、どうやら霊夢は薬の副作用のことを魔理沙から聞かされていないようだ。

一護はあの時の薬のことを説明する。

「……っー訳だ。魔理沙から聞いてねえのかよ？」

説明し終わった一護は、分かっていたか聞いてみる。

「そんな話、知らないわよ…!」

予想通りの答えが返ってきた。

魔理沙は副作用の説明をしないまま飲ませたようだ。事実、一護も副作用のことは飲んでから聞かされた。

「まあいいや。取りあえず布団敷くから、そこで横になっとけよ」

「そうさせてもらっわ」

一護は動けない霊夢を背負い、部屋まで運んだ。

部屋に入ると一護は布団を敷き、そこに霊夢を横にさせる。

「んじゃ、何かやらねえといけねえこととかあるか？」

一護は何もできない霊夢に代わって用事を済ますみたいだ。

「それじゃあ、食料の買出しでもお願いしようかしら」

「買出し…」

「ええ、そうよ。人里まで行けば食料が売っているから」

霊夢はそういうと、買ってきてほしい物を言っていく。

一護はそれを全て記憶する。

お金は霊夢の財布から言われた金額だけ抜いた。

「でもよ、一人で大丈夫か？ そんな体でいきなり妖怪なんかに襲われたら…」

「心配いらないわよ。神社の周りに結界を張っとくから。それに…」

霊夢の視線が一護から縁側の方に移る。
その瞬間、いつも通り箒に乗ってやってくる魔理沙が現れた。

「よお霊夢に一護。遊びに来たぜ！」

魔理沙が箒から降り、地面に着地する。

そして、霊夢の姿を縁側から見て口を開く。

「どうしたんだ霊夢、風邪か？ 体には気を付けるよな。情けないぜえ」

魔理沙が溜め息混じりに言う。

そのセリフを聞いた霊夢の額から青筋が立った。

「一護…早く行ってきてくれない」

霊夢の声調が急激に変化した。

それを聞いた一護は身震いがした。

恐怖…殺気を感じた一護は直ぐ様「行ってくる」と言い、部屋から逃げるように去った。

一護は神社から出て、人里に向かって飛び立とうとした瞬間、神社の方から「魔理沙ア!!!」と霊夢の怒鳴り声が聞こえてきた。
一護は聞かなかった事にして、人里の方に向かった。

人里に向かって飛んでいる中、一護は不図思った。

(そういや、人里に行くのは初めてだな)

霊夢から人里の事は少しだけ聞いた事があつたが、行ったことは無かつた。

正直あまり今は行きたくない一護。

何故かというと、あの文々。新聞のせいだ。

あの新聞には自分の事を異変解決前に戦闘狂みたいに書かれていたからだ。

もし、人里の人達に警戒でもされたら気分的に最悪だ。

一護は心に不安を募らせながら人里の方にゆつくりと飛んでいく。

同時刻、広大な庭に大きい日本屋敷がある場所で二人の女がいた。

「では幽々子様、今晚の買出しに行つてきます」

少女が目の中の女性にそう言う。

「は〜い。行つてらっしゃ〜い」

女性は微笑みながら脳天気 answers。

どうやら、この二人は主従関係のようだ。

そして少女は女性に背を向け飛んで行つた。

同時刻、竹の生い茂る中にひっそりと建てられている屋敷がある。その屋敷から一人の男が出てこようとしている。

「どこ行く気？」

その男は一人の女性に呼び止められた。

男は女性の方を見て口を開く。

「少し出る」

男は低い声で簡略に答えた。

「そう。だったら買出し頼めるかしら。そろそろ頃合いだしね」

「…好きにしる」

男も買出しをすることになった。

女性は買ってきてほしい物を言う。

「それじゃあ、よろしくね」

女性がそう言うと男は歩き出した。

「ウルキオラ」

最後に女性は男の名を呟いた。

“ウルキオラ”と…

第22斬 【人里での約束】（前書き）

今回もかなり駄文な上、一護が少しキャラ崩壊しているかも。

ジャンプでは、ようやくHUNTER×HUNTERの連載再開が8月に決定して嬉しいです。

自分の中では、HUNTER×HUNTERはジャンプの中でベスト3に入る作品なので。

第22斬 【人里での約束】

人間の里

幻想郷における、普通の人間達が住んでいる集落。

妖怪の賢者が保護しており、人間の里の中にいれば妖怪に襲われることはほとんど無い。

人間が生活する分に必要なものは全てこの里の中で揃う。

その為、霊夢はいつも里で食料や道具の購入をしている。

妖怪も人里に来ることはある。

だが、ここを訪れる妖怪達は暴れ回ったりすることはないたため、人間と妖怪の交流もなかなか多い。

特にお酒の飲める店では、人と妖怪が一緒になって盛り上がることも割と日常茶飯事らしい。

一護は今、そういう里に向かっていている。

数分後

一護は人里に到着した。

到着した一護はまず周りを見渡す。

まるで過去にタイムスリップしたような集落。

流魂街や日本史の資料で見た一昔前の風景に似ている。

里の人の着ている服も時代劇でよくみる着物だ。

だから、一護の着ている服は嫌でも目立つ。

一護の服装は外界の服装そのままだからだ。

里の人達が里を歩く一護をチラチラ見る。
視線が痛い。

時折どこからか囁き声が聞こえてくる。

その囁き声はキツチリ一護の耳に入っている。

その内容は殆ど、あの新聞の事だ。

耐え切れなくなった一護は直ぐ様買い物を済ませようとする。

「そのオレンジ頭！ ちょっといいか？」

不図、後ろから声を掛けられ、一護は振り向く。

そこには一人の女性がいた。

腰まで届こうかというまで長い、青のメッシュが入った銀髪。

頭には頂に赤いリボンをつけ、赤い文字のような模様が描かれた青い帽子を乗せている。

この帽子は六面体と三角錐の間に板を挟んだような形。

衣服は胸元が大きく開き、上下が一体になっている青い服。

袖は短く白。襟は半円をいくつか組み合わせ、それを白が縁取っている。

胸元には赤いリボンがつけてある。

下半身のスカート部分には幾重にも重なった白のレースがついている。

「…えくと、俺のことツスカ？」

一護は自分で自分を指差し聞く。

「ああ。少し時間を頂けるか？」

「…いいツスけど」

一護は渋々、女性の言うことを承知した。

一護と女性は適当な団子屋に行き、店前に置いてある横幅の広い腰掛けに座った。

「で、用件は何ですか？」

横に座る女性に言う。

「まあ、そう急かすな。ここの串団子は美味しいぞ。どうだ？」

「はあ、じゃあお願いします」

女性は団子屋の主人に団子を二人前注文した。

直ぐにお茶と共に二人前の団子が持ってこられた。

一護と女性は串団子を食べ終わると女性が口を開いた。

「自己紹介が遅れたな。私は上白沢慧音。この里で寺子屋の先生をしている」

女性は自己紹介をしたので一護も自己紹介をする。

「俺は黒崎一護。訳有って今は博麗神社に世話になっている外来人だ」

「ああ、知っている。新聞に載っていたからな」

新聞：一護に嫌な記憶が蘇る。

あの嘘八百の文々。新聞：一護の事を戦闘狂と書いた上、強いヤツ大募集という身勝手なことを書いた新聞。

「まさか、あの新聞読んだんですか？」

「まあな。けど、心配するな。私はあの新聞のことを殆ど信じていない」

それを聞いた一護は一安心する。

「それじゃ、上白沢さん、用件つてのをそろそろ聞かせてくれねえか？」

「慧音でいいよ。用件つてのはな、黒崎一護君：君に寺子屋の子供達に外の世界の事を少し教えてやってくれないか？」

「え？」

あまりにも的外れな用件に一護は目を丸くする。

「いや、別に嫌なら断わってくれてもいいんだぞ」

慧音が少し焦り口調で言った。

「別に断わる理由なんてありませんけど、どうしてですか？」

今はそれ程忙しくないので取りあえず了解する。

そして、その理由を聞いた。

「簡単な事由だ。近頃、子供達が外の世界に憧れているんだ」

「え、どうしてです？」

「新聞でだよ。それで君の事を子供達が見て、興味を示したんだ」

「あの新聞ですか」

あんな新聞で自分のことを知られたと思うと最悪だ。

取りあえず、その子供達にはいくつか間違いがあるという事を教えないと、と思う一護。

「そして今日の朝、子供達が新聞を見てきたらしく、その話題で授業が全く進まなかったよ」

一護は今日の新聞を思い出す。

書いてあったことは、あの異変のことだ。

「たしか、あの異変の事だよな」

「ええ、そうよ。あの新聞で興味から憧れに変わったんだ。あの事は事実なんだろう？」

文々。新聞をあまり信用していない慧音が本当かどうかを聞いてくる。

「あれは本当ですよ。まあ、その前の新聞は丸切り嘘ですけど」

「やっぱりそうか。写真まで載せられていたから確信はもてたが、やはり本人に聞いてみないと思ってるな」

そういつと慧音は残りの茶を飲み干し立ち上がる。

「そろそろ行かないとな。それじゃあ、黒崎一護君。いつでもいいから寺子屋に寄ってくれ」

「あ、はい」

慧音はその言葉を聞くと走ってどこかへ行った。

一護はまた約束をしてしまった。

その後、一護は適当に里をブラブラ歩き回った。

直ぐに買出しを済ませて帰ればいいのだが、ついでに人里がどんなところなのかを自分の目で確認する為に適当にぶらついている。周りの視線もそれ程気にしなくなった。ぶらついて、もお二十分くらい経つ。

「…そろそろ買う物買って帰るか」

一護はそういつと、適当な店に行こうとする。

その姿を一人の少女が見て、一護に駆け寄った。

「あの、すみません」

一護は背後から声を掛けられたので振り向く。

そこには、背中に二本の長刀と短刀を携えている少女がいた。さらさらとした銀色の髪をボブカットにし、黒い質素なりボンを付けている。

そして白いシャツに青緑色のスカート。

その少女の横には白くて大きい幽霊みたいなのがいる。

「何か用か？」

一護は少女に聞く。

「はい。あなたがあの紅い霧の異変を解決した黒崎一護さんですか？」

このセリフ、どうやら新聞の事だ。

一護はそれに答える。

「そうだけど」

それを聞いた少女の表情が明るくなった。

「やっぱりそうですか！ あ、申し遅れました。私は魂魄 妖夢と
います」

妖夢という少女がペコリとお辞儀をする。

その姿を見た一護もお辞儀をし名乗る。

「黒崎一護といます」

なぜか丁寧語になってしまった。

一護と妖夢はお互い顔を上げる。

そして、妖夢が口を開く。

「早急で極まり無く不躰なんです、一つお願いしても宜しいでしょうか？」

「構わねえけど」

これと言って断る理由が無いので承知する。

「ありがとうございます！」

妖夢は深く頭を下げる。

「では、そのお願いですけど…私と一戦交えてくれませんか？」

さっきと同じくらい予想外の願いに少し驚く。

「別にいいけど、どうして俺なんだ？」

「あの新聞を読んで尊敬したんです。幻想入りしたばかりの人が異変を解決した上、あの吸血鬼と互角以上に戦った」

「それで俺と戦いてえのか？」

「いえ、本当の理由は別にあります。受けて頂けますか？」

もう一度聞いてくる。

「護は」「ああ」と言い頷く。

「ありがとうございます」

妖夢はもう一度お礼を言う。

一護はこうして、またまた約束をしてしまった。

一護はあその後、妖夢に戦う日取りと場所を言われ去った。

「ったく、また約束しちまった」

買い物を終えた一護は人里を出ようとしていた。

この里に来て一護は二つも約束をした。

慧音とは寺子屋の子供達に外の世界を教える約束。

妖夢とは弾幕勝負をする約束。

一護は一つ溜め息をつくど、博麗神社に向かって飛ぼうとした。

その瞬間、後ろの方から強い視線を感じた。

少し殺気が込められた視線。

一護はばつと後ろを振り向く。

だが、そこにはそういう視線を送っている人物はいない。

一護は気のせいだと思い、神社に帰った。

一護が飛んで行くと同時に一人の男が物陰から現れた。

その男は角が生えた仮面を左頭部に被り、痩身で真っ白な肌をした黒髪の男。

貫通した孔が喉元に開いており、緑の両眼の下に、垂直に伸びた緑色の線状の文様がある。

そして、コート状の死神のような白い死覇装を着ていおり、腰には一本の刀を差している。

そう、この男は一護と壮絶な戦いをした破面のウルキオラ・シファ
！。

だがウルキオラは一護との死闘の末、消滅した。

その男が平然とそこにいるのだ。

消えた男がそこに…。

「黒崎一護…やはり、幻想郷に来ていたか」

ウルキオラはボソリと呟き、その場から姿を消した。

一護はまだ知らない。

自分以外にも色んな奴等が幻想入りしている事を。

一護が博麗神社に戻ると霊夢の副作用は治っており、魔理沙が床の上で気絶していた。

第23斬 【一護VS妖夢】（前書き）

なかなか話が進まない。

もうちよいで夏休みだけど、この夏休みは少し忙しいから何回も更新できないかも。

第23斬 【一護VS妖夢】

妖夢との約束の日は一週間後。

昼過ぎに人里から西に1km行った辺りにある平原に来るようにと言われた。

この約束は一応、霊夢に伝えたが興味が無いのか無関心だった。

そして、直ぐに一週間が経った。

「そんじゃあ、行ってくるぜ」

昼、昼食を食べ終えた一護は約束の平原に向かう為、縁側で靴を履く。

霊夢は「早く終わらせて帰って来なさいよ」と言って、一護を見送る。

一護は「ああ」とだけ答え平原に向かった。

目的の平原までは空を飛ばせば直ぐに着く距離だ。

一護が平原に到着すると既に妖夢の姿があった。

会った時と同じように長刀と短刀を背中に携えており、横には幽霊みtainなのが浮いている。

妖夢は一護の姿を確認すると「黒崎さあん！」と大きくも小さくもない声で叫んだ。

一護は妖夢の前に着地すると口を開く。

「よお、妖夢。来るの早いな」

「はい。頼んどいて後に来るのは失礼なんで」

なんとも律儀な子である。

「では、早速ですが宜しくお願いします」

妖夢は小さく頭を下げると長刀を抜いた。

なぜか、あの刀が斬魄刀に見えてしまう一護。

「この刀は楼観剣。私の大切な一振りです」

「そうか。じゃあ、始めようぜ」

談話も無く、直ぐに戦いが始まった。

一護はスペルカードを取り出す。

相手の持つ刀は真正銘の刀。

死神の戦いを思いだした一護は少しわくわくし始めていた。

「行きます」

妖夢は地面を蹴り一直線に一護に向かって跳んだ。

美鈴程ではないが結構速い。

「黒符『月霊幻幕』」

一護はスペルを唱え、三日月状の弾幕を展開させる。
それを見た妖夢もスペルを唱える。

「幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』」

妖夢が刀を横に一振りした瞬間、その軌跡から無数の弾幕が放たれた。

一護はそれを相殺するために、展開していた三日月状の弾幕を放った。

それと同時に地面の魂を操り反発力の補助をさせ、一瞬で妖夢の背後に移動した。

妖夢は一護の動きを見切り、一護が自分の背後に移動した瞬間、攻撃の動作に入る前に刀で一護を攻撃した。
一護はそれを素早く後ろに低く跳び、躲す。

(今だ！)

妖夢は一護が地面に着地する前にスペルを唱える。

「人符『現世斬』！」

妖夢は前方へ踏み込んだ。

刹那、妖夢は一護の後方に移動していた。

一護の左肩から血が飛び散った。

どうやら、一瞬で斬り抜けたようだ。

(速え…！)

一護は妖夢の方を振り向き、口を開く。

「やるじゃねえか」

「お褒めに預かり光栄です。ですが、黒崎さんはまだ殆ど力を使われていませんね。そろそろ、少し本気を出していただけませんか？」

「ああ」

一護は霊圧を上げ、構える。

その霊圧に妖夢は少し身構えた。

「次は俺から行くぜ」

一護はポケットから代行証を取り出す。

その瞬間、いつも通り代行証を中心に黒い霊圧が卍型の形になった。

「何ですか、それは？」

妖夢が代行証を見て聞いた。

「こいつは俺の最強のスペルを発動するのに必要な物だ」

「最強のスペル……」

妖夢はあの代行証から出る最強のスペルを考えた。だが、全く思いつかない。

「見せてやるよ。黒斬『月牙天衝』！」

一護は代行証を大きく振り、月牙を放った。

妖夢は本能で月牙の危険さを察知し、避ける。

月牙はそのまま森に入っていく、木を何本も薙ぎ倒していく。

妖夢はその威力に少し圧倒される。

「凄いですね。これが黒崎さんの最強のスペルですか」

「ああ。そんじゃあ、もう一発いくぜ」

一護は再び月牙を放った。

妖夢もそれに対抗するようにスペルを唱える。

「餓王剣『餓鬼十王の報い』！」

妖夢はさつきと同じように横に一振りした。

妖童餓鬼の断食と同じように刀の軌跡から弾幕が無数に放たれた。

だが月牙はその弾幕を掻き消していく。

(やはり、この程度のスペルでは歯が立ちませんか。では…)

妖夢は刀を構え、地面を強く蹴り一護に向かった。

一護は代行証を構え、向かってくる妖夢の刀を受け止める。

妖夢は自分の刀を受け止められたことに驚く。

代行証の卍型の部分は一応鏢のように扱うことができる。

その鏢の部分で防いだのだ。

妖夢は一旦後退しスペルを唱える。

「魂魄『幽明求聞持聡明の法』」

妖夢と一緒にいる幽霊のようなものが妖夢の姿を模った。まるで妖夢が二人いるみたいになっている。ただし、模った姿は白黒。

「行きます」

妖夢が一護に向かって駆け出すと、同じように分身の方も一護に駆け出した。

妖夢が刀を振ると時間差で分身の方も同じ動きで斬ってきた。

一護は二つの攻撃を防ぎきる。

だが、妖夢は攻撃を止めない。

斬り込みの攻防から数十分が経った。

一護と妖夢は間合いをとっていた。

妖夢を模った分身は元に戻っている。

「強えじゃねえか妖夢」

「黒崎さんも流石です」

一護は一呼吸し口を開く。

「妖夢、そろそろお前の最強のスペルを見せるよ」

一護は微笑みながら言った。

「そうですね。最強かどうかは分かりませんが、これで最後にします」

妖夢は刀を前に構えスペルを唱える。

「断迷剣『迷津慈航斬』！」

妖夢の刀の刀身に青い大量の妖力がつき込まれ、巨大な刀身が作り出された。

「すげえな。けど、俺も負けねえぞ。黒斬『月牙天衝』！」

一護の代行証の卍型の部分が歯車のように高速回転する。

「では、行きます！」

妖夢は刀を頭上に振り上げ、一気に一護に向かって振り下ろした。

一護は代行証を刀に向かって振り、月牙を撃ち放った。

月牙は振り下ろされる刀に激突した。

妖夢はその力に負けないように耐えた。

「はあああああああ！！！」

妖夢は声を上げ、カー杯刀を振り下ろした。

それにより、月牙は真っ二つになった。

一護の月牙が妖夢の刀に負けた。

だが、一護は既にいた位置にはいず、妖夢の背後にいた。

妖夢は直ぐ様振り向くが、一護の拳が妖夢の顔に当たる寸前で止められた。

「く…っ」

「俺の勝ちだな、妖夢」

一護は拳を向けたまま言う。
妖夢は参ったかのように目を閉じた。

「はい、私の負けです。ありがとうございました」

こうして、妖夢との戦いは終わった。

「黒崎さん、今日は本当にありがとうございました」

妖夢は頭を下げて言う。

「ああ」

「後、この戦いを申し込んだ本当の理由は…」

「いいよ、別に」

妖夢の言葉を一護が途中で遮った。

「どうしてですか？」

「あなたの刀を通じて分かったんだよ」

「刀…」

「ああ。あなたは誰かを護る為に刀を振ってんだろ？」

妖夢は目を見開く。

心を見透かされたのだ。

そう、一護は相手と剣を合わせる事により、相手がどういう覚悟で剣を振ってんのか、自分を認めているのか見下しているのかも分かるのだ。

「そうです。その方を護る為には強くならなければいけません。だから私は黒崎さんと戦ったんです」

「そうか。何か良いこと有ったか？」

「はい。満足です」

一護はそれを聞くと後ろを向いた。

「そいつは良かった。じゃあ、俺は帰るぜ」

一護は顔だけ妖夢の方に向け言った。

「あの、お礼は…？」

「別にいいよ、そんなの。またな、妖夢」

「は、はい！ では、また何処かで」

それを聞いた一護は「ああ」と答え、飛んで行った。

妖夢は一護が見えなくなると、森の方に顔を向け口を開く。

「そろそろ出てきてくれませんか？」

妖夢がそう言うと森の中から一人の男が現れた。

「るせえな。テメエが黒崎と戦っていたから出て行けなかつたんだよ」

男は少し怒り混じりの声音で言った。

「黒崎…あの人のことを知っているんですか？」

「ああ。ただ、今は接触するなって言われてんだよ」

「…で、用件は何ですか？」

一護が博麗神社の前に到着すると、中から色んな人の声が聞こえてきた。

（誰か来てんのか？）

一護が玄関の戸口を開け「ただいま」と言った瞬間、誰かが「一護オー！」と言い抱きついてきた。

一護は「うおっ」と言い、倒れそうになる体を頑張って踏み止まらせた。

そして、胸囲に抱きついている奴の姿を見る。

黄色の髪に変な羽。

そいつが抱きついたらままだ一護の方に顔を上に向けた。

そいつを確認した一護は声を上げた。

「フラン！」

そう、抱きついてきたのはフランだったのだ。

第24斬 【ロリコン】（前書き）

内容がかなり薄いです。

見なくても今後の話についていけるくらい薄いです。

次回の更新はなるべく早めにします。

第24斬 【ロリコン】

「何で、フランがここに？」

一護は自分に抱きついているフランを見る。

どうしてフランが博麗神社に…一護はあの時の約束を思い出す。

「今度、お姉様たちと遊びに行ってもいい？」

紅霧異変の後、一護はフランとそう約束したのだ。

いつ遊びに来るかは言っていなかった為、いつ遊びに来るか分からなかった。

まあ、いつ来られても別に構わなかったけど。

「遊びに来たんだよ」

フランが微笑みながら答える。

この笑みはあの狂気の笑みとは全く違う。

純粹で無垢な笑み。

と、そこに三人の少女が一護の前に現れた。

「一護」！

「一護」！

「一護さん」！

三人の少女が一護の名を呼んだ。

一護は前を見て三人の姿を確認する。

ルーミア、チルノ、大妖精：この三人だった。
声からして大体想像はできたが。

「何でお前らまで…。まさか」

一護は抱きついているフランを引き離し、居間に向かう。
そして、一護が居間の襖を開けると見知った面々がいた。
レミリアに咲夜、美鈴にパチュリー、小悪魔も。
おまけに魔理沙と。

「…マジかよ」

妖夢との弾幕勝負の疲れがどつと出る。
紅霧異変に関わった連中が勢揃いだ。

「よお、遊びに来てやったぜ一護」

魔理沙がここに来た時いつも言っているセリフを言う。
もう、聞き飽きた。

「久しぶりね、一護。この私が自らここに来て上げたわよ」

レミリアがテーブルに肘をつきながら言う。

外見だけでいえば糞生意気なガキである。

一護は取り敢えず紅魔メンバー全員と挨拶する。
美鈴とはあの戦い以降全く話していなかったから少し緊張した。
ルーミア達も居間に戻ってきた。
フランが一護の膝に座っている。

「…居間にこんなに集まると鬱陶しいわね」

霊夢が廊下から居間を見て言った。
そして一護に目を移した。

「どうしたの？ その左肩の傷」

霊夢が妖夢との戦いで負った一護の傷に気づいた。
左肩、妖夢に斬られた傷だ。
隠していたつもりだったが、やはりばれてしまった。

「分かるだろ。約束の相手と弾幕ごっこをしてきたんだよ。これはその時に負った傷だ」

「「「弾幕ごっこ！」「」」

弾幕ごっこという単語にフラン、ルーミア、チルノが反応する。
一護の額から冷や汗が流れる。

「一護、せっかく遊びに来たんだから弾幕ごっこしよ」
フランが言う。

たしかに遊ぶ約束はしたが弾幕ごっこになるとは。

「妖夢、遅かったわね」

一人の女性が縁側でお茶を啜りながら妖夢の帰宅した姿を見て言った。

「すみません。少し時間が掛かってしまいました」

妖夢は女性の前に行き言っ。

「…随分楽しんできたらしいわね。得られたものは大きかったよね」

「どうして分かるのですか？」

「顔に書いてあるもの」

女性はそういうと小さく笑った。

そして妖夢は何かを思い出したかのように口を開く。

「そついえば幽々子様。あの後、八雲の使いが来られまして」

「紫の…藍の方？」

「いえ、この前新しく八雲に入った男の方です」

男という言葉に女性の脳裏に一人の男が現れる。

「あの男ね。で、何て？」

「今度、紫様が外の世界で見つけた美味しい飲み物を一緒に飲みましょうと」

「分かったわ。でも、その程度の伝言を何であの男に頼むのかしら？」

「それは分かりません」

妖夢が答えると女性が残りの茶を全部飲んだ。女性は空になった湯呑みを置き、少し俯く。

(それに、あの男が命令されて素直に聞くような人には思えないけど)

「あの、幽々子様」

妖夢の声に思い耽っていた女性が顔を上げる。

「何、妖夢？」

「…次の春に計画を実行するんですね」

それを聞いた女性が「そうよ」と答える。

この春に実行する計画で、再び一護と戦う事になることを妖夢はまだ知らない。

それから数時間後、一護は三人の弾幕ごっこにつき合わされた。

もう完全にボロボロになった一護は晩飯の後、みんなより一足先に眠りについた。

紅魔メンバーもルーミア達も泊まっていくようだ。

だから、一護は朝起きた時、大変なめにあつた。

朝、一護が目を覚ますとルーミア、チルノ、大妖精、フランが一護にくっ付いていた。
そのお陰で起きようにも起きれない。

と、ちょうど良いタイミングで霊夢が部屋に入ってきた。

「起きてるわよね、一護」

霊夢は一護を見る。

同時に一護にくっ付いている四人も見る。

「霊夢、助けてくれ」

一護が四人を起こさないように小声で助けを求める。

霊夢はなぜか軽蔑な眼差しで一護を見る。

「お、おい。何だ、その目は？」

「昨日から言っただけだったんだけど、今言っわね」

「何をだよ？」

「この、ロリコン」

ロリコン…は？ ロリコン…だと！

霊夢はそれを言っただけで出て行ってしまった。

一護はこれから一ヶ月先まで霊夢から名前ではなくロリコンと呼ばれた。

第25斬 【新たな異変】（前書き）

ようやく異変解決に出ます。

文字数が少ないので読んだ感じは多分しません。
次からは多くするつもりです。

今度の夏コミに行くか行かないかで悩んでいます。

冬コミの時、相当金を使ったんで。

他の同即でも金を使っているし。

友達には行こうと言われているんですが。

行く気がしない

第25斬 【新たな異変】

早くも幻想郷には春が訪れた。

暖かい気温に綺麗な桜。

冬とは真逆の季節。

な、はずだった。

外は白い吹雪が休むことなく吹雪いている。

一護は縁側から外を眺める。

冷たい風が一護の体温を下げる。

一護の後ろの部屋では霊夢が炬燵に入り暖まっている。

「もう春だろ。何でまだ雪が吹雪いてんだよ？」

一護が霊夢の方に顔を向け言う。

そう、今は春の季節。

この吹雪は季節外れにしては長続きしすぎている。

冬から春になってまで雪が降り続けているのだ。

「知らないわよ。それより、早くそこ閉めてよ」

霊夢が縁側と部屋の間のおくを指差す。

本当、霊夢は寒いのが苦手みたいだ。

冬に魔理沙達と雪合戦した時、霊夢だけ参加しなかった。

寒いのが大嫌いという理由で。

一護は部屋に戻り、襖を閉める。

「これって異変じゃねえのか霊夢？」

「多分ね。こんな異常気象は今までになかったから」

「だったら、異変の解決しないといけねえんじゃねえのか？」

「そうね〜」

霊夢のやる気が全く出ない。

紅霧異変からはこれといって大きな異変はなかった。

だから博麗大結界の異変も一向に進歩無し。

その上、霊夢の異変解決へのやる気も上がらない。

「まったく、こうなったら俺一人で…」

一護が襖を開け、異変解決に一人で向かおうとした瞬間、まるで狙ったようなタイミングで魔理沙が現れた。

「よお一護。霊夢いるか？」

「あ、ああ」

魔理沙が服や帽子に積もらせた雪を落としながら部屋に入って行った。

お陰で部屋なんかも落とされた。

誰が後始末すると思ってるんだ、と思う一護。

「ちょっと魔理沙。部屋に雪落とさないでくれる」

「そんな事より霊夢。これを見る！」

魔理沙がテーブルの上に何かをバンツ！！と叩きつけた。

一護と霊夢は魔理沙の叩きつけた物を見る。

「…桜の花びら？」

一護がそれを見て言った。

そこには一枚の桜の花びらがあった。

「これが何よ？」

霊夢が桜の花びらを摘みながら聞いた。

「鈍いな霊夢。こんな雪が降り続けている中、どうして桜の花があるんだ？」

「…あ、そういうことね」

春になっても冬の季節と全く変わらないのに、春に咲く桜の花びらが存在する訳がない。

「どこで見つけたんだ、それ？」

一護が聞く。

「数十分前に魔法の森の上空で見つけたんだ。これだけじゃないぜ。他にも沢山の桜の花びらが、雪と一緒に吹かれてたんだ」

「どづいつ事だよ？ 何で桜の花びらが」

「さう、そこまでは分からないぜ」

と、霊夢が溜め息をつき立ち上がった。

「仕方ないわね。それじゃあ、この異変の解決に行こうかしら」

ようやく霊夢がやる気になってくれた。

「ああ」

「私も行くぜ。この寒さには迷惑してるからな」

こうして三人で異変解決に向かうことになった。

三人は外に出た。

冷たい風が顔を刺激する。

霊夢と魔理沙の服装はあまり変わらないが、一護は服の上に青いダウンジャケットを着ている。

「私の勘で行くわよ。良いわね？」

霊夢の勘…

あまりそついつのを頼りに任せたくないが承知した。

「私も御一緒させていただいても宜しいでしょうか？」

不意に上空から声が聞こえてきた。
三人は声のした方を見る。

「咲夜」

一護が言った。

そこには紅魔館のメイド長、十六夜 咲夜がいた。
服装は変わらないが、首元にマフラーを巻いてる。
咲夜はゆっくりと一護達の前に着地する。

「何しに来たの？」

霊夢が聞く。

「言ったでしょ。私も御一緒させてもらいますよ」

霊夢がちよつと悩んだ末

「足手まといにはならないですよ」

という条件で同行を許可した。

「でも何で咲夜が？」

「この冬のせいで色々困っているのよ。だから、お嬢様から許可を
もらってここに来たの」

一護たちが異変に立ち向かおうとした瞬間に咲夜が登場。
偶然にしては出来すぎている。

多分、レミリアが何かしたんだろう。

「今回の異変も一筋縄じゃないわよ」

霊夢が言う。

「ああ。分かってる」

一護が答える。

この春までに一護はまた強くなった。

紅霧異変の時みたいに仲間を傷つけさせない為に。

「行くわよ」

霊夢がそう言うと、四人は異変解決に向かった。

第26斬 【冬の妖】（前書き）

全然話が進まない。
本当に長くなりそうです。

第26斬 【冬の妖】

今、幻想郷は春なのに雪が降るといふ異変が起きている。

勿論、気温も春の暖かい気温ではなく冬の寒い気温である。

一護、霊夢、魔理沙、咲夜はその異変を解決するべく調査に向かっている。

四人は取りあえず霊夢の勘を頼りに進んでいると、桜の花びらがちらほら見え出した。

その方向に四人は進む。

現在は白い山々の上を飛んでいる。

「本当に桜の花びらが雪と混じってやがる」

少し半信半疑だった一護は桜の花びらを見て信用する。

「この異変を起こしている黒幕を見つけ出すには、この桜の花びらを辿るのが一番の近道かもしれませんね」

咲夜が言う。

「言っまでもないわよ。それに若干暖かくもなってきたわ」

霊夢の言うとおり、たしかに桜の花びらを辿って進むことに少しだけ気温が上がってる気がする。

「早くこの異変を解決して、花見で一杯やりたいぜ」

魔理沙が急におっさんみたいな事を言い出した。

でも、桜の木の下で食べる弁当は美味しいなと思う一護。

「その時は私達も是非誘ってください。きっとお嬢様達も喜びます」

「ああ、良いぜ」

異変解決が始まったばかりなのに、もう終わった時のことを言い合っている。

霊夢と一護は二人の会話を聞き流しながら飛行する。

と、四人の前にチルノが現れた。

「氷の妖怪チルノの登場だー！！」

元氣一杯の登場セリフである。

「…で、何しに来たのかしら？」

霊夢が睨みつけて聞く。

この二人、正直あまり仲良くない。

っていうか、霊夢が一方的に嫌っているだけで、チルノは別に霊夢のことを嫌っている訳ではない。

なぜ霊夢が嫌っているのかは、分からない。

「一護と弾幕ごっこをしに来たのよ！ 今度こそ一護に勝って私が幻想郷最強の称号を取り戻すのよ！」

「またかよ」

一護が呟く。

冬の間も、よくこういう口実でチルノと弾幕ごっこをするはめになった。

弾幕ごっここの結果は全て一護の全勝。
もう、やり飽きた。

「一護、こんな奴無視してとっとと行くわよ」

霊夢がそう促す。

が、その程度でチルノから逃れることが出来ないと分かっている一護はそれをしない。

「すまねえ霊夢。先に行つててくれ。俺はチルノと弾幕ごっこをしてから行く」

「ハア！ 何言ってるのよ、今は異変の解決中なのよ」

霊夢が反論する。

確かに、異変の解決中に遊びで弾幕ごっこをするのは、あまり良くない。

それを聞いた魔理沙が口を開く。

「別に良いんじゃないのか。一護の言つとおりになさせて」

魔理沙が一護に乗る。

「魔理沙まで何言ってるのよー！」

「だってよ、どうせ無視してもずっと付いてくるぜ。だったら一護と弾幕ごっこをさせた方が良いだろ」

「私も同感ですわ」

咲夜も同意してくれた。

三対一、流石の霊夢も仕方なく賛同してくれた。

「早く終わらせて来るのよ一護」

「ああ」

そういうと、霊夢たち三人は先へ進んで行った。

「それにしても早く敵さんに登場してもらいたいぜ」

魔理沙が言う。

一護と別れて五分。

敵の姿が中々現れない。

「そんな簡単に現れる訳ないでしょ」

霊夢が答える。

敵が簡単に現れたら苦労はしないからラッキーである。

まあ、そんなラッキーは来ないだろうけど。

「くるまく〜」

と、三人の前に「くるまく〜」と言い一人の女性が現れた。

女性は薄紫のショートボブに白いターバンのようなものを頭に巻いている。

左胸あたりに首から腰までの白いラインが走っており、そこに氷をかたどったようなアクセサリーをつけている。
下はロングスカートにエプロンらしきものを着用。
首には白いマフラーを巻いている。

…ん、黒幕？

まさか、ラッキーな展開が来たのだろうか。

「今、何て言ったの？」

霊夢はさっきの女性の言葉が気になったので聞く。

「黒幕だけど」

平然と答える女性。

黒幕がこんな堂々と正体を現して良いのか？
それを聞いた魔理沙が横にいる咲夜に聞く。

「黒幕がこんな簡単に出てきて良いのか？」

「ダメですね。黒幕がこんなに早く出てきては。ゲームや漫画だったら一瞬で完結してしまいますよ」

「私はそっちの方が好きだわ。だから一瞬で終わらせるわね」

霊夢がお札を両手に持ち、臨戦態勢に入る。

「ちょっと待って！ 私は黒幕だけど普通よ」

女性が焦りながら、よく分からない事を言う。

「普通の黒幕ね。だったら普通に退治させてもらっわ」

普通の黒幕を普通に退治する事となった。

霊夢が攻撃を仕掛けようとする。

だが、それを咲夜が霊夢の前に立ち、霊夢の攻撃を遮った。

「ちょっと、何のつもり？」

仲間に攻撃を遮られると思っていなかった霊夢は、何故遮ったのかを聞く。

「いえ、ただこの妖怪の相手は私がしたいと思ひまして」

「どうして？」

「最近体を動かしていないもので、本当の黒幕と戦う前に準備運動がしたくてね」

たしかに咲夜は紅魔館で働いているだけで、戦いはあまりしない。攻めてくる敵がないからだ。

だから、肩慣らしに戦いたいのだろう。

「分かったわ。早く終わらせてね」

「ええ。分かっていますよ」

咲夜はそういうと、ゆっくり女性に近づぐ。

そして、咲夜は手品のように右手の指の間から三本のナイフを出し、

構える。

「完全で瀟洒な従者 十六夜咲夜です。弾幕ごっこを申し込むわ」

「受けて立つわ。私は冬の忘れ物 レティ・ホワイトロックよ」

二人は名乗り、そして弾幕ごっこが始まった。

その頃、一護もチルノと弾幕ごっここの相手をしていたのであった。

第27斬 【咲夜は勝利 一護は敗北】（前書き）

こっ暑いと本当に頭が働かない。

それに紅魔篇に比べて文字数が減っているような。

第27斬 【咲夜は勝利 一護は敗北】

「霜符『フロストコラムス』！」

チルノがスペルを唱える。

遅い弾と速い弾が色んな方向に無数に放たれた。

現在、一護とチルノは弾幕ごっこをしている。

まだ、お互い一発も被弾していない。

一護は自分に向かって飛んでくる弾幕を軽快に避け続ける。

「もお、何で全然当たらないのよ!？」

チルノが悔しそうに言う。

冬の間によくチルノと弾幕ごっこをしたのだ。

チルノのスペルはもう全て見飽きた上、嫌でも簡単に避けられるようになった。

だから、当たることなど滅多にない。

「当たるかよバカ」

チルノに聞こえないように呟く一護。

バカとチルノに聞こえるように言うと、過剰に反応し憤るので小さく言う。

「そろそろ終わりにしねえかチルノ？」

「まだまだだよ！ 本番はこれからだから!!!」

当分終わりそうにない。

一護は溜め息をつく。

チルノはスペルカードを取り出しスペルを唱える。

「凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノから無数の弾幕が放たれる。

一護は放たれる弾幕を避ける。

その瞬間、全ての放たれた弾幕が凍てついた。

運悪く一護はその弾幕に囲まれた。

「このパターンも飽きたな」

チルノは再びカードを取り出しスペルを唱える。

「氷符『アイシクルマシンガン』！」

チルノから一護に向かって小さな氷柱が無数に発射された。

それを見た一護はカードを取り出し、スペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開される。

一護は周りの凍て付いたチルノの弾幕を三日月状の弾幕で相殺していき、逃げ道を作る。

そして、一護は小さな氷柱の弾幕を避ける。

「この程度かよ、チルノ」

一護が挑発的なことを言う。

「そんな訳ないでしょ！ こっからが、あたいの本気よ！」

「そのセリフも、もう聞き飽きたな」

その頃、咲夜とレティも弾幕ごっこをしていた。

「寒符『リングリングゴールド』！」

レティがスペルを唱える。

その瞬間、レティから大量の弾幕がばら撒かれ、咲夜目掛けて中弾が発射された。

咲夜もカードを取り出しスペルを唱える。

「幻符『インディスクリミネイト』！」

咲夜から無数のナイフがばら撒かれた。それにより、レティの弾幕が掻き消されていく。

「くっ、やるわね」

「まだですよ。幻符『殺人ドール』」

咲夜が新たなスペルを唱える。

咲夜から無数のナイフの弾幕が回転しながら、レティに襲い掛かった。

「白符『アンデュレイションレイ』！」

それを見たレティは透かさずスペルを唱えた。
レティから無数の弾幕と共に細いレーザーが放たれた。
その弾幕とレーザーが咲夜のナイフを撃ち落としていく。

「流石は黒幕ですね。この程度では倒せませんか」

咲夜が自分の撃ち落とされたナイフを見て言った。

「そうよ。黒幕を舐めないでね」

レティは再びカードを取り出し、スペルを唱える。

「冬符『フラワーウィザウェイ』」

レティから無数の弾幕が放たれる。

「奇術『エターナルミーク』」

咲夜もスペルを唱える。

咲夜から弾幕が無数にばら撒かれる。
それがレティから放たれる弾幕を相殺していく。

今のところは拮抗した戦いをしている。

「中々やりますね」

咲夜が言う。

「あなたもね」

「…そろそろ終わりにしません？ このまま、やっつけても同じパターンが続くだけです」

咲夜が決着をつけようと言う。

たしかに、このままだと中々決着はつかないだろう。

「で、どうすると？」

「あなたの全妖力を次に出すスペルに込めてください。それを私のスペルで対抗します」

「…罨ってことは？」

「心配ありません。私はそんな卑怯な真似はしませんから」

レティは咲夜の言うことを信じるべきか否かを悩んだ。
提案は悪くない。

けど、それが罨だったら自分は一気に不利になる。
だが…

「分かったわ。あなたの案を飲みましょう」

レティは咲夜の提案を受け入れた。

例え罨だろうとレティはその罨を打ち破る自信がどこからか出てきたのだ。

多分この天気、吹雪がそうさせるのだろう。
相手は冬の妖怪。

今のこの天気はレティからしたら最高の局面。
自分の力を100%発揮できるからだ。

「それじゃあ、いくわよ」

レティはカードを取り出し、自分の妖力を全て込める。

「凄い妖力ね」

咲夜がレティの妖力を感じ取り呟く。

「怪符『テーブルターニング』！」

レティを中心に全方位に無数に弾幕が放たれた。

それを見た咲夜はゆっくりカードを取り出しスペルを唱える。

「時符『パーフェクトスクウェア』」

刹那、空間全体の時間が停止した。

それにより、レティの放った弾幕が無効化されてしまった。

そして咲夜は時間が止まっている間に、もう一枚のスペルを唱える。

「幻符『殺人ドール』」

咲夜から無数のナイフの弾幕がレティに向かって放たれた。

そして、ナイフの弾幕がレティに当たる瞬間、時間が動きだした。

「え……」

レティが口を開き、最初の一言を言った直後に無数のナイフがレティに直撃した。

レティはそのまま気を失い、森の中に落下した。

「弱い黒幕でしたわ」

咲夜は落ちてったレティを見て呟いた。

咲夜はレティと拮抗した戦いをしているとレティに錯覚させていたのだ。

なるべく、永く弾幕ごっこをして戦いの感を取り戻す為である。

それに、拮抗した戦いの方が感を取り戻すのに一番だと思い咲夜はそうした。

「だったら、何で早く決着つけなかったのよ」

霊夢と魔理沙が近づいて来ていた。

咲夜の呟いた声が聞こえてたらしく霊夢が言ってきた。

「こっちは体を動かしていないから、凄く寒いだよ」

「それは、すみません」

咲夜が短く謝罪する。

「よお、追いついたぜ」

と、そこに一護がやって来た。

どうやら、チルノとの戦いは終わったみたいだ。

「一護、遅かったな」

魔理沙が言う。

チルノとの弾幕ごっこは直ぐに終わって追いついて来ると思ったが、

思っていたより遅かった。

「で、勝ったのか？」

聞くまでもないが聞いてみる。

「…それが、負けたんだ」

負けた…その言葉に三人は驚愕する。

「ちよ、ちよつと嘘でしょ？」

霊夢が聞く。

「いや、負けたというより、負けてやった…って言った方が正しいのかな」

「え、どういふこと？」

「いやよ、勝つちまったら、また弾幕ごっこを挑まれるだろ。だから、今回の弾幕ごっこで負けて、もう挑まれずに済むようにしたんだ」

「…成程ね」

少し悩んだ末、霊夢が納得した。

「でもよ、チルノに負けたって、文の奴に知れたら大変だぜ」

魔理沙が少し心配そうに言う。

たしかに、文に知れたらまた変な事を書かれそうだ。

「心配ねえって。こんな吹雪の中でバレル訳ねえだろ」

「まあ、そうだけだよ」

「それより、咲夜。お前誰かと戦ってたのか？」

一護が咲夜の方を見て聞く。

「どうやら一護は二つの力のぶつかり合いを感じ取っていたらしい。」

「ええ。ですが、この異変とは全く無関係な妖怪ですわ」

「そうか。じゃあ、とつとと先に進むか」

こうして一行は先へ進んで行った。

第28斬 【迷い家で迷った一護】（前書き）

投稿遅れてすみません。

完全に夏休みに入って羽目を外して遊んでいて忘れていました。
次からは忘れずに投稿します。

第28斬 【迷い家で迷った一護】

「ここは…何処だ？」

一護は今、見慣れない住居が建立ち並ぶ里にいる。そこは雪も降っていない、気温も上がっている。

「それに、みんなは？」

一護は周りを見渡す。

霊夢達がどこにもいないのだ。

「くそ…っ、一体此処は何処なんだよ？」

人里ではない。

人里はあれから何回も行っているから、嫌でも里の風景を覚えていく。

「誰でも良いから出てきてくれ」

「呼ばれて飛び出てにゃんにゃかにゃん！」

と、一護の前に一人の少女が現れた。

茶色のショートボブに猫耳が生えている。

緑色のナイトキャップを被っている。

白いシャツに赤いベストおよびスカートを着用。

首元には黄色のリボンを付けている。

「…え〜と、誰？」

「凶兆の黒猫 橙ちえんだよ」

「元氣よく自己紹介をしてくれた。」

「俺は黒崎一護」

「一護も自分の名を名乗る。」

「で、此処が何処なのか知ってるのか？」

「え、此処。此処はマヨヒガっていう処だよ」

「マヨヒガ……」

「一護は不図ある事を思い出した。」

（たしか、前に読んだ本にマヨヒガっていう奇談があったような）

「一護は自分の知っている事と同じか聞く。」

「マヨヒガって迷い家の事か？」

「そうだよ。よく知ってるね」

「どうやら、自分の知っている事と一致したようだ。」

「まあな。たしか、旅人が山奥で迷うと辿り着くっていわれてる無
人の屋敷だよな。そして、その屋敷の物を持ち帰ると幸運が訪れる
っていう」

「そうよ。一護は運良く此処に迷い込んだんだよ」

「そうか。橙はこっから出る方法は知ってんのか？」

「知ってるよ。教えてあげようか？」

一護は内心で助かったと思った。
でも、こんな小さい子に助けられるのは少し面映かった。

「けど、一つ条件があるよ」

まあ、だいたい予想はしていた。

今まで事がスムーズに進んだことがないからだ。

「条件つてのは？」

「私と弾幕ごっこをしてもらおうよ」

予測的中。

幻想郷では相手が条件などをつけてきた時は殆ど弾幕ごっこになる。

「ああ、いいぜ」

一護が答えると、橙は弾幕ごっここの試合ルールを言ってきた。
試合ルールは簡単。

お互いスペルカードは五枚まで使用可能で、一発でも弾幕を被弾したら終了。

もちろん、弾幕に被弾した方の負け。

「それじゃあ、弾幕ごっこスタート!」

橙の合図により弾幕ごっこが始まった。

その頃、霊夢達は一護が消えたにも関わらず先に進んでいた。

一護が急に姿を消した事には三人共心配したが、一護なら大丈夫だろうとの事で先に進んでいる。

「早く次の敵さんに登場を願いたいものですね」

咲夜が言う。

レティと戦ってから一向に敵らしい敵が現れない。

「平和でいいじゃねえか」

魔理沙が微笑みながら答える。

「この状況のどこが平和な訳?」

霊夢が言う。

「私が平和だと思ったら平和なんだよ」

「何それ」

魔理沙が何やら意味不明な発言をする。

「また変な事を言っているようね、魔理沙」

と、三人の前に一人の少女が現れた。
髪は金髪で頭にヘアバンドのように赤いリボンが巻かれている。
青のワンピースのようなノースリーブを着用し、スカートはロング。
その肩にはケープのようなものを羽織っている。

「お、アリス。久し振りだな」

どうやら、魔理沙の知り合いのようだ。

「誰なの魔理沙？」

霊夢が聞いてくる。

「ん、こいつはアリス・マーガトロイドって言って、同じ魔法の森に住む魔法使いだぜ」

「よろしく」

アリスが小さく頭を下げる。

霊夢と咲夜は取りあえず名乗った。

「で、何しに来たんだアリス？」

「黒崎一護って人に会いに来ただけど」

「あゝ一護は今、行方不明だぜ」

「仙符『鳳凰卵』！」

橙は一枚目のスペルを唱える。

橙の周りからサークル状に広がる無数の弾幕がいくつも現れた。

一護は飛んでくる弾幕を軽く避け続ける。

「そんなスペルじゃ、俺に弾幕を当てるのは無理だぜ」

「むくだったら、これにやんてどうにや！」

橙は二枚目のカードを取り出しスペルを唱えた。

「式符『飛翔晴明』！」

橙が五芒星形に高速で回転しながら動き、5つの頂点から弾幕を大量に出した。

一護はそのスペルに対抗するため、一枚目のスペルを唱えた。

「黒符『月霊幻幕』」

一護の周りに無数の三日月状の弾幕が展開される。

一護は展開した弾幕で飛んでくる弾幕を掻き消していき、一護の弾幕がそのまま橙を襲う。

「うにゃっ！」

橙は飛んでくる弾幕を見て、透かさずカードを取り出し、三枚目のスペルを唱える。

「翔符『飛翔韋駄天』！」

橙がスペルを唱えると回転しながら高速で移動した。それにより、綺麗に一護の放った弾幕が避けられた。そして、橙は高速で移動しながら大量の弾幕をばら撒いていく。

「何…！」

流石の一護もこのスペルには驚いた。

橙が高速で移動している上、弾幕をばら撒いているのだ。

これでは、弾幕を当てるのも難しいし、橙のばら撒いている弾幕も避けないといけない。

「ちっ、黒符『月霊幻幕』！」

一護は自分の周りに三日月状の弾幕を展開し、飛んでくる弾幕を掻き消していく。

そして、一護は自慢の動体視力で橙の動きを見切り、橙目掛けて弾幕を放った。

橙はそれに驚き、一護からの弾幕を避ける。

一護からしたらレミアやフランの方が圧倒的に速かったので、橙くらいの動きなら見切るのにそう難しくない。

「うっ、こうなったらこれにゃ！ 鬼符『鬼門金神』！」

橙は動きを止め四枚目のスペルを唱えた。

橙から赤と青の無数の弾幕が放たれた。

「黒符『月霊幻幕』」

一護は三枚目も同じスペルを発動し、三日月状の弾幕で橙の弾幕を

相殺していく。

「にやんでー！」

橙が悔しそうに言う。

「お前の出せるスペルは後一枚だけ、橙」

一護は三枚スペルを発動し、橙は四枚スペルを発動した。
確実に一護の方が有利である。

「…まだ、一枚つかえる！ 鬼符『青鬼赤鬼』！」

橙が最後のスペルを唱えた。

橙から赤い大弾と青い大弾が幾つか発射され、その大弾の弾道から大量の弾幕が一護に飛んでくる。

「まだ、そんなスペルが残ってたのかよ」

一護が飛んでくる大弾と普通の弾幕を見て言った。
たしかに今までの橙の出したスペルとは迫力感が全く違って凄い。

「だったら、こっちも少し本気でいくぜ」

一護は代行証を取り出し、いつも通り代行証を中心に黒い霊圧が卍型の形になった。

そして一護はカードを取り出し、四枚目のスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒となり代行証に吸収される。

一護は飛んでくる弾幕に向かって代行証を振り、月牙を放った。月牙が橙の放った弾幕を簡単に掻き消していき、そのまま橙に飛んでいく。

「にゃにー!」

橙は直ぐ様、月牙を避ける。

(今だ!)

一護は橙の一瞬の隙を狙い、最後のスペルを唱えた。

「黒符『天幻月牙』!」

橙の周りの空間から三日月状の弾幕が現れる。

「にゃ?」

橙が気付くのと同時に、三日月状の弾幕が橙を襲った。

「にゃあああああ!?!」

全ての弾幕が橙に被弾した。

一発どころか数十発も当ててしまった。

一護の完全勝利で、この弾幕ごっこは終わった。

第29斬 【二つの弾幕勝負】（前書き）

なかなか先に進まない展開です。
早く先に進めたい。

これからは後書きに適当に何か書きます。

第29斬 【二つの弾幕勝負】

「にやゝ負けてしまった」

橙は残念そうに俯いて言う。

「そんな落ち込むなよ。また相手してやるから」

「え、本当!？」

橙が顔を上げ聞く。

「ああ、約束する」

「やったにやゝ!」

橙が喜ぶ。

何がそんなに嬉しいのか分からない。

「で、こっから出る方法は？」

「こっちだよ」

一護は橙の後をついていく。

その頃、霊夢達は先に進んでいた。

あの後、アリスは用を無くしたのか帰った。

「今のって春告精だよな？」

魔理沙が後ろを振り向きながら聞く。

今さっき霊夢が一体の妖精を撃ち落としたのだ。

「そのようね。鬱陶しかったから、撃ち落としたわ」

春告精というのは、春になると春が来たことを伝えにくる妖精。

その妖精が興奮していたのか、霊夢達に向かって弾幕を放ってきた。だから、霊夢が一瞬で撃ち落としたのだ。

「それにしても、一護さん中々姿を現しませんね」

咲夜が言う。

「その内現れるわよ。それより、雲の上まで上昇しましょ」

霊夢がそういうと、三人はどんどん空高く飛行しだした。

「雲の上に何かあるのですか？」

咲夜が聞く。

「分からなかったの？ 桜の花びらが徐々に空の方に上がっていったのよ」

「え……」

それを聞いた咲夜はそこらに舞う桜の花びらを見る。

霊夢の言う通り、たしかに桜の花びらが雲の上へ上がっていつてい
る。

そして、三人は雲の上へまでやってきた。

「おっ、ポカポカしてきたぜ」

魔理沙が言う。

雲の上は地上とは打って変わって春らしい陽気に満ち溢れている。

「見えてきたわよ。目的地っぽいところ」

霊夢が前方を見て言う。

そこには途轍もない大きさの門があった。

「恐らく、あの門の向こうにいる誰かが春を奪っているのね」

「だったら早く調べに行こうぜ」

と、魔理沙が門に向かおうとした瞬間

三人の少女が三人の前に現れた。

一人目は金髪のショートボブに金色の瞳。

頭には円錐状で、返しのある黒い帽子をかぶっている。

服装は白のシャツの上から黒いベストのようなものを着用し、下は
膝くらいまでの黒の巻きスカートを着ている。

ベストに二つあるボタンは赤。

スカートにも同じボタンが二つ付いている。

また、ベストやスカートの裾には円や半円を棒で繋いだような赤い
模様があしらってある。

帽子の先には赤い三日月の飾りがついている。

傍らにヴァイオリンが浮いている。

二人目は全体的に強いウェーブがかかった薄い水色の髪。

服装は、薄いピンクのシャツの上にこれまた薄ピンクのベストのよ
うなものを着て、上同様薄ピンクのフレアスカートを履いている。

ベストは前面ボタン閉じタイプのもの。

そして、円錐状で返しのあるピンクの帽子を被っている。

返しの淵には、ここにもフリルが付いている。

ベストの裾、スカートの端、襟の淵フリル手前、帽子の返しの淵フ
リル手前には黒いライン付きである。

帽子の先には青い太陽の飾りがついている。

傍らにトランペットが浮いている。

三人目は少し薄い茶色の髪で、毛先に行くに従って強い内巻きの癖
がついているショートヘアである。

服装は、白のシャツに赤のベストのようなものを着ていて、他の二
人と違い赤いキュロットを着用している。

二つあるボタンは緑。

ベストやキュロットの裾には白いジグザグ模様がある。

そして返しのある赤い円錐状の帽子を被っている。

帽子の先には緑の星の飾りがついている。

傍らに楽器のキーボードが浮いている。

「ここから先は通しませんよ〜」

茶色の髪の少女が言う。

「誰あんた達？」

霊夢が聞く。

「この門の番を任されている者」

金髪の少女が答える。

「ふうん。じゃあ、あんた達を倒せば通れるってことかしら？」

霊夢がお札を取り出して言う。

「そうねえ、そうなるのかな」

水色の髪の少女が答える。

「でも、この門は多分あんた達を通してくれませんよ」

続けて水色の髪の少女が言った。

「心配しなくてもいいわ。この程度なら簡単に通れるから」

「そう、なら弾幕ごっこで決めましょ。負けた方は諦めて引き下がるぞ」

金髪の少女が弾幕ごっこを提案してきた。

「上等よ。三対三だからちょうど良い弾幕ごっこになるわ」

霊夢が相手の申し出に受けてたった。

「決まりね。じゃあ、自己紹介するよ。私はプリズムリバー三姉妹の長女、騒霊ヴァイオリニスト ルナサ・プリズムリバー」

「私は次女の騒霊トランペッター　メルラン・プリズムリバーよ」

「私は三女の騒霊キーボードイスト　リリカ・プリズムリバーよ」

金髪の少女、水色の髪の少女、茶色の髪の少女の順番で自己紹介をした。

「私は楽園の素敵な巫女　博麗霊夢よ」

「私は普通の黒魔術少女　霧雨魔理沙だぜ」

「私は完全に瀟洒な従者　十六夜咲夜です」

各々二つ名を言い名前を言った。

そして、三対三の弾幕ごっこが始まった。

「やっと出られた」

一護は迷い家から脱出し、先に行った三人を追っている。

「にしても、あいつ等結構先に行っちゃったな」

一護は一人でぼやく。

「あなたが黒崎一護？」

と、後ろから誰かに声を掛けられた。

一護は振り向く。
そこには、ちよつと前まで霊夢達と会った、魔理沙の友達？の魔法使いアリスがいた。

「あんたは？」

「私は七色の人形使い アリス・マーガトロイドよ」

アリスが名乗る。

「で、俺に何の用だ？」

一護はなぜ自分の名前を知っているかは聞かない。
文々。新聞で知れ渡っているからだ。

「少し、弾幕勝負に付き合ってもらえないかしら？」

弾幕ごっこを申し込まれた一護は少し悩み

「悪い、今はちよつと急いでてよ」

アリスの申し出を断る。

「心配しなくても良いわ。魔理沙達はもう異変解決のゴール近くまで多分到着しかけたから」

アリスが言う。

そのセリフに一護は少し驚く。

「何で魔理沙達のことを？」

「ちょっと前に会ったからよ。そして、魔理沙から一護と弾幕勝負をしても良いと許可も貰ったよ」

「マジかよ」

再び一護は少し考え込み

「じゃあねえな。ちょっとだけ付き合っただけよ」

と申し出を受けた。

一護はこの幻想郷の連中の殆どが弾幕ごっこを断っても、素直に諦める連中じゃない事を知っているので受けた。

「ありがとうございます。じゃあ、早速やりましょうか」

アリスが一言礼を言うと、周りから金髪ロングヘアの可愛い人形がいくつか現れた。

「来やがれ」

一護もスペルカードを一枚取り出し構える。

こうして、今二つの弾幕勝負が起こり始めた。

第29斬 【二つの弾幕勝負】（後書き）

今週のジャンプですが（ネタバレ注意）

遂にルキアが登場し、一護が死神の姿に戻った。

超嬉しいです。

しかも一護の姿が滅茶苦茶格好良い。

特にあの斬月。

少し変わってるけど格好良いです。

前までの、あの変な姿から一変して良かったです。

一心も登場し、一心の謎も近々明らかになるのかな？

第30斬 【アリスの人形劇】（前書き）

結構進んだ方かな。

次もこの位頑張りたいです。

そういえば、夏休みの宿題がまだ全く終わっていない！

第30斬 【アリスの人形劇】

「操符『乙女文楽』」

アリスがスペルを唱えた。

アリスの周りにいる数体の人形からレーザーと共に無数の弾幕が一護に向かって放たれる。

「黒符『月霊幻幕』」

一護もスペルを唱える。

三日月状の弾幕が展開され、アリスの弾幕に向かって放つ。

二人の間に無数の弾幕が飛び交い、相殺しあう。

一護はその隙に、アリスの方に向かって行った。

だが、人形たちがアリスを守るようにアリスの前に移動する。それを見た一護は動きを止め後退した。

（チツ、あの人形が邪魔だな。バウントと戦ってる気分だ）

一護の脳裏にバウントとの戦いが出てきた。

バウントはドールという人格を持った武器を使い戦う集団。

アリスの戦い方は一護の目にはバウントと同じように見えるようだ。

「白符『白亜の露西亞人形』」

一護がバウントの戦いを想起していた時にアリスがスペルを唱えた。人形たちから六方向に弾幕が大量に放たれる。

(だったら、これだ)

一護もカードを取り出しスペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』」

一護がスペルを唱えた瞬間、アリスの周りの空間から三日月状の弾幕が現れた。

その弾幕が一斉にアリスを襲った。

一護は飛んでくる弾幕を躲しながら、やったかどうが見る。

と、アリスが無傷で現れた。

一護はそのことに驚いた。

「テメエ、何で無傷なんだ…って顔ね」

一護はアリスに心中を読まれた。

「それはね、あなたのスペルや能力を全て魔理沙から聞いたからよ」

「何だと…!?!?」

一護はアリスのセリフに驚く。

「そんなに驚くことじゃないわよ。魔理沙が家に来て、よくあなたの事を話していたから知っていただけよ」

一護はそのセリフから魔理沙とアリスは友達なのだと知った。

「あなたの能力は？物質に宿る魂を操る程度の能力？で、スペルの

種類は全部で四つ。その中で一番強力なのが月牙天衝。そして、魔理沙から聞いた中で一番興味深かったのが、黒衣の姿よ」

黒衣の姿：恐らく死神の姿の事だろう。

「私にその姿を見せてくれないかしら？」

「まだ、見せてやれる程の力を出しちゃいねえだろう。お前が本気で来たら見せてやるよ」

「そう。なら、少しだけ本気を出そうかな」

アリスはカードを取り出しスペルを唱える。

「蒼符『博愛の仏蘭西人形』」

人形たちがアリスの周りに行き、それぞれ一発の青い弾を放った。その青い弾が白い弾に複数に分裂し、そして更に赤色の弾に無数に分裂した。

「甘え！ 黒符『月霊幻幕』！」

一護もスペルを唱え、アリスの弾幕に対抗する。

いくら無数に分裂しようと、自分に向かってくる弾幕だけ相殺すれば何の問題も無い。

「まだまだ行くわよ。闇符『霧の倫敦人形』」

アリスは続けて新たにスペルを唱えた。

人形たちがアリスの周りでグルグル回転しながら無数の弾幕をばら

撒いてくる。

一護はその弾幕を軽快に避け続ける。

アリスはその隙に一護の後方に移動した。

そして、カードを取り出しスペルを唱える。

「呪詛『魔彩光の上海人形』」

アリスの周りの人形たちが無数の弾幕と少数の大弾を展開し、それらを一斉に放ってきた。

一護はアリスが後方に移動していたのを見逃さなかったので、簡単に対応できた。

「どうしたよ、こんなもんか？ お前の實力は」

一護は全ての弾幕を避け終わった後にアリスに言った。

「いいえ。まだ、全く本気なんて出してないわよ」

「だったら、そろそろ本気出したらどうだ？」

「…そうね。早くあなたの黒衣の姿も見てみたいし」

アリスはカードを取り出しスペルを唱える。

「蒼符『博愛のオルレアン人形』」

人形たちがアリスの周りで、一発ずつ青い弾を放った。

その弾が先程の博愛の仏蘭西人形のスペルのように青、白、赤の順番で無数に分裂していった。

(さっきと同じスペルか…?)

一護がそう思い避けようとした瞬間、大量の赤い弾幕が再び分裂した。

赤い弾幕が黄緑の弾幕に無数に分裂したのだ。

「しまっ！」

一護は咄嗟の事で避けるのに遅れ、何発か被弾してしまった。

「休む暇は与えないよ。雅符『春の京人形』！」

アリスが直ぐにスペルを唱えた。

このスペルも先程の霧の倫敦人形のような弾幕だ。だが、圧倒的に先刻のやつより強力だ。

「チツ、黒符『月霊幻幕』！」

避け切るのは無理だと思った一護はスペルを唱えた。

一護の周りに三日月状の弾幕が現れ、その弾幕が向かってくる無数の弾幕を相殺していく。

アリスは先程と同じ、一護の後方に移動した。そして、同じようにスペルを唱える。

「呪詛『首吊り蓬莱人形』」

これも先程の魔彩光の上海人形のようなスペルだ。だが、これも同じように強力になっている。

一護は直ぐ様ポケットから代行証を取り出した。

そして、いつも通り代行証を中心に黒い霊圧が卍型の形になった。
一護はカードを取り出しスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

カードが光の粒となり代行証に吸収される。

一護は向かってくる弾幕の奥にいるアリス目掛けて月牙を放つ。
月牙はアリスの弾幕を掻き消しながらアリスに向かっていった。
だが、アリスは月牙を簡単に避けた。
それもそのはずだ。

月牙天衝の情報も魔理沙から聞いているのだから。

「今のが、あなたの最強のスペル、月牙天衝ね。想像以上の威力だわ」

流石のアリスも今には驚いたようだ。

「けど、油断は大敵よ。魔符『アーティフルサクリファイズ』」

刹那、一護の背中が爆発した。

一護は苦悶の声を上げ、倒れそうな体を踏み止める。

「くっ… テメエ、何しやがった…!?!」

「あなたが私の弾幕をスペルで防いでいる時に、後方に回ったついでに私の魔力を込めた人形をあなたの背中に付けておいたの。戦いに夢中で気付かなかったでしょ？」

「それが、爆発したのか？」

「そうよ」

「…強えな、やっぱ。仕方ねえ、俺も少し本気でいくぜ」

そのセリフにアリスの口元が少し緩んだ。

ようやく、自分の見たかったものが見れるのだから。

一護の代行証の黒い霊圧が一護の体を覆い、死神のような姿になった。

「…お望み通り、見せてやったぜ。これが、お前のいう黒衣の姿だ」

アリスは一護の姿に驚愕していた。

(…これが、魔理沙の言っていた黒衣の姿。凄まじい霊力。先刻とはまるで別の人みたいだね。少し、興奮してきた)

アリスがスペルカードを取り出した瞬間、一護は一瞬でアリスの目の前に行き、カードを持っている腕を左手で掴んだ。

「…!!え…!!？」

アリスは目を見開いた。

(…いつの間に…私の前に移動を？ この私が、全く見えなかったっていつ訳!?)

アリスは強引に一護に掴まれている腕を引き離し、一護から距離を

取った。

「凄い、凄いわ。私をここまで驚かせた人間なんて初めてだわ。さあ、これからが本番よ」

「すまねえけど、一瞬で終わらせるぜ」

一護はそういい、構えた。

アリスは持っていたスペルを唱え始めた。

だが、この戦いは一瞬で一護の言った通りに幕を閉じる事になる。

一方、三対三のチーム戦はお互い全く疲弊していない。

それと霊夢チームは全くチームプレーをしていない。

まあ、この三人がチームプレーをしたら逆に変に感じてしまう。

「騒符『ライブポルターガイスト』」

ルナサがカードを取り出しスペルを唱えた瞬間、三姉妹から無数の弾幕が放たれた。

「霊符『夢想封印 散』」

「魔符『スターダストレヴァリエ』」

「幻符『インディスクリミネイト』」

霊夢たち三人も各々スペルを唱え、飛んでくる弾幕を相殺していく。

プリズムリバー三姉妹は霊夢たちが弾幕に気を取られている間に、それぞれ霊夢たち三人を取り囲むように移動した。

そして、三姉妹は各々のスペルを唱える。

「弦奏『グアルネリ・デル・ジェス』」

「管霊『ヒノファンタズム』」

「冥鍵『ファツイオーリ冥奏』」

三姉妹の放った無数の弾幕が霊夢たちを襲う。そして、凄まじい爆発が起きた。

「あれ、終わっちゃったの？」

メルランが言う。

「多分」

それにルナサが答えた。

「思ったより呆気なかったね」

リリカが言った。

だが、爆発による爆煙が消えた瞬間、三姉妹は驚愕した。霊夢たち三人が無傷で現れたのだ。

「夢符『封魔陣』よ」

どうやら、霊夢がスペルを発動して防いだらしい。

「そんな…！ 三人のスペルをたった一枚のスペルで…！」

リリカが驚きながら言う。

「さて、もう準備運動はこの位で良いわね。それじゃあ、とつとと終わらせるわよ。魔理沙、咲夜」

霊夢の言葉に場の雰囲気が一気に緊迫した。

この戦いも、そう永くは続かないだろう。

第30斬 【アリスの人形劇】（後書き）

何か他にもBLEACHのクロスオーバーを暇があったらしてみたいです。

例えば今してみたいのは

BLEACHと11eyes

BLEACHとネギま

BLEACHとながされて藍蘭島

BLEACHと瀬戸の花嫁

かな。

東方なら

東方とGetBackers 奪還屋

東方と07-GHOST

東方と最遊記

かな。

何か、凄いカオスな組み合わせだなって思った。

第31斬 【決着 三姉妹との弾幕勝負】 (前書き)

最近、体がだるいせいか中々投稿できない。

けど、ようやく投稿できた。

第31斬 【決着 三姉妹との弾幕勝負】

「準備運動は終了よ。とつとと終わらせるわ」

霊夢のセリフに三姉妹が身構える。

このセリフを言うと同時に霊夢から凄まじい霊力が纏われた。身構えておかないと、いつ倒されてもおかしくない状況なのだ。

「そうだな。私も準備運動はもういいし」

「私は先の弾幕勝負で既に準備運動は済ませていましたよ」

霊夢のセリフに二人が答える。

「…フツ、私たちもまだ本気は出していないよ」

ルナサが苦笑いを浮かべながら言った。

三人も全力を出すために霊力を完全に解き放った。そして、霊夢たちより先にスペルを唱える。

「大合葬『霊車コンチエルトグロツソ怪』！」

三姉妹の間に三角形を描くレーザーが発生し、中心から無数の弾幕がばら撒かれた。

その弾幕を霊夢たち三人は紙一重で避け続ける。

「まだ、こんな隠し球が有ったのか」

魔理沙が感心したように言う。

事実さっきの三人同時で来たスペルよりは格段に強力だ。

「けど、私には通じないぜ」

そついうと魔理沙はミニ八卦炉を取り出しスペルを唱える。

「恋符『マスタースパーク』！」

ミニ八卦炉から極太レーザーが三姉妹に向かって放たれた。その間にある弾幕は全てレーザーに掻き消されていく。

三姉妹はそのレーザーに危険を感じ、スペルを解きレーザーを避けた。

「今よ、二人とも！」

霊夢の合図と同時に魔理沙はリリカの前に、咲夜はメルランの前に移動した。

そして、霊夢はルナサの前に移動する。

「これで一対一ね」

どうやら霊夢は一対一に持ち込みたかったようだ。でも、何時三人で計画をたてたんだろうか。

「一対一だからって勝てると思わない事ね」

ルナサがカードを取り出しスペルを唱える。

「偽弦『ソードストラディヴァリウス』！」

ルナサから音符の連桁付き8分音符のような弾幕が展開され、それが通常の弾幕に変わり霊夢に目掛けて飛んでいった。霊夢はそれを全て軽く避けるが、どんどん音符のような弾幕が展開され、休む暇なく弾幕が飛んでくる。

「面倒なスペルね。けど、やっぱりこの程度ね」

霊夢は自分目掛けて飛んでくる弾幕を避けながら、カードを取り出す。

「霊符『夢想封印 集』！」

霊夢がスペルを唱えた。

霊夢から複数の光弾がルナサに集まるように放たれた。その光弾はルナサの放っている弾幕を消していく。

「！え、ええ、嘘！？」

ルナサが驚きの表情を浮かべる。

そして、光弾がルナサに迫りくる。

「く、来るなあああ！！」

ルナサはスペルを解き、叫びながら光弾から逃げる。

「逃げてても無駄よ」

霊夢の言う通り、光弾がどんどんルナサとの距離を詰める。そして直ぐに、光弾がルナサと衝突した。

魔理沙サイドでは…

「先手必勝だぜ。恋符『ノンディレクショナルレーザー』！」

魔理沙は相手より先にスペルを唱えた。

魔理沙から三方向にレーザーが放たれ、そのレーザーが回転し始めた。

「私だって負けないよ〜。鍵霊『ベーゼンドルファー神奏』！」

リリカも負けじとスペルを唱えた。

リリカから無数の弾幕が自分の周りを回転しながら展開され、それが一斉に放たれる。

いくつかは魔理沙のレーザーに消されたが、残った弾幕が魔理沙を襲う。

「うおっ！ 危ねっ！」

魔理沙は飛んできた弾幕をギリギリ避け切る。

「そんなレーザーは当たらなければ怖くないんだよ〜」

リリカが言う。

たしかにレーザーの類は当たらなければ問題ない。

「このスペルじゃ駄目か」

魔理沙はスペルを解き、飛んでくる弾幕を避け続ける。
リリカはここぞとばかりに魔理沙に向かって無数の弾幕を放つ。

(けど、こいつが調子に乗ってる今がチャンスだぜ)

魔理沙がそう思案すると、ミニ八卦炉を構える。

そして一気にリリカの方に突っ込んだ。

突っ込んでいる間に二発程被弾した。

「いくぜ！ 恋符『マスタースパーク』！」

リリカとの距離を少し縮めたところで必殺のマスタースパークを放った。

マスタースパークがリリカとリリカの弾幕を包み込んだ。

リリカは声を上げること無く敗北した。

「よっしゃー、私の勝ちだぜ！」

魔理沙が喜色満面で言った。

咲夜サイドでは…

「管霊『ゴーストクリフオード』」

メルランがスペルを唱えた。

マルランから複数の不規則に漂うレーザーが放たれ、そのレーザーから無数の弾幕が現れた。

赤い弾幕は四方にばら撒かれ、青い弾幕は全て咲夜目掛けて飛んで

いった。

「早速こんな強力なスペルを発動するなんて、直ぐに決着をつけるつもり？」

「ええ、そうよ。もお、疲れたから、早く終わらせたくてね」

咲夜の質問にメルランが答えた。

「そう、なら、あなたのお望み通り直ぐに決着をつけてあげる」

そういうと咲夜はカードを取り出し、スペルを唱える。

「幻符『殺人ドール』」

ナイフが回転しながらメルラン目掛けて飛んでいった。

何発かは弾幕と衝突し相殺されたが、咲夜のナイフの方がスピードがあった為、直ぐにメルランに被弾した。

「終わりですね」

こうしてプリズムリバー三姉妹との弾幕勝負は呆気なく幕を閉じた。

「それじゃ、約束通り通してもらおうわよ」

霊夢が三姉妹に向かって言う。

「別に良いよ。約束だし。でも、ここを通ったら後悔するかもよ」

ルナサが最後の警告のように言う。
けど、霊夢はそういうのは聞く耳持たず無視する。

「行くわよ魔理沙、咲夜」

霊夢がそっぴい、門の方に向かおうとした瞬間、後ろから「おっい」という声が聞こえてきた。

霊夢たちが後ろを振り向くと、そこには一護の姿があった。

「一護!!!」

魔理沙が声を上げて言った。

プリズムリバー三姉妹は誰?と、いう顔をしている。

一護は霊夢たちの前に行く。

「随分と遅かったじゃねえか一護」

魔理沙が笑みを浮かべて言う。

その笑顔とは対照的に一護の顔は少し怒っているように見える。

「お前のせいで遅くなったんだよ」

そのセリフを聞いた魔理沙は察したのか一言謝る。

「で、今まで何してたの?」

「ん、何かマヨヒガってとこに行って、その後アリスと弾幕ごっこをして遅れたな」

霊夢の質問に一護は大間かに答える。

「…んで、この三人は？」

一護の質問に霊夢は適当に答えた。

プリズムリバー三姉妹っていう騒霊で、さっきまで弾幕勝負をして
いたってという程度の説明である。

一護は取りあえず自己紹介をし、プリズムリバー三姉妹も各々自己
紹介をした。

その様子を見かねた霊夢は

「とつとと行くわよ一護」

と言い、一護の服の襟を引っ張り、門の方に向かった。

そして、遂に霊夢たちは門の向こうに到着し、異変解決のカウント
ダウンが始まった。

第31斬 【決着 三姉妹との弾幕勝負】（後書き）

プリズムリバー三姉妹の出すスペルの連桁付き8分音符のようなスペルを検索した時に、ガキの頃に習っていたピアノ教室での出来事を思い出していました。

あまり、良い思い出が無かった気がする。

夏だからという事でよくホラーゲームをプレイしたり、ホラー映画を見る。

まあ、これをしているせいで執筆が進まないのだけ。

友達とホラーゲームをして、毎回零シリーズのゲームで叫びます。

一応、全作プレイしたんだけど、全部かなりの感動作でした。

唯一 呪怨だけは正直あまり面白くなかった。

つうか、呪怨の小説の方も読んでいたけど、小説の方が怖かった。

ホラー映画は正直、日本のホラーが怖い。

怖がりな俺は怖い場面でリアルに何回も叫んで、友達にうるさいと何回も言われました。

友達四人で見たんですが、四人なら怖くないだろうという俺の甘い考えは簡単に打ち砕かれました。

第32斬 【一護VS妖夢 再戦】（前書き）

一護VS妖夢、前回より多分よく出来ていると思います。

そして今現在、夏休みの宿題が驚きの白さです。

第32斬 【一護VS妖夢 再戦】

「一体いつまで続くんだよ、この階段？」

一護は現在、糞が付くほど長い桜並木に挟まれた階段を数十分ほど登り続けている。

門の向こうに到着したら即黒幕の登場だと思っていた一護たちは超糞長い階段を見て愕然とした。

そう、門の向こうには階段と桜の木しかなかったのだ。

神社や寺などでよくある石造りの階段で、なぜか普通の階段より上るのが疲れる。

ここは幻想郷から消え去っていた筈の春で満ち溢れており、桜の木も満開になっている。

「逆に疲れちまうよ」

なぜ、一護が飛んでいかないかというのと、一護の霊力の回復の為である。

一護は此処に来るまでにチルノ、橙、アリスと戦っている。

自分では気付いていないだけで、結構霊力を消費しているのだ。

「文句言わないで黙って登る」

と、霊夢が言う。

その言っている本人は空中に浮いて、一護のペースで飛んでいる。

「ファイトだぜ、一護」

「頑張ってくださいね、一護さん」

魔理沙と咲夜が労ってくれる。
だが、魔理沙も咲夜も楽に飛んでいる。

「くそ、テメエらはしんどくねえけど、俺はしんどいんだよ」

一護の額から汗が流れる。

此処は地上と違って春のポカポカとした気温だ。
お陰で汗がどんどん出てくる。

一護の服の上から着ていた、防寒のための青いダウンジャケットは
此処に来た瞬間、門の前に置いてきた。

と、一護は何かを感じたのか足を止めた。

霊夢たちも一護が止まると同時に動きを止める。

(この霊力は…！)

一護は前方を見据える。

コツコツと上から誰かがゆっくりと降りてくる音がする。

そして、一護たちの前に一人の少女が現れた。

一護はその少女を見て驚愕した。

「…妖夢…ッ！」

そう、そこには魂魄妖夢がいたのだ。

いつも通りの服装に二本の刀、そして常に妖夢と一緒にいる半霊。
妖夢とはよく人里で会って、他愛の無い会話をしていた。
だから、ちよつとした妖夢の素性なら一護は知っている。

「驚きました。黒崎さんが侵入したと騒霊の姉妹から聞いた時は、

本当に」

「どうやら、あの三姉妹が報告したようだ。」

「お前が従者をしているってのは聞いてたが、此処の従者だったなんてな」

「黒崎さん、今すぐ此処から退いてはくれませんか？」

「できねえ相談だな」

それを聞いた妖夢は少し残念そうな表情になり、ゆっくりと長刀の楼観剣を抜いた。

「そうですか。なら、私は今から黒崎さんを敵として排除しなければいけません」

「そうかよ。霊夢、ここは俺に任せて先に行つてくれ」

忘れ去られていた三人は何も言わずに先へ進んだ。

妖夢はその三人を引き止めようとせせず、一護の姿を見据える。

「止めねえのかよ？」

疑問に思った一護は聞く。

「私一人では四人全員を相手にするのは無理です。ですから私は一人、一番厄介な人物、黒崎さんだけでも此処で阻止します」

「成程な。じゃあ、久しぶりに闘るか。今度は手加減無しだ」

一護はそういうとスペルカードを取り出した。

一護対妖夢の弾幕勝負が再び始まった。

「先手は貰います。獄炎剣『業風閃影陣』！」

妖夢が一護より先にスペルを唱えた。

妖夢から無数の大弾が放たれる。

「ただの大弾の弾幕か…」

一護がそう思考した瞬間、妖夢が自分で放った複数の大弾を刀で横

一闪に大きく斬り、複数の大弾を無数の弾幕に分裂させた。

一護はそれに驚き直ぐ様、左上斜めに高く跳躍し上空に飛ぶ。

妖夢は一護が移動した方に弾幕の方向を変える。

「チツ、黒符『月霊幻幕』！」

一護は持っていたカードのスペルを唱える。

一護から三日月状の弾幕が展開され、それを向かってくる妖夢の弾幕に当て相殺させる。

「弾幕に気を取られすぎです」

一護が弾幕を相殺している間に、妖夢が一護の後方に移動していた。

一護は直ぐ様後ろを振り向く。

「遅い！ 人符『現世斬』！」

だが、振り向くのに一步遅れ、妖夢がスペルを唱えた。

妖夢による一瞬の一撃が一護の左肩を斬り裂いた。

一護の左肩から血が噴出す。

予想以上に深く斬られたようだ。

「この戦法は黒崎さんから習ったんですよ」

「俺から…」

一護は初めて妖夢と戦った時の事を思い出す。

そう、あの時、一護と妖夢が最後の激突をした時、妖夢が一護の月牙天衝に気を取られ、防いでいる間に一護は妖夢の背後を取り勝利した。

多分、その戦法を使ったんだろう。

「黒崎さんからは色々と学ばせて頂きました。だから私は、あの時より強いですよ」

「俺も、あの時より強くなってるぜ」

一護はカードを取り出す。

「まだ、お前には見せた事の無えスペルだ。黒符『天幻月牙』！」

一護がスペルを唱えた瞬間、妖夢の周りの空間から三日月状の弾幕が現れた。

妖夢はそのスペルに驚いたが、冷静に対処する。

「天神剣『三魂七魄』！」

妖夢から七色の弾幕と大弾がばら撒かれる。
それが妖夢の周りに展開された一護の弾幕を相殺していく。

「簡単に対処しやがった！」

一護は自分のスペルを防がれた事に少し驚く。

「まだです。六道剣『一念無量劫』！」

妖夢は新たなスペルを唱える。

妖夢の周りの空間が一瞬何かに斬られた様な閃が入り、そこから無数の弾幕が飛び出てきた。

一護はその弾幕を紙一重で避け切る。

（今だ！）

妖夢は一護が弾幕に気を取られている一瞬の隙を狙い、スペルを唱える。

「人鬼『未来永劫斬』！」

妖夢は一瞬で一護の方へ踏み込み、擦違いざまに一護を斬り上げる。

「くっ！」

一護は苦悶の声を上げる。

そして更に妖夢は一護が地面につくまでに超高速で全方位から追い討ちを仕掛ける。

一護の体中から血が噴出する。

妖夢の攻撃が止むと、一護はそのまま階段の方に落ちた。

「く…そ…ッ！」

一護は気合で体を起こす。

「まだ立ちますか。ですが、黒崎さんは此処で斬られてお仕舞いです」

妖夢は一護の方を見下ろしながら言うと、新たなスペルを唱える。

「断迷剣『迷津慈航斬』」

妖夢の刀の刀身に青い大量の妖力がつき込まれ、巨大な刀身が作り出された。

これは、あの時一護の月牙天衝をも打ち砕いた最強のスペルだ。

「これで、終わりです！」

妖夢は刀を構え、一気に一護へと振り下ろした。

凄まじい激突音と砂煙が舞う。

これを受ければ一護でも、もう立つてはいられないだろう。

なのに妖夢は怪訝な表情をしている。

そう、斬ったという感覚がないのだ。

それどころか、何かに受け止められている感覚がする。

「一体、何が…？」

徐々に砂煙が晴れてくる。

そして、妖夢は驚愕した。

一護の姿が黒くなっており、自分の刀を一護の右腕の黒い霊圧に受け止められていたのだ。

一護は妖夢の刀を弾き、妖夢を見る。

一護の今の姿は死神の姿で、右腕の黒い霊圧を刀状にしている。

「妖夢、すまねえが、一瞬で終わらせる」

一護がそう言った直後、妖夢の背後を簡単に取った。

一護は霊圧の刀を妖夢に向かって振るう。

妖夢は間一髪のところ、一護の刀を防ぐ。

だが、一護の振りが強かったのか、妖夢が後方に勢いよく吹き飛ばされた。

「くっ！」

妖夢は直ぐ様態勢を整え、スペルを唱える。

「奥義『西行春風斬』！」

妖夢がスペルを唱えた瞬間、一護目掛けて走りこみ、桜色の斬撃を放ちながら来た。

どうやら、このスペルが妖夢の今出せる最強のスペルだろう。

一護は何の動揺もせず、ゆっくりと右腕を上げスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』」

一護はスペルを唱えると、月牙を放つように右腕を振り下ろした。

それにより月牙が放たれ、一瞬で妖夢の斬撃と共に妖夢を撃ち落とし

た。

妖夢はあまりにも月牙の速さに反応できずに撃ち落されたのだ。

「また、私の…負け…ですか。申し訳ございません、幽々子様。私、負けてしまいました」

妖夢は落下しながら薄い意識の中、誰かに謝罪している。

そして、地面に激突した。

だが、痛みが無い。

誰かに受け止められたのだ。

だけど、妖夢にそれを確認する程の意識は残っておらず、意識を失った。

第32斬 【一護VS妖夢 再戦】（後書き）

この小説が良いとこまで進んだらBLEACHとネギまを書きたいな〜って思っている。

とりあえず、ウルキオラをネギまの世界に登場させたいです。

多分、夏休みが明けたら書くかも。

小説の一話一話を投稿する前に誤字があるかをチェックします。

その時は毎回BLEACHのBGMを聞きながらしています。

これを聞きながら読むと、なぜか俺の駄文の小説でも面白く読めます。

第33斬 【亡霊の幽々子】（前書き）

ようやく更新できました。

よかったですら見て行ってください。

第33斬 【亡霊の幽々子】

その頃、霊夢たちは階段を登り切り、どこかの屋敷に侵入していた。凄まじい程広大な日本屋敷で綺麗な桜が庭園に咲き誇っている。

「此処は何処なんだ？」

魔理沙が周りを見渡しながら聞く。

「多分、此処は冥界ね」

魔理沙の質問に霊夢が答えた。

冥界、普通は聞いたら驚くが二人とも驚いていない。

「生きた人間が冥界に来ても良いのかしら」

咲夜が尤もなことを言う。

「駄目に決まっているでしょ。だから早々にお引取り願おうかしら？」

「…誰あんた？」

いつの間にか、知らない女性が前方に佇んでいた。

女性は綺麗な桜色の髪をしており、薄紫のナイトキャップを被っている。

そのナイトキャップには白布の三角頭巾が付けられている。

着物を着ており、柄は桜で全体的に水色の着物だ。

腰回りの帯は太く、腰の横辺りで蝶々結びされている。

「私は幽冥楼閣の亡霊少女 西行寺幽々子。って、あれ、こついう時って普通自分達から名乗るのが礼儀じゃないの?」

「そんな礼儀は知らないわ」

キツパリと言う霊夢。

「あなた本当に巫女?」

霊夢の言葉に呆れる幽々子。

「これはすみませんでした。私は紅魔館のメイド 十六夜咲夜」

「私は奇妙な魔法使い 霧雨魔理沙だけ。よろしくな」

咲夜と魔理沙は霊夢のやり取りが無かったかのように自己紹介をする。

「ほら、あなたのお仲間はちゃんと名乗ったわよ。早くあなたも名乗りなさい」

「何かムカつくわね」

幽々子のセリフに少しイラッと来る霊夢。

「私は永遠の巫女 博麗霊夢よ」

「よく出来ました」

幽々子のセリフに更にイラツとする霊夢はとつとと用件を済ます事にする。

「あんたの集めてる春を返しにもらいに来たわ。さあ、とつとと大人しく素直に返しなさい」

「嫌だつて言つたら？」

「フルボッコよ」

霊夢はスペルカードを取り出し、即スペルを唱える。

「霊符『夢想封印 集』！」

霊夢から複数の光弾が幽々子に集まるように放たれた。

「あらあら、いきなりスペルを唱えるなんて本当に礼儀がなっていないわね」

幽々子は何の動揺もせず、カードを取り出しスペルを唱える。

「亡舞『生者必滅の理』」

螺旋状に弾幕が飛び散り同時に複数の大弾が現れ、それにより霊夢の放った複数の光弾が掻き消されていく。

「面倒ね。夢符『封魔陣』！」

霊夢がスペルを唱え結界を張り、飛んでくる弾幕を防いだ。

「あら、少しはやるようね」

幽々子は少し感心したように言う。

「あんたもね。けど、何か忘れてない？」

霊夢がそう言うと同時に、幽々子の後方から魔理沙と咲夜が現れた。

「私たち二人を忘れてるぜ。魔符『ミルキーウェイ』！」

「幻符『殺人ドール』！」

二人はスペルを唱え、幽々子に星型の弾幕と無数のナイフが放たれた。

霊夢も前方からさつきと同じスペル、霊符『夢想封印 集』を発動する。

これにより幽々子は前方からも後方からも弾幕に襲われることになる。

「あら、三対一なの。困ったわねえ〜」

困ったと言うものの、全く困ってなさそうな幽々子はカードを取り出し、スペルを唱える。

「けど、私の方が上ですよ。亡郷『亡我郷』」

幽々子を中心に無数の弾幕とレーザーが回転しながら発射された。それにより、霊夢たちの弾幕が相殺されていく。

「すげー、マジで強いぜ」

魔理沙が焦りにも似た感心をする。

「フッフ、私の本気はこれからよ。華霊『バタフライディールージョ
ン』」

(…!!…この霊力は…)

一護は急いで階段を上がっている。
その最中、一護は霊夢たちの霊力と共に、もう一つ強力な霊力を感じ取っていた。

(霊夢たちが押されてやがる)

一護は右腕に霊圧を込めながら急いだ。

「…この亡霊女。中々弾幕が当たらないわね」

霊夢が悔しそうに呟く。

三人共かなり疲労している。

「流石に三人相手じゃ私でも結構きついわね」

幽々子も弾幕が全く当たっていない訳では無い。
だが、三人相手に引けは取っていない。

「そろそろ終わらそうかしら」

幽々子が小さくそう呟く。

と、同時にスペルカードを取り出した。

三人も幽々子のセリフが聞こえていたので身構える。

「さあ、いくわよ」

「させるかあ!!」

突然、一護の声が聞こえてきた。

幽々子はスペルを唱えるのを止め、声のした後ろを見る。

そこには一護が月牙を放つ態勢に入っていた。

幽々子はその姿に目を丸くする。

「黒斬『月牙天衝』!」

一護は幽々子に向かって月牙を放った。

「しまった!!」

幽々子は咄嗟のことに対応しきれず月牙に飲み込まれた。

第33斬 【亡霊の幽々子】（後書き）

クレヨンしんちゃんの映画ってどれも面白い。
お陰で更新が遅れました。

もう少しで夏休みが終わってしまふ。

今年は早く感じた。

しかも夏休みなのに全然更新できなかったし、夏休みが終わるまでに妖々夢を終わらせたかったのに終わらせなかった。

とりあえず、九月中に妖々夢を終わらせます。

第34斬 【西行妖での決着】（前書き）

ようやく書き終わりました。

文字数が多かった割りに結構早めに書けました。

第34斬 【西行妖での決着】

霊夢、魔理沙、咲夜対幽々子の弾幕勝負は一護の月牙天衝により、一時停止する。

幽々子はその月牙天衝に飲み込まれた。

と、三人は思っていた。

そう、月牙天衝は幽々子のギリギリ横を通り抜けていっただけで、幽々子は無傷だった。

「あなたは何者？」

幽々子が一護に向かって聞く。

「黒崎一護。霊夢たちの仲間だ」

「黒崎一護……」

幽々子は腕を組み思索する。

「…あ、思い出したわ。妖夢の言っていた子ね。後、新聞に書いてた子」

幽々子は一護という人を思い出すと同時に、妖夢が一護に敗れたということを悟った。

「ふうん、ねえ一護ちゃん」

（何でちゃん付け…？）

「私と弾幕勝負してくれない？」

突然の幽々子の申し込みに一護だけではなく、霊夢たちも驚く。

「ちよっ、あなたは今私たちと弾幕勝負しているのよ！ 勝手なことを言わないで！」

霊夢が幽々子に怒鳴る。

「あら、別にいいじゃない。あなた達はもうボロボロなんですから、一護ちゃんに代わってもらってことで」

「ですが、あなたも表面上はピンピンしていますけど、内面の方はどうでしょうね？」

咲夜のセリフに幽々子は少し顔を引きつる。

「…だったら、ハンデをちょうだい」

幽々子のバカげたセリフに一同唾然とする。

「ふ、ふざけたこと言ってんじゃないわよお！…！」

霊夢が咆哮のような怒鳴り声を上げる。

一護たちはしっかり手で耳を塞いだ。

「あんた今の状況分かってるの！？ ここで四人で掛ければ一瞬であんたの負け！ この現状でよく…！！」

霊夢が一人怒鳴っている間、一護は幽々子と話をしていた。

「あんたの名前、まだ聞いてなかったな？」

「私は西行寺幽々子。よろしくねー護ちゃん」

「そのちゃん付け止めてもらえませんか？」

「え〜良いじゃない。可愛いでしょ？」

「そういう問題じゃなくて」

「そのの二人！！ 何和気藹々と話込んでるのよ！！」

霊夢は自分を無視して、二人が普通に話しているのを見て再び怒鳴り上げた。

「あら、まだ了承してくれないの？」

「する訳ないでしょ！」

即答する霊夢。

幽々子は一つ溜息をつき

「仕方無いわね。じゃあ、ごうしましよ。私が負けたら春を返した上、ここでの花見を許可するわ」

と、提案する。

「お生憎様。花見は家でも出来るのよ」

「でも、此処の桜はそこら辺とは訳が違うわよ」

「そんな提案を呑む訳ない……」

「良いじゃねえかよ霊夢」

霊夢は最後まで言い切る前に一護の言葉に遮られた。

「良いわけないでしょうが。何勝手に決めているのよ」

「俺は幽々子さんと一度戦ってみてえんだ。それに俺が負けるとでも思ってたのか？」

「それは……」

霊夢は言葉に迷ってしまった。

「仕方ない！ じゃあ、もう一つ！」

と、幽々子が何かを切り出す。

「私が負けたらタダ酒に妖夢お手製弁当をご馳走するわ」

「オツケー。良いわよ」

幽々子の提案に霊夢は即OKを出した。

「良いのかよ」

一護はそんな霊夢を見て小声でつつ込む。

「良かったね一護ちゃん。これで弾幕勝負ができるよ。それじゃあ、ハンデをもらうわね」

「ああ」

「私は三発、弾幕を被弾したら負け。一護ちゃんは一発でも被弾したら負け。良いわね？」

「あ、ああ。構わないぜ」

少し無茶だが一護はOKした。

「それじゃ、スタート！」

幽々子が開始の合図をすると同時に一護は素早くカードを取り出し、スペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

三日月状の弾幕が展開され、幽々子目掛けて発射する。

「あらあら、速いわね」

幽々子もカードを取り出し、スペルを唱える。

「桜符『完全なる墨染の桜』」

幽々子から大量の大弾が放たれた。

その大弾により、一護の放った弾幕が掻き消されていく。

そして更に米粒状の弾幕が数多に降り注いできた。

一護は直ぐ様それを避ける。

(すげえ弾幕だ。避けるのが精一杯だ)

一護が弾幕を避け続ける隙を狙い、幽々子は新たなスペルを唱える。

「死符『ギャストリドリーム』」

幽々子を中心に大量の蝶弾を円状に撃ち出された。

「やべえ！」

一護は直ぐにスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護の右腕の黒い霊圧から月牙が放たれた。
その月牙が全ての弾幕を掻き消していく。

(こんなに早く月牙天衝を使っちゃった！)

一護は少し情けない気持ちになった。

(つつか、これで霊力が殆ど残ってねえのかよ。ピンピンしてるよ
うにしか見えねえぜ)

一護は少し焦っている。

咲夜は幽々子の霊力がもう殆ど残っていないと言っていたが、一護

からしたら余裕なくらいある。

これで殆ど無かったら、もし始めの全快の状態で戦っていたらと思うと少し恐怖を覚える。

「それがさっきのスペルね。見たところ、一護ちゃんの一番最強のスペルなんじゃない？」

綺麗に当てられた。

「ああ、そつだ」

「凄いわね。私の弾幕を全て潰すんですもの。やっぱり弾幕勝負はハラハラドキドキしないとね」

余裕綽々という感じだ。

「そうかよ。だったら、あんたのお望み通り、そつさせてやるよ！

黒斬『月牙天衝』！」

一護は幽々子に向かって月牙を放つ。

だが、月牙は当たらなければ怖くないし、真正面から堂々と放たれても簡単に避けられる。

幽々子はその月牙を軽く横に移動し避ける。

一護はその移動する一瞬の隙を狙っていた。

「黒符『天幻月牙』！」

一護がスペルを唱えると同時に幽々子の周りの空間から三日月状の弾幕が現れ、幽々子目掛けて一斉に放たれた。

だが、幽々子は予想していたかのように対応する。

「幽曲『リポジトリ・オブ・ヒロカワ』」

幽々子から円形状に広がる弾幕が現れ、それが一護の弾幕を相殺していく。

「チツ、やっぱり駄目か。じゃあ、こいつでいくか」

一護は新たなスペルを取り出す。

「黒符『天雨月閃』」

一護がスペルを唱えた瞬間、三日月状の弾幕が展開され、全て上空へと飛んでいった。

「逃げれると思うなよ。降り注ぐ月牙の雨から」

一護はそう言うと、弾幕を幽々子に向かって放った。

「何言っているの？ あんな物、此处に居なければ良いだけじゃない」

幽々子はそう言って、一護の放った弾幕を避ける。

たしかに上空に放った一護の弾幕は恐らく相手が居た場所に降り注ぐ弾幕。

だが、幽々子は一護がスペルを発動してから放った普通の弾幕により、既にその場には居ない。

これは失敗かと思われた。

だが、幽々子の避ける方向を予測していたかのように、月牙の雨が幽々子に降り注いだ。

咄嗟の事に幽々子は避けるのに遅れ、一護の弾幕を二発被弾してしまふ。

「ど、どうして私の所に!？」

流石の幽々子も今には驚いたようだ。

「予測しておいたんだよ。俺があの時月牙を放って、あんたがどう避けるかをチェックし、あんたの動きを予測した。そして次にさっきのスペルを発動し、予め予測しておいた場所に月牙が降り注ぐようにする」

「簡単に言うと、こう攻撃を仕掛ければ、こう躲すだろう。さっきの普通の弾幕がその役割をしたわけね」

「そういうことだ。半分は賭けだったけどな」

避ける場所を予測して放った天雨月閃が成功して少し満足気になる一護。

「うーん、これは一気に私が不利になったわね。でも、さっきの手はもう通じないわよ」

「分かってるさ。同じ手が二度通じる相手とは思えねえし」

幽々子は二発被弾したせいで、後一発でも被弾したら負け。これで、お互い一発でも当たったら負けとなる。

「それじゃあ、続きといくぜ」

その瞬間、一護は右手に変な違和感を感じた。

だが、一護は気にせず幽々子の方に向かう。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護は自分の周りに三日月状の弾幕を展開させながら幽々子の方に行く駆ける。

「無闇に放つのは止めたようね」

幽々子は一護から逃げるように、後ろに高く飛ぶ。

そして、周りの桜の木より数段大きい木を背景に、一護に向かい合った。

「何だ、その木…？」

一護はその桜の木から不思議な力を感じた。
自分では理解できない力を。

「これは西行妖っていう妖怪桜よ。こんなに桜が開花しているのに、これでも満開じゃないのよ。見てみたくない？ この桜の満開を」

「…まさか、あんたが春を奪っていた理由って」

一護は幽々子のセリフから春を奪っていた理由が分かった。

「そうよ。私はこの西行妖を満開にしてみたかったの。その為に幻

想郷中の春を集めていた。それだけの理由よ」

「その桜は満開にしない方が良いと思うぜ」

一護はその桜の木から、どうしてかは分からないが危険を感じていた。

「そうね。たしかに満開にさせたら封印が解けて、何者かが復活するって聞いたわね」

「封印してんなら解いたら駄目なんじゃねえの」

尤もな意見を言う一護。

「良いじゃない。別に」

「駄目だろ普通。まあいいや。俺が勝てば良いだけの話だしな！」

一護は再び幽々子の方に向かって飛んだ。

「これで最後よ。『反魂蝶 - 一分咲 - 』！」

幽々子からレーザーと弾幕がばら撒かれた。

「この程度で当てれると思うなよ」

一護は全てのレーザーと弾幕を避けながら進む。

「まだまだ、次よ。『反魂蝶 - 参分咲 - 』！」

幽々子から再び同じようなスペルが唱えられる。
さっきのスペルと似ているが、弾幕の数と放たれるレーザーの数が
一段とアップしている。

「面倒臭え」

一護は展開しておいた弾幕で、幽々子から放たれる弾幕を相殺して
いく。

「まだ、やるのね。『反魂蝶 - 五分咲 - 』！」

再び同じようなスペルが唱えられた。

同じように弾幕の数とレーザーの数が増えている。
更に大弾まで加えられている。

「くそ、何なんだよこのスペル!？」

一護は残っている弾幕を全て放つ。
それでも当て損なつた弾幕は紙一重で避ける。

「まだ当たらないのね。だったら、これで本当の最後よ。『反魂蝶
- 八分咲 - 』！」

「こつちも最後だ!」

幽々子がスペルを唱えると同時に、一護は動きを止める。
幽々子からは無数の弾幕とレーザーが放たれてくる。
それを見た一護はスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』!」

一護から凄まじい月牙が放たれた。
その月牙が幽々子の弾幕を掻き消していく。

「もう少しなのよ…」

幽々子は月牙に消されていく弾幕を見ながら言う。

「もう少しで…西行妖が満開になるのよ!!」

幽々子が激昂すると同時に弾幕の威力が強くなった。

一護の月牙が一瞬押されたが、それでも月牙の方が強かった。

月牙はそのまま幽々子の弾幕と共に幽々子を貫いた。

第34斬 【西行妖での決着】（後書き）

遂に学校が始まりました。

これで更新はいつも通りの早さに戻ると思います。

第35斬 【悪酔い】

幽々子と一護の弾幕勝負は幽々子が敗北し、一護の勝利で幕を閉じた。

約束通り幽々子は春を解放し、花見を白玉楼で行うことになった。

その際は紅魔メンバー、騒霊の三姉妹、アリスも呼ばれた。

霊夢はタダ酒って事もあつて飲みまくっている。

当然の事だが、一護は未成年なんで酒じゃなくてオレンジジュースを飲む。

妖夢のお手製弁当を食った一護は何処か遊子の弁当の味を思い出した。

「どうですか黒崎さん。不味くはないですか？」

妖夢は一護が自分の弁当を食べる姿を見て聞いた。

「ああ、滅茶苦茶美味いぜ、妖夢」

「え、あ、ありがとうございます！」

妖夢は心底嬉しそうに言った。

「お〜お〜お熱いねえ〜お二人さん」

酔った魔理沙が一護と妖夢に近づいてきた。

「将来は結婚かなあ〜」

「完全に悪酔いしてやがる」

一護は鬱陶しい小父さんを見るような目で魔理沙を見る。こついうのに絡まれるくらいなら、そこらの不良に絡まれる方が何倍もましだと思っ一護。

魔理沙のセリフを聞いた妖夢は顔を赤くして、足早に屋敷に戻って行った。

「ったく、魔理沙ったら何言ってるのよ」

アリスが酔った魔理沙を止めようとしてくれている。

「結婚の日程が決まったら報告してよね」

アリスがとんでもない事を言い出した。

「駄目だ！ こいつも完全に酔ってやがる」

もう、完全に酔った親父の領域だ。

とりあえず、この二人から一護は離れた。

「ったく、これじゃあゆっくり弁当も食えないぜ」

と、紅魔メンバーが騒霊の三姉妹の演奏を聴きながら花見をしている。

「あれえ〜一護がぼやけて見えるよあ〜」

フランがよるよるの千鳥足で一護に近づいてくる。

こいつも、酔っている。

体格は完全な子供だが、実年齢は500を超える。
だから、多分酒も大丈夫だろう。

「あれえ〜、一護が四人に分身したあ〜。もしかして私のフォーオ
ブアカインドを使ったのかなあ〜」

フランは違う意味で嫌な酔い方をしている。

「コロコロ、フラン駄目よ。一護を困らしちゃ。弾幕ごっこなら、
あっちでやって来なさい」

レミリアが助けしてくれると思ったが、レミリアも酔っている。

「一護さん!」

と、突然美鈴に話し掛けられた。

「何です?」

一護はちよつと期待した。

この人なら悪酔いはしていないと。

「私とお、戦つてえくれませんかあ〜? 今なら私、酔拳が使える
んでえ、メツチャ強いですよお」

期待した自分がバカだったと思う一護。

こついう時に限って咲夜は妖夢と料理を作っている。

(そつだ、俺も二人の方に行って手伝うか)

そうすれば、こんな悪酔い共と居なくてすむ。そう思った一護は屋敷の中に入るうとする。その途端、後ろから誰かが抱き付いてきた。

(この豊満な胸は…)

一護の背中に抱きついているので、背中に豊満な胸が当たっている。この中でこれ程の胸の持ち主は一人しかいない。一護はゆっくり後ろを振り向くと、そこには幽々子がいた。

「一護ちゃん、ダメよ。勝手に人の家に入っちゃ」

この人？も完全に酔っている。

「あの、幽々子さん。その、胸が背中に、当たっているんですけど…」

恥ずかしながらも言った一護は少しどころか、かなり赤面する。

「やあ〜ん、一護ちゃんのエッチイ〜」

「何言ってるんですか！？ あんたは！」

悪酔い共に絡まれて徐々にイライラしてきた一護は幽々子を引き離し、屋敷の中へ入って行った。

幽々子は何だか少し残念そうにいた。

そして一護は直ぐに戻ってきた。

両手に満タンの水が入ったバケツを持って。

「あんたらしい加減に目え覚ませ！！」

一護はバケツに入った大量の水を悪酔いしている全員にぶっかけた。ぶっかけられた悪酔い連中は水のせいで一気に酔いが覚めた。

「ったく、これだから悪酔い連中は」

一護は悪酔いから覚めた連中を一瞥し、屋敷の中にバケツを戻そうとした。

「黒崎さあん！！」

が、妖夢の呼ぶ声が一護を止めた。

一護はその方を見る。

妖夢が門の方から慌てて何かを持ってやって来た。

「何だよ、そんなに慌てて」

妖夢が一護の前に行き、持っていた物、文々。新聞を一護に渡した。一護はその新聞を見る。

それを見た一護は目を丸くした。

それが気になった霊夢、魔理沙が新聞を覗く。

二人とも一護と同じ反応をした。

「あら、どうしたの？ 私にもちよつと見せて」

幽々子が一護から新聞を取り読み上げる。

「え〜と、大スクープ。異変を解決し、吸血鬼とも互角以上に戦った黒崎一護氏が、バカで有名な妖精チルノ氏に…まさかの敗北」

幽々子の読み上げに紅魔メンバーがピクリと反応した。

「チルノ氏が幻想郷最強か…だって。構図まで書かれてるわ。チルノ>黒崎一護>吸血鬼・博霊の巫女>PAD長>その他諸々」

とりあえず最後から二番目には触れないでおこう。

「ちょ、ちよつと待てよ！ 俺はあの弾幕勝負は…」

わざと負けたなんて言えなかった。

なぜか、それが卑怯だと思ったからだ。

「くそ、くそ、あの鴉女ああ！ 許さねえ！！」

一護は文に復讐？を誓った。

その頃、ある屋敷では一護たちと同じ新聞を見て苛立っている男がいた。

「あの野郎、こんなふざけた奴に負けやがって…」

怒りが頂点に達したのか、男は新聞を握り潰した。

「何をイライラしているの？」

その男に女の人が声を掛けた。

「チツ、どうでもいいだろ」

男はクシャクシャの新聞を置き、何処かへ行った。

女はそのクシャクシャになった新聞を見る。

そして、女は何か面白い事でも考えたのか微笑んだ。

第35斬 【悪酔い】（後書き）

これからは二作品同時更新だから、更新が少し遅くなるかもしれない。

第36斬 【再び迷い家】（前書き）

今回は文字数が少なめになってしまいました。

第36斬 【再び迷い家】

あの花見の後、霊夢、魔理沙、一護以外は全員帰った。

花見にパチュリーが見えなかったのは、ある事を夢中に調べていたかららしい。

三人は花見の後、幽々子の家に泊めてもらった。

霊夢と魔理沙はあの後も飲んだせいで、直ぐに就寝した。

一護は泊めてもらう礼として、適当に妖夢の手伝いをした。

そして、明朝直ぐにお暇するはずだったのだが。

「すみませんが、此処に黒崎一護という人はいますか？」

一護は朝起き、着替え、縁側に出たら一人の女性に突然声をかけられた。

金のショートボブに金色の瞳を持ち、その頭には角のように二本の尖がりを持つナイトキャップを被っている。

服装は古代道教の法師が着ているような服で、ゆったりとした長袖ロングスカートの服に青い前掛けのような服を被せている。

その女性が腕を交互の袖の中に隠しながら黒崎一護は何処と一護に聞いてきた。

「えっと、俺ですけど」

一護は自分を指差しながら言う。

それを聞いた女性は少し驚いた表情をした。

「そうでしたか。あなたが黒崎一護さんでしたか。では、今から私とちよっとの間付き合ってもらいます」

「は…:…どういう事だよ?」

一護は訳も分からない事を言われ少し困惑する。

「仰った通りの意味です」

女性はそういうと自分の後ろを指し示した。
そこには空間に穴が空いたようなものがある。
両端にはリボンで縛られている。

「では、行きましようか」

そう言うと、女性は穴の方に歩き出した。

「ちょっと待てよ。俺はまだ行くとは行ってねえぞ」

「幽々子さんには既に伝えて了承を得ていますが。それに、この先
にあなたに会いたがっている男がいるんです」

「俺に会いたがっている男。つつか、あの人は勝手な事してくれ
たな」

一護は頭を抱える。

「それじゃあ、行きますよ」

女性は穴の中に入っていった。

「あ、おい待てよ!」

一護は何も考え無しに穴の中に入って行ってしまった。

穴の中は無数の目が有り、一言で言い表すなら気持ちの悪い空間である。

一護は女性の後ろを歩きながら周りを見渡す。

(何か気分が悪くなってきやがった)

一護は手で口を押さえる。

まだ、一護は寝起きも同然。

寝起きからこんな空間に居たら気分が悪くなくても仕方ない。

「そついや、まだあんたの名前聞いてなかったな」

一護は不図思ったので聞いてみる。

「私はすきま妖怪の式 八雲藍です」

「式って式神のことか？」

「はい。私はグータラババア…じゃなかった、スキマ妖怪の八雲紫様の式神です」

(今グータラババアって言わなかったか?)

と、そんな会話をしていると出口に到着した。

そこは一護が一回だけ行った事のある、橙と弾幕ごっこをした迷い

家だった。

「此処は…」

一護がそう呟くと、目の前に一人の女性が現れた。

金髪のロングで毛先をいくつか束にしてリボンで結んでいる。

ナイトキャップを被っており、赤いリボンで結んである。

首にも同じ赤いリボンが付いている。

服装は紫にフリルのついたドレスを着ており、白い手袋を着用している。

片手には大きな可愛らしい日傘を持っている。

一護はその女性を見て、かなりの強者だと分かった。

正直いつて今の自分では敵わないと確信している。

「あんたは？」

「人に名を聞く時は自分からよ、ぼーや」

「…黒崎一護」

「私は神隠しの主犯 八雲紫。宜しくね」

紫が一護に微笑みかけてくる。

その微笑に一護は少し悪寒が走った。

「で、用件は何ですか？」

「早速本題に入るの。せっかちさんね。まあ、それ程大した用じゃないから安心して。あなたに会わせたい男がいるの」

「誰だ？」

「こつちにいらっしやい」

紫はそういつと歩き出した。

どうやら、その男のところに連れて行くようだ。

一護はその後ろを歩く。

付いていくこと二分、一護は少し広い平地にやってきた。

そして、一護は一人の男が自分に背を向け立っている姿を見る。

一護はその後ろ姿だけで誰なのかが分かった。

ショートジャケット風の白い死覇装に水浅葱色の髪。

そして、右腰背面に？6？の刻印がある。

一護は声を上げ、その人物の名を言った。

「グリムジョー！！」

その名を言われ、男は笑みを浮かべながら一護の方を振り向いた。

第36斬 【再び迷い家】（後書き）

最近ホラゲーくらいしかしていない。

どうも、最近ゲームがしたいと思わない。

お陰で執筆が結構早く書ける。

次の更新も3日以内でいきたいです。

11eyesが大好きで早く新作が出ないかなあ〜と最近思う。

特にトゥーレが現在の新作に出てきたけど殆ど出番が無かったし。

3daysでのヴァルターの黒衣の姿がメツチャ好きだから、次回作でそんな感じのキャラが出てきてほしい。

一時はBLEACHと11eyesのクロスを考えた程好きです。

あれ、何書いてんだろ俺。

第37斬 【グリムジョー・ジャガージャック】（前書き）

文字数が多い割りに早めに書けた…のかな？

第37斬 【グリムジョー・ジャガージャック】

「グリムジョー!!!」

一護は自分の前に立つ男がグリムジョーだと確信する。
グリムジョーはゆっくりと一護の方を振り向く。

「よお、黒崎一護!」

刹那、一護の視界からグリムジョーが消えた。

一護はグリムジョーの動きが読めたのか、後ろに跳ぶ。

一護が後ろに跳んだ瞬間、グリムジョーが一護の居た位置に拳を叩き込んでいた。

拳は一護に当たらず地面に当たり、その地面が砕けた。

「何しやがんだ!? グリムジョー!」

一護がグリムジョーに言う。

「久し振りじゃねえか、黒崎。まさか、テメエまで此処に来ていたなんてな。なぜ、此処にいる?」

グリムジョーは両手をポケットに入れ、一護を見る。

一護はグリムジョーが何もしてこない事を見ると、話し始める。

「それはこっちのセリフだ。何でテメエが此処にいらんだよ?」

「先に聞いたのは俺だぜ。テメエから答えろ」

「俺はただ不運に幻想入りしただけだ」

一護は答える。

霊夢と初めて会った時に言われた事と同じ事を言ったのだ。

「テメエも同じ理由か？ グリムジョー」

自分は答えたのだ。

グリムジョーにも答えてもらわないといけない。

「…ああ。俺は此処に幻想入りして、その女に此処の知識を教わった」

グリムジョーは紫を一瞥して言った。

どうやら、八雲紫に世話になっているようだ。

そこで、一護はある事に気付いた。

「テメエ、霊圧はどうした？」

そう、一護はグリムジョーの霊圧が弱まっている事に気付いたのだ。以前グリムジョーと戦った時より半分位の霊圧が消えている。

「さあな。俺はテメエとノイトラの戦っている最中に意識が途絶え、此処に来た。そして、此処に来たせい^{レスレクシオン}か、霊圧の四分の三が消えてやがったんだよ。それどころか、^{レスレクシオン}帰刃まで使えなくなっちまってる」

「何だと？」

グリムジョーは幻想郷に来た瞬間に霊圧の四分の三が消えており、^{レスレクシオン}帰刃まで使用出来なくなっている。

それが、どうしてもはグリムジョーにも分からない。

「チツ、そんな事はどうでもいいんだよ。俺はテメエと戦う為に此処に呼んだんだぜ」

どうやら、グリムジョーが一護を此処に呼んだらしい。戦うために。

「心配しなくても、ちゃんとした弾幕勝負でだ、黒崎。テメエは言つたよな。何回でも戦ってやるつてよ」

一護はグリムジョーとの戦いの終末を思い出す。たしかに、言っていた。

「だから、俺と戦え！ 黒崎！ 今度こそテメエに勝ち、俺の方が上だつて事を教えてやる！！」

「……ああ。だったら、俺も手加減無しで行くぜ。覚悟しろよ、グリムジョー」

一護はグリムジョーを睨みつけて言う。

「良いぜ、黒崎。勝負ルールは最後まで立っていた奴の勝ちだ。さあ、掛かってきやがれ！」

グリムジョーがそういうと一護は即座に代行証を使い、死神の姿になつた。

「テメエの事は紫から聞いてるぜ！ 死神の力を無くしたらしいな！」

一護はその事を言われ驚いた。

「藍染の野郎を倒す為に失ったんだろ！ 良いじゃねえか！ 俺もお前も一から再び強くなった！ これで対等だ！」

確かに一護は霊圧を失い、幻想郷で一から鍛え強くなった。だが、幻想郷に滞在した期間を考えるとグリムジョーの方が長い。これでは対等とは少し言い難い。

「喋ってる暇なんてあんのか？ グリムジョー。随分と余裕だな」

一護がそう言った刹那、一瞬でグリムジョーの背後に移動した。

一護は右腕の刀状の霊圧でグリムジョーに攻撃を仕掛けた。

だが、一護の初撃はグリムジョーの刀により受け止められた。

「舐めんな！」

グリムジョーは力強く刀を振り、一護を吹っ飛ばす。

一護は直ぐに態勢を立て直し、スペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護の周りに三日月状の弾幕が展開され、グリムジョーに放った。それを見たグリムジョーもスペルを唱える。

「豹符『豹鉤』！」

グリムジョーから無数の棘状の弾幕が放たれた。それが一護の放つ弾幕を相殺していく。

一護は再びスペルを唱える。

「黒符『天幻月牙』！」

グリムジョーの周りの空間から三日月状の弾幕が現れる。

だが、グリムジョーは一瞬でその場から消え、一護の目の前に行く。グリムジョーは一護に向かって刀を振り下ろす。

一護は刀状の霊圧でそれを弾く。

が、グリムジョーは攻撃を止める事なく斬り込んで来る。

一護もそれに対抗する。

数十秒で斬り合いが終わり、二人共距離を取る為に後方に跳ぶ。その跳んでいる間にグリムジョーはスペルを唱える。

「虚符『虚閃』！」

スペルを唱えると同時にグリムジョーの掌が赤く光り出す。

それを見た一護は目を見開く。

そして、グリムジョーの掌から赤き閃光、レーザーが放たれた。

このスペルは大虚や破面がよく放つ虚閃と全く同じだ。

一護はその虚閃をまともに受けてしまう。

一護はそのまま勢いよく吹っ飛ばされた。

「ただだぜ黒崎！ 豹符『豹鉤』！」

グリムジョーは攻撃を休める事なく続いてスペルを唱える。

再び棘状の弾幕が一護を襲う。

一護は自分に弾幕が飛んで来るのに気付くと、直ぐ様態勢を整えスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護から月牙が放たれ、グリムジョーの放った棘状の弾幕を掻き消していく。

月牙はそのままグリムジョーの方に向かった。

「チツ、虚符『虚閃』！」

グリムジョーは月牙に向かって、虚閃を放つ。

だが、虚閃は月牙を消しきれず、グリムジョーに当たった。

一護もグリムジョーも一旦動きを止める。

グリムジョーは一護の姿を見る。

「…フツ、フハハハハハ！！ いいぜ黒崎！ この時を待ってたんだ！ 今度こそ俺がテメエを全力で潰せる時をよ！」

グリムジョーはそう言うと地面を蹴り、一気に一護に向かった。

一護は直ぐにスペルを唱える。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護は向かってくるグリムジョーに弾幕を放つ。

グリムジョーは俊敏な動きで全ての弾幕を避け、一護の目の前に行く。

グリムジョーはそのまま一護を上空に蹴り上げる。

そして、蹴り上げた一護の方まで跳び、次は一護を前の方に蹴り落とす。

グリムジョーは一護の落下地点を見る。

落下地点は砂煙が集っていて見えない。
だが、グリムジョーはスペルを唱える。

「行くぜ、黒崎。喰らいやがれ。虚符『王虚の閃光』!!」

カードが光の粒になり、グリムジョーの掌に吸収される。

その瞬間、グリムジョーの掌に凄まじい霊力が溜まる。

そして、超極太の青い虚閃が放たれた。

その虚閃が地面を吹き飛ばし、大型のクレーターを作り上げた。

「…どうした。こんなもんじゃねえだろ。…出てこいよ」

グリムジョーがそう言った瞬間、背後に一護が現れた。

「黒斬『月牙天衝』!」

一護はグリムジョーが振り向く前に月牙を放った。

月牙はグリムジョーを飲み込んだが、直ぐに月牙が掻き消された。

「いいぜ! 黒崎一護!! いい眼だ!!! その眼が!! 気に喰わねえんだよ!!!」

グリムジョーは再び一護に斬り掛かる。

一護もそれに対抗するべくグリムジョーに斬り掛かる。

一護とグリムジョーの最初の初太刀が激突すると同時に、凄まじい突風と砂煙が吹き荒れた。

そして、直ぐに二撃目の激突に入った。

一回一回激突すると同時に地面が砕け、突風が吹く。

それを観戦している八雲紫と藍は驚いていた。

「凄まじい戦いですね、紫様」

藍が戦いを見ながら紫に言う。

「ええ。二人共、身体能力だけなら私より確実に上ね。これは中々面白い戦いだわ」

紫はこの戦いを楽しみながら見ている。

面白い戦い程、終わるのが早い。

だから、この戦いも直ぐに決着が着くだろう。

一護とグリムジョーの斬り込み合いが続いている。

平地だった此処は既に見る影も無く潰れている。

一護とグリムジョーの刀が交じり合った瞬間、一護は月牙を放ち、グリムジョーをそのまま後方に吹っ飛ばした。

「終わりだグリムジョー！」

一護は刀を構え、グリムジョーの方に凄まじいスピードで一気に向かった。

だが、グリムジョーは直ぐに態勢を整えスペルを唱える。

「封閉『反膜の扉』！」

グリムジョーがスペルを唱えた瞬間、一護の周りに半透明の結界が張られた。

これにより、一護はその中に閉じ込められた。

「何だよ、これ!？」

一護は刀で結界を破ろうとするが、全く効かない。

「無駄だぜ黒崎。そいつは内側からじゃ絶対に破れねえ。ただし、外側からの攻撃なら簡単に破れるがな！」

そう言うとグリムジョーはスペルを唱えた。

「虚符『虚閃』！」

グリムジョーの虚閃が、閉じ込められている一護に向かって放たれた。

その虚閃は簡単に結界を破り、一護に当たった。

一護は虚閃によりボロボロになったが、まだ立っている。

「よく耐えたな。だが、次で終わりにするぜ。黒崎一護」

グリムジョーが最後のスペルカードを取り出す。

その瞬間、一護が真っ先にスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護がグリムジョーに月牙を放つが、軽く横に跳び避けられる。

それを見た一護は笑みを零した。

一護の笑みを見たグリムジョーは上空から靈力を感じ、上を見る。

そこには一護の弾幕がグリムジョーに向かって落ちてきていた。

そう、グリムジョーの避ける方向を予測しておき『天雨月閃』を放っておいたのだ。

天雨月閃の弾幕がグリムジョーに降り注いだ。

「くっ、くそ…！」

「よく耐えたじゃなえか、グリムジョー。けど、次で終わりにするぜ」

「テメエ…！」

グリムジョーは一護にさっきのセリフを真似られて少し苛立つ。

「ふざけてんじゃねえぞ！」

グリムジョーが一護に向かおうとする。

だが、一護の方が先にグリムジョーの目の前に行き、先に斬りかかった。

グリムジョーは一護の攻撃を刀で受ける。

「くっ、舐めんな！」

グリムジョーは空いている足を使い、一護の脇腹を蹴る。

それにより、一護の腕の力が一瞬弱まる。

そこを狙いグリムジョーは一護の刀を弾き、一護の顎を蹴り、上空に飛ばす。

「虚符『虚閃』！」

グリムジョーはスペルを唱え、上空に飛んだ一護に虚閃を放つ。

一護はそれを見ると素早く月牙を放ち、虚閃と相殺させる。

その隙にグリムジョーは一護の背後に移動する。

この展開を予測していた一護は防御の態勢を取り、グリムジョーの

攻撃を半減させる。

だが、グリムジョーの攻撃が予想以上に強かったのか、地面に叩きつけられた。

「これで最後だ！ 黒崎一護！！ 豹符『豹王の爪』」

グリムジョーが最後のスペルを唱えた。

手を前方にかざし、両の指先から霊圧で十本の青色の巨大な刃を両手に創り出した。

これは虚圏でグリムジョーと戦った時に最後に見せた技と一緒だ。

「さあ、テメエも最後の力を振り絞って、月牙天衝を放て！！」

上空から見下ろし命令するグリムジョー。

一護はそれに答えるようにスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護の右腕に霊力が込められる。

「ああ、良いぜ、グリムジョー。俺も本気でぶつかってやるよ」

「いいぜ、そうこなくっちゃな。…黒崎一護！！！！」

グリムジョーは一気に十本の巨大な刃を放った。

「終わりだ！！ グリムジョー！！！！」

一護も月牙天衝を放った。

霊力を込め過ぎたせいかわ、一護は方膝を地面につける。

そして、月牙が巨大な刃を一本づつ砕いていく。
一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本と。
だが、九本目を砕いたところで月牙が消滅してしまった。

残りの一本が一護に当たり、一護の意識が途絶えた。

これにより、二人の弾幕勝負が終わった。

第37斬 「グリムジヨイ・ジャガージャック」 (後書き)

今回はグリムジヨイの二つ名と能力が出てきませんでしたが、一応考えてあります。

次回で桜春雪篇はラストです。

第38斬 【幻獄七夢卿】（前書き）

結構早めに書いてしまいました。

その分、駄文の上に駄文かもしれません。

第38斬 【幻獄七夢卿】

《一護、私はあなたの味方よ。どんな事があっても、私が絶対に護るから》

《…おふくる》

「…ん、此処は…」

一護はゆっくりと目を開けた。

天井が見える。

どうやら一護は布団の中で寝ていたらしい。

「ようやく目が覚めたようね」

不図、一護の傍らから声が聞こえてきた。

一護は寝たまま、声のした方を見る。

「あんたは、八雲紫さん」

そう、そこには八雲紫が一護の傍らに座っていた。

「おはよう、一護君」

紫が一護に微笑みかける。

一護は上半身を起こし口を開く。

「何で、俺はこんな所で寝てんだ？」

「あなたはグリムジョーとの弾幕勝負で最後の激突の時に、グリムジョーの刃があなたを貫いて気絶したのよ」

それを聞いた一護の顔が少し暗くなる。

「俺、負けたのか？」

「ええ、残念だけど」

「そうか」

一護は静かに言う。

「負けたことが悔しいようだ。」

「落ち込むことはないわよ。グリムジョーの方が先に幻想郷に来て、弾幕を覚えたんだから、グリムジョーが勝っても不思議じゃなかったのよ」

紫が一護を励ます。

「紫さん。俺は別に落ち込んだじゃいねえよ。ただ、次に俺が勝ちやいいだけの話だ」

「じゃあ、どうしてそんな暗い顔してたの？」

「いや、何でもねえよ」

一護は言わなかった。

言ったところで意味が無いからだ。

一護の見た夢に自分の母親が現れた事なんて。

「まあいいわ。今あなたの仲間達が来たところよ」

「霊夢たちが？」

「そうよ。もう、立てる？」

紫がそう言つと一護は「ああ」と言い立ち上がった。

それを見た紫も立ち上がり、居間の方に向かった。

一護はその後、居間に行くとき霊夢、魔理沙、幽々子、妖夢に会った。
グリムジョーと藍の姿は無く、何処かに出掛けたようだ。

一護は霊夢に何も伝えずに行った事を怒られた。

霊夢の説教が長いので、魔理沙が制止した。

そして、六人はテーブルを囲むように座る。

「…で、私達はそろそろ此処からお暇したいんだけど」

霊夢が少しイライラしながら言う。

「別に良いじゃない。ゆっくりして行こうよ」

霊夢のセリフに幽々子が答える。

「元はといえば、あんたが勝手に了承しなければ、こんな事にはならなかったのよ」

霊夢が幽々子を睨みつけて言う。
幽々子は「怖い目しないでよ」と言い、微笑む。

「まあまあ、ゆっくりしようぜ霊夢。帰ったってする事ねえだろう」

魔理沙が一々霊夢の癪に障ることを言う。

これでまた霊夢が怒り出した。

一護は溜息をつき、妖夢が霊夢を宥める。

その姿を見た紫は微笑み、霊夢に声を掛ける。

「あなたが今の博麗の巫女ね」

その事を言われた霊夢は怒りを忘れ、紫の方を見て頷く。

「そう、やっぱりあなたの怒っている姿は母親似ね」

「…あんだ、私の母上を知っているの？」

「ええ、まあね。当然だけど父親の事も知っているわよ」

「…何が言いたいの？」

紫のセリフから、あまり主旨が見えてこない。
だから、霊夢が問う。

「セラテムカールダ…幻獄七夢卿って組織は知っているかしら？」

幻獄七夢卿という単語に霊夢、一護、魔理沙が目を見開く。

幻獄七夢卿は紅霧異変の時に現れた、危険極まりない奴等だ。剎蘭、そして元幻獄七夢卿のルリミア。この二人はレミア達と共闘しても敵わなかった相手。なぜ、その幻獄七夢卿を紫が知っている？

「どうやら知っているようね」

「あなた、あいつ等の事を知っているの？」

霊夢がさつきとは打って変わって真面目な表情になり聞く。

「ええ、少しだけね。聞きたい？」

「…聞かせてもらおうかしら」

どうして紫がこの話を切り出したのかは分からないが、先ずは奴等の事を聞きたい三人。

そして、紫は口を開き話し始める。

「セブテムカールダ幻獄七夢卿とは七人の能力者による幻想郷の裏組織よ。この七人に上下関係は一切無くて、仲間意識も無い、当然組織力も無いわ。だけど、一人一人の実力は恐ろしく高い」

一人一人の力は霊夢達が身を持って体験している。

「この七人が一体何の目的でこの組織に在籍しているかは分からないわ。ただ、少しだけならメンバーの事を知っている。聞きたい？」

一々聞いてくる。

当然三人共聞きたいに決まっている。

「さっさと行って」

霊夢が答えると、紫が再び語りだした。

「幻獄七夢卿は非常に危険な思想を持った連中だから、聞いた事のある人がいるかもね。まずは刹蘭という男は知っている？」

紫が聞いてくる。

三人共、嫌でも記憶に残っている。

「あの男は私の予想だけど幻獄七夢卿を創り出した男だと踏んでいる。そして一度、幻想郷の博麗大結界を消そうとした人物よ」

「!...!... そんな事したら幻想郷が大変な事になるわよ」

霊夢が反応した。

「ええ、けど奴の作戦は失敗に終わったわ。あなたの母親と父親のお陰でね」

「!...!... 母上と父上が」

紫のセリフに霊夢は驚く。

そして紫は続ける。

「そして他の幻獄七夢卿のメンバーだけど、刹蘭は勿論の事、ブギーヴァルトという男は大量の人間と妖怪を殺した殺人鬼。続いてリフトオールは禁忌に必ず入るような術を数多に創り行使した人物。

そして断霧鏡帥たちきりきょうすいは幻想郷には居ず、今は外の世界の裏社会を牛耳っているとと聞く。私の知っている奴はこの四人だけよ。残りの三人は全く知らないわ」

紫が説明を終える。

「聞いた四人だけでも、かなり危険だぜ」

魔理沙が少し震え上がる。

「ああ、かなりヤバい奴等だな」

「そうね」

二人も魔理沙と同じ反応をする。

知らなかった妖夢も、その事を聞いて驚いている。

幽々子は幻獄七夢卿の事を知っていたらしく、あまり反応しない。

「因みにさっき言った断霧鏡帥は幻獄七夢卿から脱退したらしいわ」

紫が付け加えるように言った。

「で、なぜ私がこの事をあなた達に話したかというと、幻獄七夢卿の刹蘭が活発に動き始めているからよ」

その事に全員が驚く。

「また、あいつが来るのか」

一護の顔が少し険しくなる。

「まだ時間はあるわ。あの男だって二度目の失敗は絶対にしないはずよ。二度目の失敗をしないという事は、それなりに時間も掛かる年単位でね」

「何でそんな事が分かるんだよ？」

「昔に失敗した際は百年間の準備を整えてきていたの。今回はもっと掛かるはずよ」

「…俺の出番無くなるんじゃないかねえの？」

百年以上、という事は一護はおろか霊夢の寿命も尽きているだろう。

「油断は禁物よ。もしかしたら、十年後になるかもしれないしね」

一気に十年後が変わった。

だが、あくまで憶測。

「いや、多分俺はあいつと戦う事になる」

一護が言う。

「どっして？」

紫がキョトンとした顔で聞く。

「あいつは俺を頂きに来るって言ってた。だから俺はあいつと嫌でも戦うことになる」

たしかに紅霧異変の時、刹蘭は黒崎一護を頂くと言った。
即ち、一護は刹蘭と戦う確立が高い。

「なぜ、あなたを頂くの？」

「さあな、俺もよくわからねえんだ。けど、次に会ったら俺があいつを倒す」

一護は必ず刹蘭を倒すと心に誓った。

第38斬 【幻獄七夢卿】（後書き）

次からはようやく新章突入ですが、オリジナルになります。
10話くらいで終わる予定です。

第39斬 【百鬼夜行の小さな鬼】（前書き）

この章はある作品をモチーフにしています。

もしかしたらパクリと言う人がいるかもしれませんが、殆どその通りです。

第39斬 【百鬼夜行の小さな鬼】

チユンチユンと外から小鳥の鳴く声が聞こえてくる。

朝の陽射しが半開きになった襖障子の隙間から部屋の中を照らす。その一筋の眩しく暖かい光りが一護の閉じている目蓋に当たる。

一護は目蓋を照らされたせいか、ゆっくりと目を開ける。

「朝か…」

一護はそう呟くと、ゆっくりと上半身を起こす。

寝起きの一護は布団から立ち上がり、襖を開け縁側に出る。そして、両腕を上げ背伸びをする。

（そっぴゃ、幻想郷に来て一年くらい経つのか）

一護が幻想郷に来て約一年が経とうとしている。

幻想郷に来た時の一護は早く自分の世界に戻りたいと考えていたが、此処でする事が出来たのでそれを終わらすまでは帰れない。

それに博麗大結界の異変が解決していない。

もし他に帰れる術を見つけても、この異変を解決すると霊夢と約束したから解決するまでは帰らない。

「結構早いもんだな、一年が経つのは」

一護はそっぴゃという部屋に戻り、布団を畳む。

その後、普段着に着替え、顔を洗う為に井戸に向かう。水で顔を洗うと縁側に戻り居間に行く。

居間に着くと霊夢が朝食の用意をしており、ここで一護は霊夢と朝の挨拶をする。

二人は朝食をとり、食べ終わると霊夢は神社の外の掃除をし、一護は中の掃除をする。
これが毎日の日課だ。

昼になり昼食を食べ終えた霊夢と一護は縁側に行く。
すると決まって魔理沙がやって来る。
だが、今回は魔理沙の服装が随分と違っていた。
その服装を見た一護は驚愕する。

「よお一護、霊夢」

魔理沙が縁側に居る二人に歩み寄る。

「何なの魔理沙、その服装？」

霊夢が魔理沙の服装を怪しむように見ながら聞く。

「へへ、良いだろ。私の新コスチュームだぜ」

魔理沙が自慢するように言う。

その服装は黒い着物で下には純白も長襦袢を着ている。
まるで死神の着ている死覇装のようだ。

「魔理沙、それを何処で手に入れたんだ？」

一護はその服装の事を聞く。

「ん、気になるか。この着物は一護が幻想郷に来て初めて香霖堂に

行った時に見つけたんだぜ」

「香霖堂で……」

魔理沙はあの時、一護と霊夢が帰った後、棚の奥から見つけ出した着物。

それを魔理沙が購入？し、サイズをアリスに合わせてもらい着用した。

「どうだ、一護のあの黒い姿に似ているだろ」

似ているというより、まんま同じである。

「魔理沙は元々黒い服を着ているから、あまり違和感が無いわ」

「何か、強くなった気がするぜ」

一護は死覇装に似ている着物って事で一応その場は済ました。と、そこに魔理沙に続いて一人の少女がやって来た。

薄い茶色のロングヘアを毛先のほうで一つにまとめている少女。その頭の左右から長くねじれた角が二本生えている。

幼い容姿で、服装は白のノースリーブに紫のロングスカートで、頭に赤の大きなリボンを付けている。

三角錐、球、立方体の分銅を腰などから鎖で吊るしている。

その少女が三人の前に行くと言を聞く。

「此処に黒崎一護が居るって聞いて来た！ 私と勝負しろ……！」

突然現れていきなり戦いを申し込まれた。

「いきなり現れて何言い出すの？ こいつ」

霊夢が言う。

「私は小さな百鬼夜行 伊吹萃香だぁ！！」

顔が少し赤い。

ちよつとだけ酔っている。

「いきなり名乗られても困るんだけど」

「紫から聞いたのよ。強いヤツ大募集してるって」

紫の知り合いのようだ。

一護の脳裏にあの新聞が蘇る。

たしかに強いヤツ大募集と書かれていた。

「だから尋常に勝負よ！ 黒崎一護！！」

と、魔理沙を指差す。

「え、私？」

「そつだよ。黒崎一護は黒衣着物を着てるって聞いたからね」

何か勘違いしている。

完全に紫の説明不足だ。

それとも、この萃香って子が大切なところだけを聞き逃して、黒衣着物ってところだけを聞いていたのかな。

しかも、黒い着物といつても戦闘で死神の姿になった時以外はならないし。

「へっ、良いぜ。この黒崎一護が相手になってやるぜ！」

間違いを指摘せずにそのまま流す魔理沙は自分を黒崎一護と嘘を言った。

「おい、魔理沙。良いのかよ？ 俺って言わなくて」

一護は小声で魔理沙に言う。

「別に良いだろ。それとも一護がやりたい？」

「いや、別にやりたいとは思わねえけどよ」

「じゃあ良いって事で」

二人が小声で話し合う。

霊夢には会話が丸聞こえだが、萃香には聞こえていないようだ。

「それじゃあ、勝負だぜ！！」

「おおー！ 掛かって来い！！」

こうして魔理沙VS萃香の弾幕勝負が始まる。

第39斬 【百鬼夜行の小さな鬼】（後書き）

遂にBLEACHのアニメが10月11日より消失篇になります。
メツチャ楽しみです。

早くOPとEDを聞いてみたいです。

10月11日が待ち遠しい。

第40斬 【魔法VS鬼】

魔理沙と萃香は博麗神社から少し離れた平原にやってきた。此処は一護が幻想郷に来たばかりの時に魔理沙と弹幕ごっこをした場所だ。

あの時と同様に広い平原の真ん中辺りで二人が向き合っている。一護と霊夢は二人から離れた場所に立っている。

「何か久し振りだぜ。此処にこうやって相手と向き合つのは」

魔理沙はあの時の事を思い出す。

初めて一護と弹幕ごっこをした時の事だ。

「ねえ、早く始めようよ一護」

一護といわれ魔理沙は反応しない。

そして、不図今は自分が黒崎一護って事を思い出す。

「お、おう。分かったぜ」

魔理沙は答える。

「それじゃあ、スタート!!」

魔理沙が答えた後に霊夢がスタートと言った。

「先手必勝! 萃符『戸隠山投げ』!」

萃香がスペルを唱えると同時に大岩を魔理沙目掛けて投げてきた。

小さい体をしているくせに大岩を軽々投げる腕力。
流石は妖怪である。

「危ねえ！」

魔理沙は飛んで来る岩を横に跳び避ける。

「まだまだ行くよぉ〜！」

萃香が続けて大岩を魔理沙目掛けて投げってくる。

魔理沙はそれらを箒に乗り、高速で避け続ける。

「一体どっからあんな数の岩が出て来るんだよ!？」

魔理沙が疑問を口にする。

「私の能力は？密と疎を操る程度の能力？。この能力で私の周りに
岩を萃めているのさ」

魔理沙の疑問に萃香が丁寧に答えてくれた。

「説明さんきゅう」

魔理沙はお礼を言う。

お礼を言ったついでにカードを取り出しスペルを唱える。

「魔符『スターダストレヴァリエver.2』！」

魔理沙がスペルを唱えると箒の速さが一気に上がり、そのまま萃香
の方に突っ込んだ。

「この私に正面から挑もうなんて、良い度胸してるじゃない」

萃香は不敵な笑みを浮かべながら拳を構える。

それを見た魔理沙は雄叫びを上げ、炎のような黄色いオーラを纏った。

萃香も橙色のオーラを纏い、両者が激突した。

激突と共に黄色いオーラと橙色のオーラが拮抗し、凄まじい突風が舞った。

「鬼の力を舐めるなよー!!!」

萃香が叫ぶと同時に、魔理沙が上空に吹き飛ばされた。

激突は魔理沙が負けたようだ。

だが、魔理沙はただ負けた訳ではなく、吹き飛ばされると同時に三二八卦炉を取り出した。

「喰らえ！ 恋符『マスタースパーク』！」

そして即座にスペルを唱え、萃香に向かって極太レーザーを放った。

萃香はその極太レーザーを避けきれず、レーザーに飲み込まれた。

魔理沙は地に足を着き、萃香の方を見る。

マスパのせいで土煙が舞っていて、無事かどうかは分からないが、この程度で倒せる程柔な相手では無い事は承知している。

「流石は黒崎一護！！ 紫が強いつていうだけの事はある！」

萃香が土煙を掻き消して現れた。

「ちょっとだけ、本気を出して上げる！」

萃香はそういうとスペルを唱える。

「鬼神『ミツシングパープルパワー』！」

スペルを唱えた瞬間、萃香が何倍にも巨大化した。

「な、何：だと!？」

魔理沙はその巨大化した萃香を見上げて驚く。

「さあ、こっからが本番だよ！」

萃香はそういうと魔理沙目掛けて拳を振り下ろした。

魔理沙は直ぐに箒に乗り、拳を飛んで避ける。

「へっ、ただ大きくなっただけじゃ、私は倒せないぜ」

魔理沙は再びミニ八卦炉を萃香に向け、マスターパークを放った。
萃香はそのマスパに拳で挑んだ。

「おりゃあ〜！」

素っ頓狂な声を上げ、萃香はマスパを殴り消した。

「マジかよ」

魔理沙は自分のマスパを拳で消された事に驚く。

「次は私から行くよ！」

萃香は魔理沙に殴りかかった。

魔理沙は飛行しながら萃香の攻撃を避け続ける。

「くそつ。一発でも当たったら終わりだぜ」

萃香の攻撃は巨大化して鈍くなっていると思っていたが、殆ど鈍くなっていない。

「儀符『オーレリーズサン』!」

魔理沙はスペルを唱えた。

魔理沙の周りに四つの球体が現れる。

その球体が魔理沙の周りを回転しながら萃香に向かってレーザーを放った。

だが、そのレーザーは萃香に殆ど効いていない。

「まだまだー!!」

魔理沙の周りを回転する球体が青白い光りを放ち、ブーメランのように回転しながら萃香に向かって放たれた。

「喰らわないよぉ!」

萃香はその四つの球体を殴り潰した。

その事に魔理沙は目を見開く。

「冗談だろ…!」

「隙有り!」

萃香は魔理沙の一瞬の隙を狙い、拳をぶつけた。
魔理沙はそのまま地面に勢いよく叩きつけられた。

「これで終わりだよ、黒崎一護」

止めを刺すかのように萃香は地面に叩きつけられた魔理沙を踏み潰そうとする。

「くそ…っ、この私を…霧雨魔理沙を、こんな簡単に倒せると思っ
なよお！…！」

魔理沙が憤ると同時に自分の本当の名を明かしてしまった。
それを聞いて驚いたのか、萃香の動きが一瞬止まってしまっ
その間に魔理沙は、凄まじい速さで上空に飛んだ。

「大出力！ 星符『ドラゴンメテオ』！！」

魔理沙は萃香の上空に行くときスペルを唱えた。
ミニ八卦炉から下方の萃香に向けて極太レーザーが放たれる。
萃香は油断してしまい、もろにレーザーを受けてしまった。

「く…っ！」

萃香も今のレーザーは結構喰らったようだ。

「くそおおお！！」

萃香は直ぐに自分の上にいる魔理沙を見るが、そこには既に魔理沙の姿はない。

「ど、何処に行った!？」

萃香は少し焦りながら魔理沙を探す。

何処にも居ない。

「終わりだぜ、魔砲『ファイナルスパーク』!」

不意に魔理沙のスペルを唱える声が聞こえてきた。

聞こえた方向は、自分の真正面。

そう、魔理沙は萃香の真正面にいたのだ。

そして、スペルを唱え魔力を大量にミニ八卦炉に溜めている。

萃香も真正面にいるとは思わず、探しそびれていたようだ。

「しまった!！」

萃香は直ぐに魔理沙を攻撃しようとするが、間に合わない。

魔理沙のミニ八卦炉から凄まじい超極太レーザーが萃香に発射された。

萃香は全身でそれを受け止めるが、あまりの強さに受け止めきれず、レーザーに飲み込まれた。

「はっ、はっ、はっ…私の勝ちだぜ…」

完全に疲れ切った体でそう言うと、魔理沙は地面に吸い込まれるように倒れた。

今のレーザーを喰らった萃香も大ダメージを受けたらしく倒れた。

両者が倒れ弾幕勝負は終わった。

そして、観戦していた霊夢が勝者の名を言う。

「勝者は…萃香ね」

どうやら萃香の勝ちのようだ。

「は？ 引き分けじゃねえの？」

一護が異論反論する。

たしかに両者が倒れたので引き分けのはずだが。

「何言ってるの。倒れたのは魔理沙が先よ。魔理沙の負けに決まってるじゃない」

「あゝ成程な」

一護は一応納得する。

「で、この二人はどうするんだ？」

一護は倒れている二人を見る。

この二人は気絶しているから誰かが何処かへ運ばなければいけない。

「一護に任せるわ。じゃ、先に帰ってるから」

霊夢はそういうと直ぐに神社の方に飛んで行った。

「あ、おい！ 何で俺なんだよ！？」

一護の言葉を完全に無視する霊夢。

霊夢は直ぐに一護の視界から消えた。

「はあく、仕方ねえな」

一護は溜息をつき二人を博麗神社まで運んだ。

夜になり一護と靈夢は夕食を終えた。

魔理沙と萃香はあのまま起きず、仕方無しに神社で寝かせた。

「んじゃ、俺はそろそろ寝るな靈夢」

一護は居間に居る靈夢に言い、寝床に向かった。

眠気が高まってきた一護は直ぐに布団に入り、寝息をたてた。

第40斬 【魔法VS鬼】（後書き）

この作品を書き終えたら、戦国BASARAと戦極姫のクロスオーバーが書きたいな〜って思っている。
結構面白いかも。

第41斬 【公園】

…長い夢を…見ていたような気がする…
とても長い…幻想的な夢を…

「グッモーニンツ！ イッチゴーツ！！」

深い微睡みを打ち消すように、父親の一心の大声と足音が聞こえてくる。

その音が一護の鼓膜を叩き、一気に目を覚ます。

「…つるせえ」

ベットから起き上がり、部屋の扉を開け入ってくる一心を撃退する。

「毎朝毎朝つるせえんだよ」

一護は倒れた一心を一瞥し、部屋から出て行った。

下の階から妹の遊子と夏梨の声が聞こえてくる。

一護は階段を下りリビングに向かう。

リビングに入ると遊子と夏梨に朝の挨拶をし、テーブルに着く。

いつも通り朝食をとり、一護は部屋に戻り制服に着替える。

そして、遊子たちとは一足先に家から出る。

少し早めに家を出すぎた一護は少し遠回りをして学校に向かう事に

した。

一護は公園へと足を踏み入れる。
視界一杯に桜の木が目に映る。
もう少して春。

桜の木はまだ蕾もなっていないが春になると沢山の桜を咲かせる。
そこに色んな人々が花見をしにやってくる。

この公園は学校の通学路から大きく跨るように位置する公園。
学校に行くのに、この公園の中を通るのは遠回りになる。

だから学生でこの公園を通る者は滅多にいない。

一護はゆっくりと足を動かす。
舗装された公園の道を歩き、もう直ぐ公園の出口が現れる所まで来た。

一護は普通に公園から抜けるはずだった。

そう、普通に抜けるはずだったのだ。

「……」

一護の目の前に、いつもの景色を遮るように、いつもの景色を切り取るように、突如一護の前に現れた。

「何だよ…これ…!？」

何かは分かる。

だが、何が起きたのかは理解できない。
黄色いテープで囲われた物。

その囲われた中にある青いシート。
その青いシートがテントのようになっている。
まるで、その青いシートの中を見えないようにする為に。

「…ッ！」

一護の視線が自然とその青いシートの下に行く。

そこには引きずったような…這ったような…真紅の色。

その真紅の生々しい紅は紛れもない血。

その血の筋先に青いシート。

そのシートに隠されているものは…見てはいけないモノ…？

一護はシートの中に何が有るのが分かった気がした。

「ちよつと、そこの少年！」

突然後ろから声を掛けられた。

一護が後ろを振り返ると、警察の人がいた。

「この公園は現在立ち入り禁止になっている。何処から入った？」

警察の人が困ったような表情で聞いてくる。

「立ち入り禁止…？ 普通に入れたぜ」

「何？」

「普通に南の出入り口から入れた。立ち入り禁止とか、そんなもん全然してなかったぜ」

「…チェック漏れがあったのか…？」

「どつやら警官の不注意だったようだ。」

「…」

一護は黄色いテープの周りをよく見る。
気付かなかったのか、何人が警察官がいた。

この現場の異様さに圧倒され気付かなかったみたいだ。
さっきの警官が他の警官に出入り口のチェック漏れの事を伝えてい
る。

警官なのか、周りの警官とは少し服装が違う。
多分、刑事とかいう人だろう。

この公園は空座町で一番広い公園なので、出入り口も沢山ある。
ちょうど一護が入って来た所だけチェックから漏れていたんだろう。

「あの、すみません。そろそろ学校に行かねえといけないんですけど」
この公園での事で時間を忘れていた一護は近くにあった時計台の時
間を見て言った。

そろそろ行かないと結構やばい時間に差し掛かっていたのだ。
警官が一護の方を向き口を開く。

「…君は空座一校の生徒か？」

「はい、そうですけど」

「そうか、ちょっといいかな」

警官が一護の学年や住所などを聞いてきた。
それに一護は答える。

これで、この場は通してもらえらしい。
本来なら事情聴取をしなければいけないんだが、今回は見逃してく
れた。

一護は異様な空間から逃げ出すように公園を出た。

公園で多少のタイムロスがあったが、予鈴が鳴るまでには間に合った。

学校に着いた一護は上靴に履き替え、教室に向かう。その途中で小島水色に出会う。

「おはよ一護」

「おーす、水色」

二人共、挨拶を交わす。

と、廊下の奥の方から一人の男が走ってくる。

「い~~~~ち~~~~じ~~~~!!!!」

その男は大きい声で一護の名を言うてくる。

そいつの名は浅野啓吾。

いつも朝、一護にハイテンションで駆け寄って来る男。

「おす」

一護はそう言い、腕を啓吾の顔面に当て、動きを止める。

啓吾はその衝撃で廊下に倒れた。

一護はその状態の啓吾を無視し、教室に向かった。

「全く、毎度毎度しょうがねえな」

一護はそう言い、教室に入った。

教室に入ると井上織姫が「おはよう、黒崎くん！」と言って来る。啓吾とまではいかないが、井上も中々朝からテンションが高い。他にも幼馴染の有沢竜貴や茶渡泰虎も一護に挨拶を交わす。

一護は一応頑張って公園での事を忘れようとしていた。

そして、朝のホームルームが始まった。

担任の越智美諭は教卓に立つと珍しく真面目な表情で口を開く。

「本当だったら体育館で全校生徒の前で伝えるべきだったんだが、教室で言う事になった」

先生のセリフに教室内がざわめく。

「ほら、静かにしろー」

なぜか一護は内心嫌な予感がしていた。

あの公園での映像が頭に過ぎる。

「今日の明朝、すぐその公園で殺人事件が起きた。警察が言うには通り魔の犯行の線が強いらしい。登下校の際はなるべく一人ではなく複数で帰るように」

通り魔。

一護はどうしてか、ただの通り魔が犯人では無い気がしていた。

そんな公園での事のせいで授業は殆ど上の空。そして、放課後。

井上がそんな一護を心配して歩み寄ってきた。

「黒崎くん。大丈夫？」

「ん、何がだ井上？」

「今日ずっと元気無かったから」

「何だ、そんな事かよ。心配すんな。いつも通りだ」

そこで一護は不図、あの事件の事が聞きたくなった。

「井上は、何かあの殺人事件の事知らねえか？」

「え、どうして？」

「いや、知らねえんだったら良いや。悪い、忘れてくれ」

一護はそついい帰り支度をし、教室から出ようとした。

「待って、黒崎くん！」

教室から出る直後に井上に呼び止められた。

「少しだけなら、噂くらいの事なら知ってるよ」

その言葉に一護は少し驚き、井上の元に行く。

「本当か」

「うん。女の子って基本的にそついつ話が好きな子が多いから」

確かに、女性は世間話や噂話が好きなきが多い。
それにコンビニ等の女性誌コーナーはホラー関連の漫画や雑誌をよく見かける。

そういうのに精通している子が沢山いても何ら可笑しくない。

「だから、色々と変な噂は聞いたんだ」

「例えば…」

「例えば、今回の殺人犯は郊外の精神病院から脱走した人なんじゃないかって…」

「精神病院か…」

空座町の郊外には、かなり古くからある少し大きな精神病院がある。その精神病院から脱走…。

「あと、精神鑑定で罪に問われなかった人が、脱走したって噂が…」

TV等で騒がれるような凶悪犯罪や少年犯罪を見ると、二言目には精神鑑定だ。

犯罪が凶悪で常軌を逸していればいるほど、精神鑑定で無罪になっ
てしまう気がしない事はない。

確かに、郊外の精神病院にそういう人間が入院していても可笑しく
は無い。

でも、そんな事が起きているなら、噂だけで済むとは思えない。
警察が直ぐに嗅ぎつける。

「それから、これは結構良く聞く話なんだけど…」

井上が言うか言わないか悩んでいる。
此処まで聞いたら最後まで聞きたい。

「言ってくれ」

「うん。上から下まで真っ黒な服を着た人が、建物の影から、じつとこっちを見てるって話……」

「あゝ、何かそんな話を聞いたことはある。たしか？闇夜の男？だっけ」

「護自身、そういう霊関係以外の事はあくまで噂や都市伝説程度の事だと思っている。」

「ずっと前から噂はあったけど、最近になってその？闇夜の男？を見たって人が多くなってるんだって」

「!?!?」

「護はその事に驚く。」

「背が高くて、全身黒くて、不気味な仮面を付けてるみたいなの噂話にしては具体的すぎる。」

「精神病院の噂もあるし、どこかで繋がっているのだろうか？」

「他には何かねえのか？」

「うん。これだけ。何で、黒崎くんがそんなに今日の事件の事を気にしてるの？」

「いや、ただの興味本位：かもな。近くで人が殺されたら気になるだろ」

一護はそういうと「じゃあな井上」と言い、教室から出た。

啓吾と一緒に帰ろうと言われたが、今日はそんな気になれなかった。

自然に足が公園の方に行ってしまった。

警察による現場検証が済んだようだ。

公園全体に対する立ち入り禁止の措置は、既に解除されていた。

あの場所に行くと、変わらずテープで囲われ、警察が立っていたが、朝の雰囲気とは違っていた。

野次馬が沢山いるのだ。

まあ、居ても仕方ない。

朝と全く同じ状態なのに、朝の緊迫感が殆どない。

あの青いシートの向こう側に人の死体：もとい、その遺体はもう無いだろう。

いつまでも野晒してはおけないだろう。

シートの奥を詳しく調べてみたいが殺人事件があった当日に、その現場で怪しい行動をとる訳にはいかない。

そんな怪しげな行動を取ったら、犯人に間違えられても弁明のしようがない。

それに調べる理由なんて一護にはない。

こういう状況に直面していると、小説や漫画で出てくる探偵っていう人は本当に特殊な存在だと分かる。

犯行現場に踏み入って、勝手な事を抜かしまくっても、全然怪しまれないからだ。

「まあ、俺が何かしたところで重要な証拠が見つかる訳ねえし」

警察が見落としてしまうような証拠が有ったとしても素人の一護に見つけれぬ訳が無い。

一護はそのまま家に帰った。

第41斬 【公園】（後書き）

やっちまった感じがする。

第42斬 【一つの結末】

遊子と夏梨も学校で殺人事件の事を聞かされていた。

夜のTVニュース番組は火災や交通事故など、あまり興味の引かないものが流れた。

当事者にとってみれば大惨事なんだろうけど、TVのこっち側の人間にとっては等しくニュースになって消費されてしまう。

今日の殺人事件もこういう視点で見てもええ、ありきたりなニュースの一つになってしまう。

いくつかのニュースを見ていると、公園での殺人事件のニュースが流れた。

他の事件ニュースと殆ど相変わらず流れる。

殺されたのは女性だったようだ。

一護にとっては衝撃の出来事だったが、TVの放送を見る限り、それ程大きく報道されていない。

この日、一護は精神的疲労が高かったのか早めに就寝した。

そして、次の日の学校にて。

一護は事件の事を忘れられなく、石田から少し情報が有ると思い話しかける。

「石田、昨日の殺人事件の事で何か知らないか？」

「生憎僕にそっち関係の事を聞いても、キミの期待している答えは返ってこないよ」

そつち関係…多分、人間関係の事と霊関係の事のことだろう。
石田は滅却師^{クインシー}、霊関係の事には精通しているが、人間による事件はあまり詳しく知らないようだ。

「それじゃ、殺された人の魂魄から情報を得る事はできねえか？
殺されたんならきつと未練が残つてて、この辺に居るかもしれねえ
だろ」

「すまないが、僕もそれを試みたが、殺された人の魂魄は見つけ出
せなかった」

「!?!?何…!!」

「理由は知らないが、成仏したんだと思うよ」

唯一情報を得られると思った一護の期待は綺麗に潰された。
一護は諦め、そのまま去ろうとしたが石田に声を掛けられる。

「黒崎、キミはなぜそんなに今回の殺人事件に首を突っ込もうとす
るんだ？ 昨日、井上さんにも事件の事を聞いたらしいじゃないか」

「さあ、俺にもよく分かんねえんだ」

首を突っ込む理由は自分でも本当によく分からない。
事件現場に偶然居合わせたからなのか、それとも自分に今回の何か
が降り掛かろうとしているのではないかと予感しているのか。

「まあいい。キミに丁度良い情報を与えよう」

石田の台詞に一護は少し期待する。

「パソコンのあるサイトに報道されていない事件の詳しい情報を得る事の出来るサイトが有るんだ。そのサイトならより詳しく事件の事を知る事が出来ると思うよ」

ネットによる情報。

本当か否かは分からないが、見て損は無いだらう。

「そのサイト名は？」

「たしか、廃絶の理」

サイト名を聞いた一護は早速、放課後に学校にある情報室のパソコンを使い調べる事にした。

勿論、先生の許可を得た上で。

一護は情報室に入ると、パソコンを立ち上げた。

ホームにいくと、石田に教えて貰った廃絶の理と検索し、ページに入る。

廃絶の理とはニュースサイトで報道関係者でもない一般の人が、様々なホームページを毎回巡回し情報を収集して、自分のアンテナに引っ掛かったニュースを簡単なコメントと共に紹介しているものらしい。

その中で廃絶の理とは結構有名なニュースサイトとして多くの人に知られているようだ。

「断華」という、本名なのかハンドルネームなのか、よく分からない名前の方が作っている。

ズラツと並んだニュースへのリンク。

リンク先のページを読むだけで、最近ネットで話題なものはチェックできる。

よくこれだけの更新を毎日できるものだと感心する。

こんなものを毎日更新できるなんて一護からしたら超人か、超暇人のどっちかだ。

この廃絶の理は数あるニュースサイトの中でも、群を抜いて収集するニュースの数が多いみたいだ。

単純に多くのニュースに眼を通したいのなら、新聞社のサイトとここを見れば充分だ。

時事的なニュースをチェックし、今度は今回の公園での殺人事件に関する情報がないか、探してみた。

……探していた事件の記事を見つけた。

そこには発見された時刻や死亡推定時刻、被害者の詳細、事件が起きた地区の事などが事細かに書かれている。

しかも絶対に報道されない、死体の写真まで掲載されていた。

一護はそれを見て気分が悪くなった。

こんなものを掲載してなぜ消されない。

(このサイトはアングラかよ…!?)

アングラとはアンダーグラウンドの略。

つまり地下だ。

アングラのニュースサイトは突っ込んでいかないようなところまで、情報を集めてくる事で有名だ。

毎日見ていると気が滅入るようなサイトである。

だから、たまに見るのが丁度良い。

もしかしたら、このサイトはアングラに近いサイトなのかもしれない。

取り敢えず、一護は死体の写真を見ないように写真の横に書いてある記事を読む。

内容は昨日見た報道より詳しい事が書いている。

殺された人は鋭利な刃物で切り刻まれ、殺されたようだ。

腹を真一文字に深く切られ内臓が飛び出し、それから眼球を抉られ、喉の奥を抉られ、性器を抉られ、脳を抉られ、内臓を抉られていたようだ。

こんな殺し方は、あまりにも非道だ。

本当に殺人犯が人間なのか疑いたくなる。

一護は読んでいるだけで吐きそうな位、気分が悪くなった。

そして、同じような事件が数十年前にも空座町で起きたらしい。

あの時の犯人は未だに捕まっていない。

一護は過去のその事件を調べるのは止めた。

もう精神的にきついからである。

「石田の野郎、何でこんなサイト知ってんだよ？」

今さらだが、そんな疑問が頭に浮かんだ。

一護はブラウザを閉じ、システムを終了させモニターの電源を落とす。

そして鞆を持ち、時計を見る。

夕方の6時過ぎ。

もう最終下校時刻前だ。

一護は情報室を後にし、鍵を職員室に渡し、帰路についた。

家に帰る途中、迷子の男の子を見つけた。

泣いている。

どうやら、親と逸れたようだ。

一護はその子連れ、交番に届けた。

そんな事で時間を費やし、見れば夜の7時になっていた。

夜の7時まで家に帰らないと父親の一心が煩い。

黒崎家の夕食は每晚7時と決まっている。

7時を過ぎると一心の血の制裁を喰らう事になる。

最近は喰らっていないが。

一護は早足で暗くなつた夜道を歩きながら家に帰る。

そして、一護は異変に気付く。

家の明かりが全く点いていないのだ。

普通なら電気が点いていて当然の時間。

一護は不審に思いながらも家の玄関を開け、中に入る。

物音一つしない。

その静けさが少し恐怖心を抱かせる。

廊下が暗くてよく見えない。

だから電気を点けようと、スイッチを入れるが電気が点かない。

ブレーカーでも落ちているのかと思うが、何かおかしい。

一護は靴を脱ぎ、リビングに向かう。

何処かに出掛けているのだろうか。

「ッ!！」

リビングに向かう途中、一護は急に異様な感覚に襲われた。

この感覚はあの時の、昨日の公園での殺人現場で圧迫されたような感覚。

一護の頭に一瞬、昨日の殺人現場の光景が鮮明に蘇った。

その時、一護はまさかかと思った。

そのまさかには外れて欲しい。

一護は早足で歩き、リビングの扉を開ける。

開けてしまった事を一護は後悔してしまった。

暗闇に眼が既に慣れていた一護の眼に最初に映ったのは、赤い紅い液体。

例え、暗闇に眼が慣れていなくても月明かりがリビングの窓ガラスから侵入していて、よく見える。

その液体が部屋中に飛び散っている。

ソファやテーブル、テレビ、窓ガラス、壁、カーテン…彼方此方にだ。

一護の視線が下の方に移る。

下の方に視線を絶対に向けたくは無かった。

けど、見ないと何も言えないし、何も考えられない。

床には赤い水溜り。

その水溜りの先に一つの影があった。

それを確認し、それが何なのかを理解した一護は声にもならない悲鳴を上げた。

そう、その影は紛れもない遊子だった。

遊子が床の赤い水溜りに浸かる様に倒れている。

一護は遊子に駆け寄ろうとする。

だが、一歩足を動かした途端、足で何かを蹴ってしまった。

柔らかくて、少し重い物。

一護はゆっくりと蹴った物を見る。

それは血だらけの黒崎夏梨だったものだった。

「うわああああああつ！！！！」

一護は叫んだ。

妹が二人共死んでいる。

それを理解してしまった一護の胃が跳ね上がる。

苦くて酸い液体が食道を上がってきた。

「げええ…っ！」

一護は胃の中の物を吐いてしまった。

あまりの事に足が竦む。

手や足が痺れたかのように力が入らない。

一護は深い悲しみより、恐怖感の方が強かった。

そのお陰か、一護は前からする微かな物音に気付けた。

一護は音のした方を見る。

そこには異様な物が立っていた。

それが人だと分かった時には全てが遅かった。

全身黒づくめの男が動いたかと思うと、一護の視界が完全なる闇へと墮ちる。

「テ……」

テメエと叫ぶつもりが、その刹那より前に一護は声を失った。

真なる闇に銀の一閃。

何かが一護の喉に当たった。

黒衣の男は一護の喉に手を伸ばしている。

何かが喉にめり込んでいる？

男は一護の喉をついたそれを半回転させる。

ゴリツという音と共に喉に液体が溢れた。

それは刺さっていた。

「げ……はっ！」

液体と共に強烈な不快感と焼けるような熱さが湧く。

「う……あ、げはあっ……げえ……」

男は一護の腹を蹴り、廊下に出す。

焼ける液体が喉と鼻に溢れる。

一護は足が無くなったかのように、そのまま膝を折り倒れた。

(これは…血…だ…!!)

一護はそれが何なのかを理解した。

「げ…うう…！」

ごぼごぼと泡立った血を吐き出す粘液と赤黒い血液が混じり合う大量の血。

喉に残る違和感、痛みでは感じない焼けるような感覚と強烈な不快感に残る。

これはナイフ？　メス？　意識した瞬間、ようやく遅れた激痛がやってきた。

「…うげえ…げ…げはっ…！」

突っ伏したまま大量の血を吐き捨てる。

言葉にならない激痛。

神経が寸断されるかのような感覚。

だが、痛みが戻ったお陰で一護の意識が少しだけ鮮明になる。目の前に黒衣の男が立っていた。

(クソ！　畜生！　クソクソクソクソオッ！！)

一護は男を睨みつける。

出血が多過ぎるせいか眼が霞んでよく見えない。

だから男の姿が詳しく分からない。

男は一護を見据えている。

そんな男の姿を見ている一護の憎悪が激しく高まる。

(許さねえ！ 許さねえ！ 許さねえ！ こいつは殺す！！ 絶対に殺してやる！！！！)

一護の憎悪の念が更に強くなる。

頭の中がジンジンと熱く感じる。

まるで脳が赤熱化した鉄に変わったようだ。

怒りと殺意のみが一護の生を実感させている。

男は一護の喉に刺さった物を抜き取る。

一護は一瞬苦悶の声を上げた。

そして、男は抜いた物を一護の脳天目掛けて振り下ろした。

一護が最後に聞いた音は自分の脳に何か刺さった音。

今までの痛みが嘘だったかのように消えた。

… 全てが闇に堕ちる。

… 一護の世界が消えた。

第42斬 【一つの結末】（後書き）

書いていて気持ち悪くなった自分。

これはある作品をモチーフにしているから此処までで何の作品が分かった人がいるかもしれませぬね。

第43斬 【違和感】

.....!!!!!!

一護が目を大きく開け、目を覚ます。

(…夢を…見ていた…のような気がする…。とても…嫌な夢を…)

その証拠に起きたばかりの一護の身体は汗でびっしょりと濡れていた。

今の季節は冬。

こんなに寝汗をかくほど、暑い夜ではない。
起きたばかりなのに、どっと疲れた感じがする。

(どんな夢だったっけ…。思い出そうにも、全く思い出せない)

とても嫌だった、という余韻しか残っていない。
不図、顔に触れると、頬が涙で濡れていた。

「…ふう」

朝から夢で落ち込んでいても仕方ない。
服の裾で顔を擦る。

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。
時計を見る。

少し早めに起きたようだ。

一護は制服に着替え、下の階に向かう。

一階に行きリビングの扉を開ける。

「あ、おにいちゃん！ おはよう！」

「おはよう、一兄」

妹の遊子と夏梨が一護に挨拶する。

いつもの二人の声。

毎日聞いている遊子と夏梨の声だ。

「おう、おはよう」

分かっていた。

毎日必ずする挨拶なのだ。

今更驚く事など何も無いはずだ。

(なのに…何だ…この違和感は)

「…どうしたの、一兄？」

夏梨が一護の様子がおかしい事に気付いたようだ。

「何でもねえよ。顔洗ってくる」

一護はそついい、風呂場の洗面台に向かった。

洗面台の前に立ち蛇口を捻る。

胸に蟠るもやもやを消し去る為に、勢い良く冷水で顔を洗った。

寝汗をかいていたせいか、洗顔がいつもよりも気持ちよく感じた。

(それにしても、あの違和感は一切何だったんだ…？ 昨日の出来

事で思い当たる事はない。やっぱり夢が原因か…)

一護は夢を思い出そうとする。

そして、夢を思い出そうとした瞬間、胸の奥がグッと苦しくなるような感覚に襲われた。

「…く…っ」

形容し難い不快感が身体の奥をゆっくりと蠢く。

不吉な予感が実体を持つようとしているような、曖昧かつ濃厚な気持ち悪さ。

一護はもう一度冷水で顔を洗い、落ち着きを取り戻そうとする。

(これは…精神的なものだ)

病気や怪我といった具体的な害ではない。

一護はタオルで顔を拭く。

その時には不快感は消え、若干の精神的な疲労だけが残った。

一護がリビングに戻ると、既に朝食が出来ており食卓に着いた。

いつも通り朝食をとり、遊子たちとは一足先に家から出て、学校に向かった。

家から出ると一護は空を仰ぎ見た。

今日も快晴。

突き抜けるような青。

空を高く広く感じる冬。

いつもと変わらない冬の空…それなのに。

(どうしてこんなに、空虚に感じるんだ)

それに目の前にいた遊子と夏梨もあのまま霧散してしまいそうな程、儂い存在に感じた。

あの時、なぜか涙が出そうになった。

（一体どうしちまったんだろうな、俺は）

一護は足早に学校に向かった。

少し早めに家を出すぎた一護は少し遠回りをして学校に向かう事にした。

ついでに気分転換もかねて。

公園に足を踏み入れると視界一杯に桜の木が目映る。

（…！）

強烈な違和感が一護の中を走り抜ける。

見慣れた道が、まるで異界に通じる禍々しい通路のように感じた。

朝日が道を照らし、まだあまり木に葉が生っていないが、見る人が見れば綺麗な公園だ。

だが、その綺麗な公園の皮を剥けば、底知れぬ闇が溢れ返ってくる。そんな印象を一護は受けた。

（一体…どうしてそんな印象を受ける…！？）

一護の足が止まる。

この先に行つては駄目だ。

一護の何かがそう叫んでいる。

でも、どうして…？

…理由などは無かった。

でも、此処を通らないと学校には行けない。

行けるには行けるが遅れてしまう。

一護は自分の不自然な考えに戸惑いが隠せない。

「まったく、訳分かんねえ」

一護はまとわりつく暗い澱みから逃げ出すように、足早に歩き出した。

理由も定かで無い妙な感覚に振り回されるのが不快で仕方なかったのだ。

「……………っ!？」

目の前に広がる異様な光景。

黄色い立ち入り禁止のテープに囲われた空間。

青いシートに隠された死体。

(俺は、これを…知っている…?)

なぜ、知っているのだ？

「ちょっと、そこの少年！」

突然後ろから声を掛けられた。

一護が後ろを振り返ると、警察の人がいた。

「この公園は現在立ち入り禁止になっている。何処から入った？」
警察の人が困ったような表情で聞いてくる。

(…こんな事が…前にも何処かで…あったような…)

記憶に検索をかけてみても、全く憶えていなかった。

(…気のせいなのか…?)

じゃあ、この強烈な感覚は一体…。

「立ち入り禁止…？ 普通に入れたぜ」

「何？」

いつまでも黙っていると不審に思われるので、一護はそう答えた。

「普通に南の出入り口から入れた。立ち入り禁止とか、そんなもん全然してなかったぜ」

「…チェック漏れがあったのか…？」

どうやら警官の不注意だったようだ。

「…」

黄色いテープで囲われた犯行現場の周りに立つ警官たち。

ドラマなどで見た光景と変わらないそれは、何だか現実感が無くて、
少しだけ滑稽な感じがした。

本物っぽい、いや、本物だからこそ、嘘臭い感じが際立ってしまう気がした。

「あの、すいません。そろそろ学校に行かねえといけないんですけど」

この公園での事で時間を忘れていた一護は近くにあった時計台の時間を見て言った。

そろそろ行かないと結構やばい時間に差し掛かっていたのだ。

警官が一護の方を向き口を開く。

「…君は空座一校の生徒か？」

「はい、そうですけど」

「そうか、ちょっといいかな」

警官が一護の学年や住所などを聞いてきた。

それに一護は答える。

これで、この場は通してもらえらしい。

本来なら事情聴取をしなければいけないのだが、今回は見逃してくれた。

一護は異様な空間から逃げ出すように公園を出た。

学校での朝のホームルームが始まった。

担任の越智美諭は教卓に立つと珍しく真面目な表情になっていた。

(何でだ…？ 先生が何を言うかが分かるような気がする)

一護の心が平然としている。
あの現場を見ていたから…？

(いや、これは今朝の違和感の延長…)

いつもと変わらない朝に戸惑いを感じて、異常な光景には平然としている。

一護の中の日常と非日常が逆転してしまったみたいだ。
それが違和感と冷静さの原因か。

あの光景を知っていた、という感覚。
直感的にそう思ったけれど、どう頭を捻ろうとも、そんな記憶はない。

見た事の無い場所を、いつか見たように感じる。

(こつこつこのを既視感って言うんだっけ?)

そんな事を考えている内に先生が口を開いた。

「本当だったら体育館で全校生徒の前で伝えるべきだったんだが、
教室で言う事になった」

先生のセリフに教室内がざわめく。

「ほら、静かにしろー」

先生が出席簿で教卓を叩き、生徒のざわめきを止める。

「今日の明朝、すぐその公園で殺人事件が起きた。警察が言うには通り魔の犯行の線が強いらしい。登下校の際はなるべく一人ではなく複数で帰るように」

一護はこのセリフを何処かで聞いた感じがした。
通り魔の事件。

海外の事件の話でも聞くかのように、まるでリアリティを感じる事が出来ない。

自分の冷淡さに気分が滅入った。

そんな事のせいで授業は殆ど上の空。

そして、そのまま昼休みになり、未だに教室では事件の話で持ちきりだ。

井上が一護を心配そうにし歩み寄ってきた。

「黒崎くん。大丈夫？」

「ん、何がだ井上？」

「今日ずっと元気無かったから」

「何だ、そんな事かよ。心配すんな。いつも通りだ」

そこで一護は不図、あの事件の事が聞きたくなった。

「井上は、何かあの殺人事件の事知らねえか？」

「！？え…？」

突然、一護にそんな話題を振られ少し驚いたようだ。

女の子の持っている情報ネットワークは野郎の噂話の比ではないから、その情報源を無視する訳にはいかない。

そういう情報ネットワークで訓練を積んで、やがて少女達はオバさ

んとなり、さらに情報伝達の速度を上げていく。
局所の情報収集能力に関しては、各国諜報機関も真っ青に違いない。
つまり、女の子の情報はバカに出来ないという話だ。

「こんな話は聞いたよ。今回の殺人犯は郊外の精神病院から脱走した人なんじゃないかって…」

「精神病院か…」

「信用していい話かどうか分からないけど、精神鑑定で罪に問われなかった人が、脱走したんじゃないかって噂だった」

憲法何条か忘れたけど、精神病などで責任能力がないと判断された場合、罪が問われないっていう話だ。

でも、そんな脱走があったら、もっと騒ぎになっている。

「それから、これは結構良く聞く話なんだけど…。夜遅くに道を歩いていると、全身真っ黒な服を着た人が、じつとこっちを見てるっていう…」

暗闇に現れる？闇夜の男？ってやつか。

一護もそれは聞いた事がある。

「ずっと前から、そういう噂はあったよね。でも、最近になってその？闇夜の男？を見たって人が多くなってるの」

「…！？」

「背が高くて、全身黒くて…それから、不気味な仮面を付けてるみたいなの…」

背が高く、全身黒い…一護に悪寒が走る。
何だか、とても嫌なものを思い出しかけた…そんな感じがした。
井上も嫌な話をし過ぎたせいか、ひどく疲れたような顔をしている。

「ごめん、井上。嫌な話させちまったな」

「あ、大丈夫だよ。私、役に立てたかな？」

「ああ、ありがとな」

一護は一言礼を言う。

その会話で昼休みは過ぎ、チャイムが鳴った。

それから放課後、一護は帰り支度をした。

そこに啓吾と水色がやってきた。

「一護、これからゲーセン行かね。久し振りにさ」

ゲーセン…そういや、最近行って無いな。

「ああ、構わねえけど」

これといって別に用事は無い。

それに羽を伸ばして遊べば、変な違和感を忘れる事が出来ると思っ
たのだ。

一護達はゲーセンに向かった。

第43斬 【違和感】（後書き）

東方キャラが出てこない現状。

早くこの篇を終わらせないといけない。

でも、まだあまり進んでいない。

本当にやばいかも。

第44斬 【ゲーセンの帰り道】（前書き）

少し遅くなりました。

今回は少し文字数が多いのと、無駄な所が殆どです。

第44斬 【ゲーセンの帰り道】

夕方6時。

一護たちはゲーセンから外に出た。

「いやあ、今日は楽しかったぜ！」

ゲーセンを出た啓吾は背伸びをすると共に笑顔で言った。

「啓吾は万年楽しそうにしてるじゃない。悩み事とか今まで無かったでしょ？」

「いや、俺にだって悩み事の一つや二つ……」

啓吾の言葉が途切れた。

どうやら啓吾に悩み事が無いようだ。

「無いんだね。羨ましいよ啓吾が」

皮肉のように言う水色。

「ちょっとちょっと！ 何で急にそんな話になるのさ！ 人が楽しい気分になつてたのに！」

「あ、ごめんね。つい言ってみたくなくて」

一護は二人の言い合いを適当に耳を傾けていた。

と、一護が二人の話を聞いている中、一護の興味を引く話が耳に流れ込んできた。

「ねえねえ知ってる？ 今日公園で起きた猟奇殺人事件って、昔にもこの町で似たような事件が合ったらしいよ」

「へーそうなんだ。昔ってどのくらい？」

「え〜とね…」

二人の女性が事件の事を話しながら一護たちの前を通って行った。

一護はその話の詳しい内容が気になった。

「なあ、二人共」

一護の言葉に啓吾と水色は話を止め一護を見る。

「何だよ一護？」

「空座町で昔、今日みたいな殺人事件ってあったのか？」

「あったよ。たしか18年前だったっけ？ 知り合いから聞いた話だから詳しくは知らないけど」

水色が答えてくれたが、あまり知らないようだ。

「俺は姉貴から聞いたんだけど、18年前に空座町で連続殺人事件と集団失踪事件があったって話を聞いたぜ。あの事件は全く解決さねずに終わったみたいだけど」

「連続殺人事件と集団失踪事件か…」

啓吾が中々良い情報をくれた。

「もっと詳しく知らねえか？」

「え〜と、たしか…姉貴が言うには…」

啓吾が少し間を置き本題を話す。

「空座町で連続殺人が起こって、町が恐慌状態に陥ったらしいぜ。空座町で立て続けに起こった殺人事件は、死体をバラバラに刻む猟奇的なものだったみたいで、死体を隠す意味すら無いように、間隔を空けずに次から次へと人が殺されたって話した。まあ、その事件も空座町に住む人々の集団失踪を境にぶつり途切れたみたいだけど。因みに、当時その二つの事件は全国規模のニュースにまでなったらしいぜ」

その大きい事件が何の手掛かりも無しのまま現在に至っている。

「つつか一護、何で急にそんな話を聞いたんだ？」

「いや、何となく。ちょっと小耳に挟んだから気になったただけだ。そろそろ、帰ろうぜ」

三人はゲーセンを後にし、無事、家路に着いた。

次の日の朝。

一護はすっと目が覚めた。

昨日の不快な目覚めと比べて、かなり清々しい。

「い〜ち〜ごおおお〜!!!」

清々しいのに、それを踏み潰すような声と足音が聞こえてくる。

一護はベットから立ち上がり、部屋の扉を見る。

瞬間、扉が強く開けられ一心が飛び掛かってきた。

「うつせえええ!!!」

一護は強く一心の顔面に蹴りを入れる。

顔面に綺麗にヒットしたせいで一心の鼻から鼻血が噴出する。

一心はそのまま床に倒れた。

「朝っぱらからうつるせえんだよ」

倒れた一心を一瞥して言う。

そんな言葉を聞いた一心は鼻で笑った。

「何だよ、元気じゃねえか一護」

一心は鼻血を垂らしながら言う。

声柄と今の状態が全く合っていない低い声だ。

「は、何でだよ？」

一心が何を言っているか分からない。

「いや、昨日お前、全く元気が無かったじゃねえか。遊子と夏梨が心配してたぞ」

成程。

たしかに昨日の一護は妙な違和感や不安に駆り立てられていた。それに遊子と夏梨が気付いたらしい。

まあ、家族なんだから気付くのも当然か。

「悪い」

一護は一言一心に謝った。

「何俺に謝ってんだよ。謝るんなら遊子と夏梨に言え。俺は全く心配してなかったからよ」

「そうかよ。謝って損したぜ」

何て親だ。

一護はそう思いながら部屋を後にしようとする。

「待てよ一護」

だが、一心に呼び止められた。

「何だよ？ まだ何かあんのか？」

一護は顔だけ一心の方に向け聞く。

「何か、有ったのか？」

有ったのか？

一心の質問に一護は答えられない。

昨日は変な違和感が有ったのと犯行現場に偶然居合わせただけ。

それだけなのだ。

一護にとって答えられる要素が無い。

「何も無えよ。少し疲れていただけだ」

一護はそれだけ答えた。

学校にて。

今日は昨日とは違い授業にも身が入り集中できた。

妙な違和感などが消えたお陰だ。

そして放課後になり啓吾が一護に話しかける。

「なあ、一護。今日もゲーセン行かね？」

一護たちが行くゲームセンターは商店街にある。

正式名称は空座レジャーワールド。

全国に支店があり、通信対戦系のカードゲームや格ゲー、音ゲーに力を入れている感じた。

今、啓吾や水色、一護たちがハマっているのはオルカナム アニムスという2D対戦格闘ゲームだ。

キャラが特徴的なのと、ゲーム全体のバランスが秀逸で飽きない上、人気が高い。

ネットワーク対戦機能もあるので、それを利用して一年に一度は全国大会が開催されている。

そのオルカナム アニムスに啓吾が群を抜いてハマっている。

実の所、一番ハマっている啓吾が一番下手で、水色が群を抜いて上手い。

井上もたつきも時々プレイしている。
たつきは格ゲーが好きなのか水色の次くらいに上手い。

「ああ、そうだな」

こうして昨日と同じ三人でゲーセンに向かった。

三人はゲーセンの中に入ると早速啓吾がオルカナム アニムスをプレイする。

対戦直前に自分のキャラの特性を6種類のパターンの中から選択するので、対戦が始まってみないと完全には相性の善し悪しが判明しない。

このシステムのお陰で、簡単に絶対的な強者が生まれにくい。その他に、自分の位置から直線的に敵を攻撃できる追撃機能、それを途中で解除できる追撃キャンセル等、使える機能が豊富にある。こういった多様な機能が仇となって、初心者には向かずマニア同士の技の磨き合いになってしまっているのが現状。

一護は今回は積極的にプレイせず、周りの人達のプレイを後ろから観戦している。

なぜか何のゲームをやらせても上手い水色のプレイを観戦していると、色々と勉強になる。

「よっしゃー！ マージナルMの連勝だぜ！！」

オルカナム アニムスをプレイしていた啓吾がガッツポーズをしなから叫ぶ。

啓吾のプレイ画面を見ると、五人抜きを達成した結果が表示されて

いた。

啓吾の言ったマージナルMというのは、オルカナム アニムスのキャラクターの一人。

どんな相手にもカウンターを取れる万能型ではあるが、操作が難しく自分からの攻撃には特色の少ないキャラである。

「いつの間にそんな腕上げたんだよ啓吾」

昨日は啓吾と対戦せず他の人達をしていたので啓吾の現在の腕前は知らない。

今回はオルカナム アニムスの全国大会前って事でかなりの凄腕が集まっている。

その中で五人抜きをするという事は、お世辞抜きに腕を上げている。啓吾の使っているマージナルMはあまりにもクセが強いキャラなので本格的に使っている人は少ない。

メインに使い込むには不向きなキャラを、よくもここまでと思う一護。

「はっはっはっは！ 格ゲーに大事なものは訓練だからな。どれだけ時間と金を投資したことが…」

その情熱を他のものに活かせれば、一廉の人物になれるだろうに…。

「水色に常々フルボッコにされてたからな、今度こそはリベンジしてやんよーっ！」

と宣言する啓吾。

啓吾と水色は同じゲームで競い合う事が多い。

だけど、同じくらい時間をゲームに当てていても十中八九、水色の方が上手くなる。

「それじゃあ対戦しようよ啓吾」

リベンジの雄叫びを聞きつけたのか、水色が啓吾の元にやってきた。

「よっしゃー！ 今日こそは勝ってやるぜえ！」

自信満々の啓吾。

「へえ、五人抜きなんて凄いじゃない啓吾」

「お前に褒められても嬉しくねえよ！ さっさとやるうぜー！」

今までの積年の屈辱をこの場で雪ごうと意気込んでいるようだ。

「一護、次やる？」

水色が聞いてくる。

全く啓吾を見ていないような感じだ。

「いや、俺はいいよ。昨日久し振りにゲーセンに来て全然駄目だったから、やるなら勘を取り戻してからにするよ」

今は恐らく啓吾にも完敗してしまう程のレベルだろう。

「それじゃあ、始めようか啓吾」

画面にNew Challengerと表示される。

水色と啓吾の戦いの火蓋が切られた。

水色の使うキャラはリズというキャラだ。

オルカナム アニムスの中でも弱い部類に入るキャラなのだが、水色はこのキャラだけを限界まで極めている感がある。

通信対戦が可能なゲームなので、空座店のリズ使いとして全国でも知る人ぞ知る存在である。

「ほらほら、どうしたの啓吾」

「くっ！ ……フッフ、中々やるな水色。まあ最初は小手調べってやつだぜ」

一戦目は水色の勝ち。

プレイを客観的に見ていると、最初は互角だったが一戦の間に水色が啓吾のパターンを読み切っていくのが分かった。

そして二戦目。

「オラオラオラオラアッ！ いくぜっ必殺ライザーキック！」

「あまいよ啓吾」

「おいイ！？ カウンター取れんのかよ！?? それじゃ、これでどうだッ!？」

「お！ んー、成程」

「おっしやー！ へっへっへ、最後の二択からのコンボは読めなかったみたいだな水色！」

「んー…でも駄目だよ」

水色が自分の読みが正しいのかを確かめるようにプレイするのが分
かり、それに比べると啓吾はただ必死に戦っている状態。
仏心を見せたのか、それとも、三戦目でいたぶるためか、水色はギ
ロギロのところで負けた。

…これは第三戦の結果を見るよりも明らかだった。

一護はいたたまれなくなつて、そつとその場を離れた。

数分後、啓吾が涙を流し、水色が笑顔で一護の元にやってきた。
結果は聞くまでもない。

「一護、そろそろ帰ろう、もう暗くなつてきたし」

水色が言う。

外を見てみると、商店街なのでまだ賑わっていたが、時間はもう7
時前だ。

「ああ、そうだな」

三人はゲーセンを後にした。

一護は啓吾と水色と別れ、一人暗くなつた線路沿いの夜道を歩く。
人気も無く、物音一つしない。

そこにあいつが現れた。

闇の中から湧き出るように。

影の中から浮き上がるようにして現れた。

「…ッ!？」

一護は驚きのあまり目を見開く。
闇よりもなお暗い黒衣。
不気味な仮面。
そしてキラリと輝く…。

「くっ!」

一護がそれを理解すると同時に、禍々しく光る刃が一護の目の前を
通り過ぎていく。
一護は瞬間的過ぎる刃を転がり避けた。
そして咄嗟に立ち上がり身構える。
男はゆっくりと一歩一歩近づいてくる。

…ヤバイ…こいつはヤバイ。
とにかくヤバイ。

頭の中がチカチカとスパークする。
警報が大音響で鳴り響く。
逃げる! 逃げる!と、どこからともなく声が聞こえてくる。
男が手に持った巨大なナイフを構えもせず、無造作に横に薙いだ。

「くっ!」

びゅんっと言う風を切り裂く音。
身をよじらせて、それを何とか避ける。
再び空を裂くナイフ。
横に転がりながら避けた。
ガシャンと線路沿いのフェンスに背中がぶつかる。

(しまった…！)

この状況で退路を無くしてしまつたら、万事休すだ。

一護は周りを見ると、自分の横の方に何かがあった。

それは鉄パイプだ。

フェンスの根元に鉄パイプが転がっているのを見つけた。

一護はスライディングをするかのように鉄パイプの落ちてる方に移動する。

そして、地面の土もろともパイプを拾い上げた。

男は一護と対峙する。

相手は肉を裂き骨を断つ刃物。

一護の獲物はただの鉄のパイプ。

だが、さつきと比べれば勝算は感動的なほどに確立を増した。

「うおおおおおお！！！」

一護は先手必勝とばかりに、鉄パイプを握って突進する。

振れば隙を突かれる。

狙いは男の手。

突きで男の手からナイフを落とさせるつもりだ。

…だが、男はナイフを構えようとせず、片手を一護に突き出した。

「死ね…虫けら」

黒煙にも似た濃厚な気体が浴びせかけられる。

(ガス…！？)

鼻を突く刺激臭で目も開けられなければ、息をする事もままならぬ
い一護。

(このままじゃ、殺される！)

逃げ出そうと体を捻った時…

世界が爆発した。

「!?!」

違う…爆発したのは一護の周りの空気。

全身が一瞬で炎に包まれた。

「あ…」

火だと認識したのは一瞬の事。

そこから先はただの地獄だった。

「ぐああああああああああつ!!!!!!!!!!」

衣服が瞬時に液状化し、肉に張り付き焼き焦がす。

炎が耳に轟音として届き、脳が攪拌かくはんされるような痛みが走る。

眼球が煮え爆ぜ、皮膚が爛れ縮み、器官に灼熱が流れ、肺を焼く。

もう悲鳴すら上げる事が出来ない。

数秒後、一護は炭化しつつある皮膚を崩しながら、アスファルトに
倒れ込んだ。

何なんだ、これは…?

ガス…炎…?

自分の死の理由すら分からないまま、全身を走り抜ける炎の激痛で、
一護はショックのあまり心停止した。

…全てが闇に堕ちる。

…一護の世界が消えた。

第44斬 【ゲーセンの帰り道】（後書き）

ネタバレ注意

今週のBLEACHで獅子河原が倒されました。

残るはリルカ、月島、銀城だけ。

取り敢えず、リルカは戦うのかな？

予想では戦わない気がする。

何か和解しそう。

月島はどうなるか予想できません。

銀城は新たに力をつけた一護の卍解にやられそうな予感。

やっぱり戦いの中で斬月のおっさんが出てくるのかな？

これからのBLEACHの展開が楽しみです。

第45斬 【お喋り女】（前書き）

今回は朝の朝食、井上の噂話は《省略》させてもらいました。

展開的に第43斬【違和感】と同じなので。

ですから朝の寝起き部分が終わったら、直ぐに放課後です。
手抜きをしてみません。

もし、入れてしまったら文字数が凄い事になるので。

第45斬 【お喋り女】

.....

「.....ッ!..!」

一護は飛び起きるように、上体を起こす。
全身からべとつく汗が滲み出している。

(...夢を...見ていた...ような気がする...。とても...嫌な夢を...)

内容は欠片ほど覚えていないが身体に残る不快感が、悪夢に魘されていた事を物語っている。

「!?!?..!」

突然、ズンツと重い感覚が胸を走る。
それと同時に視界がホワイトアウトする。
きつい眩暈が走った。

「.....」

直ぐに眩暈は治ったが、起きたばかりのたるさも相まって、不快感が増してしまう。

一護は汗で濡れた両掌を見る。

「.....!..!」

一瞬...指が?消えた?ように見えた。

「…はっ、まさかな」

眩暈の直後だったから、視界がおかしくなったただけだ。

「そくに…決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

《省略》

放課後。

一護は公園の方に行った。

警察による現場検証が済んだようだ。

公園全体に対する立ち入り禁止の措置は、既に解除されていた。

あの場所に行くと、変わらずテープで囲われ、警察が立っていたが、

朝の雰囲気とは違っていた。

野次馬が沢山いるのだ。

まあ、居ても仕方ない。

朝と全く同じ状態なのに、朝の緊迫感が殆どない。

と、その野次馬の中に有沢竜貴がいた。

「たつき！ 何してんだよ？ こんな所で」

一護が声を掛けるとたつきが一護の方を向いた。

「！一護…あんたこそ何で此処にいんだよ？」

「何でって…ただ通りかかったただけだよ」

「そう…そういや一護。あんた何か今回の事件について色々聞きまくってんだって？ 織姫から聞いたよ」

あからさまに話を逸らした。

それにそんなに聞きまくってはいない。

「実はあたし、そういう話に凄く詳しい人知ってた。紹介してやろうか？」

「詳しい人…！」

話を逸らした理由はどうであれ、そんな人を紹介してくれるのは有り難い。

「ああ。多分今も学校にいると思うから行ってみるか？」

「いや、流石に今日は迷惑だと思うから明日で…」

そう一護が断ろうとしたら、たつきが一護の腕を掴んだ。

「いいから。どうせ、あいつ暇だろうし」

そんなこんなで強引的に一護は学校に連れて行かれた。

学校に戻ると、一護は情報室に連れて行かれた。

情報室に入ると一人の女子生徒がパソコンをしている。

「おい、華！ ちょっと用事有るんだけど今良いか？」

たつきが女子生徒に声を掛けると女子生徒は二人の方を振り向く。

「あ、たつきちゃん。良いよ別に」

女子生徒はパソコンの電源を落とし、二人の方に歩み寄ってきた。

「あれ、そちらさんは？」

女子生徒が一護の顔を見て聞く。

「ん、ああ。こいつは黒崎一護って言うてあたしの友達だ」

「どうも」

たつきに自分の事を紹介された一護は軽く頭を下げる。

「黒崎さんですね。私は華断はなたちと言います」

華断も自分の名を名乗ると頭を軽く下げた。

華断は赤い髪に黄色いリボンで後ろの長い髪を二つに纏めツインテ

ールにしている。

「で、たつきちゃん。用事って何？」

「一護がちょっと聞きたい事があるらしいのよ」

「聞きたい事？ 何ですか？」

たつきから一護の方に顔を移す。

「いや、ちょっとした事を聞きたいんだ」

「じゃあ、話して下さいな」

そういうと華は情報室にある椅子に座った。続いて一護とたつきも椅子に座った。

「一護。華は一度何かを話すと止まらないから気をつけるよ」

と、たつきが一護に耳打ちしてくる。

どうやら彼女はマシングントーク娘らしい。

だが、そんな事を一々気にしない一護は本題に入る。

「それじゃあ、二つ程聞きたい事があるんだ」

「はい、何でしょうか？」

「公園で起きた殺人事件の事を知ってるだろ？」

「勿論ですよ」

まあ、今日のホームルームでも言われたから知らない方がおかしい。

「俺はあの事件に少し興味が有ってさ、クラスの女子から色々とな噂を聞いたんだ」

「変な噂？」

「夕暮れ時に全身黒尽くめの男が現れて、こっちを見てるって話なんだけど」

「？闇夜の男？の噂ですね」

一瞬で言い当てられた。

「ああ、それならあたしも知ってる。最近見たって人の話だと変なマスクを付けてるらしいよ」

マスク…

「変なマスク？ プロレスラーが着けるみたいなの？」

そりゃあ、夜道で黒尽くめのプロレスラーに会ったら、かなり怖い。

「いや、能面のような変なマスクだって聞いている」

……

一護の脳裏にやけにリアルなイメージが湧いてくる。

能面の泥眼のような不気味な面。

不快感と嫌悪感、そして怒りにも似た感情がない交ぜになって胸に

込み上げる。

(何だろう…この感覚は…?)

「その情報は何かねえか？」

変な感覚は置いとき話を進める。

「…その最近の目撃例が、ちょっと引つかかるけど…メン・イン・ブラックの噂は珍しくありませんからね」

「メン・イン・ブラック？」

「いわゆる都市伝説の類です」

「都市伝説？」

「昔は伝説なり民話なり怪談なり、人間の理解を超えた怪異つてのが結構身近にあったんです。何か不思議な事が起きても「それはナニニの仕業じゃ…」とか言っつて、一応納得する事が出来たんです。でも近代化するに従って、科学的にありえないものは無いと切り捨てられてしまった訳です。辛うじて幽霊の存在は信じている人はいますけど、人を化かす狸や狐を信じる人は少ないでしょ？」

「確かに」

事実、一護は幽霊が見えていたので信じるも何も無い。

死後の世界の尸魂界にも行った事があるし。

「有るかもしれないが無いが変わっても、理解できない事、不気味

な事は起こり続ける。そうになると、迷信として切って捨てた存在が形や名前を変えて現れる事になる。それが都市伝説なんです」

妖怪が出たと聞いても信じる気にはなれないが、黒尽くめの人攫いが現れると聞けば、ありえない話ではない。

でも、昔の人に見れば、妖怪もありえない話ではないという事だ。

信じるものや感覚の違いこそあれ、レベルは一緒という事なのだろう。

「空座町近辺だと？闇夜の男？の噂は聞くけど、これはオーソドックスな都市伝説ですね。昭和の始めに赤マントという都市伝説が生まれましたが、雰囲気はそれに近いですね」

赤マントなら一護もたつきも聞いた事がある。

「さつき言ってたメン・イン・ブラックって何？」

「それは黒衣の男の事です。メン・イン・ブラックっていうのは少しアメリカ的な言い方です。アメリカは元々植民地で、土着の伝説や民話が少ないせいで怪異の理由を、あっちに求める傾向が強いです」

と、言っ指を上に向ける華。

「…天井？」

「…空？」

一護とたつきが上を答える。

「宇宙です。アメリカ政府は宇宙人と密約を交わしていて、その事実を知ってしまった人間を攫ったり、記憶を消したりするエージェントがいるって話。それがメン・イン・ブラックです」

「んな、バカな」

でも、妖怪も闇夜の男もメン・イン・ブラックと変わらない。

「どんなに近代化し都市化しても、そういう不思議な現象がないと、人の心はバランスが取れないという訳です。人間は怪しい事を無視する事も、そして語らずにいる事も出来ないんです。逆に語る事によって、怪しいものに説明を与え、納得しようとする。全てのものに意味があると考えたがる心理。それが現実と現実との間にある、空白を埋めようとする訳です。そうして、科学信仰に満ちた現代社会でさえ、都市伝説を生み出すんです」

この話題に関しては、何となく納得できる。

「更に言えば、この世界の全ての事象は言葉にされた段階で怪しいという本質を失うのです」

?言っている意味がよく分からない。

「つまり、この世に怪しい事なんて何も無いんです」

(飛躍してねえか…? 何か騙されている気がしてならねえ…)

「そつえば、口裂け女という都市伝説は知ってます?」

「口裂け女…知ってるけど。何か関係あるのか？」

「ありますよ。要は都市や近代というものが生み出した現象なんです。あれは整形手術に失敗して発狂した女性が、精神病院を抜け出したっていう話なんです。口裂け女の話が最初に発生した時期と場所は、実は特定されているんです。1978年末の岐阜県。そこから愛知や滋賀、次いで京都を始めとして、まずは西の方へと伝わっていった。そしてほぼ全国に伝わった後の79年6月、マスコミに取り上げられて、都市伝説としては決定的になったんです。まあ、それはどうでもいいんですけどね。問題はなぜ口裂け女か何です」

「どういう事だ？」

「どうして整形手術の失敗なのか？ どうして精神病院から抜け出すのか？」

確かに整形手術と精神病院の繋がりが分からない。

「この場合、精神病院というのは特殊ではありません。都市伝説のブラックボックスとして、噂にはよく使われているガジェット何です。黄色い救急車とか今もよく聞くでしょ？」

何だか、脱線し始めてる気がする。

「でも黒崎さんは黄色い救急車なんて見た事ありますか？ 無いでしょ？」

「そういえば…ないな」

「つまり現代社会の狂気は、古代社会の化物と同じ扱いになってい

る訳です。分からない事があつたら精神病。そうやって恐怖に対して安全弁を働かせているんです。大衆という存在は」

確かに、そうなのかもしれない。

病院に世話になったのは、内科とか整形外科とかばかりだ。普通に暮らしてたら、精神病や精神科というのは縁遠い存在だ。

「整形手術というのは面白い事例ですね。この都市伝説が流行ったのは78年から80年頃。つまり、その頃は整形手術がまだそんなメジャーではなかった事が関係しているんです」

「?メジャーとかマイナーとかが関係あんのか?」

「精神病院と同じです。恐ろしい物、嫌な物があると、人々は未知の領域にその責任を押しつけるんです。だから整形手術の失敗というのは、まさにその時代だから成立しえたことなの」

成程。

分からないから仕方ない。

そう思ってしまった方が、精神衛生上いいって事だ。

「何となく分かったけど、口裂け女つてのは要するに何なんだ?

何が恐くて、そんな噂が広まったんだろうな。整形手術に失敗するのは怖いだろうけどさ、それだけじゃなさそうだよな」

「良い質問ですね。それに答える前に...ところで、噂話を広めるのは誰だと思えます?」

「え? マスコミ...か?」

「いいえ。実は噂話を広める主体は主に少女なんです。主婦なんかもその主体になりやすいんですけど、この場合は一度ワイドショーで取り上げられてからね。口裂け女の場合、マスコミで取り上げられる前に、既に全国に広がっていたから、それを伝え広めるのは主に少女達と考えられるんです。学校というコミュニティが媒介になる訳」

「それがどうかしたのか？」

「関係大有りです。恐ろしい物、嫌な物から逃避したがっていたのは、つまり少女達だったという事です」

たしかに興味が無ければ話題にはしないからな。

恐がっていた、語らずにはいられなかったのは、女の子って事になるのか。

「受験戦争の全国化、社会の情報化による性情報の氾濫、80年前後という時代はそういう時代だったの。口裂け女イコール教育ママとする説があるんです。つまり受験に対する嫌悪が形となって現れた。それから、裂けた口というのは性器に通じるといふ説もあるんです。思春期の女の子達の性への興味と不安、それが裂けた口というものに現れたという事ね。そうやって人々は不安を解消するの。噂という形で表に出して、カタルシスを得たのね。それじゃあ女の子は、どうやって不安を解消しているのでしょうか？」

「え？」

「解消出来ないの」

一護の答えを待たずに答えを言ってしまう華。

「考えてみてください。少年犯罪の激化なんて事が言われますけど、その犯人は殆どが男の子じゃない。不安を解消出来ずに内に溜めていつて、そして爆発させてしまった結果、それが犯罪となってしまう。犯罪も化物も、私たちに無縁の話じゃないんです。全ては起こるべくして起こるんです」

全ては起こるべくして起こる。

一護はそのフレーズに何か不気味なものを感じた。

「ここがポイントです。現実というのは？発生？するもの。実体じやなくて？現象？なんです」

現実の実体じゃなくて現象？

「それは炎みたいなものなんです。炎に実体はない。火の原子なんて有る訳が無い。でも、燃える物があつて、温度が発火点に達した時、火という現象は存在を始める。」

言われてみるとそつだ。

火には実体が無い。

「化物や犯罪も同じ事。それを滅ぼそうと思つたら、その根を絶つしかないんです。火を消そうと思つたら、水を掛けて酸素を遮断したり温度を下げたり、燃える条件をどうにかしないと駄目なんです。火をいくら叩いたつて火は消えない。噂を否定したり犯罪者を処罰するだけでは駄目。その原因にアクセスしないと。そして原因は一つでは無いわ。いくつもの原因が複雑に絡み合つてそれは存在するんです。原因が違えば、原因の比重が少し違つただけでも、表に出る現象は違つた形を帯びてくる。例えば火のイメージというと赤が

あるけど、あれは炭素が燃えている色ね。木、紙…私達の周りの燃えやすいものには炭素が多いから、赤のイメージが定着しているわけ。ガスの火は赤く無いでしょ？ それから炎色反応なんていうのもあるわ。化学の授業とかで実験しなかったかしら？」

（あれ…？）

「銅ならば青緑、ナトリウムは黄色、カリウムは赤紫…。同じ火でも燃えるものが違うとこんなに違う。因みにいうと、花火っていうのは、このメカニズムを応用したもののなんです」

（何の話をしてたんだっけ？）

「ところで花火って日本の文化のイメージだけど、元々は日本の発明では無かったです。そもそもの最初は勿論火薬の発明。黒色火薬の基礎となる硝石が発見されたのが、紀元前3世紀の古代中国。それから紀元200年頃、やはり中国で黒色火薬が発明されたわ。最初は主に狼煙に使われていた。形態としては、この狼煙を花火のルートとして扱うといいかも。鑑賞用の花火としては、14世紀後半、イタリアのフィレンツェで始まったとされているんです。その後、大航海時代において全世界に伝播。日本に火薬が伝わったのは…」

カー、カー。

「……は！」

カラスの声で一護の目が覚めた。

難しい話が続いていたので、思わず眠り込んでいた。華の声は子守唄にしかならなかったが、別の物音はちゃんと聞こえた。

情報室の窓の外が赤く染まっている。もう夕方のようだ。

華は相変わらず講釈を続けている。

フランス革命だとか立憲主義だとか、重商主義とかアメリカとか。一護の聞きたい話とは関係ない。

そもそも一護が寝ている事さえ、華は気がついていない。

一護は陶酔している華を無視して帰る事にした。

「たちき、起きろ」

小声でたつきを起こす。

「ん〜」

目を開けるたつき。

きよろきよろと周りを見回す。

「帰るぞ」

寝ぼけ眼のたつきの手を引いて、そつと情報室を後のした。

案の定、華は気付いていないようだ。

閉められた情報室の中から、滔々と華の声が聞こえてくる。

「つまり民主主義の暴走が全体主義を生み出す訳で、民主主義を金科玉条にするのは非常に危険な……」

未だに流れてくる華の声から逃げるように去った。

第45斬 【お喋り女】（後書き）

灼眼のシャナが三期か。

二期から、かなり長かった気がする。

灼眼のシャナ？はまだOPしか聞いていません。

一話が始まっているので早く見ないといけない。
でも、何だろ。

釘宮理恵の声がどうにも好きになれない。

因みに好きなキャラは啓作とヘカテーかな。

あんな感じのキャラは結構好きなんで。

続いてとある魔術の三期も早くやってほしいな。

第46斬 【路地裏】（前書き）

前半部分が少し大雑把になってしまいました。

第46斬 【路地裏】

次の日の朝。

一護はすつと目が覚めた。

昨日の不快な目覚めと比べて、かなり清々しい。

「…親父は来ねえのか？」

こういう朝は大体親父が急に現れるのだが現れない。

ただど別にそれ程気にする事ではないので、いつも通り制服に着替え、一階に下りた。

遊子が言うには明朝から親父は診察室に籠もりつきりらしい。

学校が終わり、放課後にて。

一護は遊子から頼まれていた買い物をする為に商店街に向かった。その商店街に向かう為に、あの公園を通った。

公園のあの場所は昨日みたいな野次馬は居ず、普通に人が通っている。

だが、変わらずテープであの場所は囲われている。

不図、近くのベンチに目をやった。

そこに一人の小学生くらいの少年が呆然とベンチに座って前を見ている。

その少年を見た時、なぜか昔の自分を思い出してしまった。

昔の、母親が死んだ日の自分を見ているみたいだった。

一護はその小学生に声を掛ける事が出来ず、そのまま商店街へと向かった。

商店街に着くと一護は啓吾と水色に出会った。

二人共、これから空座レジャーワールドに行く途中だった。時間に余裕が有ったので一護も空座レジャーワールドと一緒に行事にした。

それから…

「くそ…っ！」

一護は一言そう言った。

ゲーセンから出ると、既に外は夕方で6時を過ぎている。

遊子から買いたい物を頼まれていたのにゲーセンで遊んでいたら結構ヤバイ時間になっていた。

まだ、買いたい物は済ませていない。

一護は急いで買いたい物を済まそうと思った時、視界に見知った人物が目に入った。

「…あれは…」

夕闇に沈み行く街。

そんな中で有沢竜貴を遠目で発見する。

高架下を通って、繁華街の外れから旧商店街へと抜けるところだった。

「たつき…」

おかしい…。

北口の商店街は廃墟みたいなシャッター街。

（そんなところに何の用が…？）

不安に駆られる。

一護はたつきが消えた方へと走り出した。

高架下から旧商店街に抜ける。

旧商店街は戦後すぐの市場から、自然発生的に出来たものなので、複雑な上に道が狭い。

区域は広くないのだが、裏路地も大量にあって迷路のようなものだ。

町の区画整備が進んで、商店街の南側が明るく綺麗な街に生まれ変わり、徐々にこの一画は寂れていってしまった。

たつきが入っていったのは、旧商店街の中でも最も寂れているところだった。

殆どが店をたたむか、商店街の南に移動してしまい、こんな時間でも開いていない。

一護はそんな中を走って追いかける。

「うわ…」

旧商店街も通りに面した場所は、まだ開いている店もちらほら有ったが、裏路地を進んだ此処は、まるで廃墟だった。

無駄に点いている蛍光灯だけが、この場所が人の通れるところだと教える。

(こんな場所に何でたつきが?)

倍増する不安を胸に、一護は奥へと進んでいく。
迷路のように入り組んだ裏路地。

所々で外に通じる道から、オレンジ色の光が差し込んでいたが、それも見えなくなった。

外が夕闇に包まれた証拠だ。

入り組んでいるとはいえ、旧商店街はそれ程広くはない。

追いつけないって事は、いつの間にかたつきは此処を抜けて、帰ってしまったのかもしれない。

「うわぁあっ!?!?」

「うおお…?」

たつきと出くわした。

「な、何で一護が此処に…?」

「俺はお前が、こんなところに入って行くのを見たから気になって追いかけてきたんだ。一体なんでこんな所にいんだよ?」

「それは…」

たつきが口籠る。

「…実はね、昨日殺された女性はうちの道場に通う子の母親だったんだ」

「何…!?!?」

突然の事に一護は驚いた。

そして合点がいった。

昨日、たつきがなぜ、あの場所に居たのかが。

「その子ね、昔のあんたと一緒にすぐ泣く子だったの。でも、あんたと一緒に迎えに来たお母さんの力が見ると、すぐにニコニコなんの。本当にあんたと一緒にそれが嫌だったわ。ヘラヘラしててお母さんにベツタリの甘ったれ…そのお母さんが昨日殺されたって分かった時のあの子は…と、あそこに居るの。お母さん捜すためにウロウロウロウロ、疲れたらそこにしゃがみ込んで、しばらくしたら立ち上がってまたウロウロ…見てらんなかったのよ…あの時のあんたと一緒に…」

たつきのセリフに一護は自分の過去を思い出していた。

あの時、一護は一人で苦しみ、悲しみ、誰にも頼ろうとせず、全て一人で背負い込んでいた。

だが、それが一番弱いと家族に気付かされ、苦しみや悲しみを家族と共に背負い、立ち直った。

「だから、あたしがあの子からお母さんを奪った犯人を捕まえて、あの子の前で謝らせる。あたしにはそれ位しか出来ないから」

「けど、相手は殺人犯だぞ。危険過ぎるだろ」

たつきは片腕を骨折していてもインターハイで準優勝するほどの空手の達人でも、相手が悪過ぎる。

「もう、あんな姿見たくないんだよ。あたしまで悲しくなっちゃうだろ」

「…」

一護は昔、本当に色んな人を悲しめていたと改めて理解した。

「俺にも、その子に会わせてくれねえか？」

「え…？」

突然の一護の発言にたつきは少し驚いたようだ。

「俺ならその子の気持ち分かる。自分が間違った事をしてるって事が。だから、会わせてくれ」

「…ああ、分かったよ」

たつきは少し微笑んで答えた。

ここまで二人が会話をした時。

「…」

たつきの背後の闇から滲み出るように、不気味な仮面の男が姿を現した。

「あ…！」

「え…？」

黒衣の男はサバイバルナイフを振りかざす。

問答をする時間もなく、躊躇すらない。

一護はたつきの腕を掴んで引き寄せる。

そして、抱き込むようにして、刃に背を向けた。

「くっ!!」

背中に焼き付くような感覚が迸る。

「い、一護っ!?!」

「たつきっ!! 走れ!!」

一護はたつきの身体を押し、狭い通路を走り出す。

汚水で濡れた地面で滑り足を取られ、放置されたゴミで転びそうになりながら、一護とたつきは走る。

一護はスピードを緩めない様にしながら振り返った。

まるで一護たちに逃げ場などが無いと言わんばかりに、ゆっくりと歩いている黒衣の男。

たとえ逃げ場がなくとも、今は走る事しか出来なかった。

何処をどう走ったのか分からない。

入って来たときの倍以上の距離を、進んだような気がする。

それでも一護たちは、この迷路のような廃墟から抜け出せなかった。

「ハア…ハア…」

「一護、大丈夫か…!?!」

一護はそれに答える事が出来ず、そのまま地面へと倒れ伏した。

「一護っ！」

背中の出血が思ったよりもひどかったらしい。
水溜りに血が混じり、あっという間に赤く染まる。

「もう…動けねえ…。 たつきだけでも…逃げる…」

「ふざけた事言ってるじゃないよ！ あんたを見捨てれる訳ないでしょ！」

分かっていた。

たつきが一人で逃げる訳が無い事は。

「けど、身体が動かねえんだ。 たつき…病院を…救急車を呼んでくれねえか…？」

「でも、電話が…」

たつきが今、携帯電話を持っていない事は承知していた。

一護は携帯電話を持っているが、その事は黙っておく事にした。

「頼む…。 俺を助けると思って、電話を掛けてきてくれ。 それから人を呼んで戻ってくれば良い」

「でも…」

「大丈夫だ。 行ってくれねえと、助かるものも助からなくなっちゃう。 このまま、たつきが急いで行ってくれなかったら、俺は確実に死ぬ事になる」

「……」

「行けっ！」

「……分かった……絶対に戻ってくるから……」

たつきは急いで走り出した。

「……ハア……ハア……」

（俺もとんだ嘘つきになっちまったな。この傷で生きて帰れる訳ねえのに……）

意識が朦朧としてくる。

徐々に視界が暗くなる。

一人で死ぬ事を覚悟して、たつきを行かせたのに、目前に迫った死に一護は恐れおののく。

死にたくねえな……

ぴしゃり……ぴしゃり……。

汚水の水溜りを踏みながら、ゆっくりとやってくる黒衣の男。

「……」

「おおおおおおおおお……！！！！」

シャッターに指をかけ、手だけで体重を支えるようにして立ち上がる。

人一人しか通れない程の狭い通路。
こうすれば、今の一護でも邪魔ぐらいは出来る。

「…」

無言でナイフを一護の喉に目掛けて突き刺す。

「ぐ…！」

貫通しそうなほどに、黒い刃が喉を抉る。
そして一護を引き倒した。

「ぐあああつ…！！！」

一護は男の足にしがみ付く。
死んでも放さないように、抱きつくようにしがみつく。
何度となく振り下ろされるナイフ。

「…あ…が…」

どれくらいの時間稼ぎになるか分からないが、こうしてこいつを血塗れにしてしまえば、そう簡単に表には出られないだろう。

もう、たつきは路地から抜け出せたかな…

降り注ぐ激痛と死の刃の下、たつきを逃がす事が出来た安堵を感じ、
一護は眠りについた。

…全てが闇に堕ちる。

…一護の世界が消えた。

第46斬 【路地裏】（後書き）

BLEACHのアニメが遂に消失篇になった。

銀城の声が中々良い。

そして、OPもかなり良い。

月島がメツチャ格好良い。

やっぱり、半年でルキアが現れる前くらいまではするのかな。

早く次のBLEACHが見たい！！

第47斬 【精神病院】

.....

「.....ッ!..!」

一護は飛び起きるように、上体を起こす。
全身からべとつく汗が滲み出している。

(...夢を...見ていた...ような気がする...。とても...嫌な夢を...)

内容は欠片ほど覚えていないが身体に残る不快感が、悪夢に魘されていた事を物語っている。

「!?!?..!!」

突然、ズンツと重い感覚が胸を走る。
それと同時に視界がホワイトアウトする。
強烈な眩暈が走った。

「...」

じっとしていると、じんわりと視界が戻ってくる。
軽い頭痛もするし、寝起きのダルさと相まって、気分が悪い事この上ない。

一護はこめかみを指で揉みながら、溜め息をついた。

「.....!?!?」

一瞬…手が？消えた？ように見えた。

ほんの一瞬だったが、一護の目には確かにそう見えた。

「…はっ、まさかな」

眩暈の直後だったから、視界がおかしくなったただけだ。

「そつに…決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

《省略》

放課後。

一護は教室に待っているようにと井上に言われ、教室に居る。

何故かは分からない。

井上から噂話を聞くと、もっと詳しい人を知ってるから待っててと
言われ教室に待機している。

「何だ、さつきから変な意味で嫌な予感がする」

この予感は…今まで不快な感じの予感とは違う予感。

どちらかというと、面倒な感じの予感。
面倒な感じの予感…？
意味が分からない。

「まあ、会ってみりゃ分かるか」

一護が一言そう言うと、井上と一人の女子生徒が教室に入ってきた。
赤い髪に黄色いリボンにツインテール。
一護がその生徒を見ると少し目を丸くした。

「黒崎くん、待たせちゃってゴメンね。この子が噂話とかに詳しい生徒なの」

「華断ななたまと言います。黒崎さんの事は井上さんから色々色々と聞かせてもらっています」

色々…？

一体何を聞かせたんだ井上は。

「会えて嬉しいです」

そう言って、華は手を前に出した。

「お、おう。俺も会えて嬉しいよ」

一護も手を出し、握手を交わした。

(…こいつ、やっぱり何処かで会った気がするな…)

一護は不思議とそう思った。

「では黒崎さん。私に聞きたい事とは何ですか？」

早速、華断が本題に入った。

「ああ。じゃあ、聞け。公園で起きた殺人事件の事を知ってる？」

「勿論ですよ」

まあ、今日のホームルームでも言われたから知らない方がおかしい。

「あの事件についてなんだけど、精神病院から脱走したやつがいて、そいつが通り魔の正体なんじゃないかって。そういう噂があるらしいけど、何か詳しい事しらねえか？」

「精神病院から脱走？ そいつが通り魔の正体？ これだから素人は…。明治大正の頃なら、いざ知らず、現代人がこの有様だなんて…。精神病院が都市のブラックボックスに成り易いのは分かるけど、そんな典型的な差別意識で見ても駄目です」

「別に差別してる訳じゃねえけど…」

「日本の制度だと、犯歴がある精神患者とそれ以外の患者を区別しないから、同じ扱いになってしまう…。だからいつまで経っても、こういった偏見がなくなるのかもしれない」

「偏見…」

不図、井上を見る。

既に話についてこれていない様子だ。

「でも最近では凶悪な犯罪を犯しても精神鑑定で、罪が軽くなるやつが多いだろ。憲法何条か忘れたけど」

「憲法じゃなくて刑法ですよ、それは。刑法三十九条。心神喪失者の行為は、罰しない。心神耗弱者の行為は、その刑を軽減する」

事もなげにそらんじる。

(すげえ…)

一護はそう思った。

「そう、それだよ。もしかしたら空座町の病院に、そういうやつが入っていたかもしれねえだろ？」

「それはありません」

否定された。

「黒崎さんが言っている病院っていうのは、町境の空座第三病院の事でしょう？」

「ん？ 名前まで知らないけど、町境のそれ」

町境の街道に抜ける方角に、大きな精神病院があると聞いている。実際に行った事はないが、その方角には大きな火葬場と墓地があるため、精神病院の印象も強かったのだ。

「世間を騒がせるような事件なら大体知っていますけど、あの病院の精神病棟に入院したって話は聞かない。それにあの病院から脱走した人がいたら、少なからず噂を耳にするはずだもの。無いです、それは」

「何で言い切れんだよ？」

「この私が知らないからです」

…何だか分からんが、凄い自信だ。

「それに、猟奇殺人から精神病院なんかをイメージするのは、映画やドラマの悪影響を受けすぎです。典型的思考ってやつです。普通の人が、未だに精神病院に負のイメージを持ってしまつのは、分かんなくも無いのです。実際、精神病院の歴史を紐解けば、目を覆うような陰惨な事実が沢山ありますし、特に町境の空座第三病院は、そついう噂が絶えない場所でしたし」

「やつぱり？」

「元々は空座癲狂院と呼ばれていて、かなり早いうちに建設された精神病院の一つだったんです。多分に漏れず、近代的な医療技術と法制度が整備されるまでは、その時代なりの酷さはあつたらしいけど…それに独逸ドイツの療養院を模倣して作られた石造りの施設だったから、みんな不気味がつて近づこうとしなかつたらしいです」

「だった？」

「十数年前に取り壊されているんです。老朽化のために、ずっと廃墟でしたし。今は総合病院の別院になっていて、長期療養も可能な

綺麗な施設に変わっている。過去のイメージで悪く言うのはいけませんよ」

「あ、ああ……。でも、いくら施設が良くても、殺人狂みたいな奴が入ってた可能性は少しくらいあるだろ？」

「その考え方自体がナンセンスです。例えば、人を傷つけたり、殺してしまうような凶暴性を持った異常者がいたとするでしょ。その人の場合、自分をコントロール出来ていないが故に、簡単に捕まってしまう。警察の捜査能力が高い国で、異常な犯罪を続けるには、それなりに高い知性が必要になってくるんです。心神を喪失している人間には、ちよつと無理な話です」

映画に出てくるような頭のいいサイコ野郎は、フィクションの中のもの存在でしかないのかな。

もし実在していても、こんな場所にはいないって事か。

「というわけで、精神病院と猟奇殺人を繋げる思考っていうのは、実際は無理が大きいって訳です。その考えでいくと、別に病院じゃなくたって、どこに殺人鬼がいようと同じでしょう？ それに、私の情報以前の問題として、そういう事実があるなら、真っ先に警察が動くはずでしょう？ 私はともかく、黒崎さんや井上さんが知っている噂なら、警察だって知っていますよ」

「それは俺も、薄々気付いていたけど……」

何だか一護には反論の余地がなくなくらいに、言い包められてしまった。

……でも、華の言うことに真を受けていいのかと思う。

……ん？

ちよつと待てよ。

「あのさ、異常な犯罪を続けるって言わなかった？」

「言いましたけど？」

「今回の事件以外にも、こんな事が起こっていたって言うのか？」

「うん…警察が正式に発表した訳じゃありませんから、憶測の域を出していないけど、今回の事件は連続した殺人の一つかもしれないんです」

「!?!」

「空座町だけでみたら、こんな大事件は他にありませんけど、視野を近隣の県まで広げると、似たような事件が起こっているんです。間隔や距離もまちまちで、繋がった事件としては報道されていないけど、平均から考えたら数が多すぎるんです。その筋の人間には結構有名な話だし、公表はしていないけど、警察もその線で動いていると思います」

「…そうだったのか…」

本当に自分は何も知らなかったんだなと…少し打ちのめされた気分になってきた。

「そういえば、口裂け女という都市伝説は知ってます？」

「口裂け女…知ってるけど。何か関係あるのか？」

何だろ、嫌な予感がしてきた。
前にも似たような事があったような…。

この後、一護は口裂け女の話から、何故か花火や政治等、色んな話に移って、寝てしまった。
予感にあたっていた。

カー、カー。

「……は！」

カラスの声で一護の目が覚めた。
難しい話が続いていたので、思わず眠り込んでいた。
華の声は子守唄にしかならなかったが、別の物音はちゃんと聞こえた。

教室の窓の外が赤く染まっている。
もう夕方のようにだ。

華は相変わらず講釈を続けている。
フランス革命だとか立憲主義だとか、重商主義とかアメリカとか。
一護の聞きたい話とは関係ない。
そもそも一護が寝ている事さえ、華は気がついていない。
一護は陶酔している華を無視して、帰る事にした。

「おい、井上」

小声で井上を起こす。

「ん？ むう？ もう食べられないよう〜」

「マ、マジですか…。」

そんなベタな寝言が聞けるとは思ってもみなかった。

「井上。起きろ〜」

「ん…」

目を開ける井上。

きよるきよると周りを見回す。

「帰るぞ」

「ん、帰る…」

寝ぼけ眼の井上の手を引いて、そっと教室を後にした。

案の定、華は気付いていないようだ。

閉められた教室の中から、滔々と華の声が聞こえてくる。

「つまり民主主義の暴走が全体主義を生み出す訳で、民主主義を金科玉条にするのは非常に危険な…」

未だに流れってくる華の声から逃げるように去った。

夕暮れの中、一護と井上は二人で並びながらゆっくりと帰り道を歩いている。

「…本当に強烈な奴だったな」

帰り道、華の話を振った。

「すごいよねえ、華ちゃんは。難しい事も一杯知ってるし、行動力もあるし。私、尊敬しちゃうなあ」

「…尊敬に値するか…？」

博識なのは分かるけど、聞いていないような無駄知識を言い立てられると、最初に何を聞きたかったのが忘れてしまう。

行動力はあるのかもしれないけど、それは思いついた事をすぐ実行するっていう、集中力のなさの現れなんじゃないかなろうか。

「まあ、今日はためになった話は聞けたから結果はよしだな」

「そうだね。…あ、じゃあね、黒崎くん」

いつの間にか、互いの家の分岐点まで来ていた。そこで井上と別れる。

「おう、また明日な、井上」

一護はそういい、足早に帰る。

家の直ぐそこまで行くと、遊子と夏梨が家の前に出ていた。

「お兄ちゃん、帰ってくるの遅いよお〜！」

どうやら、帰りが遅くて心配していたらしい。

いつもなら心配などしないが、朝の事もあって心配していたのである。

本当に心配性の妹達だ。
人の事はいえないけど。

不図、沈みゆく夕陽を見つめる。

違和感に包まれた不快な朝。

殺人事件に駆り立てられた一日。

それが終わろうとする今、心がこんなにも安らぎに満ちているのは、
何故だろう…。

…その答えは明白だった…。

どこかにズレていきそうだった一護を、日常に引き戻してくれた存在。

友達や家族。

友達や家族がいるから…。

「!?!?…家族…?」

何だ…?

「…っ」

脳髓を這いずる不快感。

「げ」

喉の奥が焼けるように熱い…。

だが、吐き出すものは何もなく、喉と胃に引き絞られるような苦し
みだけが残った。

一護は唾を吐き捨てる。

「な、何だ…今のは…」

自分の頭の中から生まれたとは思えないような、陰惨なイメージ。生臭い瘴気が嗅ぎとれる程の、圧倒的なイメージ。

何で家族の事を考えている時に、あんなものを想像してしまったんだ…？

「…気にする…必要なんでねえよな…」

一護はそう言い聞かし、家に着いた。

第48斬 【闇の中の絶望】（前書き）

文字数がかなり多くなってしまいました。

過去一位かな？

第48斬 【闇の中の絶望】

家に入ると既に晩飯の準備が出来ていた。だが、その晩飯に少し疑問を抱く。

三人分しか準備されていない。

そう、親父の分が無いのだ。

「遊子、親父の分はどうしたんだよ？」

「何か、今日急な用事があるとかで何処かに出掛けて、明日の夜には帰ってくるらしいの」

何処かって…。

何で用事も何も言わずに出て行ってんだ。

そして今日三人はうるさい親父抜きで晩飯を取った。

533

一護は診療室にやって来た。

黒崎家は一心が開業したクロサキ医院という病院と併設して建っている。

一心はああ見えても医者で、大きな手術以外のことは大抵こなす人物だ。

「たしか精神関係の本は…」

一護が診療室に来た理由は精神関係の本を探すため。

今日、華に精神病院の事を聞かされた事もあるが、今日の朝から妙な不快感に襲われている。

その事について一護は精神的なものだと思っている。
その為に医療関係の書物が沢山ある診療室に来ているのだ。

「ん〜と…」

本棚にギッシリ並べられた医療関係の本。

一護は一冊一冊の背表紙を見ながら、精神関係を探している。

…不図、床を見た。

そこには一滴の赤い雫が付いていた。

「何だ…？」

よく見ると一滴ではなかった。

その赤い雫が診療室にあるベットの下の方まで間隔をおいて付いていた。

一護はベットの下をのぞき見る。

「あれ…」

ベットの下に箱のような物がある。

ギリギリ手の届く位置にあるそれを…。

一護はひっぱり出した。

「…何だよ…これ…」

一瞬、目を疑う。

ところどころ赤黒く変色している救急箱。

それは明らかに古い血がこびり付いていた。

いや…此处は病院。

何か、理由があつての事だ。

だが見れば見るほど、それが普通の救急箱ではない事が分かる。
血のりで錆付いたメス…。
それが五本以上入っている。

(メスがこんなに入った救急箱なんてあんのかよ…?)

しかも臭気が漂うほどに、血がこびり付いている。
中には刃に脂が付いている物まで…。
思わず吐き気を催す。

(…この木の棒は…杭?)

杭…?

木の棒を削って作った太い杭が、何故、メスと一緒に入っている…?
そして…一番目立っていたのに、目に入れようとしなかったそれ。
それは…。
血が付いた大型のサバイバルナイフだった…。

「う…」

吐きそうになったが、手で口を抑え、吐気を止める。
そのサバイバルナイフを見ているだけで、正気を失いそうになる。
とてつもない不快感。
一護は救急箱をベットの下にしまい、立ち上がる。
少し、足が震える。

「何だよあれ…!? 一体、親父は何を…?」

考えても、答えには全く至らない。
至るはずが無い。

一護は精神関係の本を探すのを止め、診療室から出て行った。

答えを知るには親父に直接聞くしかない。
そう思ったのだ。

次の日、遊子の言った通り親父は帰ってこなかった。
だが、今日の夜に帰ってくる。

その時にあの救急箱の事を問いかける。
今日はそんな事で授業に全く集中できなかった。

「気晴らしに商店街にでも行くか」

放課後になっていたので一護は席から立ち、足早に商店街に向かった。

商店街にやって来た。

今、ゲーセン、空座レジャーワールドが一段と賑わっている。
ある2D対戦格闘ゲームが全国大会前って事もあって、皆集まっているのだらう。

一護も久しぶりに行こうかなと思ったが止めた。
今はあんな騒がしいところには行きたくなかったからだ。

と、誰かが自分の前に建つショッピングモールから大量の買い物袋を持って出てきた。

空座一校の女子の方の制服を着ている。

恐らく、学校帰りにバカ買いしたのだらう。

買い物袋を持っている両手が震えている。
どんだけ買ったのだろうか。

「…ん」

よく見ると見知った人物だった。

赤い髪に黄色いリボンにツインテールの女生徒。

はなたち
華断だ。

華が大量の買い物袋を頑張って持ちながら、重い足取りで歩いている。

今にも買い物袋を落としてしゃがみ込みそうな勢いだ。

「…つたく、しゃあねえな」

見ていられなかったので、一護は華を助ける事にした。

「大丈夫か、華？」

「あ、黒崎さん。大丈夫と聞かれたら、大丈夫ではありません…」

息遣いが荒い。

もう無理だろう。

一護は片手を華に差し出す。

「ほら、持つの手伝ってやるよ」

「…あ、ありがとうございます」

華は一言礼を言い、買い物袋を渡した。

買い物袋を受け取った一護はその重さに少し驚いた。

かなり重い。

買い物袋の中には色々と何かが入っているが、余計な詮索は止めた。

「何で、こんなに一気に大量買いなんてしたんだ？」

「欲しい物が沢山あったので、まとめ買いしたら予想以上に凄い量になってしまったんです」

後先考えずにいたんだな。

「仕方ねえな。家まで運んでやるよ」

「え、いや、悪いですよ。そんなの」

「昨日の礼だ。気にすんな」

昨日は何やかんやで華には世話になった。だから、その礼をするのだ。

「…昨日の事ですが、黒崎さん、昨日はごめんなさい」

突然の華の発言に一護は少し驚く。

「私って一度何かについて話したら止まらなくなって、話が逸れてしまう事が多々あるんですよ。それで昨日、黒崎さんに聞いてもないような無駄な事ばっか言っただじゃないですか。だから…」

どうやら自分で自覚はしていたようだ。

「こっちもお前に何も言わずに帰って悪かったな」

一護も謝る。

昨日は華に何も言わずに黙って帰ってしまった。
その事について詫びた。

「いえ、そもそもの原因は私ですから」

「いや原因は俺の方にあるって。俺が井上にあんな話をしたから…」

「でも、それを私が承知しましたから…」

と、いう面倒な会話をしながら、華の家に向かった。

一護と華はマンションに来た。

此処が華の住居。

大きくもなければ、小さくもない。

何処にでもある普通のマンションだ。

中に入ると、真っ先に目に入ったのはエレベーターの前に置かれた黄色い立て看板だった。

看板にはエレベーター故障中と書かれてある。

「マジかよ」

二人は重い買い物袋を持ちながら、長い階段を上がった。

華の家の中に到着すると、買い物袋をテーブルの上に置く。

華は現在一人暮らしをしている。
理由までは聞いていないが、一人暮らしをするには少し広すぎる住まいだ。

「…6時30分前か」

一護は部屋の時計を見て言った。
此処に来るまでに結構時間が掛かってしまった。
まあ、あんな重い買い物袋を二人で持つて、数km歩いてきたのだ。
しかも華は女。
歩く速さは一護と比べて遅いし、買い物袋を持つ力も一護の方があ
る。
遅くなって仕方ない。

「んじゃ、俺はこれで帰るな」

「えっあつ、あの…黒崎さん。一緒に…」

「…何だよ？」

「一緒に、この映画を見てくれませんか？」

と言つて、DVDのパッケージを見せてきた。

パッケージにハロウィーンの悪夢3と書かれてある。

ハロウィーンの悪夢3といえばスプラッタホラーのシリーズ最新作だ。

一護はこの作品を見ている。

今作は今までのシリーズとは、ちょっと違う展開があるらしくて、
見てみたいとは思っていた。

「少し怖くて、一人ではあまり見たくないんですよ。良いですか？」

「…まあ、いいけど」

少し悩んだ末、OKした。

どうせ、明日は学校は休みだし、断る理由は無い。

遊子や夏梨も一護が一日居ない事には慣れているだろうし。多分…。

「じゃあ、私の部屋に来てください。リビングのテレビは少し小さいので…」

そういつて、一護は華の部屋に向かった。

華の部屋には家族が居間に置くような大きいテレビがあった。

そして、華は部屋の電気を消した。

7時前だが冬は夜が早いので、もう真っ暗だ。

「それでは再生っと」

華はDVDを再生した。

約2時間で映画が終わった。

部屋の電気を点ける。

今作はストーリーらしいストーリーは無かったが、恐怖シーンとスプラッタシーンは前作よりかなり上がっていた。

たたみかけるような勢いで展開される恐怖シーン等がこの映画のウ

り。
試写会の人に、恐くてマジ泣きしちゃった女の子がいた、なんてエピソードがあるほどだ。

「悪くは無かったな」

「うん。けど、ストーリーはちょっとあれだったね」

「ああ」

ストーリーは無いに等しかった。
そこだけは次回作に期待だ。

その時、激しい金属音が響き渡った。

「な……」

プツンと電灯が落ちた。

「きゃ……」

華が小さい悲鳴を上げる。

(…この不快で悪寒に満ちた感覚を…俺は知っている…?)

状況を確認するために、一護は床から立ち上がろうとした。

「黒崎さん……」

華が怯え、腕を掴んだ。

「…華、心配すん…」

華にそう言い切らないうちに、部屋のドアが音もなく開いた。

「な…」

まるでそれが当然のように、黒装束の男が部屋へと入ってくる。長身の男だが、足音すら立てず、風にたなびく布のような自然な歩みで近づいてくる。

あまりにも異常過ぎて、一瞬、それを危険だと気付けなかった。鈍のようなサバイバルナイフを目視する。

それが何の予備動作もなく、スツと華に向けて突き出された。

「…!!」

一護は無意識のうちに華を庇う。

ブツンと音を立て、刃が一護の腕を貫いた。

鮮血が迸り、華の顔を真っ赤に染める。

「ぐああ…!!」

「きゃああああああああつ!!」

華の悲鳴と共に、一護の腕に雷撃のような激痛が湧き上がる。

「フンツ!!」

黒衣の男は、そのまま裏拳で一護の頬を殴りつけた。

「ぐ…っ！」

床に倒れる。

その勢いで引き抜かれるサバイバルナイフ。だくだくと流れる血を止める事が出来ない。

「ひ…嫌…イヤアアアアアッ！！！」

華の上に乗りがかる黒衣の男。

「テメエエエ！」

男を羽交い絞めにしようと、飛びかかったその時、振り向きざまにナイフが振るわれる。

「が…」

真一文字に振るわれた漆黒の刃。

顔面を覆う激痛と共に、光が失われる。

「…目が…！！！」

何かに足を取られ転ぶ。

真なる闇の中でもがく。

「は、華あああっ！！！」

「黒崎さん…！！！」

声のする方に手を伸ばす。

「ぐああっ!!」

手首を棒で殴られたような衝撃が走り抜ける。

だが、それは棒ではなく、あのナイフ。

手首がパツクリと開き、肉が空気に曝されたのが分かった。

パタパタと一護の顔に降る温かい雨。

それは水などではなく、一護の血液。

「や、やめてええええっ!!」

ドンツと腹部に鈍い衝撃。

押し潰されるような苦痛。

腹を貫く鋭角の痛。

(何をされた…?)

下半身の感覚が痛みの泥に沈み、消えてしまう。

(腹を…刺された…?)

「く…ん、んぐっ…」

声を上げようとした華。

それを封じられたのが分かった。

「…あの男はもうじき死ぬ…」

「な…っ!? …げふ…」

「あんな男の事は気にせず、私の事を愉しませてくれよ」

下卑た言葉を華に吐く。

一護は立ち上がるごと、身体を動かす。

「げ……」

腹に刺さった異物に固定されて、身体が動かない。

腹の肉が裂けた感触。

あまりの激痛に頭を床に打ち付けて悶える。

「は、華ああ……！」

腹のナイフに手を伸ばすが、指に全く力が入らない。

辛うじて握っても、血液で滑って、うまく引き抜けない。

まるで解剖される蛙のように、一護は床に釘付けられてしまっている。

ドンッと鈍い音。

「んんぐ——————っ……！」

悲鳴。

手で封じられている絶叫。

再び、ドンツという鈍い音。

「い、きやあああああっ……！」

金切り声に近い絶叫が部屋に木霊する。

「は……がはっ……は……はなあ……」

口の中に溢れ返る血を吐き出しながら、華の名を呼ぶ。
一護の身体に充滿する死の鈍痛が、意識を不明瞭にしていく。
華の悲鳴にすら、指一本動かせない。

「美しい…聖性すら感じるぞ…」

「あっ…あ…」

痙攣するような声を上げる華。

ショックで正気を失っているみたいだ。

「人が磔刑にかけられた姿は、この世で一番美しいと思わないか？」

磔刑…？

「両手に杭を打たれた感想は…？」

(なん…だと…？)

ショック状態の華は、勿論答える事など出来ない。

「美しい身体だ…。よい供物になりそうだ…。だが、命尽きるまで
は、この身体で愉しませてもらうとしようか…」

「…あ、い…！？ あ、きゃあああああっ…！」

視力を失った真の闇の中。

聞こえるのは華の悲鳴のみ。

肉を裂く水っぽい嫌な音。

その後に、ゴリツという硬い音が聞こえる。

「ぎゃっ、んぐう…！」

ダンツという叩き付ける音。

「んぐんんんっ…！」

悲鳴などという生易しいものではない。

命の破裂音が、華の喉から搾り出される。

間断なく上げ続けられる絶叫。

しかし、それは黒衣の男の手で封じられているようだった。

「ああ…んんんんんっ…！！！！ん……………っ…！」

ブチリと千切る音がする。

「美味そうな肉だ…。カニバリストだったら焼いて食うんだが…生憎、私は刻む事にしか興味が無い。何なら、自分で喰らってみるか？」

「ん…ん…ん…ん…」

「冗談だ…」

そう言って笑ってから、床に仰向けに横たわる一護に、何か投げつけられる。

「あ…？」

視力が無い一護は手で確かめると…不恰好なL字の物体…先が五つに割れているこれは…。

(足…華の足首…?)

「は、はなあああああ!!」

「綺麗な太ももだ…」

「んんぐうつ!!」

ビツという布を裂くような音と、箆った華の絶叫がシンクロする。

「厚みのある肉を裂く感触は、何度味わっても最高だ…」

ビツ…ビツ…

繰り返す切り裂き音と悲鳴。

「裂いた腸の中の温かさは…膾などとは比べ物にならない…」

又チャ又チャと粘性の液体音が聞こえる。

「見てみる。綺麗な色をした腸だぞ」

「ひ…ん…ん…」

力ない悲鳴。

聴覚と苦痛のみが全てになっている一護には、気が狂いそうなほどに不快な音。

「くくくく…」

「あ…ああ…」

一護は何度も何度も、腹に突き刺さっているナイフを取ろうとする。

「くくくく…このまま、お前の腹を解剖し、生きたまま内臓全てを晒そうか」

「んえ…い…いやあああああ！…！！…！！」

「…チツ…」

「んぶ…」

華の悲鳴が、泡立つような音と共に消える。

（何を…した…？）

「女の悲鳴は好きなんだがな…。場所が場所だ。あまり騒がれても困るんだよ。もう少し生きたままを愉しみたかったんだが、仕方あるまい…」

「ぎ…ぎざまあああああ！…！」

ナイフを握り締める。

脳を焼き尽くすような憎悪のお陰で、ナイフを掴む握力を得る。

ゴリゴリと擦り切るような刃の音。引き抜く。

ナイフを手に立ち上がろうとする。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！！」

「貴様も黙れ…？黒崎一護？」

何か大きな丸い物を投げつけられた。

立ち上がるのがやっとだった一護は、そのまま倒れ込んでしまう。

（何だ…これは…？）

球状のものを撫でる。

沢山の糸状のものが指に絡む。

「…」

沢山の凹凸…。

濡れた断面から血が滴っている。

（まさか…）

藻のように指に絡むのは、血に濡れた髪…。

動かすと開くこれは顎で…この硬いのは歯…口…？

（じゃあ、この突起は鼻…？）

濡れた穴に指が滑り込む。

ぐちゃり…と眼球を潰してしまった。

（これは…華の首だ）

そうか…華は殺されてしまったのか。

「…あ…ああ…」

一護の中から全ての力が揮発した。
身体を動かす力も。
意識を保とうとする力も。

「…」

黒衣の男が歩み寄ってくるのが分かった。
その刹那、一護にある考えが浮かんだ。
あのサバイバルナイフに一護の名を知っていた。

(まさか…親父…?)

親父の診療室にも同じようなサバイバルナイフがあった。
そして、親父は昨日から家にいない。
何より、証拠づけるのは名乗ってもいない一護の名を知っている事
だ。

だが、もう遅い。

一護から華の首を奪い取ると、代わりとばかりに硬い刃を降らせた。
喉、胸、頬、額、眼窩。
激痛と死が降り注ぐ。
が、まるでこの絶望を終わらせてくれる、慈悲の刃のようにも思えた。

「?また会おう?黒崎一護」

最後に男が何かを喋った。

だが、一護には聞き取れない。
顔の中心に死が突き立てられた。
一護の命が死に向かってめくれ返る。

…全てが闇に堕ちる。

…一護の世界が消えた。

第48斬 【闇の中の絶望】（後書き）

BLEACHの月島の能力はチートだと思う。

あれは卑怯だろ。

藍染よりは強くないだろうけど、かなりチートだよ。

銀城より強いと思う。

つてか、BLEACHのアニメの展開が早いような気がする。

色々省略されているような。

このままだと、直ぐに原作に追いついてしまうような感じがする。

お願いだからオリジナルはあまり挟まないでほしい。

ギャグ系以外は。

今後のアニメの方の進行具合が心配。

第49斬 【逸れ易い話】

.....

「.....ッ!..!」

一護は飛び起きるように、上体を起こす。
全身からべとつく汗が滲み出している。

(...夢を...見ていた...ような気がする...。とても...嫌な夢を...)

内容は欠片ほど覚えていないが身体に残る不快感が、悪夢に魘されてきた事を物語っている。

「!?!?..!」

突然、ズンツと重い感覚が胸を走る。
それと同時に視界がホワイトアウトする。
強烈な眩暈が走った。

「.....」

じっとしていると、じんわりと視界が戻ってくる。
軽い頭痛もするし、寝起きのダルさと相まって、気分が悪い事この上ない。

一護はこめかみを指で揉みながら、溜め息をついた。

「.....!?!?」

一瞬…手が？消えた？ように見えた。

ほんの一瞬だったが、一護の目には確かにそう見えた。

「…はっ、まさかな」

眩暈の直後だったから、視界がおかしくなったただけだ。

「そっくに…決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

《省略》

放課後、一護と啓吾が職員室に呼び出された。

二人を呼び出したのは、担任の越智美諭だ。

呼び出された理由は、この前のテスト結果の事だ。

啓吾はこの前のテストで、クラスでドベ赤点をくらい、一護は最近のテストの点数が急激に落ちている事を指摘された。

結果、これを踏まえた上、二人共明日の放課後に補習をするはめになった。

それを聞いた啓吾は、明らかガツカリした表情で帰宅していた。

一護は一旦教室に戻り、机の中にある教材を取りに戻った。

念の為に持って帰るのだ。

一護が教室に入ると、人影が二つあった。

一つは井上織姫。

もう一つは、赤い髪に黄色いリボンにツインテールの女子生徒だ。

「あ、黒崎くん」

「おう」

「え、この人が井上さんの言っていた黒崎一護さんですか？」

女子生徒が一護を見るなり、そういつてきた。

言葉から察するに、井上が一護の事をこの生徒に色々と話していたのだろう。

「あんたは？」

「あ、私は華断といます」

華断…。

なぜだろう？

その名を聞いて、なぜか少し心が安堵している。

初めて聞く名のはずなのに…。

「俺は黒崎一護。で、何してんだこんな所で？」

「ほら、黒崎くん。公園の事件の事を知りたがってたでしょ。華ちゃん、事件とか犯罪とか、そういうのに詳しいから、紹介しようと思ってる」

「そうだったのか」

(つつか、俺が教室に戻ってくる事を先読みしてたのか?)

この事に対し、少し驚いた一護。

「私は皆さんと違ってヒマヒマ人ですから、何でも教えて上げれます。本当のエリートは有閑階級ともいいますし。と言っても今日は少し見たいテレビがありまして、予約録画をセットするの忘れて来ましたから、小一時間で済ませていただけたら嬉しいです」

「ああ…そんなに時間はかからないと思う」

いつの間にか、華に聞く事になってしまった。

「公園で起きた殺人事件の事を知ってるだろ？」

「勿論ですよ」

一護は単刀直入に話を振る事にした。

「あの事件についてなんだけど、精神病院から脱走したやつがいて、そいつが通り魔の正体なんじゃないかって。それから、これも気になる噂なんだが、夕暮れ時に全身黒尽くめの男が現れて、こっちを見てるって噂があるんだ」

「最近見た人の話だと、変な仮面みたいなのを付けてたって言うの」

「何か知らねえか？」

聞きたい事を全部言っただけだ。

「何か知らないか？って言われても。噂の種類としてはどちらもありふれているから、それだけじゃ何も分かりませんね」

「ありふれてる？」

「そうです。まず最初の噂の方の話ですけど、精神病院から脱走なんて、通り魔の犯人としてはよく噂になるものです」

「そうなのか？」

「聞きますけど、精神病や精神病院について、黒崎さんはどのくらいの知識を持っています？」

「え、どのくらいって…」

「言われてみて気が付いた。

こういつた噂によるイメージ以外に、一護は何の知識も持っていない。」

「精神疾患の定義は？ 精神病と神経症の違いは分かります？ 精神科医と臨床心理士の違いは？」

「分から、ない…」

「やっぱり知りませんか。最もそれは黒崎さんに限った事ではありませんけどね。一般の人たちにとって、精神病っていうのはブラックボックスなのです。理解できないもの、恐ろしいもの、見たくない」

いもの、そういったものに対する責任を、未知の領域に押し込めている訳です。昔はそれを担当するのは怪異譚だった。例えばひよっこり女の子いなくなった。人々は神隠しだと恐れた。ある日、きこりが山に行くと、神隠しにあった女の子の成長した姿があつて、子供を連れていたのを見た。そこで、きこりは山男に攫われたんだと考えた。よくあるタイプの昔話です。でもこれを現代風に解釈したらどうなるかな？ 山に住む少女趣味者が女の子を誘拐し、子供を産ませて強制的に結婚した。そうなるのが筋でしょ」

言われてみれば、そう考えられなくもない。

「確かにその方が現実的だな…」

「現代に生きる私たちにとってはね」

昔の人間にとってはそうではないと言う事か。

「子供がいなくなつて戻つてこない、そんな悲しい事実からはみんな目を背けたい。だから昔の人々は神隠しとして処理したんです。子供が略奪されて強制的に妊娠させられた。これも見たくない事実としては同じ。だから山男というフィクションを作るの。何か不幸があつた時には、自分たちの手に負えないモノによつて起こつた、そう考える事で納得したがるんですよ人間は。その為のフィクションを、長い長い時間をかけて作ってきたの。それが神だつたり妖怪だつたりするんです。でも現代では神も妖怪もいなくなつて、そういった部分を担当してくれるモノが減つた。そこで精神病が召喚されてくるんです。普通の人々は精神病について知らないから、それをフィクションとして扱つてしまふの」

成程。

よく知らないものなら、どう解釈しようと納得できてしまう。

「最初の話につながりますけど、全身黒尽くめの男だってその典型ですよ。これはメン・イン・ブラックという形で、特にアメリカで有名な類型ですけど。アメリカの場合は歴史が新しいから、日本で言う神とか…これは向こうでは妖精かな、それから妖怪とかは、最初から機能していないの。だから彼らはブラックボックスにこれを選ばんです」

そう言って華は指を上に向けた。

「…天井？」

「…空？」

一護と井上が上を答える。

「宇宙です。アメリカでは科学技術も発達しているし、近代的な政治機構のイメージもありますからね。アメリカ政府は宇宙人と密約を交わっていて、その事実を知ってしまった人間を攫ったり、記憶を消したりするエージェントがいるって話。彼らは黒いスーツに身を包んでいるのが典型です。それがアメリカにおける神隠しであり、妖怪にあたるモノなの」

「宇宙人って…そんなまさか…」

いる訳が無いだろう。

「それはまさしく偏見です。アメリカは精神医学に対しては常識がある国だから、精神病院から脱走した通り魔なんて聞けば、まさか

と思われるのは私たちかもしれない」

「そんなものなのか…」

つまりアメリカ人と一護たちの現実感覚が、まったく違うわけだ。

「だったら、噂からだけじゃ今回の事件については、何も分からないんじゃないのか？」

「ですから最初からそう言っているではありませんか」

バツサリ切り捨てられてしまった。

「まず精神病院云々っていうのは、先程も言ったようによくある話だから論外です。黒衣の男については、かろうじて何か手掛かりになる可能性もあるけど、そこまで噂になっているなら警察も知っています。警察は基本的に人海戦術なんです。噂についてだったら、私たち以上に詳しい事を知ってるはずですよ。もし本当に脱走した精神病患者の記録があるなら、当然それを掴んでいるはずだし、だしたら氏名や容貌まで分かっているはず。安楽椅子探偵を気取るなアムチエア・ディテクティブんで無茶です。現実はそのなにごくくないの」

「そんなつもりはねえけど。何か、俺たちに来る事はないかなって思ってますよ」

「ありますよ」

「あるのか？」

「警察の邪魔をしない事です。根拠のない噂を広めない事。捜査協

力は惜しまない事」

「そうか…」

結局、一護に出来る事は何も無いのだろう。

「ところで精神病院と妖怪ってというのは、意外なところでつながっているんですよ？」

「え？」

「先程も言った通り、妖怪というのはあくまで現象であって、それを構成する科学的な事実が存在するんです。たとえば憑き物という現象。狐憑きとか犬神憑きというのは本当に存在するんです」

「まさか」

「そう思うでしょうね。でもそれは、狐憑きが存在するという事と、憑く狐が存在するという事を、混同しているだけなんです。憑き物は科学的に言うと乖離性障害、多重人格とか記憶喪失とかの組み合わせで起こるの。狐が人に憑くんじゃないのよ。人が憑かれた？ふり？をする訳。勿論本人にその自覚はないけど。そしてそれを共同体も認めるの。だから狐憑きは本当にあっただんです。狐を現象として見てしまえば、それもいたの」

「はあ、成程な。しかし何でまたそんな現象が起こるんだ？」

「原因は一つではないでしょうね。様々なケースの解決法として発達したもののなんです。例えばこんな例が考えられます。ある男が悪さをしてしまったとする。彼には罪悪感もあつたけれども、それを

告白する勇氣はない。そして昔の話だから、外からやってきて罪を追求してくれる警察もない。客観的な罰を与える裁判所もない。そこで憑き物の出番なんです。その男に狐が憑いて、つまりは多重人格を発症して、暴れ回る。そこで彼はみんなを集めて狐の人格は言うわけ。「この男はこれこれこういう悪事を働いた。そこで罰として俺はこの男に憑いたのだが、これこれこうすれば許してやるうって。お狐様の言う事だから、その共同体の中では客観性がある。男には懺悔と償いの機会が与えられる。そうやって処理されていたの」

「あ、ああ。成程、分かってきた……。それが昔の社会制度の欠陥を補っていたんだな。裁判所とかねえもんな」

「というより、それが昔の社会の制度だったの。欠陥と捉えてしまふのは、自分の社会を基準としてしか考えてないから。面白い事に外国にこういった憑き物の症例っていうのはないんです。いえ、憑き物自体はあるんですけど、その殆どが悪魔か狼なんです。日本みたいに、狐とか犬神とか、蛇だとか竜だとか蛙だとか化け猫だとか、そういった豊富な憑き物はなかったみたいね。ところで狐と言えば稲荷様な訳ですけど、あれって全国の神社の内の約30%を占めるんです。街の片隅にある社なんかも含めたらもっと。稲荷の鳥居といえは朱で有名だけれど、これは色んな説があるんです」

(あれ?)

「まずは稲作起源の説。稲穂の黄金色を朱色に見立てたという説。実りの季節の紅葉を模したという説。それから、稲作に鉄の農具が不可欠な事から、鋤物が成り「イナリ、炉の中の赤い鉄を見立てた」という説もあるんです」

「でも稲荷に限らず、神社には朱が多くないか？」

「そうね。だからもつと広く取って、中国の道教に由来するという説もあるんです。道教の陰陽五行説によると、あらゆるものは陰と陽の気で出来ているの。ほら、韓国の国旗にあるでしょう？ あのイメージです。そして人間の生活にとって重要なのは、木火土金水の五つの元素だとされている。この陰陽五行説は日本に伝わると、神道や仏教と結びついて、原型をとどめないほど浸透していったんです」

（何の話をしてたんだっけ？）

「ま、元々原型なんてない理想だったんだけど。さて、この五行思想によると、赤は火星を意味し、季節は夏、方位は南、霊は朱雀とされている。朱雀つてのは鳥だから、鳥居は朱雀の休まる場所、したがって赤くあるべきだという説があるのね」

「成程な。ところで、その陰陽五行思想は曜日と関係あんのか？」

「勿論です。ただの偶然ではありません。そもそも望遠鏡が発達する前、目に見える惑星というと、太陽と月を除いた五つだったんです。あなわち、水星、金星、火星、木星、土星。これらは他の星に比べて、特殊な動き方や輝き方をするから、どうしても注目される訳。星を基準に季節や方向を見る技術は世界共通だから、太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星の七つは、古今東西の思想に万遍なく影響を与えているんです。陰陽五行説だって、陰が月、陽が太陽、他がそのまま木火土金水にあたる訳ね。現代の曜日の七日制の起源は、古代バビロニアだと言われているんです。これも占星術が元になっているの。だから陰陽五行説の用語が、西洋の曜日制にすっぱりあてはまったのは、単なる偶然という訳じゃないんです」

「そういえば一週間の始まりって、月曜か日曜か迷うよな。週末って言葉があるくらいだから、月曜が最初ってのが俺はしっくりくるけどな」

「土曜とする説もあるんですよ？ 私はそれが有力だと思います。」

「そうなのか…」

「月曜日が週の始めだとするのは、一番歴史的根拠がないの。単に日曜日が休みとなっているから、働き始める日という意味が、一週間の始まりの日と重なってしまったのね。でも実感には即しているから、ある意味で根拠が一番あるのかもね。日曜を始まりとする説は、キリスト郷やユダヤ郷に由来するものです。これらの宗教では日曜を週の始まりとしています」

…はっ！

ていつか滅茶苦茶話がずれてる！

事件と全っ然関係ない！

雑学としては面白くない事もなかったので、つい付き合ってしまったが、当初の目的とはかけ離れた事態になっていた。そろそろ切り上げて帰ろう。

（井上は…）

寝ている。

しかも立っただまま。

器用すぎるだろ。

「井上。起きろ」

「ん…あ、黒崎くん、おはよう…」

「おお、おはよう。もう夕方だけだな。用事も終わったから、そろそろ帰ろうぜ」

「うん」

井上が頷く。

「イエスが磔にされたのは、13日の金曜日という事で有名です。そしてその日から三日目にキリストは復活するの…」

「おい、華」

「金曜日を第一日目として数えるから、キリスト復活の日は日曜日にあたるわけね。この日を主の日として祝福する」

ちつとも聞いていない。

「はーなー!」

「はなちゃん!」

「その祝福を行う日ための日が…え? 何です? 話の腰を折らないで下さいよ」

「いや、誰もお前の話聞いてねえから」

「えっ!?!」

二人の沈黙。

「…帰るか、井上」

「うん」

一護がそう切り出し、二人は一緒に帰路についた。

第49斬 【逸れ易い話】（後書き）

次は番外でグリムジョーの幻想入りを入れます。
東方キャラをそろそろ出さないとヤバイ気がします。

第・1斬 【グリムジヨ一の幻想入り】（前書き）

今回は番外編です。

久し振りに東方キャラを出せました。

第 - 1 斬 【グリムジョーの幻想入り】

「何処だ…此処は」

男は気がつくくと、森の中に倒れていた。ゆっくりと体を起こし、回りを見渡す。

周り全て木しかなかった。

一体なぜ、自分が森の中にいるのかを思索する。

…全く分らない。

「チツ、面倒くせえな」

男は歩き出す。

だが、どれだけ歩いても森だけしかない。

「…何か近づいてきてるな」

男がそう呟いた瞬間、目の前に異形の化物が現れた。その化物は書物などで目にした妖怪に似ている。

「虚じゃねえな。テメエ、何者だ？」

男が聞くと、化物は答える気が全く無かったのか、男に向かって襲い掛かった。

その現状に男は全く動揺しない。

相手は男より巨体で、明らか人間の身体能力を優に超えていそうな化物だ。

男は腰に一本の刀を差しているが、それだけでは全く勝てる気がしない。

だが、その刀すら男は抜こうとしない。
化物は男に向かって拳を突き出した。

これで終わりかと思った。

「何だ、テメエ」

妖怪は目を丸くした。

そう、男は化物の拳を片手で受け止めていたのだ。

「その程度で俺を殺ろうとしたのか？」

男は仕返しをするかのように、化物目掛けて殴りかかった。
化物からしたら、小さな拳。

だが、男のパンチを喰らった化物は天高く吹き飛ばされた。
あの化物を男は蟻を潰すかのように軽く倒してしまったのだ。

「まだ、いやがるな」

男は前を見る。

そこから、さっきの化物と似たような化物が数体現れた。
恐らく、さっきの奴の仲間だろう。

男は全く興味が無さそうに、掌を化物共に向ける。

それを見た化物共は一斉に男に襲い掛かった。

「目障りだ。消えろ」

男の掌が赤色に光り出した。

瞬間、閃光が放たれた。

その閃光が化物共を襲い、化物共を一瞬にして消滅させた。

そう、この技は虚の放つ技、虚閃。
そして、それを放ったのは、破面N.O.6グリムジョー・ジャガー
ジャックだ。

「チツ、胸糞悪いな」

グリムジョーはイライラしていた。
虚圏で一護に敗れ、ノイトラに殺されかけた上、その後気付いたら
見知らぬ場所。

その事でグリムジョーはイライラしている。

「…おい、とつとと出てきやがれ」

グリムジョーがそう呟いた瞬間、気付かれた事に驚いたのか、何処
からか一人の女性が現れた。
金髪で紫のフリルのついたドレスを着ていて、片手には日傘を持っ
ている女。

そう、彼女は八雲紫。

彼女がグリムジョーの前に現れたのだ。

「テメエは何者だ？」

グリムジョーは紫の方に顔を向け聞く。

「不躰ね。そういう時はまず自分から言わなきゃ」

「答える」

グリムジョーは紫を睨みつける。
その目からは殺意を感じられる。

「しょうがないわね。私は割と困ったちゃん 八雲紫よ」

緊迫した状況の中、飄々と名乗る。

「八雲紫か。で、此処が何処なのか、当然知ってるよな?」

「当たり前でしょ」

「そうか。なら此処が何処なのか教える」

「本当に礼儀って言葉を知らないらしいわね。まあいいわ、ここは幻想郷という所よ」

「幻想郷…? 知らねえな。どういう所だ?」

「あなたばっか質問して不公平じゃない? 私にもあなたの事を聞かせてよ」

「…テメエに言う必要なんてねえだろ」

「そう。なら、力尽くで聞かせてもらおうわ」

「!?!」

紫の言葉にグリムジョーの闘志が一気に上がる。

しかも、イライラしている中でそれを言われたので、グリムジョーの苛立ちは頂点に達した。

「素直に答えてりゃ、死なずに済んだのにな…女!」

グリムジョーは並外れた速さで、紫の方に駆けた。紫は微動だにせず、グリムジョーを見据える。

「チツ、嘗めてんのか、テメエ!!」

グリムジョーは何の動きも見せない紫に、更に苛立った。完全に嘗められていると思ったからだ。そして、紫に向かって、拳を突き出そうとした瞬間。

「式神『十二神将の宴』!」

不意に、自分の上空から声が聞こえてきた。それと同時に、声のした上空からグリムジョー目掛けて、弾幕が降り注いだ。

「!何だ!?!」

グリムジョーは直ぐ様、後方に跳んで避けた。だが、それも束の間、魔方阵のような円形の物が弾幕を放ちながら、グリムジョーの方に移動してきた。恐らく、弾幕はこの魔方阵から放たれている。しかも、その魔方阵の数は全部で十二個。グリムジョーを囲むように魔法陣が移動し、四方八方から弾幕を放ってくる。

「何だ、この力は!?!」

全ての弾幕がグリムジョーに激突する。爆発音と共に砂煙が舞う。

「遅かったじゃない、藍」

紫がそう言うと、狐の尻尾を九本生やした女性が紫の前に現れた。この女性は紫の式神の八雲藍だ。

「遅いじゃありませんよ。急に何処かに行ったと思っただら、このような場所に」

「だって、面白い人間？を見つけたもの。せつかくだから、話でも聞こうとしたらこの有様よ」

「あれが人間ですか？ 私には、そうには…」

藍はグリムジョーの方を見る。

砂煙が舞っていて、安否かどうか分からないが、この程度で倒れるとは思っていない。

予想通りに、グリムジョーが砂煙から姿を現した。着ていた服が少し汚れているだけで、外傷は殆ど無い。

「…テメエ、何者だ？」

グリムジョーは何も無かったかのように聞く。

「私は紫様に仕える式神です。あなたが何者であろうと、紫様に危害を及ぼそうとするのであれば、私があなたを倒します」

藍はそう言って構える。

「はっ、テメエが俺を倒しだと、笑わせんじゃねえ！！」

グリムジョーは再び駆け出す。

「式神『仙狐思念』！」

グリムジョーが駆け出すのと同時に、藍はスペルを唱えた。藍から一発の大弾が放たれる。

「何だその攻撃は！ 嘗めてんのか！？」

グリムジョーは軽く横に跳び避ける。

その瞬間、大弾が破裂するかのように、無数の弾幕に姿を変え、弾幕がばら撒かれた。

「！！」

グリムジョーは目を見開いて驚く。

直ぐ様、高速移動技の響転ソニードを使い、弾幕を避ける。

避けると同時に、藍の目の前に移動し、拳を勢いよく突き出す。

「甘い」

藍は体を反らし、拳を避ける。

そしてお返しと言わんばかりに、グリムジョー目掛けて殴り掛かる。グリムジョーは殴られると同時に、空中に移動する。

避けられると思っていなかったグリムジョーは驚いてしまい、その隙を突かれ易々と藍の攻撃を受けてしまったのだ。

（硬っ！）

藍はグリムジョーを殴った感想を心の中で呟く。
グリムジョーは破面。

破面は鋼皮イェロという、強固な霊圧硬度の外皮を持つ。
それ故、鎧の様な硬さをしている。
それを素手で殴れば痛いのは当然。

(あの女、俺の動きを簡単に見切りやがった。強えな、あいつ)

グリムジョーの苛立ちが徐々に消えてきていた。

藍はグリムジョーのいる上空に移動する。

「まだ、やりますか？」

「当たり前だ。テメエを穴アキにするまでな！」

「そうですか…では、仕方ありませんね。私もあなたを殺す気でいきます」

藍はカードを取り出し、スペルを唱える。

「式輝『プリンセス天狐 - Illusion - 』！」

瞬間、藍の姿が消えた。

「！何処行きやがった!？」

消えた事に驚くグリムジョー。
自分でも全く見えなかったのだ。

「此処よ」

突然、藍がグリムジョーの目の前に現れた。現れると同時に藍は大量の弾幕をばら撒く。

「チツ」

グリムジョーは直ぐに弾幕を避ける。

が、続いて、自分目掛けて流星を模した大弾と中弾が放たれた。

「くそっ！」

グリムジョーはそれを避け切る事が出来ず、被弾してしまう。相手は殺す気で放った弾幕。

さっき喰らった時とは威力が格段に違って高い。

「式輝『四面楚歌チャージミング』！」

藍は休む事無く、スペルを唱える。

水色の弾幕が沢山の列を作り出し、グリムジョーの移動を制限した。更に、そこからグリムジョー目掛けて大弾が大量に放たれた。

「これで終わりです」

藍はこの大弾を当て終わると思っていた。だが、そうはいかなかった。

「虚閃！！」

グリムジョーの掌から赤い閃光が放たれた。

その閃光が藍の弾幕を消していき、終には藍自身まで届いた。

「！馬鹿な……」

藍は直ぐ様、虚閃を避ける。

「何処見てんだよ」

藍が避けたのと同時に、グリムジョーは響転で藍の直ぐ横に移動していた。

グリムジョーは藍に向かって拳を突き出す。

この攻撃に藍は避ける事が出来ず、腕でガードし、ダメージを軽減させる。

だが、威力が強過ぎたのか、藍が後方に軽く吹っ飛んだ。

「虚閃！」

藍が後方に吹っ飛んでいる間に虚閃を放つ。

「この程度で、私を倒せると思わないで下さいよ！」

藍は態勢を直ぐに整え、虚閃を避ける。

「式弾『ユニラタルコンタクト』！」

虚閃を避けると藍はスペルを唱えた。

全方位に針弾が無数に放たれる。

グリムジョーは軽く弾幕を避ける。

だが、その放たれた針弾が藍の方に収束し始めた。

そして、堰を切ったかのように、一気に収束していた弾幕が再び放たれた。

「何!？」

予想外の事に驚くグリムジョー。
その弾幕を全て紙一重で避ける。

(あの虚閃という技は、急な攻撃には対応できないようですね)

藍はグリムジョーの放つ虚閃の攻略法を見つけていた。

「だったら、式神『憑依茶吉尼天』!」

藍がスペルを唱えると、回転しながら移動し始めた。
移動しながら無数の弾幕をばら撒く。

「ちょこまかと動き回ってんじゃねえよ!」

グリムジョーは動き回っている藍に向かって、虚閃を放つ。
だが、うまい事当たらない。

「チツ」

それどころか、虚閃を放っている間に、藍がばら撒いている弾幕に
被弾してしまった。

「埒が明かねえな。仕方ねえ。威力は弱えが、こいつで動きを止め
るか」

グリムジョーは拳に霊圧を固め、小さな塊を放った。
それを連発で放つ。

だが、グリムジョーの勝ち誇った表情が一気に一変した。爆煙から先程藍が放った弾幕がグリムジョーに向かってきていたのだ。

「何だと!？」

油断していたグリムジョーは全ての弾幕を被弾してしまった。

藍はグリムジョーが王虚の閃光を放つ前に放った弾幕を、王虚の閃光と対抗させる為に放ったのではなく、グリムジョーに直接当てる為に放ったのだ。

「油断大敵という言葉を知らないようですね。私があんなに溜めて放つ技を避けられない訳ないでしょ」

戦闘中に技を出すまでの数秒間は長い。

そんなに掛かったら、対策を立てられたり、攻撃されたりする。

グリムジョーは今の攻撃でかなりのダメージを受けてしまった。

「くそっ…! クソが…っ!」

グリムジョーは刀に手を取る。

「軋れ!！」

「!!!??」

「豹王!！」
バンテラ

グリムジョーは解号を言う。

帰刃状態になろうとしているのだ。

が、何も起きない。

帰刃が出来ないのだ。

「…なん…だと…!？」

その事にグリムジョーは驚愕する。

「何をするかと思えば、ただのハッターですか」

藍はスペルカードを取り出す。

「終わりです。幻神『飯綱権現降臨』」

最後に藍がスペルを唱えた。

ここでグリムジョーの意識が途絶えた。

……

「……………ッ!?!」

グリムジョーが大きく目を開け、目を覚ます。

「何処だ…?」

今、目に映っているのは何処かの天井。
自分は何処かに眠らされていたようだ。

「ようやく起きたようね」

突然、グリムジヨールの傍らから聞き覚えのある声が聞こえてきた。グリムジヨールはその方を見る。

「テメエは……」

そこには八雲紫がいた。

「随分と早いお目覚めね」

「此処は何処だ!？」

そう言い、立ち上がろうとした瞬間、身体に途轍もない痛みが走った。

「くっ!」

「まだ立たない方が良いわよ。あなたは奇跡的に助かったと言っても良いほどなんだから」

グリムジヨールは自分の体を見る。

包帯が巻かれている。

どうやら、傷の手当てをされたらしい。

「テメエ、何で俺を助けた？」

殺そうとした自分を助けるなんて、正気の沙汰ではない。

「…あなたに興味を持ったから。ただ、それだけよ」

「ふざけてんのか？」

「ふざけてなんていないわよ。ただ、あなたをあそこで見殺しにするには惜しい存在だと思っただけ」

「…俺をどうする気だ？」

「どうもしないわよ。傷が治れば此処を出ても良いし、私の命を狙っても良い」

グリムジョーはこの女の言っている事が分からなかった。

傷が治って、自分の好きなようにしても良いなら、助ける事に意味があるのか。

ただ惜しいから？

それで自分の命が危機に晒されても。

「けど、あなたが本当に強くなりたいのなら、私の下で仕えてみない？」

「何？」

そのセリフにグリムジョーの表情が険しくなる。

仕えるという言葉に苛立ったのだらう。

ただ…

「強くなれるだと？」

その言葉にだけは引っ掛かった。

「そうよ。勿論、幻想郷の知識も、弾幕ごつこという物も教えてあげる」

「…」

少し考える。

「…分かった。今はテメエの下に就いてやる」

結果、グリムジョーは紫の下に仕える事にした。

「だが、それでテメエが俺に殺されても、文句は言うなよ」

「心しておくわ。じゃあ、あなたの名前を聞かせてくれない？」

「…グリムジョー・ジャガージャックだ」

こうして、グリムジョーは紫に仕える事になった。
それから約1ヶ月後に一護も幻想入りしたと聞かされる。

第 - 1 斬 【グリムジョーの幻想入り】（後書き）

東方妖々夢を久し振りにプレイしたらNormalをクリア出来なかった。

滅茶苦茶下手になっていた。

流石にちよつとヤバイかな。

いつもならNormalくらいはクリアできたのに。

第50斬 【仮面の下】

夜。

黒崎家の今日の夕飯はキムチ鍋。

とても赤い…辛そうだ。

キムチ鍋には肉や野菜、豆腐などが入っている。

そして、食卓に三人がつく。

…一人足りない。

「あれ、親父は？」

そう、父親の一心の姿が無いのだ。

「何か、今日は急な用事があるとかで何処かに出掛けてしまったの。明日の夜には帰ってくるって」

「そうか」

何だろう…。

前にも似たような事があったような気がする。それも最近に。

「それじゃあ、食べようか」

遊子がそう言うと、三人は夕飯を食べ始めた。

一護はキムチ鍋を突きながら、リモコンを手に取り、TVをつけた。夜のニュース番組。

交通事故やら、火災やら、大して興味を引かないニュースが続く。

センター

「今日の早朝未明…空座町の公園で…女性が遺体で発見され…」

「…！」

不意に今日の公園の事件を伝えるニュースが流れる。

空座町の事件が全国区のニュース番組で流れるとは思ってもみなかった。

遊子と夏梨もその事件の事を学校で聞かされていたらしく、事件の事を話し始めた。

二人の話を聞き流し、一護はニュースに集中する。

「被害者は身体を酷く傷付けられた後に、バラバラにされていたらしく…」

…酷く傷つけられた後に…バラバラ…。

「…！」

悪寒とも吐気ともとれる不快な感覚が、一瞬だけ一護の身体を駆け抜ける。

何か、途轍もなく嫌なものを思い出しかけた。

キムチ鍋の赤色でさえ生々しく見えて、それ以上口をつける事が出来なくなってしまった。

「どっしたの一兄？ 顔色悪いよ」

箸を置こうとした一護に、夏梨が心配そうな表情で言ってきた。

「ん、いや、何でもねえよ。ほら、とつとと食っちまおうぜ」

そう言い、一護は箸を再び持ち、赤いキムチ鍋に箸を入れた。

精神的疲労が高かったのか、一護は夕飯を食べ終わった後、少し勉強し早めに就寝した。

次の日の放課後。

一護と啓吾は教室に生徒が居なくなると、担任の下補習授業が始まった。

補習授業の内容は基本教科、国語、数学、英語だ。

二人はこの三教科をみっちり担任に教えてもらった。

それだけでも啓吾はクタクタなのに、その後止めを刺すかのように三教科のテストをやらされた。

一護は少しだけだが、昨日家に帰った後、復習していたので難無く出来た。

が、逆に啓吾は何の対策もしていなかったので、かなり苦戦していた。

結果、啓吾のせいで最終下校時刻まで帰る事が出来なかった。

一護と啓吾は二人で帰路につく。

二人が帰り道のいつも通る線路沿いの道にやってきた。

その時には辺りはすっかり暗くなっていた。

「あゝだるう〜」

啓吾が疲れ切った表情で言った。

放課後になつてまで、あれだけ補習授業をされたら啓吾にとっては死ぬほど辛いだろう。

「何で俺らだけ補習授業だったんだよ」

「昨日先生が言つてたじゃねえか。終わった事をあんまネチネチ言うなよ」

「でもさあ〜でもさあ〜、大島と反町は不良だから補修免除つてどつという事だよ!? あいつらも成績すごい悪いのにさ」

「さあ〜な」

一護の担任はヤンキーだったら、まあ殆どの事はOKされる。

「それにさあ〜」

啓吾がまだ話を続ける。

その話を一護は適当に聞き流していた。

(それにしても…)

平和だ。

ちよつと前まで、死神代行として活動していた自分を命をかけた戦いをしていた一年間。

ルキアと会つて、死神として活動し、その後に重罪を犯したルキアを助ける為に尸魂界に潜入し、ルキアを救出。

そしてその直ぐ後に破面が出現し、その破面と激闘を繰り広げ、最後は藍染との戦いで死神の力を失った。

この一年間は本当に色々な事があつた。

死と隣り合わせの生活。
だが、今は死神の力も失い、戦う事が無くなった。
今が一護にとつての本当の平和。
こんなに平和でいいのかって思えるくらい平和で
平和ボケしているかのようだ。

…

……

…だからなのだろうか。

一護はそいつがそこに立っていると云う事に、今の今まで気がつか
なかった。

「…」

そいつは闇の中から現れた。
闇の中からわき出るように。
影の中から浮き上がるようにして現れた。

「…わぁっ!」

啓吾が驚いた。

「あ…」

一護は声が出せない。
闇よりもなお黒い黒衣。
不気味な仮面。
そしてキラリと輝く…。

「啓吾っ!」

「うおおっ!!」

瞬間、一護は啓吾を突き飛ばしていた。

それと同時に、禍々しく光る刃が一護の目に前を通り過ぎていく。

「く…っ!!」

一護はゴロゴロと道路を転がる。

咄嗟に立ち上がり、両手を大きく広げて男の前に立ちふさがる。

「…」

男はゆっくりと、一步一步近づいてくる。

(…ヤベエ)

こいつはヤバイ。

とにかくヤバイ。

頭の中がチカチカとスパークする。

警報が大音響で鳴り響く。

逃げる！ 逃げる！ と、どこからともなく声が聞こえてくる。

男が手に持った巨大なナイフを構えもせず、無造作に横に薙いだ。

「ぐおおっ!!」

びゅんっと言う風を切り裂く音。

一護は身をよじらせて、何とか避ける。

「逃げろっ!! 啓吾っ!!」

一護が大声で叫ぶ。

「え…けど、一護…」

一体何が起こっているのか分からないのだろう。

啓吾は戸惑っていた。

ただ、驚いた表情を浮かべている。

だけど…。

今はそんな余裕は無い。

一刻も早く。

一秒でも、一瞬でも早く、この場を離れなければならない。

「早く逃げろ！ 啓吾！！」

「一護、お前はとうするんだよ…！？」

「いいから！ 早くいけ！」

「お前を放って行けるかよ！」

友達が危険な状況にいるのに、自分だけが逃げるなんて出来ない啓吾。

だけど、今はそんな事を言っている余裕など無い。

本当にヤバいんだ。

「俺は大丈夫だ！ 俺を信じろ！！ たのむっ！」

真剣な眼で啓吾を見つめる。

言葉以上に想いを伝える事を信じて。

「…あ、ああ…分かった…」

ようやく一護の必死の想いが伝わったようだ。

「すぐに警察呼んでくるから待つてるよ一護!!」

そして啓吾は後ろを振り向かず夜闇の中に駆けて行った。

「…」

それと同時に男が動いた。

今まで一護を見つめていた瞳が、啓吾の後ろ姿に向けられる。

そして、そのまま男はその後ろ姿を追って…。

「くそっ！ 待ちやがれっ!!」

瞬間、考える間もなく、一護の身体は動いていた。

腰を落とし、全身のバネを効かせて、男に飛びかかる。

「ぐっ!!」

「くっ!!」

激しい衝撃。

それと同時に、一護と男はもつれ合うように地面に倒れ込んだ。

「…ちっ!!」

「テメエ!!」

もみ合いながら、男の武器を奪おうとする一護。
それを躲しつつ、必殺の一撃を一護に喰らわせようとする男。

「…あ…くっ…」

「うっ…くっ…」

お互い上を奪えば勝負は決する。

一護は相手の武器くらいは奪い取れるだろう。

逆に相手は一護の命を奪い取れる。

天秤にかけるのは、ちよつと割に合わない条件。

でも今更もつどうにもならない。

「くそっ！ テメエ！」

「ぎ…ぐっ…」

互いにつかみ合うような形で、ゴロゴロと地面を転がっていった。
いつ果てるとも分からない取っ組み合いを、どのくらい続けただらうか。

激しいつかみ合いの衝撃で、男の付けていた仮面がガキンと外れた。

そして、否が応でも見えてしまう男の姿。

仮面の下に隠された、その顔は…。

「え…？」

命のかかっている状況だというのに、一護は驚きに我を忘れてしまった。

何故なら、その仮面の下に隠されていたのは…。

「何で…だよ…？」

おふくろ…。

黒崎真咲。

一護の母親だ。

一護の母親が目の前にいる。

死んだはずの母親が。

頭が混乱する。

訳が分からない。

理解できない。

混乱で頭が一杯になり、現実感が遠のく。

理解できる事があるとしたら…。

それはたった今、取り返しの着かないミスを一護が犯したと言う事だけ。

「あ…」

サバイバルナイフの切っ先が迫る。

黒崎真咲が振り上げたナイフは、真っ直ぐ一護に向かって突き進んできた。

一護の眼窩に飛び込んできた切っ先は、そのまま眼球を突き破る。ぐちゅりと血液とは違う粘性の汁が滴る。

それも一瞬。

溢れ出した鮮血に上塗られていく。

突き立てられる刃。

肉を引き裂き、骨を砕いて、感じる事など有り得ない領域にまで到達する。

死が頭蓋の中に溢れた。
そして、一護の自我はそこで消滅した。

…全てが闇に堕ちる。

…一護の世界が消えた。

第51斬 【廃絶の理】

「ぐあ……………っ！…！！！」

一護が飛び起きる。

「夢…？」

一瞬、自分がどこにいるのかすら、上手く認識できなかった。

「ここは…俺の部屋？ ……夢を見ていた…？」

さっきまで鮮明に見えていたはずの夢が、溶けるように消えうせて、もう思い出せなくなっている。

夢の中で感じていた事も、まるで霧に包まれたように、曖昧になっていく。

一護はゆっくりと自分の頬に触れる。

…涙。

涙が一護の頬と指を濡らす。

（…俺は一体どんな夢を見てたんだ？）

脳裏に残る悪夢の残滓を、必死に拾い上げようとしたが、こぼれ落ち霧散していった。

残ったのは、悪夢を見ていた不快感だけだった。

「？…ぐあ……………っ！」

胸の奥が熱い。

全身から脂汗が滲み出る。

熱さは激痛へとステップアップしていく。

「う…ぐ…」

悲鳴を上げそうになって、一護は唇を噛む。鼓動の度に、白い衝撃が意識を攻め立てた。全身の神経が痺れていく。

「…」

一護の意識がブラックアウトする。

「は…っ。…夢？」

死に至るほどの激痛が嘘のように消えている。

「何が、起きたんだ？」

服に手を入れ、胸の中心を確かめる。

早くなっている鼓動と冷や汗以外は、別段変わったところはない。なかった。

「…心臓の病気にでもかかっていたのか？」

一護は冷や汗に濡れた手をじっと見つめる。

「…！」

一瞬、腕も含めて、全てが消えたように見えた。
眩暈かと思ひ、目を固くつぶる。

「何とも…ねえ」

(…まさかな。そんな有り得ねえ事が起きる訳ないか)

「そつに…決まってる」

一護は深呼吸をして気分を入れ替えた。

《省略》

「つう訳だ一護。その廃絶の理ってサイトなら色々分かんと思つぜ」

放課後。

啓吾は一護が今日の事件について興味を持っている事に気づき、誰かからそつという情報が沢山載っているサイトを教えてもらい、一護に教えて上げたのだ。

「廃絶の理……」

「サイトのアドレス教えてもらったから、今から一緒に情報室に見に行こうぜ」

啓吾が一護の腕を引っ張る。

正直、今日は体調があまりよく無いから断りたかったけど、好奇心が上回ってしまったのか、一緒に見に行く事になった。

そして情報室へ。

二人は情報室に入ると、早速パソコンを立ち上げた。

ホームにいくと、啓吾が誰かから教えてもらったという廃絶の理のアドレスを打ち込み、サイトに入る。

廃絶の理とはニュースサイトで報道関係者でもない一般の人が、様々なホームページを毎回巡回し情報を収集して、自分のアンテナに引っ掛かったニュースを簡単なコメントと共に紹介しているものらしい。

その中で廃絶の理とは結構有名なニュースサイトとして多くの人に知られているようだ。

「断華」という、本名なのかハンドルネームなのか、よく分からない名前の人を作っている。

ズラツと並んだニュースへのリンク。
リンク先のページを読むだけで、最近ネットで話題なものはチェックできる。

よくこれだけの更新を毎日できるものだと感心する。

こんなものを毎日更新できるなんて一護からしたら超人か、超暇人のどっちかだ。

この廃絶の理は数あるニュースサイトの中でも、群を抜いて収集するニュースの数が多いみたいだ。

単純に多くのニュースに眼を通したいのなら、新聞社のサイトとこ
こを見れば充分だ。

「つつか、今日起きた事件の事はまだ掲載されてねえんじゃねえの
か？」

殺人事件は今日の朝辺りに起きた事件。

即ち、まだあまり報道されていない事件だ。

「ところがどっこい。今日の事件の事がもう掲載されてるぜ」

啓吾が事件の記事を見つけた。

どうやら、断華という人は早くも事件の事を嗅ぎ付けていたらしい。
記事に発見された時刻や、事件が起きた地区の事などが事細かに書
かれている。

流石に被害者の情報や、死亡推定時刻などは載っていない。

そして、一護は記事の横の画像を見て目を見開いた。

そこには絶対に報道されない、死体の写真が掲載されていた。

一護はそれを見て気分が悪くなった。

「おい、何だよこの写真？」

「ん、多分作り物だろ。死体の」

一護が死体の写真を見て言ったが、啓吾は作り物だと言った。

確かに有名なニュースサイトで本物の死体の画像など貼れば、騒ぎ
になる。

だが、一護すら本物の死体と間違えてしまうほどの出来上がりだ。
しかも事件が起きてから時間はそれ程経っていない。

一体どうやって、こんな短時間で作ったのだろうか？

「それよりも横に書いてある記事読もうぜ」

啓吾が写真を見つめたままの一護にそう促す。

「！お、おっ……」

啓吾の言葉に一護は我に返る。

一護は写真の横に書かれている記事を読む。

……

……どうやら、殺された人は鋭利な刃物で切り刻まれ、殺されたようだ。

身体中を弄ぶかのように切り刻まれた死体。

横の作り物の死体の写真がその酷さを教えてくれる。

そして、記事の最後に付け足しのように一文書かれている。

それは18年前に空座町で連続殺人事件と集団失踪事件が起き、空座町を騒がせていたという文面だ。

死体をバラバラに刻む猟奇的なものだったみたいで、死体を隠す意味すら無いように、間隔を空けずに次から次へと人が殺されたようだ。

その事件は空座町に住む集団失踪事件を境にぶつとりと途切れたみたいだ。

その二つの事件は同一犯の可能性が非常に高いらしいが、現在も犯人は不明。

そして手掛かりも全く無いまま、時効まで警察が犯人を追っている。世間では永遠に犯人の正体は分からないままだと言っている。

後7年くらいすれば時効が成立する。

恐らく犯人を捕まえるのは不可能だろう。

「この18年前の事件、姉貴から聞いた事あるな」

啓吾も一護と同じところを読んでいたようだ。

「たしか姉貴曰く、切り裂きジャックの襲来だって言ってたな」

切り裂きジャック。

詳しくは知らないが、ロンドン市民を恐怖のどん底にたたき込んだ猟奇的連続殺人事件・切り裂きジャックだ。

今から100年以上も昔、売春婦ばかりを残虐な手口で殺した人物。この事件は結局迷宮入りとなり、犯人は判明していない。

「切り裂きジャックか…」

確かに18年前の事件と似ている。

「けど今回の事件で井上から聞いた話だと？闇夜の男？って奴が出てきたな」

「？闇夜の男？って、あの都市伝説か？」

「ああ。ネットに情報とか無えかな？」

「無いだろ。？闇夜の男？の都市伝説って空座町で少し有名なだけで、全国的には全く知られて無いからな」

それもそうだ。

闇夜の男の都市伝説はあまり知れ渡って無い都市伝説だ。ネットなどに情報があるとは思えない。

「じゃあねえ。今日はこんぐらいにするか。これ以上探しても情報

は無さそうだし」

一護はブラウザを閉じ、システムを終了させモニターの電源を落とす。

その時、どつと体が重くなった。

どうやら精神的疲労は自分が思っていたより、かなり凄まじいものであったらしく、一護と啓吾はすぐに帰路についた。

第51斬 【廃絶の理】（後書き）

殺人などの時効が無くなったらしいですが、一護の世界では殺人などの時効が存在しているという設定にしています。

第52斬 【黒い影】

「…寝ちまったのか」

昨日、家に帰った後、一護はあまりにも疲労に夕飯までベッドで横になった。

だが夕飯まで眠るはずだったのに、次の日の朝まで眠ってしまった。それ程まで疲れていたのだろう。

「…うつ」

頭痛がする。

それに、身体が重い。

まだ疲れがとれていないみたいだ。

「熱でもあんのか？」

額に触れるが分からない。

恐らく熱は無いだろう。

一護は病気は愚か、軽い風邪にも殆ど掛かった事が無い。

「んな訳ねえか」

時計を見ると、そろそろ遊子が朝食を作り終え、呼びに来る時間だ。一護はベッドから立ち上がり、制服に着替えようとする。

「ぐあ…っ！」

制服に手を伸ばした瞬間、急激な頭痛に襲われた。

一護は頭を抱え、倒れ込みそうになるのを何とか踏み止める。

「何だよ…一体…!？」

頭痛が止まない。

それどころか頭痛が増してきている。

その瞬間だった。

一護の脳裏に何かが現れた。

それは人影。

黒いシルエットになっていて、誰かは分からない。

が、なぜか大切な人のように感じる。

自分の運命を変えた人。

そんな考えが浮かんできた。

けど、ルキア…では無い。

じゃあ一体…。

その時、その人影の口元が動いた気がした。

だが、何も聞こえない。

そのまま人影は一護の脳裏から消え、同時に頭痛が止んだ。

「…何だったんだ、今の？」

自分でも理解できない。

けど、何か忘れてはいけないものを忘れている気がした。

一護は妙な違和感に駆られながらも、普通の日常に戻った。

学校にいる間も精神的疲労で授業も集中できずにいた。
時折激しい頭痛も起きた。

その度に人影が現れる。
現れては自分に向かつて何かを言っているような気がする。
けど、一体何を言っているのかが分からない。
そして誰なのかも分からない。
そんな事が五回ほどあった。

放課後、一護は酷く疲れていたのので、直ぐに帰宅した。
帰宅途中も一度だけ激しい頭痛が起きた。
流石に七回目って事もあり、頭痛で頭を抱える事も無くなり、悶える事も無くなった。

だから、脳裏に現れる人影に集中できた。
人影は同じように何かを話している気がする。
否、話しているのだ。

何て言っているかは分からないが、何かを言っている。
とても懐かしいような声。
少し声を荒げているように聞こえる。
だけど聞き取れない。
そんな声と影も頭痛と共に消えた。

「…何だつてんだよ…!？」

一護は一言そう吐き、走るようにして帰宅した。

帰宅すると同時に自室に行き、ベッドの上に倒れ込んだ。
先に帰っていた遊子と夏梨が心配そうに声を掛けてきたが、一言大丈夫と言い安心させた。
恐らく二人共、安心はしていないだろう。
心配性な二人がこの程度で安心する訳が無い。

だけど、一護にはもうベットから起き上がる力が無い。
一護はこのまま寝てしまいたいという誘惑に駆られた。
そして、そのまま睡魔の誘惑に軽く誘われた。

.....

.....

.....

.....

...

- - - - -夜。

一護はゆっくりと目を覚ました。

窓の外から月明かりが射している。

もう、すっかりと夜だ。

とても静寂で心地よい。

余計な雑音が無いからだ。

.....

妙に静かだ。

静か過ぎる。

普段なら下の階から、何かの音がしても良いのだが、何の音もしない。
携帯の時計を見ると、今は夜の九時前。

遊子たちが寝るには少し早いような気がする。

不審に思った一護は部屋のドアを開け、下の階を見る。

真っ暗だ。

明かりが全く点いていない。

(おかしいな)

この時間帯に家の明かりが一つも点いていない事は有り得ない。

(遊子と夏梨はもう寝たのか?)

一護は下の階に下りる。

家の中を階段を下りる足音だけが響く。

下の階に行くと、リビングの扉を開ける。

…誰もいない。

どうやら本当に遊子と夏梨は寝てしまったようだ。

(親父も寝たのか…?)

妹たちは兎も角、一心まで寝ているとは思っていなかった。

一護はリビングの電気を点ける為に、スイッチを入れる。

が、電気が点かない。

「何だ…?」

電気が点かない事に疑問を抱いたが、気にせずリビングの中に入る。その瞬間だった。

背後で何かの気配を感じた。

それと同時に大量の血が口から溢れ出た。

「ぐあ…っ!」

胸から突き出る黒い刃。

サバイバルナイフが背中から胸にかけて、肋骨を縫うように貫通していたのだ。

確実に心臓を貫いている。

「…これで終わりだ…黒崎一護…」

何処かで聞いたような不快な声。

口から血を吐きながら、倒れ伏した。

倒れ伏すと同時に、サバイバルナイフが引き抜かれた。

「テ…テメエ…」

一護が力無く言い、ゆっくりと自分を刺した人物を見る。

闇よりもなお黒い黒衣。

不気味な仮面。

都市伝説の？闇夜の男？の噂で聞いた人物とそっくりだ。

いや、それ以前にこいつとは何処かで何度か会った気がする。

「…貴様の妹と父親は殺した」

男は一護に更なる絶望感を与えるように言った。

(…遊子も夏梨も親父も…殺されたのか…)

それを聞いた一護は何故か、それを知っていたかのように思えた。

自分の冷静さに嫌気が差す。

「…早く…殺してくれ…」

自分でも理解できない事を呟いてしまった。

「…そうか、既に魂魄が崩壊し掛けているのか。なら良い。とつとと殺してやるっ」

男はそう言つと、サバイバルナイフを振り上げた。
その時、出血が多過ぎたせいか一護の視界が暗くなった。

「死ね黒崎一護」

何も見えない。

けど、男がサバイバルナイフを振り下ろしてくるのは分かる。

…だが、何も感じない。

自分はサバイバルナイフを振り下ろされる前に、意識を失ってしまったのだらうか。

「こ、この波動は…博麗の結界だとお…!?!?」

…博麗?

「!?!?な、何故…貴様が…こんなところに…?!? まさか…貴様

アア!」

男の声が聞こえてくる。

一護はまだ生きているのだ。

そして、今一体何が起きているのかを確かめる為に、残り少ない力で目を開け、男の方を見る。

…男の前に一人の女性が立っていた。

後姿で顔は見えないが、一護は誰なのかが分かった。

「…おふ…くる…」

そう、一護を守るように母親、黒崎真咲が立っているのだ。
訳が分からないが、心の何処かで安堵している。

「一護……」

真咲が口を開いた。

懐かしい声が一護の耳に入る。

それだけで、涙が溢れ出そうになった。

「私が絶対に護るから」

真咲がそう言った瞬間、凄まじく神々しい光りが全てを包み込んだ。

「うぐあああああああ……！！！！！！！！」

男が悪魔のような断末魔を上げる。

それと同時に一護の意識が遠のいた。

例えるならば、全ての世界が消え真っ白になった世界。

全ての世界を失った空を見上げるような感覚。

意識は一片の曇りもなく鮮明なのに、何も見えない。

盲いてしまったように……何も無い。

それを確かめるために手を伸ばす。

腕が無い。

脚も、身体も無い。

確かめようも無いが、恐らく目も口も耳も……顔も無いだろう。

ただ虚ろなる世界を漂っている。

何とも心細い……。

そうは思ったが、不思議と恐怖は無い。

その瞬間、何かが現れた。

そう、あの人影が現れたのだ。
頭痛の度に一護の脳裏に現れた、あの人影が
人影が何かを叫んでいる。

「い…て…のよ…」

あまりよく聞き取れない。
が、今までよりは聞き取れた。

「いっ…てんのよ…」

どんと声がはつきりしてくる。

「いつま…てんのよ…ちっ」

(何だ…この声…どっかで聞いたような…)

一護は集中して、無い耳で聞き取る。
そして、一護はその声を完全に聞き取った。

「いつまで寝てんのよ、一護…!!」

ゴツンと言う音と共に、無い額に激痛が走った。

「イテエッ!!」

一護は悪夢から目覚めた。

第52斬 【黒い影】（後書き）

ようやく東方幻夢殺篇の終了が近くなってきた。
早く終わらせたい。

この篇で主人公は六回の死の体験をしてしまいました。
もう、これからは死なないかな？

第53斬 【闇夜の男】（前書き）

遂に東方に戻った。

約一ヶ月半。

結構長かった。

第53斬 【闇夜の男】

激しい痛みと共に、一護は目を覚ました。
額が痛い。

誰かに平手打ちを喰らわされたような痛みだ。

「イテエッ!」

一護はゆっくりと目を覚ました。

そこには霊夢がいた。

どうやら霊夢が起こしに来たようだ。

「いつまで寝てるつもり一護。もう朝食済ませちゃったわよ」

「ああ、悪い。今起きる」

「早くしてよね」

霊夢はそう言い、部屋を出て行った。

「…」

夢の内容を覚えている。

とても鮮明に。

不快で不快で凄く嫌な夢。

自分が殺される夢。

家族や友達が殺される夢。

まるで現実だったかのような現実感があつた夢。

痛みも悲しみも苦しみも、現実のそれと全く変わらないほどの夢。

一瞬吐気を催した。

「一体、何だったんだ？ あの夢は」

思い出すだけで不快になる夢。

こんな夢は生まれて初めてだ。

一護は布団から起きようと立ち上がるうとする。

その時…。

「…う…！」

視界が歪む。

胸に焼けた鉛が注がれるような激痛が走る。

「ぐ…はっ…！」

一護は胸を掴む。

血管という血管が裂け、神経という神経が千切れそうな痛み。

細胞がバラバラになりそうな苦痛。

痛みが一護の意識を、軟泥のような闇へと引きずり込もうとする。

一護は気を失いそうになる。

失う訳にもいかず、肉体と精神を引き裂かんばかりの激痛を、封じ込めるように身体を丸めながら、一護はじつと耐えた。

「…」

突くような痛みが、徐々にはあるが引いていくのが分かる。

「…がはっ…！」

痛みに耐えるために、止めていた息を一気に吐き出す。
痛みの痕跡が神経に残り、吐き気と痺れたような感覚が押し寄せてきた。

「……」

けれど、何とか気絶せずに済んだ。

「そういや、夢でもこんな事が」

夢でも、殺されて起きた次の日は何らかの不快感に襲われた事があった。

「ただの、夢じゃねえのか……？」

一護はゆっくりと布団から起き上がる。

いくら、ただの夢でなくても起きてしまえばどうする事も出来ない。

だが、三つほど不可解な事がある。

空座町で起きた18年前の連続殺人と集団失踪事件。

“闇夜の男”の正体。

そして黒崎真咲の事。

“闇夜の男”の正体は一度仮面を取り見た。

正体は黒崎真咲だった。

だが黒崎真咲は最後に一護を闇夜の男から護った。

恐らく闇夜の男の正体は別にある。

真咲が二人もいるはずがないのだから。

一護は布団を畳み、私服に着替える。
着替えたのと同じくらいに、ドタドタと足音が聞こえてきた。

「誰だ？ うるせえな」

精神的疲労がある一護にとって、寝起きから雑音を立てられると、一言で言ってしまう。

そして、その足音の主が自分の部屋の襖を強く開けて入ってきた。

「本物の黒崎一護！ 今度こそ私と尋常に勝負しろおおー！」

朝の少女からの第一声。

いきなり勝負を挑まれた。

勝負を挑んできたのは勿論、伊吹萃香。

「何だよ突然。何で俺がお前と勝負しねえといけねえんだよ？」

「当たり前じゃん！ 昨日この私を騙しといて、よく言えたな！」

昨日…。

（そういえば、凄まじいくらい長い夢を見てたせいで、昨日の事をすっかり忘れてたな。つうか、昨日っていう実感が無い）

昨日、伊吹萃香が黒崎一護に弾幕勝負を挑みに来たが、何を間違ったのか一護と魔理沙を勘違いし、その流れのまま魔理沙と萃香が弾幕勝負をした。

最終的に萃香は魔理沙が一護では無い事に気づき、そのまま弾幕勝負は終わった。

だから、正真正銘の黒崎一護に弾幕勝負を挑みに来たのだろう。

「それは悪い」

一護は昨日騙した事を詫げる。

「けど明日にしてくれ。今日は疲れてて、どうにも弾幕勝負をする気にはなれねえんだ」

「？寝たのに何で疲れてるの。普通は寝たら疲れって取れるんじゃないの？」

「変な夢を見たら精神的にしんどいんだよ」

一護は適当に答えた。

「むう〜…だったら明日で良いや。本調子じゃないと、やっても詰まんないし」

萃香は諦めてくれた。

けど、弾幕勝負をするのは変わらなかった。

「…とつと朝飯食うか」

朝食を食べ終えた一護は、縁側に座りながら空を仰ぎ見た。

魔理沙は昨日の萃香との弾幕勝負で、身体中がボロボロになり、立てずに寝込んでいる。

萃香も同じくらいボロボロになったはずなのにピンピンしている。

流石は鬼である。

「…」

一護は夢の事を思い出していた。
思い出したくも無いが、気になるからだ。

…おふくろが護ってくれた。
夢で一番新しい記憶。

夢なのだが、闇夜の男から一護を護ってくれた。

…また、護られた。

夢だが、夢じゃなかったような気がする。
何故か、そんな気がする。

でも正常に考えれば、ただの不快な夢だ。
それだけなのだ。

「一護、私ちよつと人里に行って来るから、留守番していてね」

不意に霊夢が背後に現れ、人里に行くと言った。

「買い物か？」

一護は霊夢の方に振り返って聞く。

「ええ、そうよ。お昼の食材が無いから、買い足しに行くの」
食材が尽きたのか。

そして霊夢はそのまま飛んで人里に向かった。

「…忘れて行きやがった」

縁側から居間を見ると、テーブルの上には霊夢の財布が置いてあった。

どうやら財布を忘れていったようだ。

財布を持って追いかけてよと思ったが、身体がだるくて動く気がしなかった。

「…駄目だよな。こんなんじゃ」

一護は自分の墮落している姿が嫌になり立ち上がる。

一度背伸びをし、気分を入れ替える。

(掃き掃除でもするか)

一護は神社前の掃除をしようと思った。

参拝客は全く来ないが、一応掃除をしておかないと廃神社になりかねない。

まあ、成る事は無いだろうが。

「それじゃあ、私も出掛けよっと」

萃香も縁側に来て言った。

「…何処に行くんだ？」

別に興味は無いが、何となく聞いてみる。

「ん、地底だよ」

「?…地底って地底世界の事か」

誰かから地底の事は聞いたが、まだ行った事は無い。

「そつだよ。結構前だけど地底にも面白い外来人が現れてねえ。人間でも妖怪でもないんですけど、そいつが凄く強くて、時折弾幕勝負をしてもらってんのさ」

「人間でも妖怪でも無い外来人？」

「そつだよ。いつもは面倒臭えとか言っただけで全力では戦ってくれないけど、嬉しいんだ。その外来人と弾幕勝負してると」

「そつか。随分と良い奴なんだな」

「そつねえ。多分良い奴」

萃香はそう言うと、地底という場所に行ってしまった。

この幻想郷には一護やグリムジョー以外にも沢山の外来人がいるよつだ。

「さてと…掃除でもするか」

と、一護が箒を手にした瞬間、凄まじく不気味な、嫌な気配がした。一護は手にした箒を手放す。カタンと箒が地に落ちる。

(何だ…この感覚!? まさか…っ!?)

一護はこの感覚を知っていた。

夢でいつも、あいつが現れた時の不快な感覚。

一護は不快で最悪な気配を放っている方を見る。
見たくは無かった。

けど、見なくては確証を持てなかった。

「!!!? な、何で…お前が…!?!」

一護の見た方向には一人の男が立っていた。

黒い黒衣を身に纏い、能面の泥眼のような不気味な面マスクを付けている。

そう、そいつは紛れも無い、夢の世界で見た? 闇夜の男? だった。

「黒崎一護。自分の母親に感謝するんだな」

この下卑たような声。

間違いない。

? 闇夜の男? だ。

「もう少しで、貴様の魂魄を深淵なる闇の底へ消し去れるはずだったのだが、予想外の邪魔が入ったからな」

男は淡々と喋り続ける。

「何でお前が此処にいるんだよ!?!」

一護は男の話に聞く耳持たず、怒鳴りつけるように問いかける。

「お前は俺の夢の世界の人間じゃねえのか!?!」

「…くっ、くくくく。黒崎一護、あの夢の正体を知りたいか？」

不快な笑いをする。

「夢の正体だと…！？」

「そつだ。夢の世界の正体だ」

一護は少し冷静になる。

此処は幻想郷。

不思議な事が起こっても可笑しくない。

「まさか…」

そして、一護は夢の正体があった気がした。

「察しが良いな。そう、貴様に見せていた長い悪夢の正体は俺の能力だ」

「…ッ！？」

「？悪夢を操る程度の能力？とでも言っておこうか。おっと、勘違いするなよ。ただ悪夢を見せるだけじゃない。俺は相手に永久に覚める事の無い悪夢を見せる事が出来る」

「永久…？」

「そう…といつても永久では無い。悪夢を見ている者の魂魄…即ち精神が破壊されれば、悪夢から覚める事が出来る。だが、その代償として、その者は死ぬ事になるがな」

「何だと…!？」

「相手がその悪夢に現実感を持てば持つほど、魂魄の破壊は早まる。魂魄が破壊される予兆として身体が消えかけていただろう？」

夢を思い出す。

自分が殺された次の日は、眩暈などがし、身体の一部が一瞬消えた事があった。

「貴様を五回殺した後、もう後一回殺していれば、貴様は間違いなく完全な死へと追い遣れた。だが、邪魔が入ったせいで、殺すことが出来ず、その上貴様を悪夢から強引的に覚まさせた」

邪魔…。

恐らく黒崎真咲の事だろう。

「まあ、それも良い。この俺が直々に貴様を死へと葬ってやるっ」

男は仮面のようなマスクを取る。

マスクから闇夜の男の本当の顔が現れた。

獅子を思わせる程に猛々しく逆立った銀の髪。

隙の無い眼光を常に湛えている蒼い瞳。

「まだ名乗っていないかったな」

男は手に持ったマスクを捨て言う。

「幻獄七夢卿の一人。フレデリック・グレアム」

第53斬 【闇夜の男】（後書き）

フレデリック・グレアムという名前は過去の殺人鬼から取っています。

簡単に言つと二人の殺人鬼の名前を合体させたもんです。

悪夢を操る程度の能力の説明の詳しい詳細は次に書くかも（多分）。

第54斬 「フレデリック・グレアム」

「幻獄七夢卿の一人。フレデリック・グレアム」

「！？幻獄七夢卿…だと…！？」

幻獄七夢卿。

非常に危険な思想を持った七人の能力者。

一年程前に刹蘭、そして元幻獄七夢卿のルリミアと戦っている。二戦とも、桁違いに苦戦した末、仲間達がかなりボロボロになった。その七人の内の一人が、一護の目の前に現れたのだ。

「ああ。やはり貴様は幻獄七夢卿の事を知っていたか。刹蘭から聞いたのか」

「…幻獄七夢卿…テメエらの目的は何だ？」

「目的？ 何故それを貴様に話さなければならぬ？」

最もな事を言う。

「私は貴様を殺しに来たんだぞ」

「黒符『月霊幻幕』！」

フレデリックの言葉を聞いた一護は、即座に攻撃を仕掛ける。無数の三日月状の弾幕がフレデリックに襲い掛かる。

「フッ」

フレデリックが馬鹿にした様に鼻で笑う。
途端、放たれた一護の弾幕が全て、フレデリックやその周りに当たり、爆発した。

「随分と荒っぽいな、黒崎一護」

だが、爆煙は直ぐに掻き消え、服装の乱れすらない、余裕な姿のフレデリックが現れた。

「なん…だと…!?!」

「博麗の人間に敗れ、幾星霜を経て、ようやく貴様らに復讐できる」

フレデリックはそう言うと、カードを取り出した。

「貴様らはスペルカードを使って戦うんだっただな。なら私もスペルカードを使わせてもらおう。ただし、ごっこという甘い遊びではない。れっきとした、殺し合いでだ」

一護もスペルカードを取り出す。

「怒符『ヘルクラッド』」

フレデリックがスペルを唱えると、ドス黒い槍状の弾幕が幾つも現れた。

そして、そのまま槍状の弾幕が一斉に一護に襲い掛かる。

一護は持っていたスペルカードを唱えるのを止め、避けるのに専念した。

地面の魂を引き出して反発力の補助をさせ高く跳ぶ。それで何発かの弾幕は一護に当たらず、地面に衝突した。一護はそのまま空中に立ち、再び飛んで来るフレデリックの弾幕を避け続ける。

「逃げるのは巧いようだな。だが、逃げてばかりでは、私の弾幕は止まないぞ」

フレデリックは新たなスペルカードを取り出す。

「獄炎『パジエリマ』」

スペルを唱えると一護を覆い尽くす程の巨大な火の鳥が現れ、高速で一護の方に迫る。

「しま…っ!?!」

高速で向かってくる火の鳥に、一護は逃げ切れず、飲み込まれた。凄まじい炎の熱が、一護を覆い尽くす。霊圧も何も無い人間なら、一瞬で骨をも灰になってしまうような炎だ。

火の鳥は一護を飲み込んだ後、そこに佇む。

「終わりか…随分と呆気ないな」

フレデリックが火の鳥を見ながら言う。
火の鳥に飲まれた一護が、何の反応も示さないのだ。
もう、死んだのだろうか？

「!?!ん…」

火の鳥の様子がおかしい。

それに気付いたフレデリックが、火の鳥を凝視する。

その瞬間、火の鳥から黒い霊圧が現れ、火に鳥を包んだ。

「何だ、あれは？」

フレデリックが言い終わると同時に、黒い霊圧と火の鳥を払いのける様に、一人の黒衣の男が現れた。

そう、黒崎一護が死神の姿になったのだ。

「ほう、それが貴様の切り札か？ 黒崎一護」

フレデリックが今の一護の姿に、少し興味を示す。

「ああ」

一護は一言そう答えると、一瞬でフレデリックの背後に移動する。

「!?!何だと!」

フレデリックはあまりにも早い一護のスピードに、反応できなかった。

一護は右腕の霊圧を刀状にし、フレデリックを斬る。

「チッ」

だが、フレデリックの右肩を少し斬っただけで、二撃目の攻撃は避けられた。

「怒符『ヘルクラッド』！」

フレデリックは一護との間合いを取る為に、スペルを唱え、弾幕を放つ。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護もスペルを唱え、無数の弾幕を展開させ、フレデリックの弾幕を相殺していく。

だが、フレデリックの計算通り、一護が弾幕を相殺している間に、間合いは充分に取れていた。

「凄いな。まさか、その姿になるだけで、そこまで基本性能が強化されるとは」

「…」

一護は無言でフレデリックを見据える。

「…何を黙り込んでいるんだ？」

「…あんたはいつ、本気を出してくれるんだ？」

「何？」

「幻獄七夢卿の実力はこんなもんじゃねえはずだろ？ 刹蘭もルリミアも、この程度の力は簡単に対応してた。あんたみたいに、肩を簡単に斬られるような奴等じゃなかったぜ」

刹蘭は霊夢、魔理沙、レミリア、咲夜の四人を相手にしても無傷。ルリミアに至っては。七人を相手にしても余裕に対応していた。

「…そうだな。だったらお望み通り見せて上げようか？ 私の真の力を」

途端に、場の空気が変わる。

「私はこう見えても魔術師でね。魔力という物が力の源なんだよ」

魔術師…いわゆる魔法使いだ。

だが、魔法使いなら魔理沙、パチュリー、アリスと、既に三人と出会っている。

そんな事は常識の範囲で覚えた。

「それがどうした？」

「もし、その私の魔力が無尽蔵だったら、どうする？」

「!？」

魔力が無尽蔵。

それは、どれだけ魔力による力を使おうと、疲れることが無い上、魔力による力に限界が無くなる。即ち、最強の状態だ。

「さあて、少し、本気を出そうか」

フレデリックがそう言うと、スペルを唱える。

「怒符『スロウトハンド』」

フレデリックの目に前の空間に、直径4 m程の穴が開き、その中からいくつもの黒い腕が現れ、一護に襲い掛かる。

黒い腕の、手の指は鋭く尖っており、一度掴まれば、肉に喰い込みそうだ。

一護は刀状の霊圧で、向かってくる黒い腕を斬りながら、フレデリックに向かう。

だが、黒い腕は止む事無く、穴から出てくる。

「チツ、切りが無え」

向かってくる黒い腕を切り落とし続けるも、減る事が無い。

黒い腕が、穴から無限に出てくるからだ。

「くそ。だったら…」

一護は新たにスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護が右腕を振るうと、霊圧による斬撃が飛ばされた。

そう、一護が死神時代に使っていた唯一の技、月牙天衝だ。

月牙天衝が黒い腕を、全て掻き消していく。

その隙に一護はフレデリックに近づき、少し近づいたところで、高速移動をした。

移動場所はフレデリックの背後だ。

（もらった！）

今度こそ完全に隙を突いた。
と思ったが、簡単に避けられる。

「こんな見え透いた動きが、私に通じると思うなよ」

フレデリックは避けると同時に、一護の腹を蹴り飛ばした。
魔力を込めた蹴り。

一護は口から血を吐き、後方に勢いよく吹っ飛ばされた。

「くくくくく、どうだ、私の蹴りは？ 魔力を込めた蹴りは、今までに喰らった事の無いくらいに、痛かっただろう？」

「く…：そっ！」

一護はさっきの蹴りで、森の方まで吹っ飛ばされた。
お陰で木が何本の薙ぎ倒されている。

「さあ、早くこちらに戻ってきてくれ。それとも、今の一撃でノックダウンか？」

「まだだ！」

一護はフレデリックの方に駆ける。

「怒符『ヘルクラッド』」

向かってくる一護に、フレデリックはスペルを唱えた。
再び、一護に槍状の弾幕が放たれる。

「黒符『月霊幻幕』！」

一護もスペルを唱え、三日月状の弾幕で、フレデリックの槍状の弾幕を相殺していく。

その瞬間、一護は高速移動で、フレデリックの上空に移動した。フレデリックは一護にまだ気付いていない。

「いくぜ…黒斬『月牙天衝』！」

一護は上空からフレデリックに向かって、月牙天衝を撃ち放った。

「何処に向かって撃っているんだ？」

刹那、一護の更に上空からフレデリックの声が聞こえた。一護は上を見る。そこにはフレデリックがいた。

「くそ…！」

一護は透かさず構える。

「遅い。獄炎『パジエリマ』」

フレデリックが先程のスペルを唱えた。火の鳥が現れ、一護に襲い掛かる。

（ヤベエ…！）

避ける選択肢は無かった。

火の鳥が凄まじく速いからだ。

一護は目を瞑り、ガードの態勢を取る。

「水符『プリンセスウンディネ』」

「萃鬼『天手力男投げ』」

その時、聞き覚えのある二つの声が聞こえてきた。

その二つの声がスペルを唱える。

瞬間、目の前に迫ってきていた火の鳥が、二つのスペルにより掻き消された。

「誰だ？」

フレデリックも予想外だったらしく、少し驚いている。

一護はゆっくりと、声のした方を見る。

「誰ですって？ まず、自分から名乗りなさい…と、言いたいらるけど、特別に先に名乗ってあげるわ」

一護が見た二つの声の主は、予想通りの人物だった。

「動かない大図書館 パチュリー・ノーレッジよ」

「萃まる夢、幻、そして百鬼夜行 伊吹萃香だ」

そこには、パチュリーと萃香がいた。

第54斬 【フレデリック・グラム】（後書き）

久しぶりの弾幕勝負でした。

久しぶりだったのか、中々上手く書けませんでした。

まあ、元々上手くは書けないんですが。

とりあえず、前話で言っていたフレデリックの能力の解説をします。

悪夢を操る程度の能力の解説。

相手の寝ている時に、発動可能。

能力発動中は一人にしか能力を掛けれない。

相手の夢の世界に入り込み、悪夢を見せ、魂魄を崩壊させる事を目的とした能力。

対象者がその悪夢に現実感を抱けば抱くほど、魂魄の崩壊は早まる。更に、相手の夢は能力発動中、必ず目を覚ます事は無い。

といった能力ですかね。

少しおかしいかもしれませんが、こんな感じです。

第55斬 【聖無石と邪劫の法】

「パチュリー、萃香：何で、お前らが？」

一護が二人の方を見て言う。

パチュリーと萃香が一護を助けに来たのだ。

だが、どうして？

パチュリーは紅魔館から滅多に出ないし、萃香は地底に行くと言っ
て出て行った。

此処にいるのは、少しおかしい二人だ。

「説明は後よ。幻獄七夢卿を前にして、そんな暇あると思う？」

たしかにそうだ。

幻獄七夢卿の戦いは、一瞬の隙で生死が決まる。

今、そんな事を聞いている場合ではない。

「…魔術師と鬼か。成程。中々、悪くない助っ人ではないか、黒崎
一護」

フレデリックが二人を確認して言う。

確かに助っ人としては、かなり頼りになる。

だが、フレデリックは全く危険視をしていない。

居ても居なくても、大して変わらないと、いう事なのだろうか？

「…あなたが、あの有名な魔術師：フレデリック・グレアムね。会
えてほんの少しだけ光栄だわ」

パチュリーが一護の方に移動しながら、フレデリックに言う。

何が光栄なのだろうか？

「ほう、この私の事を知っているのか。やはり、アレでか？」

「ええ、そうよ」

パチュリーが一息いれりと、言う。

「あなたは初代魔術師、ダルク・マグスの残した魔導具の一つ…？
オレル・クラッド聖無石？の所持者だからよ」

「そうか、やはりな。魔術師達は、そんなにこれを欲するか」

フレデリックは手の平に収まるほどの、小さな黄色の宝石を見せてきた。

それを見た、パチュリーが驚きの余り、身体を一瞬振るわせた。

「どうだ、美しいだろ？　これが聖無石だ」

その聖無石が黄色く輝いている。

「…なあ、パチュリー。あれは一体何なんだよ？」

一護が聖無石を見ながら言う。

魔術師では無い一護にとっては、専門外で全く分からない。

「…あれは、聖無石と言って、魔術師なら誰もが知っている人物、ダルク・マグスが作った魔具なの」

「魔具…魔理沙が持つてるミニ八卦炉みてえなやつか？」

「ミニ八卦炉…みたいなやつね。そうだったら、どれ程楽か」

「そんなにヤベエのか？」

「ええ、あれは…あいつに無尽蔵の魔力を供給する魔具よ」

「…!!無尽蔵…だと…」

一護は数分前の事を思い出す。

あの時、「もし、その私の魔力が無尽蔵だったら、どうする?」と言っていたが、あれは半信半疑で聞いていた。

だから、それが確信に変わると、驚かすにはいられない。

「そうよ。だから、あいつに勝つには早めに決着をつけなくちゃいけない。そうしないと、私達が先に力尽きるわ」

時間が掛かれば掛かるほど、一護たちが不利になる。

相手の魔力が無尽蔵だが、こちらには限界があるからだ。フレデリックは聖無石を体内に取り入れた。

その瞬間…。

「だらつしゃあああああ!!」

考えるより先に動け。

萃香が戦いを待ち切れずになり、真っ先にフレデリックに向かった。

「ちよつと、萃香! 考え無しに突っ込まない!」

「考えるより動けだあ!!」

パチュリーの制止の声も聞く耳なし。
仕方なく、一護もパチュリーも萃香から、少し遅れて動き出す。

「全員で来るか。なら、怒符『スロウトハンド』」

フレデリックの目に前の空間に穴が開き、その中からいくつもの黒い腕が出てくる。

萃香は向かってくる黒い腕を、素手で殴り飛ばして行く。

一護では到底真似の出来ない事だ。

だが、流石に腕の数が多過ぎるのか、萃香一人では対応できなくなつた。

「後方で援護するわよ一護」

「ああ」

萃香の後ろを走る二人は、一人で黒い腕に対応している萃香に援護する。

「金符『シルバードラゴン』！」

「黒符『月霊幻幕』！」

パチュリーの銀の弾幕と、一護の黒の弾幕が前方に放たれる。
萃香に当たらないよう、黒い腕だけを狙う。

「その穴…邪魔だあ！ 符の言『投擲の天岩戸』！」

萃香がスペルを唱えると能力を使い、手に大岩を持ち、それを穴の前に目掛けて投げる。

黒い腕が一護とパチュリィのお陰で消えていつていたお陰で、難無く穴の前に大岩を放り投げ、穴を大岩で封じた。これで少しの間だが、黒い腕は出て来れないだろう。

「符の式『坤軸の大鬼』！」

萃香は続けてスペルを唱える。

スペルを唱えた事により、少女とは全く思えないほどの、巨大な身体になった。

そして、一気に拳をフレデリックに目掛けて突き出す。

「魔術師は拳を使つてあまり戦わないのだが、まあいい」

フレデリックはそう言うと、カードを取り出す。

「私の唯一の接近スペルだ。怒符『邪聖一点』」

スペルを唱える。

その瞬間、フレデリックの拳から黒い邪悪な魔力が集中した。

そして、萃香が突き出してくる拳に向かって、フレデリックは自分の拳を突き出す。

小さい拳と巨大な拳が激突する。

凄まじい衝突音と共に、大地が砕ける。

「まさか…」

拮抗した激突中に萃香が声を上げた。

言い終わると同時に、両者の拳が弾き合った。

互角。

フレデリックとはいえ、相手は鬼。

力では負けな思っていた萃香が、勝ったのではなく互角だった。

「やるねえ！」

萃香は直ぐ様、フレデリックに向かって拳を突き出す。

互角だった事に悔しがらず、逆に闘志を燃やした。

萃香はこういう奴なのだ。

「またか。もうその拳には挑みたくない」

フレデリックは軽くその拳を後方に跳び、避ける。

萃香の拳がフレデリックの居た位置の地面に当たる。

「魔術師は基本接近戦をしないんだよ。怒符『ヘルクラッド』」

フレデリックがスペルを唱える。

無数の槍状の弾幕が、萃香を襲う。

「符の参『追讎返しブラックホール』」

そう来ると思っていた萃香は、即座にスペルを唱えた。

その瞬間、ブラックホールが空間に現れ、フレデリックの放った弾幕を全て吸い込んだ。

弾幕を全て吸い込むとブラックホールが消えた。

「ほお、やるな」

フレデリックが少し感心する。

「何処を見てやがる」

刹那、一護がフレデリックの後方にいた。パチュリーはその上空にいる。

「！」

気付くのに遅れたフレデリック。

萃香の対応をしている時に、二人共移動していたのだ。

「いくぞ！ 萃香！」

一護が叫ぶと同時に三人がスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

「土&金符『エメラルドメガリス』！」

「鬼火『超高密度燐禍術』！」

一護は月牙天衝を放ち、パチュリーは大弾と小弾を複数放ち、萃香は拳で地面を叩きつけ、そこから溶岩弾を噴出させた。

それら全てが、フレデリックに向かって出されたスペルだ。

並外れの相手でも、このスペルを一度に一気にされれば、無事では済まない。

三人の攻撃が、フレデリックに殺到する。

「ふはははは、小賢しいっ！ ハアアアアアアアアアア…ハアッ…！」

気合の絶叫と共に、フレデリックの身体から黒い光が放たれた。その瞬間、まるで埃でも払うかのように、三人の多面攻撃が吹き飛ばされ、霧散してしまう。

フレデリックの身体を中心に、ドス黒いオーラが空間を塗り潰していく。

「な、何だ…これは…？」

「結界…？」

周囲の空気全体が、胎動する臓腑のように波打った。空間が腐った果実のように、グニヤリと溶け落ちる。

「なん…だと…！？」

溶けた世界の裏側から表れる血の色の空。

天地の感覚が混乱する。

重力、磁場、大気の組成まで変わってしまったかのような、その異常な空間の中で、三人は瞬時に体勢を整える。

さっきまでであった、博麗神社も空も山も、既にそこには無かった。

「どうやら、精神はしっかりと保っているようだな」

フレデリックが余裕な態度で三人に対峙する。

「何をしゃがった…フレデリック？」

「これ以上小賢しい真似が出来ないように、私の世界へと招待してやったまでだ」

フレデリックがそう言うと、パチユリーが周りを見渡す。

「…こんな濃密な結界を一瞬で出したの？ 詠唱も供儀も無しで、こんな大規模な結界を張れるとは思えないわ」

パチユリーが専門的な用語を出しまくっているせいで、一護と萃香は話に入れない。

「驚いているようだな」

フレデリックが懐から、一冊の赤茶気た不気味な本を取り出した。

「お前も魔術師なら、この本くらいは知っているだろう」

「…まさか!？」

あの禍々しい装丁に、パチユリーは心当たりがあった。

「そつだ。禁断の魔道書、？死アル・アジン霊秘法？の写本の一冊。死を司る禁呪ばかりを加えて再編された暗黒の魔書だ。暗黒魔術の使い手としては、これ以上の魔具はない」

「なあなあ、パチユリー。あれは何なんだ？」

一護が聞きたかった事を、先に萃香が聞いた。

「…あれは？死霊秘法？という魔道書の写本の一冊…？邪劫の法？。簡単に言えば、暗黒の魔書と呼ばれるに相応しい本よ。それに…」

パチュリーが付け足しのように説明する。

「人間の顔の皮で装丁されているのは一見して分かるでしょ？」

たしかに、あの本は顔らしき不気味な装丁をしてある。

「さらに、全てのページが生きたまま剥いで、なめされた魔術師の皮膚で出来ているの。羊皮紙ならぬ、人皮紙で作られた書物なの。数百人分の魔術師の魂を編み込んだあの本なら、無詠唱でこの結果を発動できたのも頷けるわ」

「うえ、気持ち悪う〜」

萃香が口に手を当てる。

たしかに萃香の言う通り、吐き気がする本だ。

「その本を一体何処で？」

説明し終わったパチュリーは、再びフレデリックに話しかける。

「一体何処で…か。良いだろう。場所だけは教えておいてやろう。

外の世界にある、空座癪狂院という独逸ドイツの療養院を模倣して作られた石造りの施設で手に入れた」

「空座癪狂院…だと!？」

一護が夢の世界で、華断という女子から聞いた話を思い出した。空座癪狂院…精神病院の一つで、十数年前に取り壊された建物。なぜ、その施設の名前がここで…？

「話はこれまでだ。そろそろ続きを始めよう」

邪劫の法が黒く輝き出した瞬間、フレデリックの体内に入っていた。

「さあ、掛かって来い、黒崎一護、パチュリー・ノーレッジ、伊吹萃香。この私を愉しませてくれ」

フレデリックのセリフを元に火蓋を切る。

相手は二つの最強の魔具を持っている男。

勝てる確立は低い。

だが、三人は諦めずに、フレデリックに向かう。

「怨霊『妖怨霊属』」

フレデリックが向かってくる三人に向かってスペルを唱える。

濃厚な瘴気が渦巻き、そこから獣とも人ともつかない顔が溢れ出した。

その怨霊のような物が、三人に襲い掛かってくる。

「走り続ける！ パチュリー、萃香！」

一護が二人に言うと、カードを取り出す。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護は向かってくる怨霊を、月牙天衝で一掃する。

そのせいで、黒い霊圧が舞い、フレデリックは三人を確認できなくなった。

「流石は黒崎一護だな」

自分のスペルを破られたのに、全く危機感が無いフレデリック。そこに巨大化した萃香が、黒い霊庄の中から現れた。そして、さつきと同じように拳を突き出す。

「またそれか。私には通じないと分からないのか？」

フレデリックは同じように軽く後方に跳び、避ける。

「けど、避け方は同じのようね。月符『サイレントセレナ』」

刹那、フレデリックの上空にパチュリーがいた。

黒い霊庄に紛れて、フレデリックの上空に移動していたようだ。

そして、パチュリーはスペルを唱えた。

青い米粒弾が降り注ぎ、パチュリーから放射状に水色の米粒弾が放たれる。

「降り注ぐ青い雨だんまくと言ったところか。見世物としては悪くないな」

だが…と付け加え、カードを取り出す。

「そんな単純な戦法が効くと思うなよ。獄炎『パジェリマ』」

フレデリックはスペルを唱えると、火の鳥が現れ、降り注ぐ全ての弾幕を、火の鳥が喰らい尽くす。

そして、火の鳥はそのままパチュリーに向かって飛んだ。

「土水符『ノエキアンデリュージュ』！」

向かってくる火の鳥に対し、即座にスペルを唱えるパチュリー。パチュリーから圧縮した水が放出され、火の鳥を掻き消す。

「ほお、私のスペルを破るとは、中々やるな」

「感心している暇なんて無いんじゃない？」

「何…？」

その瞬間、フレデリックの周りの空間から三日月状の弾幕が現れ、一斉にフレデリックに向かって放たれた。

これは一護のスペル：黒符『天幻月牙』だ。

三日月状の弾幕がフレデリックに全て被弾し、凄まじい爆発が起こる。

「私にこんな攻撃が効くと思うなよ」

爆炎の中から無傷でフレデリックが飛び出してきた。そして、一気にパチュリーの方に向かった。

「先に貴様から葬ってやろう」

フレデリックはそう言うと、カードを取り出す。

「怨霊『妖怨…っ!?!?』」

スペルを唱えている途中で、カードが何処かに吸い寄せられるように、手元から無くなった。

「何だと…!？」

カードが吹き飛ばされた方向を見ると、そこには萃香が出したブラックホールがあった。

符の参『追儼返しブラックホール』だ。それにより、カードが吸い込まれた。

「隙ありよ。火&土符『ラーヴァクロムレク』！」

パチュリーがスペルを唱える。

赤色と黄色い弾幕が、パチュリーを中心に無数に放たれる。

「こんな物が私に通用すると思っているのか!？」

「思っていないわ」

「!？」

パチュリーのセリフにフレデリックは少し悪寒が走った。

そう、フレデリックはパチュリーのいる自分の上空に向かって跳んでいる。

その跳んでいる下から、凄まじい程の力を感じ取ったのだ。

「馬鹿な!？」

フレデリックが自分の下方を見ると、そこには一護が霊圧を右腕に込めて立っていた。

「もう遅いわよ、フレデリック。あなたでも、あれは喰らえば、タダじゃ済まないでしょ」

パチュリーがそう言うと同時に、一護がスペルを唱える。

「いくぜ、フレデリック。黒斬『月牙天衝』！！」

一護からフレデリックに向かって、凄まじい霊圧が込められた、月牙天衝が放たれた。

「この、劣等がアアアアア！！！」

フレデリックが叫ぶ。

瞬間、一護の月牙とパチュリーの弾幕が同時にフレデリックに衝突し、凄まじい爆発が起きた。

その爆発で、結界内の世界が振動する。

爆炎と爆煙が吹き荒れる。

一護たち三人はフレデリックを倒したか確認する。

その時だった。

「ふははははははははは！！！！！！」

下卑た笑い声が三人の耳の中に入ってきた。

その笑い声を聞いた三人は目を見開く。

爆煙が誰かの為に道を作るかのように、そこからフレデリックが現れた。

「それが、最後の手か？」

フレデリックは三人に対峙する。
その姿は無傷で、服装すらも全く汚れていない。

「嘘…だろ!？」

「言っただろ。私には？邪劫の法？がある。貴様らの攻撃など、私には全く効かない。それに？邪劫の法？で使用する魔力も全て、？聖無石？から無限に供給してもらえる」

絶望。

三人は完全に絶望してしまいかけた。

「もう、終わりにしようか。数百人分の魂を編み込んで作られた、邪劫の法の力で、貴様らを跡形も無く消し飛ばしてやる」

「!?!」

その瞬間、一護はある事を思いついた。

「パチユリー、萃香…もう一度だけ頼む」

絶望しかけている二人に、一護は声をかける。

「最後にもう一度だけ…あいつの隙を作ってくれ!」

一護が最後の賭けに出る。

第56斬 【一護の賭け】（前書き）

少し文字数が多くなりました。

所々、文がおかしいかも知れません。

第56斬 【一護の賭け】

「最後にもう一度だけ…あいつの隙を作ってくれ！」

一護のこのセリフが、絶望の淵に落ち掛けていた二人を救い出した。だが、一護がフレデリックに対して、どう攻略するのは、二人共分からない。一々聞いていられないからだ。

「分かったわ。隙を作れば良いのね」

絶望しかけていたパチュリーが、一護のセリフを聞いたお陰で、完全では無いが少し立ち直っている。三人の中でフレデリックの魔力が一番感じやすいので、一番恐怖していても仕方無いのだ。

「ああ。頼む」

「簡単に言うけど、結構大変なんだよね」

パチュリー程では無いが、フレデリックの力の巨大さに、負けを覚悟してしまっていた萃香も、一護のセリフで立ち直っている。

「けど、今は…」

「そんな事言ってる場合じゃないな！！」

パチュリーが呟くように言った言葉の続きを、萃香が叫ぶように言った。

その言葉が合図のように、三人がフレデリックに駆ける。

「何を思いついたか知らないが、私に勝てると思わないことだな」

「うるせえ！ 黒符『月霊幻幕』！」

一護が最前でスペルを唱える。

無数の三日月状の弾幕が、フレデリックを襲う。

「下らんな。怒符『ヘルクラッド』」

フレデリックの周りに、槍状の弾幕が展開され、向かってくる一護の弾幕を掻き消していく。

相殺ではなく、圧倒的にフレデリックの弾幕の方が強力で、一護の弾幕全てが、一瞬で消え去った。

「俺の魔力は聖無石オーレル・クラッドのお陰で無限の上、邪劫の法で、スペルカードでも詠唱を唱えた時以上の魔術が使える。貴様のスペルが、この私に通じる訳が無いだろ？」

「御託はどうでも良い！ 黒符『天幻月牙』！」

続けてスペルを唱える一護。

フレデリックの周りの空間から、三日月状の弾幕が現れる。

「さつきと同じ手か。なぜ私に通じんと分かん」

「酔神『鬼縛りの術』！」

瞬間、萃香がスペルを唱える。

萃香から鎖が放たれ、その鎖がフレデリックを縛った。

「何…？」

鎖のせいで身動きの取れないフレデリックは、一護の弾幕を全て被弾した。

それに続いて、パチュリーがスペルを唱える。

「攻撃は止めないわよ。水符『ベリーインレイク』！」

パチュリーから水色のレーザー、小弾、大弾が、大量にフレデリックに目掛けて発射された。
休む事無くフレデリックに弾幕が降り注ぐ。

「チツ…その程度のスペルで、この私に勝てると思うなよ！」

フレデリックが鎖を解き、動き出す。

「逃がすかよ！ 黒符『天雨月閃』！」

一護がスペルを唱えると、フレデリックの上空に黒い弾幕が現れ、それらが一気に降り注ぐ。

さながら、黒い雨のようなスペルだ。

「…何をしようと…無駄だアツ！ 怨符『毒蟲砲弾』！」

フレデリックがスペルを唱える。

すると、地面から黒い小さな塊が無数に現れ、一斉に降り注いでくる一護の弾幕に向かって放たれた。

それにより、一護の弾幕が相殺されていく。

「懐が、ガラ空きだよ！」

いつの間にか、萃香がフレデリックの懐に入っていた。

「何!？」

「遅いよ！」

萃香は右拳に凄まじい妖力を込め、一気にフレデリックの腹に突き出す。

フレデリックの腹に入った拳は凄まじい威力だったらしく、フレデリックは口から血を吐き、後方に吹っ飛んだ。

「ガハ…ッ！」

フレデリックは態勢を整えると同時に、勢いよく口から血を吐いた。

「くっ、内臓がいくつか潰れたみたいだが、こんなもの一瞬で再生してやる！」

フレデリックが自分の片手を腹に持っていく。

どうやら、治療しようとしているようだ。

「させないわよ。木符『グリーンストーム』！」

パチュリーがフレデリックの治療を、阻止しようとスペルを唱える。弾幕があらゆる角度からフレデリックを狙うように放たれた。

フレデリックは透かさず、空いている手でカードを取り出し、スペルを唱える。

「舐めるなよ！ 怨霊『冥府の大蛆』！」

フレデリックの周りに黒い霧が現れ、その周辺一帯が腐り落ちる。その黒い霧のせいで、パチュリーの弾幕はフレデリックに当たる前に霧散していった。

どうやら、あの霧は全ての物を瞬時に腐らす霧のようだ。

「チ…ッ」

パチュリーが悔しそうに舌打ちする。

ようやくフレデリックに致命的ダメージを与えたのに、このまま黙って治るのを待つしか出来ないのだ。

「そうはさせつかよ！」

だが一護は諦めない。

「黒符『天幻月牙』！」

一護が相手の周りに弾幕を展開させるスペルを唱える。

もし、霧の内側に展開出来ていれば、フレデリックは弾幕の的になる。

「やったか？」

衝突音も何も聞こえてこない。

上手くいかなかったのか？

「！」

この二つを取り込んだフレデリックの肉体は魔術回路と化し、永久機関の如く邪気を生み出しているのだ。

しかも自然界と完璧に遮断されているこの空間では、邪気による力が何倍にも膨れ上がっている。

「怨怨怨怨怨怨怨怨オオオオオ!!!」

フレデリックの雄叫びに呼応し、漆黒の空から何かが降り注いでくる。

「ッ!？」

凝り固まった怨念が髑髏の形を形成して、雨のように降り注ぐ。

「パチュリー！ あいつは一体何をしたんだ!？」

魔術関連の事に全く詳しくない一護は、フレデリックが何をしたのかをパチュリーに聞く。

「簡単に言うわよ。フレデリックは自分自身を、邪気を生み出す化物にしたの」

「邪気…?」

「一護は隙を作ったと言ったわね」

「ああ」

「…あいつの隙は、もう作れないわ」

その言葉に、一護は目を見開く。

「な、何でだよ？」

「フレデリックのあの邪気は常に自分自身を守る。打ち消す事も恐らく出来ないわ。何故なら、この空間がそれをさせないから」

「空間……」

「そうよ。スペルによる力は絶対に通じないわ」

スペルによる力が通じない。

その言葉が一護たちに絶望感を与える。

「何をチンタラ話している？ 貴様らにそんな暇を与えようと思つなよ！ 怨霊『死の楔』！」

フレデリックがスペルを唱えると、ゾゾと音を立て、怨霊が現れる。

それが無数の黒い鏃となり、フレデリックの周りを浮遊する。

「死ねええええええっ！！」

一護に向かって鏃状の弾幕が放たれる。

(…：スペルが効かねえなら…これしかねえよな！)

一護は何かを決心したように、向かってくる鏃状の弾幕に向かって走る。

「な、何をしているの一護!？」

一護の行動に驚いたパチュリーが声を上げて言う。
傍から見れば、今の一護の行動は完全に自殺行為だ。

「萃香！ 俺をフレデリックの方に思い切り投げてくれ！」

一護の言葉を聞いた萃香は、一瞬思考を停止させてしまったが、直ぐに行動を起こす。

今はただ一護が馬鹿げた事を言おうと、それに賭けるしかない。それ程までに切羽詰っている。

だが、萃香の力は殆ど残ってはいない。

フレデリックを殴る時に、殆どの妖力を使ってしまったからだ。

「分かった。けど、これが最後だよ一護」

萃香は一護の方に駆けながら、スペルを唱える。

「萃符『戸隠山投げ』！」

萃香の能力で一護を手元に萃める。

お陰で鏃状の弾幕は、一護に当たる事は無かった。

そして一護を掴み、全力でフレデリックの方に投げ飛ばした。

「何をしている？」

流石のフレデリックも、今の一護の行動には理解できないようだ。

一護はそのままフレデリックの方に吹っ飛ばす。

「まさか私と正面衝突をし、気絶させようという魂胆か？ 下らん！」

怨霊の群れが、フレデリックの前で壁を作り出す。

「怨霊の壁に衝突すれば、貴様の身体はどうなるかな？」

「…霊圧を消す」

一護がそう呟いた。

その瞬間、一護の纏っている黒い霊圧、死神の姿が解除された。これで一護は完全に無防備になってしまった。

「！貴様、何を考えている！？」

この一護の行動にフレデリックは驚き、目を見開く。

「テメエの力が、スペル等による異質の力に過剰に反応するなら、俺自身の中にある異質の力、霊圧を消して、テメエの邪気を突破してやる！！！」

一護にとって、これは賭けに等しい行為。

上手くいかなければ、一護は無防備のまま邪気のを浴び、死ぬ。だが、上手くいけば、一護は最大の、フレデリックを倒すチャンスを作れる。

そして…一護は怨霊の壁を突破した。

「何だと！？」

フレデリックは驚く。
突破されると、思っていなかったからだ。

「いくぜ！」

一護は突破すると、直ぐ様態勢を整え、フレデリックの胸元を掴む。怨霊の壁を突破したと同時に、萃香に投げられた時の力が緩和されたので、態勢を整える事が出来た。

「貴様！ 何をする！？」

フレデリックは一護の掴んでいる手を掴み、引き離そうとするが、一護は離さない。

「離せえ！」

怨霊が一護の周りに浮遊し、今にも襲い掛かるうとしている。

「…フレデリック…俺の能力が何か分かるか？」

「何！？」

「…分からねえんなら教えてやる。？物質に宿る魂を操る程度の能力？だ！」

「…まさか、貴様ああああ！！」

一護の能力を聞いたフレデリックが、尋常じゃない焦りを見せる。何かを察したようだ。

「終わりだ…フレデリック」

一護は空いている手で、フレデリックの腹に手の平を突き出す。その瞬間、ドクンと空間が波打つ。

「止める…黒崎一護…！」

「…テメエの…邪劫の法の…魔術師達の魂を…解放する！」

「止めるおおおおおおおっ！！！！！」

その瞬間、凄まじい光と共に怨霊たちが霧散し、フレデリックが作り出した結界に輝が入った。

そして、ガラスが割れるような音と共に、フレデリックの結界が消え去った。

いつもの光景、山や青い空、そして博麗神社が、視界に映し出される。

「な、な、な、何をしゃがるううう！！！！ 黒崎一護おおおおお
おお！！！！」

「黒斬」

フレデリックの怒涛の叫びも聞く耳持たず、呟くように黒斬と言った。

それと同時に、一護の姿が死神の姿に戻り、右腕から黒い霊圧が溢れ出す。

「何!!!?」

フレデリックはそれに驚く。

一護は今、スペルを唱えようとしている。

しかも、胸倉を掴まれたままなので、ゼロ距離だ。

「『月牙天衝』!!!」

一護は月牙をゼロ距離でフレデリックに放った。

渾身の霊圧を込めた月牙天衝。

今のフレデリックは、自分を守ってくれる力が無い。

それにより、月牙を完全に受け、霊圧による凄まじい爆発が起きた。

幻想郷に漆黒の柱が建つ。

「ぐあつ!」

一護は自分の放った月牙天衝の衝撃で、後方に勢いよく吹っ飛んでしまった。

パチュリーもそれに耐えるように、身体を縮める。

萃香は、一護を投げ飛ばした時に、力を殆ど使い果たし、気絶していた。

「…やったよな」

一護は月牙を放った方を見て、フレデリックの安否を確認する。

流石にあの月牙を受けて無事では無いだろう。

天まで届くような黒煙が舞っていて、全く様子が分からない。

「パチュリー、後どれくらい魔力が残ってる？」

「…もう、殆ど無いわ。今の月牙天衝で倒せていないなら、絶望的ね」

「そうか」

一護は自分の残り霊圧を確認する。

(…月牙天衝は、撃てて後一・二発くらいか)

「ねえ、一護」

「ん、何だ？」

「どうやって、あの結界を打ち破ったの？」

フレデリックの結界、そして邪気による力。

そのフレデリックの全ての力を、一護はあっという間に打ち砕いてしまった。

魔術師のパチュリーはその力を、どう打ち砕いたかに興味があったのだ。

「簡単さ。あいつの持っている邪劫の法ってやつは、魔術師達の魂が源で出来てんだろ。だから、その魔術師達の魂を、あの本から解放してやったんだよ。俺の能力でな」

「!…一護の能力って一体…？」

「?物質に宿る魂を操る程度の能力?。その能力のお陰で、あいつ

の本の力を打ち破ったんだ。まあ、賭けに近い行為だったけどな」

結果、一護は二重の賭けに挑戦した事になったのだ。

フレデリックの邪氣の力を、霊圧無しで突破できるかどうか。

邪劫の法の魔術師達の魂を、自分の能力で解放し無力化できるか。

この二つの賭けを、一護は成功させたのだ。

…刹那、パチュリーが黒い弾幕に貫かれた。

「！！ッ…パチュリー！」

一護の叫び声も空しく、パチュリーは地面に倒れ伏した。

「黒崎…一護…」

一護がパチュリーに駆け寄ろうとした途端、フレデリックの声が聞こえてきた。

足を止め、月牙で出来た黒煙の方を見る。

そこから、フレデリックが歩いて来ていた。

身体は、かなりボロボロで、戦える状態とは思えない。

「フレデリック…テメエ、まだ立てんのかよ？」

フレデリックは足を止め、答える。

「…私を舐めるなよ。貴様に邪劫の法は崩されたが、まだ私には無
聖石がある。それに…私にはまだ…」

フレデリックがここまで言ったところで、一護は直ぐ様攻撃を仕掛ける。
こう会話している間にも、フレデリックは魔力で身体を治療しようとしているからだ。

(今なら、まだ間に合う！)

一護はカードを取り出しスペルを唱える。

「黒斬『月牙天衝』！」

一護が残り僅かの霊圧で、月牙天衝を放つ。

「…フツ」

フレデリックが小さい笑みを浮かべ、この場では有り得ない物を取り出した。

「…ツ！？ 拳…銃…？」

そう、フレデリックは拳銃を取り出したのだ。
その銃の種類はモーゼルミリタリーだ。

「褒めてやるぞ…黒崎一護」

迫り来る月牙に全く動揺せず、話し続ける。

「んなもんが、月牙に通用すると思ってるのかよ!？」

「…どうかな」

フレデリックが月牙の方に銃口を向ける。

月牙がただの銃に負ける訳が無い。

…そのはずだった。

フレデリックの握るモーゼルミリタリーが火を吹く。

弾丸が月牙を貫き、霧散させる。

「月牙が…霧散した…だと!？」

一護は目を疑う。

月牙が銃の弾丸に負けてしまったのだ。

「切り札というのは、最後まで取っておくものだぞ？」

続け様に銃声が発せられる。

左腕、もも、腹、肩…。

一護の纏っている黒い霊圧が貫かれ、徐々に消えていく。

肉を抉る弾丸の破片。

それが深々と刺さった瞬間に、力が急激に失われていく。

(一体…何が…?)

「俺が聖無石と邪劫の法だけで、貴様らに復讐すると思っているか？」

「何だと…」

復讐…この単語が一護には今だ理解できない。

「奥の手まで喋る程、愚かではない。お前らは、奥の手を全て出し切ったようだがな」

さらにもう一発。

フレデリックの弾丸が一護の右腕を打ち抜いた。

右腕の黒い霊圧が、霧散していき、一護の纏っている全ての霊圧が消えていく。

フレデリックは一護に歩み寄り、無造作に一護の腹を蹴り上げた。

「ぐ…っ！」

一護は衝撃のあまり転がる。

「何故ただの鉛球が、貴様や月牙を打ち抜けたか、知りたいか？」

「…何？」

「…この銃の弾丸は特別製なんだよ。この弾を相手にして、防ぎ切れる力は存在しない。今の私でも不可能だし、悪魔ですら確実に殺しきる事が出来る代物だからな。そう、これは、かの磔刑に使われた釘だよ」

「!？」

「神人の肉を貫き、血を浴びたのはロンギヌスの槍だけじゃない。十字架に磔にされた時に、手首と足に突き刺さっていた大釘の方が、充分に血を吸い込んでいた訳だ。神人の血肉を裂いた釘を独逸国へと持ち帰り、鎔かして弾丸を鑄造したのさ」

一護は言葉を発する事が出来ない。

「さらに、この弾丸の内部には、ある協会が開発した霊薬が仕込んである。あらゆる区別なく、どんな異質の力でも分解する特殊な霊薬がな。勿論、貴様のような力でも、一瞬で分解できてしまう霊薬だ」

絶望。

一護は完全に絶望してしまいかけている。

（俺は…死ぬのか…）

そんな言葉が頭を過ぎった。

「これで、最後だ黒崎一護。脳に一発撃ち込み、終わりにしてやる
う」

銃口を一護の頭に向ける。

「死ねえ」

銃声が轟く。

終わった…かと思った。

だが、一護の頭には何も貫かれていない。
何故なら、一護は放たれた弾丸の位置にいないからだ。

「貴様は…」

フレデリックは一護がいる方向を見る。

そこには、一護の横に一人の少女が立っていた。

そう、博麗霊夢だ。

「博麗の巫女か」

「誰よ、あんた？」

毅然とした態度で登場した霊夢。
この後、霊夢がとる行動とは？

第56斬 【一護の賭け】（後書き）

今週のジャンプで一護の代行証の秘密が発覚。

どうしよう。

幻想郷で一護は代行証を使いまくってるよ。

だから、あの設定は完全無視の方向で行きます。

第57斬 【二つ名】

「誰よ…あなた？」

窮地に陥った一護を、霊夢が救い出した。もし霊夢が来なかったら、今頃一護は頭に弾が貫通し、即死だっただろう。

「博麗神社とその境内をこんなに滅茶苦茶にして、死ぬ覚悟は出来てるわね」

周りを見渡す。

確かに境内には大穴が開き、博麗神社の所々が崩壊している。まあ、あんな熾烈な弾幕勝負をしていれば仕方の無い事。ただし、殆どが一護の月牙天衝によるスペルが原因だが。

「…貴様が今の博麗の巫女か？」

フレデリックは銃を下ろし、問いかける。

「私が先に誰？と言ったのよ。先に答えなさい」

「…幻獄七夢卿の一人。夢殺しの暗黒魔術師 フレデリック・グレ
アムだ」

「…！！幻獄七夢卿…」

幻獄七夢卿という単語に霊夢は面喰らった。だが、直ぐに態度を戻す。

「あんたが、その一人。良かったわ。ようやく、これで幻獄七夢卿の事を聞きだせる」

霊夢がスペルカードを取り出し、臨戦態勢に入る。

「幻獄七夢卿の事を聞き出すか…。面白い事を言う。聞き…出せるとでも思ってたのか？」

「聞き出すわよ。拷問をしてでも」

巫女とは思えないような事を吐く。

「博麗の巫女と博麗の…」

フレデリックが博麗の巫女の続きを言ったが、何を言ったか聞き取れなかった。

「…霊夢、俺の霊圧は残り少ない。月牙天衝は撃てて後一発が限度だ」

「分かってるわよ。あんたの霊圧を見れば分かる。けど、あいつも結構弱ってるわね。私が来るまでに、粗方終わらしたようだけど…」

「あいつには聖無石つつう魔力を無限に供給する魔具がある。だから、時間を掛けたら、こっちが不利になる。それに、あいつが持つてる銃は弾幕や結界などの異質の力は全て分解し、無効化される」

「聖無石と銃…分かったわ。じゃあ、私があいつの隙を作る。だから一護は、最後の月牙であいつを倒して」

「簡単に言うが、あいつの隙を作るのは大変だぜ」

「そんな事、分かってるわよ！ 神霊『夢想封印』！」

霊夢がスペルを唱え、フレデリックに駆け出す。

複数の光弾がフレデリックに殺到する。

「博麗の巫女：貴様を殺す。怒符『ヘルクラッド』！」

フレデリックがスペルを唱えると、槍状の弾幕が展開され、霊夢の弾幕を相殺していく。

「怒符『スロウトハンド』！」

続けてフレデリックがスペルを唱える。

空間に穴が開き、そこから黒い腕がいくつも現れ、霊夢に襲い掛かる。

「この程度のスペルで、私に勝てると思わないでね」

霊夢は向かってくる黒い腕を、全て紙一重で躲しながらフレデリックに向かう。

「流石は博麗の巫女だな。だが、これならどうだ？ 獄炎『パジエリマ』！」

フレデリックの頭上に火の鳥が現れる。

だが、大きさが今までの比ではない。

まるで、燬？王。

ルキアの処刑時に使われた炎の鳥だ。

「どうだ、これなら簡単には対処できんぞ」

「そのようね。けど、あんたもかなりの魔力を消耗したんじゃない？」

「ああ。だが、この程度の魔力は、聖無石で直ぐに元に戻せる」

それを言い終わると、炎の鳥が霊夢に向かって飛んだ。

「…チツ」

霊夢は後ろを少し振り向き、舌打ちをする。

そこには博麗神社がある。

そう、避けたら博麗神社は炎の鳥に燃やし尽くされる。

「最悪ね。神技『八方鬼縛陣』！」

霊夢がスペルを唱え、結界を張る。

炎の鳥から博麗神社を守れるくらいの大きさの結界だ。

「結界か」

フレデリックが呟くように言う。

「くっ…流石にきついわね…！」

霊夢が両手を前に出し、結界に霊力を注ぎながら、何とか炎の鳥に
対抗している。

「けど、もうちょっとで…」

炎の鳥の魔力が消える。

放った魔力を無限に保つ事は不可能。

即ち、時間を掛けて防ぎきれれば、炎の鳥は自然に消える。

だが、予想外の事が起きた。

凄まじい音が一瞬轟いたかと思うと、炎の鳥も霊夢の結界も霧散した。

「…!!な…に…」

霊夢の右肩から血が出ている。

何か小さな物に、貫かれたようだ。

「どうだ、この銃の威力は？」

フレデリックが銃の口を霊夢に向けながら言う。

どうやら、あの銃で炎の鳥も霊夢の結界も消し去ったようだ。

そして、弾丸はそのまま霊夢の右肩に貫通した。

フレデリックが持つ銃の弾丸は、磔刑に使われた釘と霊薬で出来ている。

その両方の力で、あらゆる異質の力は分解され、無に還る。

即ち、どのような方法を用いても防げない弾丸だ。

「博麗の力をも軽く消せる…この力は？」

「…霊符『夢想妙珠』！」

「!?!」

霊夢はフレデリックの話を聞かずに、スペルを唱える。

こうしている間にも、フレデリックは魔力を回復するからだ。

霊夢の周りに八個の光弾が展開され、フレデリックに放たれる。

複数の光弾に比べて、威力は高い。

「成程。賢明な手段だな。俺の魔力の回復時間をやらずに、一気に攻めて来るか」

「当然よ!」

霊夢はまるで右肩の傷が無いように、動き出す。

「…確かに俺の魔力は炎の鳥により、殆ど無くなったが…怨霊『スピズエイド』」

フレデリックがスペルを唱えると、半透明の暗黒色の結界が張られた。

それで霊夢の光弾から身を守る。

だが、それにより結界に輝が入り、今にも割れそうになった。

「良い弾幕だな。だが、俺の結界の前では無力に等しい」

フレデリックがそう言うと、輝が入った結界が何も無かったかのようになり、元に戻った。

「面倒な結界ね!」

霊夢が結界の近くまで行くと、スペルを唱える。

「宝符『陰陽宝玉』！」

霊夢の手の先から光りが発せられ、そこから気弾が放たれた。その気弾が結界にぶつかる。

だが、結界には傷一つ出来ていない。

「私のスペルが…効いていない!？」

「無駄だ。この結界には私の魔力が込められている。そう簡単には潰れないぞ」

フレデリックは自分の魔力で結界を強化したようだ。

これで、自分の魔力の回復の時間稼ぎをするつもりだろう。

「くそ…だったら、これなら…宝具『陰陽鬼神玉』!!」

霊夢の先程の手先から巨大な光の弾が現れ、再び結界を襲う。

このスペルは陰陽宝玉の強化版のようなスペルだ。

「だから、無駄だと言っている…何？」

フレデリックの余裕の笑みが、少し歪んだ。

結界に輝が入ったのだ。

(後…少し!)

霊夢は霊力を力強く込める。

だが、後一押しというところで結界が割れない。

「くくく、残念だったな、博麗の巫女。貴様は無駄に霊力を使っただけだ」

「ちっ、くしょう…」

霊夢の光の弾が弱まっていく。そろそろ霊力が切れそうだ。

「無駄じゃ無いぜ！ 霊夢！」

突然、霊夢の背後から聞きなれた声が聞こえてきた。

その声の主は…

「こんな近くでドンパチと祭りをやられちゃ、嫌でも目が覚めるつての！」

魔理沙だった。

萃香との弾幕勝負で、動けない程のダメージを受け寝込んでいた魔理沙が、起き上がりミニ八卦炉を構えている。

「魔理…沙」

霊夢は後ろを振り向き、魔理沙を確認すると、弱々しく言った。

「いくぜ、霊夢。恋符『マスタースパーク』…！」

ミニ八卦炉に魔力が吸収され、そこから極太レーザーが放たれた。マスタースパークがフレデリックの結界に激突する。

「ッ！…まさか、ここで魔法使いの助っ人とは予想外だ…！」

瞬間、マスタースパークが結界を打ち破った。

「チツ」

フレデリックは結界が破られたと同時に、空中に跳び、極太レーザーを避ける。

霊夢は巻き込まれないように、横に跳び避けた。

「くっ、やっぱ、一発が限界だったぜ」

スペルを唱えた魔理沙は、そのまま地面に倒れ伏した。

動かせない身体を強引的に動かして、マスタースパークを放ったのだ。

倒れても仕方が無い。

「一発でも、よくやってくれたわ魔理沙。神霊『夢想封印』！」

霊夢がスペルを唱え、複数の光弾が上空にいるフレデリックを襲う。

「くそ…まだ魔力は殆ど回復していない…だったら」

フレデリックが銃を構え、向かってくる光弾に向かって弾を発射する。

自分に向かってくる弾幕だけを的確に捉え、発射された弾丸は全て光弾に当たった。

それにより、光弾が霧散していく。

「ハハハハハ、無駄な足掻きだったな、博麗の巫女！ やはり貴様では、私に傷一つ付けられんようだ」

「…私の事ばっか見すぎよ、あんた」

「何？」

その刹那、フレデリックの背後に一護が現れた。

「！しまった！！」

後ろを振り向いたフレデリックは、険しい表情になる。

一護は死神の姿に戻り、月牙を放つ構えをとっていたからだ。

「黒斬『月牙天衝』！！」

一護は残り少ない霊圧で、渾身の月牙天衝を放った。

それと同時に、一護の右腕に妙な違和感が流れる。

(！何だ…右腕の霊圧が…今、変に感じたような…？)

「くそおおおおお！！！！」

月牙を喰らったフレデリックが、身体をボロボロにさせながら、地面に落ちていく。

「黒崎…一護おおおおお！！！！」

落ちながら、フレデリックは銃口を一護に向ける。

「これで終わりよ。幻獄七夢卿」

「博麗…があ」

フレデリックが四肢を動かそうとするが、全く動かない。

「無駄よ。今、あんたの四肢は完全に封じたから。しばらくは動けないわ」

「…貴様…！」

フレデリックは四肢を動かすのを止め、霊夢を睨みつける。憎しみや殺気が込められた眼。霊夢はそれに一瞬ビクついた。

「霊夢、終わったか？」

「ええ」

一護は空中から霊夢の横に下りる。そして、倒れているフレデリックを見る。

「…随分と無様な姿になったな、フレデリック」

一護はフレデリックを見下ろしながら言う。既に霊圧が限界状態だった一護は、死神の姿を解き、普段着に戻っている。

「…くそがああ…これ以上、博麗の前で醜い姿を見せるのは、御免だ」

フレデリックがそう言うと、掌に聖無石が現れた。

「！テメエ、まだ…！」

瞬間、霊夢と一護は目を疑った。

フレデリックが自分の聖無石を握り潰したのだ。

聖無石がガラスのように割れ、欠片が全て霧散していった。

「な、何してんだよ！？ テメエ…？」

理解できない事に、一護が声を荒げた。

「…言っただろ。これ以上、博麗の前で醜い姿を見せたくない」と

その瞬間、フレデリックの身体が徐々に消え始めた。

「！テ、テメエ…どうしたんだよ！？」

「俺の生命は聖無石に維持されてきた。その聖無石が砕けた今、俺の魂は消えていく」

「聖無石は生命を維持まで出来んのか？」

「ああ。無尽蔵の魔力のお陰で…だ」

聖無石の魔力で生き永らえてきたフレデリック。

それが潰れた今、フレデリックの生命の維持が出来なくなり、魂が消えようとしているのだ。

それに対して、一護は頭が回らなくなっている。

「あんたには聞きたい事が山ほどあるのよ！勝手に消えるなんて卑怯よ」

「聞きたい事があるなら早く言った方が良い。私に残された時間はごく僅かだからな」

どうやら、フレデリックは今なら質問をして答えてくれるようだ。だが、それはフレデリックが消えるまで。

質問できる数も限られてくる。

そんな中、一護が霊夢より先に口を開く。

「待てよ。俺も聞きたい事がある！テメエが見せたあの悪夢は、全てフィクションなのか！？」

霊夢を差し置いて、先に一護が質問した。

「…違うな」

「何！？じゃあ、18年前の連続殺人と集団失踪事件は本当にあった事なのか！？」

頭があまり回らない一護は、真っ先に思いついたことを聞いた。

「当然だ。俺が空座町に滞在した時の話になるがな」

「どづいつ事だ？」

「話すのに時間が掛かるな。簡単に言おう。俺は空座町で博麗に敗

れた」

「空座町で!？」

「ちよつと一護! 私も聞きたい事があるの。私に質問させて」

自分を差し置いて質問をする一護を退け、霊夢が問う。
まだ色々と聞きたい事が有ったが、仕方ない。

「あんた達の目的は何？」

一護が一番最初に聞こうと思っていた事を、霊夢が聞いた。

「…目的か。俺たち一人一人は独自の野望を持って活動している組織だ。だが、一つだけ共通の目的がある」

「共通の目的…？」

「ああ。俺たちの目的は？本当の自由？を得る事だ」

「本当の自由？ 何よ、それ？」

全く訳の分からない目的に、霊夢は理解できなかった。

「そろそろ俺の魂は消える。その質問に答える時間は無い…が、最後に一つ面白い事を教えよう」

面白い事…？

「刹蘭…奴の正体は、外の世界でも有名な、ある伯爵だ」

「伯爵…?」

「最後に黒崎一護。貴様の名を聞かせてくれ」

「名前だと?」

「ああ。二つ名を含めた名前をな」

二つ名を含めた名。

一護にはまだ二つ名が存在しない。
決めていないからだ。

「…俺は…」

一護は思索する。

ちようど今、決めようと思ったからだ。

「俺は博麗の死神 黒崎一護だ」

咄嗟に思いついた自分の二つ名を一護は言った。

博麗の死神…今この時をもって、一護の二つ名が決まった。

第57斬 【二つ名】（後書き）

これで東方幻夢殺篇は終了です。

10話くらいで終わらす予定が、まさかの20話。

ちょうど二倍の話数で終わらせました。

次回からは新章に入りますが、このようなグダグダ展開にならないように気をつけます。

第58斬 【フランと人里へ】

幻獄七夢卿の一人、フレデリック・グレアムを倒して数週間が経った。

フレデリックを倒した後、パチュリーと萃香は一日の間、目を覚ます事は無かった。

二人がなぜ、一護の危機に遣って来たのかと言うと、パチュリーが異様な魔力を、瞬時に感づいたからだ。

異様な魔力とは、フレデリックの魔力と聖無石の魔力の事です。

その魔力に感づいて、パチュリーは自分の身体が弱いにも関わらず、博麗神社に来たのだ。

そして、その途中で偶然地底に向かっていた萃香に会い、共に向かった。

これが、一護の危機に遣って来た理由だ。

「…どうして、こうなったんだ？」

一護は溜め息混じりに呟く。

あれから異変も起きず、これといって溜め息をつく様な事はなかった。

だが、今は違う。

一護は現在、人里にいる。

ただし、一人で居るのでは無い。

一護の横には、周りを見渡しながら無垢な声を上げている一人の少女がいる。

まるで遊園地に遣って来た子供のようなはしゃぎ様だ。

「ねえねえ、いつちー！ あれは何〜？」

少女が指を差して聞く。

その先には団子屋が有った。

あそこは人里に初めて来た時に、上白沢慧音に連れられた場所だ。

「あれは団子屋って言ってな、甘い菓子が食える所だ」

「甘いお菓子ッ！」

少女が菓子という単語に反応する。

「…食いたいか？」

「うんっ！」

少女は可愛らしく頷いて答える。

頷くときに、黄色い綺麗な髪が揺れた。

そう、一護の隣にいる少女の正体はフランドール・スカーレット。

レミリアの妹にして吸血鬼。

一護と会うまでは幽閉されていたが、その後からはフランも自由に外を出歩けるようになった。

ただし、吸血鬼なので太陽は苦手。

だから一護は日傘を差しながらフランと人里に居る。

傍から見れば、完全に日向の相合傘だ。

「そんじゃあ、食いに行くか」

「うん」

一護とフランは団子屋に向かった。

…何故、一護がフランと一緒に人里に来たかと言つと。
数時間前の話になる。

一護は一人、博麗神社の縁側で茶を啜りながら、空を眺めていた。
もう完全に神社暮らしを物にしている。
というより、霊夢に似てきている。

「平和だな」

湯呑みを置き、呟く。
フレデリック戦の後、これといって激しい死闘は一切無い。
あの後で一番激しい戦闘といえば、萃香との弾幕勝負くらいである。
それ以外は、これといって無い。

「ん〜」

一護は背伸びし、立ち上がる。

「さて、そろそろ庭の掃除でもするか」

近くにあった箒を手に取り、境内の落ち葉を掃く。
境内はフレデリック戦の時、暫しメチャクチャになっていたが、今

は綺麗に元通りになっている。
勿論、元通りにしたのは一護。
理由は殆どが月牙天衝のせいだからって事で、
霊夢に強引的に復旧作業をさせられたのだ。

「にしても、良い天気だな。風が気持ち良いぜ」

空は快晴。

風はちょうど良くくらいの感じで吹いている。

気温は暖かく、少しでも横になれば一瞬で寝てしまいそうだ。

「こんな平和が、後いつまで続くんだろうな」

誰に言うでもなく呟く。

霊夢は今、八雲紫に用事があるとかで、八雲の家に行っていて、今は一護一人である。

だから、答えが返ってくる訳が無かった。

「そうね。いつまで続くのでしょうか？ 天罰『スターオブダビデ』」

「

誰かが一護の言葉を返してきた。

それと同時に、何故か聞こえる筈の無い、スペルカードを唱える声も聞こえてきた。

一護は声のした上空の方を見る。

そして、目を見開いた。

複数の弾幕と、紅いレーザーが一護に迫ってきていたのだ。

「うおおおおおおお！ー！ー」

一護は叫びながら、弾幕とレーザーを回避した。
間一髪だった。

少しでも確認するのを遅れていたら、回避は出来なかっただろう。

「平和ボケはしていないようね、一護」

一護はもう一度、上空を確認する。

そこには咲夜の差している日傘に入った、レミリアとフランの三人がいた。

「テ、テメエ！ 何すんだよ!？」

一護は自分が居た位置を指差す。

そこは弾幕とレーザーが当たったせいで、地面が粉々になって砕けている。

「大丈夫よ。力は抜いたから、例え当たったとしてもそれ程ケガはしないわ」

「そつちじゃねえよ！ せっかく集めた落ち葉が散ったじゃねえか

！ しかも地面を砕きやがって、誰が元通りにすると思ってるんだよ
!？」

「…怒るところはそこなのね」

呆れた表情になるレミリア。

三人が一護の前に下りてくる。

「…で、何しに来たんだ？ お前ら」

「久し振りに遊びに来たのよ」

「そつ、遊びに来たんだよ〜!」

突然、フランが一護に抱きついてきた。

一護はそれを受け入れるように、フランを受け止める。

「お、おいフラン。急に何だよ?」

一護の胸に頬を摩るフラン。

何故かこの時、霊夢に言われたロリコンという単語が頭に浮かんできた。

「今日は一護と二人で、人間の里に遊びに行きたいのだあ〜!」

フランが一護の顔を上目遣いで見上げながら言う。

「は…人里に?」

「ええ、そうです。妹様の頼みです。何も言わずに聞き入れなさい」

何故か咲夜がナイフを一護に向けながら言う。

傍から見れば、脅迫以外の何物でもない。

「…はい」

そんな状態の一護は、一言答え、首を縦に振った。

そんな事があって、一護とフランは人里にいる。フランは人里に来るのが初めてらしい。

だから、フランは一護と人里に行きたかったのだろう。

「いっちー、この団子美味しいね」

フランが串団子を食べながら言う。

本当に美味しそうに食べるフランを見て、一護は微笑ましくなった。幽閉されていた時では、絶対に見られない笑顔だ。

「…つうかフラン。そのいっちーって何だよ？」

「いっちーはいっちーだよ。一護だからいっちー」

いっちー。

まるで何処その副隊長を思い出させる呼び方だ。

「お姉様がね、友達はまだ名で呼ぶもんだって言うから、私がいっちーのあだ名を決めて上げたの」

「そうか。じゃあ、俺も何かお前にあだ名を決めてやらねえとな」

「え！ 良いの！？」

「ああ。けど、少し時間が掛かるな。あだ名って中々思いつかねえから」

「いつでも良いよ。いっちーが決めてくれるんだったら！」

フランが眩しいくらい笑顔を見せてくる。
これにドキッとしてしまったら、霊夢にロリコンと言われても、反論できなくなる。

「そんじゃあ、そろそろ行くか」

「うん」

団子を食べ終えた二人は、団子屋を後にした。

「お、一護君じゃないか。久し振りだな」

団子屋を後にした途端、上白沢慧音が一護とフランの前に現れた。

「慧音さん。こちらこそ久し振りです」

フランは誰なのか分からない顔をしている。
勿論、フランと慧音は初対面だ。

「ん、一護君。この子は誰だ？」

「こいつはフラン。吸血鬼だ」

「吸血鬼？ また珍しい妖怪が人里に来たな」

慧音はそう言うと、フランの前に立ち自己紹介をする。

「私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の先生をしている者だ。よろしくな」

慧音は言い終わると、フランに手を差し出す。握手を求めているのだろう。

「私はフランドール・スカーレット。いつちーの友達なの。よろしくね」

フランも自己紹介をし、慧音の差し出してきた手に、自分の手を持つていく。

そして、二人は握手を交わした。

その頃、紅魔館ではレミリアがテーブルに付き、紅茶を飲んでいる。紅茶は血のように真っ赤だが、恐らく人間の血では無いだろう。…そうであって欲しい。

「咲夜、フランは今楽しんでいるかしら？」

紅茶を啜りながら、自分の横に立つ咲夜に聞く。

「ええ、恐らく楽しんでいるでしょう。初めて行く、人里ですから。それに、妹様は一護さんに好意を寄せていますし」

レミリアは不図、咲夜の使ったある単語が気になった。

「好意…？」

レミリアは紅茶の入ったカップをテーブルに置き問う。

「はい。妹様は一護さんに恋心を抱いているはずです。なぜ分かる

かと言いますと、同じ恋を抱いている者だからです。勿論、私が恋心を抱いているのは、お嬢」

「フランが恋心をね…」

レミリアは少し悪寒を感じ、途中で咲夜の話の聞くのを止めた。

「…あの子の気が狂れなくなったのは、一護の存在が大きいつて事ね」

何かを理解すると、レミリアは再び紅茶に口をつけた。

同時刻、ある屋敷の中では…。
ある計画が実行されようとしていた。

「今日の夜、月を隠すわよ。良いわね」

一人の女性が、前に立つ二人の少女に告げる。
それを聞いた二人はコクリと頷く。

「今回のこの計画で、博麗の巫女などの異変解決に携わる人達が動くはずよ。あなた達はそれを止める役に回ってもらおうわ」

「はい。師匠」

一人の少女が答える。

なぜ月を隠そうとしているのかは分からない。

だが、再び大きな異変が起きようとしているのは分かる。

「今回、あなたには大いに期待しているわよ」

女性は二人の少女から視線を、部屋の壁の方に移す。そこには一人の男が立っている。

コート状の死神のような白い死覇装を着ている男。

そう…そいつは

「ウルキオラ」

女性が、その人の名を言った。
ウルキオラ・シファード。

新たに起こる異変に、ウルキオラが参戦する。

第58斬 「フランと人里へ」 (後書き)

次回から死神図鑑を復活させる予定です。

第59斬 【異変解決チーム】

太陽が沈み、丸い月が顔を出す。
幻想郷に暗い夜が訪れた。

宵闇に包まれ、人々が寝静まった人間の里。
人の気配は無く、建物の明かりが一切照らされていない。
昼間とは豪い違いようである。

そんな人里に二人の男女が歩いている。
男はオレンジの髪に、眉間に皺を寄せている。
女は黄色い髪に、小柄な体躯で可愛い顔をしている。
パツと見、男が小さい女の子を誘拐しようとしているようにも見える。
だが、それは違う。

この二人の男女は、黒崎一護とフランドール・スカーレットだ。
人里に遊びに来たんだが、そこで寺子屋の先生をしている上白沢慧音と出会い、慧音宅で夜中まで話し込んでしまったのだ。
勿論、夕飯は慧音宅で済ませた。

「まったく、まさかもうこんなに暗くなってるなんて思わなかったぜ」
一護が溜め息混じりに言いながら、頭を抱える。
こんなに夜遅くまで、フランと一緒に出歩いていたのだ。
霊夢に何て言われた物が。

ロリコン。

そんな単語が一護の頭の中で泳いでいる。

「誤解されるだろうな」

弁解しようが、霊夢は恐らく聞く耳を持たないだろう。何せ、一護には不可抗力な前科があるのだから。

「…」

フランが月を見たまま黙っている。
何かあったのか？

「どうした、フラン？」

一護の言葉に我に返ったのか、少し表情がビクついた。因みに日傘は、太陽が出ていないので閉じている。

「え、えつとね…今日のお月様、少し変だな…って思って」

「月…？」

フランの言葉を聞いて、一護は月を見る。
今日は綺麗な満月で、深夜まで夜空を見ていたい気になるような感じだ。

「…満月がどうしたんだ？」

「少しだけ…あの満月、おかしくない…？ 形が」

「形？」

一護は満月をよく見る。
そして気付いた。

「満月が…欠けてやがる！」

そう、綺麗な満月のはずが、ほんの少しだけ欠けていたのだ。

その頃、博麗神社でも二人の女性が、その月の異変に気付いていた。

「…紫、月がおかしいわね」

「ええ、霊夢も気付いていたのね」

二人の女性が縁側に座りながら、欠けた満月を見ている。

その二人の正体は博麗霊夢と八雲紫。

二人がその異変に気付いたのは、ほぼ同時だった。

「異変…よね」

霊夢が自信の無い口調で言う。

「恐らくね。けど、こんな大掛かりな異変も久し振りね」

今までの大掛かりな異変といえば、紅霧異変、春雪異変の二つくらいである。

だが、これは一護が幻想入りしてからの異変であって、過去にもいくつか大掛かりな異変は起きている。

「…それじゃあ、とつとと解決に向かおうかしら。欠けた月の欠片を探しに」

霊夢が縁側から立ち上がり、異変解決に向かう事を決めた。それに続いて、紫も立ち上がる。

「それじゃあ、夜を明けないようにしないとね。朝が来たら、月の欠片なんて探し出せないでしょ」

「…どうするつもり？」

「夜と昼の境界を弄るだけよ。そうすれば、夜は明けないわ」

今、霊夢の前でも異変が起きようとしているが、今回は見逃す事にした。

ある意味では、月が欠けている事より夜が明けない異変の方が、人々にとっては大惨事である。

「さあ、今ここに幻想の結界チームの誕生よ」

そして紫は勝手にチーム名まで決めてしまった。

同時刻、霧雨魔理沙とアリス・マーガトロイドは魔法の森を歩いていた。

理由は月の様子がおかしいと言う理由でだ。

最初に気付いたのはアリスで、一人で調査しようとしたが、途中で

行き詰まり、魔理沙に協力を仰いだのだ。

「魔理沙…この異変は何が目的だと思っ？」

「え？」

アリスの唐突な質問に、魔理沙は答えに少し困る。

今までの異変には、目的があって行われていた。

紅霧異変では、太陽を隠すため。

春雪異変では、春を奪い妖怪桜を満開にさせるため。

アリスは今回なぜ、月が欠けているのか…その目的を聞いたのだ。

「え」と、分からないぜ」

満面の笑みで答える。

分からないのに満面の笑みで答えられると、何故かイラッと来る。

「アリスは分かるのか？」

魔理沙が聞き返してきた。

「え、私は…推測だけど、多分あの亡霊女が怪しいと思っの」

亡霊女。

幽々子の事だ。

「何で、幽々子が怪しいんだ？」

月と幽々子…一体何が関係しているのだろうか？

「あの亡霊女は、前に幻想郷中の春を奪った前科があるよね。それと同じよ。次は月を奪おうとしているのよ!」

自信たっぷりと言うアリス。

こんな馬鹿げた事、有り得る訳が無い。

「だったら何で、月を奪おうとしているんだ?」

とりあえず訊ねて見る魔理沙。

あの時、幽々子が春を奪っていた理由は、西行妖という妖怪桜を満開にさせる為である。

だが、今回は違う。

幽々子が月を奪ったところで、何のメリットがあるのだろうか?

「…魔理沙も分かるでしょ。満月を見ながら食べる団子やカレーは一段と美味しいの。あの亡霊女は大食いである。だから、あの大食い亡霊女は毎日満月を見ながら、美味しい食生活を送ろうとしているのよ」

つまり、食事を一段と美味しくする為に満月を奪おうとしている訳だ。

流石の魔理沙も、アリスの推測には全く信憑性が感じなかった。

「大丈夫か、アリス…頭」

魔理沙に頭の心配までされてしまった。

こいつに頭の心配をされてしまったら、頭の終わりは近い。

「まあいいわ。取りあえず動くわよ。今ここに禁呪の詠唱チームの

誕生よ」

そしてアリスは勝手にチーム名まで決めてしまった。

二人は気付いていなかった。

この会話がある人物に聞かれていたことを。

さらに同時刻。

紅魔館では、レミリア・スカーレットがフランの心配をしていた。フランの帰りが遅いからだ。

「遅いですね、妹様」

外を出窓から見ているレミリアに、十六夜咲夜が話しかけた。勿論だが、二人共満月の異変には気付いている。

「ええ、遅いわ。二人で一体何をやっているのかしら？」

「…そうですね。夜遅くまで男女がやる事といえば…」

咲夜は顔を赤らめながら言う。

そして、その続きを言おうとした途端。

「真面目に答えてくれるかしら、咲夜」

レミリアは呆れた表情で咲夜を制止する。これ以上言わせたら、何かと大変になる。

「失礼しました。…もしかしたら、博麗神社にでも泊まっているのでは？」

一言謝り、話を戻す。

「それは無いと思うわ。一護と二人で人里に向かう時に、必ず帰ってくるのよと言いついておいたから。もし、フランが途中で疲れて寝てしまって、博麗神社に泊まる事になったとして、何の連絡も無いのはおかしいわ」

「…何か事件に巻き込まれたのでしょうか？」

レミリアが今一番言われたくない、考えたくなかった事を言われた。必死に目を逸らしていた真実を言われてしまったのだ。

「…満月が欠けている上、フランまで行方不明。仕方ないわね……咲夜、出陣よ！」

レミリアは出窓を突き破り言う。

「はい、お嬢様！ そのお言葉を待っておりまして！」

咲夜はそれに乗る。

誰も出窓を突き破った事にはツッコまない。

「今ここに夢幻の紅魔チームの誕生です」

そして咲夜は勝手にチーム名を決めてしまった。

そのまた同時刻。

白玉楼で西行寺幽々子は満月を見ながら、縁側で団子を頬張っていた。

だが、途中で食べる手が止まる。

「ハァ、あまり美味しくないわ」

幽々子が滅多に口にしない発言をした。

美味しくないと。

だが、そう言いつつ、団子は全て平らげる。

「そうですか？ 私は美味しいと思います」

幽々子の隣で団子を食べている魂魄妖夢が言う。

「妖夢には分からないのお？ 団子はね、満月を見ながら食べるのが格別に美味しいのよ。それなのに、今日の満月は綺麗に欠けていて、満月じゃ無くなっている。だから、団子の味も落ちるのよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうよ」

幽々子の妙なこだわり。

だが、幽々子と同意見の人も多数居るだろう。

「…よし、こうなったら…私達で月を元通りに戻すわよ！」

急に幽々子が立ち上がり、異変の解決をする事にした。

理由は勿論、美味しい団子の味を取り戻す為である。
こんな理由で異変に立ち向かう人？は、前代未聞だろう。

「…あの、幽々子様…そんな急に言われましても…」

妖夢は突然すぎる幽々子の発現に、頭が付いて行かなくなっていた。

「今ここに幽冥の住人チームの誕生よ」

そして幽々子は勝手にチーム名まで決めてしまった。

もう妖夢は何を言っても、参加させられる事になってしまったのだ。

その頃、一護とフランも動きを見せようとしていた。

「フラン、俺は今から異変の解決を試みる。お前は先に帰っててくれ」

一護も他の四組と同様に、異変の解決に向かう事にした。
今から博麗神社に戻ったところで、霊夢は既に異変に気付き、解決に向かっていると思ったからだ。

「え、嫌だよ。私もいつちーと一緒に異変の解決に行きたい！」

突然のフランの発言に、一護は困惑する。

「いや、危ねえから。フランは帰った方が良くって」

とりあえず説得を試みる。

「嫌だ！ いっちーと一緒に行く！」

説得は効果が無いようだ。

「…しょうがねえな。じゃあ、付いてくるだけだぞ」

あっさりと引く一護。

これにより、フランは一護と同行する事となった。

「うん！ 分かったあ！」

嬉しそうに言うフラン。

「それじゃあ、今ここに禁忌の死神チームの誕生よ」

そしてフランは勝手にチーム名まで決めてしまった。

いつ決めたのだろうか？

こうして幻想の結界、禁呪の詠唱、夢幻の紅魔、幽冥の住人、禁忌の死神チームの計五チームが異変に乗り出す事になった。

第59斬 【異変解決チーム】（後書き）

<次回予告>

霊夢「久し振りの次回予告よ」

一護「帰ってきた感じはしねえが、確かに久し振りだな」

霊夢「でも、正直この次回予告、無いのと一緒によ。BLEACHのアニメと一緒にね」

一護「なっ……………今回は弾幕勝負が始めるぜ！」

霊夢「…悪あがきのような次回予告ね」

〔東方図鑑〕

「そっぴゃ、何で今までこのコーナーやんなかったんだ？」

文々。新聞を読んでいる霊夢に聞く。

「それは、これを読んだら分かるわよ」

そう言っつて、今読んでいた文々。新聞を一護に渡す。

よく分からないが、それを受け取り見てみる。

「何々、作者が受験だった為、考えるのが面倒で止めていた…だと一護の読み上げたように書かれてある。

「そうよ。単に受験勉強の為、書けなかつたって訳よ」

「んだよ、その理由」

「しかも、記事の下の方に、大きく受験合格と自慢たらしいように書かれてあるわ」

そう言われ、見てみると、記事の半分が受験合格と馬鹿でかく書かれてある。

「完璧にただの作者の自慢新聞じゃねえか！」

第60斬 【虫嫌い】

歪な月が浮かぶ幻想郷。

幻想郷では満月が欠けるといって、異変が起こっている。

満月が欠けている事は、人間からしてみれば別にどうでも良い事だが、妖怪からしたら大問題みたいだ。

そして、その異変は満月が沈むと解決できなくなる。

その為、紫が昼と夜の境界を操り、夜を止めている。

現在、異変を解決するべく二人一組のチームが五チーム動いている。幻想の結界、禁呪の詠唱、夢幻の紅魔、幽冥の住人、禁忌の死神チームだ。旨い事、人間と妖怪のタッグになっている。

この異変は一体誰の者による所業なのか…一体何の目的があるのか…。
全てはまだ、謎に包まれている。

現在、幻想の結界チームの霊夢と紫は暗い夜の森の中を飛んでいる。今日は蛍が活発に活動する日なのか、そこら中に沢山お尻を激しく光らせて飛んでいる。

「中々良いものね。夜道も」

紫が周りに飛んでいる光の球体…蛍を見ながら言う。

どこの世界でも、やはり暗い夜の蛍の輝きは良い物なのだろう。

「そうね。悪くは無いわ。けど、私はそんなに虫が好きじゃないのよね。どっちかってと嫌いな方」

霊夢はあまり好きでは無い様だ。

その証拠に、自分に近づいてきた蛍を手で追い払っている。

「初耳ね。あなたが虫嫌いなんて」

「誰にも言っていないもの。知ってる訳ないでしょ」

「あら、そうなの。で、何で虫が嫌いなの？」

「過去のトラウマもあるけど、一言で言つと…」

「あなた、さつきから蛍を拒絶しているようだけど、蛍の何が嫌なのわけ？」

と、いきなり紫でも霊夢でもない声が聞こえてきた。
だが…

「一言で言つと？」

紫も霊夢も完全に無視する。

「ちょっと、何無視してんのよ！」

無視されたのに憤ったのか、二人の前に立ち塞がる。

だが、二人共それすらも、何も居ないように素通りした。

「無視するなって言ってるでしょ！」

過ぎていった二人の方に振り向き、怒鳴りつける。

それでようやく二人は、その呼びかけに振り向いた。

そこには一人の少女がいる。

緑色のショートカットヘアに、頭部に虫の触角らしきものが生えている。

甲虫の外羽を模していると思われる燕尾状に分かれたマント、白シヤツに紺のキュロットパンツという、ボーイッシュな格好をしている。

「何か用？」

見ず知らずの妖怪に声を掛けられたので、霊夢が用を聞いた。

「用って…あなたがどうして虫を嫌っているのかを聞きたかったんだけど、もういいわ…」

少女がそう言うと、臨戦態勢に入る。

どうやら無視された事に怒ったらしい。

「弾幕ごっこでこてんぱんにブツ倒してやる」

そして少女は強引的に弾幕ごっこを仕掛けてきた。

最近、妖怪の殆どが短気に見えてくる。

「面倒くさいわね」

霊夢が溜め息混じりに言う。

「…虫の妖怪ね、霊夢。ちょうど、あなたの嫌いな」

紫が少女を見て言う。

虫の妖怪。

霊夢が嫌いな虫だ。

「虫は無視して先に急ぎたいところだけど、仕方ないわね」

霊夢がダジャレを交えて言う。

正直言っただけ。

「楽園の素敵な巫女 博麗霊夢よ。受けてたって上げるわ」

少女の挑戦を霊夢が受ける事にした。

「闇に蠢く光の蟲 リグル・ナイトバグ。虫の餌食にして上げるわ」

少女も二つ名と名前を名乗り、霊夢と弾幕ごっこをする事となった。

「とつとと終わらせて上げるから…ほら、掛かって来なさい」

霊夢が挑発的な態度を取り、手招きをして言う。

その態度に完全に憤ったのか、リグルは怒りで顔を赤くする。

「こんのお、くそ女ああ！！ 蠢符『ナイトバグトルネード』！」

リグルは激昂すると共に、スペルを唱えた。

自分の周囲に白い弾幕を配置する。

そして、そこから白い弾幕が緑色の米粒弾に変わり、拡散するよう
にばら撒かれた。

まるで卵から孵化した虫のような弾幕だ。

「最初から結構強力なスペルね…けど」

霊夢は向かってくる無数の弾幕を避け続ける。

当たってそうで当たっていない程の、紙一重で避けている。

「私には当たらないわよ」

「ッ!」

自分の弾幕を余裕な表情で避け続ける霊夢を見て、目を見開いて驚
く。

「くそ、どうして!?! 灯符『ファイヤフライフェノメノン』!」

リグルは新たなスペルを唱えた。

無数の米粒弾を全方位に放ちながら、霊夢狙いの青い弾幕が放たれ
た。

「さっきと代わり映えのしないスペルね」

「うるさい! 早く死んじまえ!」

「あのね、この程度で私に勝とうなんて…」

霊夢はそう言うと、迫ってくる弾幕を避けながら、リグルの方に向
かい、あっという間にリグルの背後に移動した。

「悪い冗談でしょ？」

リグルの背後に移動した霊夢が、リグルの耳元で呟いた。

「！！！」

リグルはそれを聞いた瞬間、恐怖にも似た表情になり、その場から即座に離れた。

離れている途中、霊夢はリグルに何もしない。

「威勢は良いようだけど、力はそれ程無いようね」

「くっ…っ、うるさいなあ！ 隠蟲『永夜蟄居』！！」

続けてリグルはスペルを唱える。

リグルの周囲に弾幕が配置され、それが米粒弾に変わり、拡散するようにはら撒かれた。

さっきの蠢符『ナイトバグトルネード』に似ているスペルだ。

「ふ〜ん。夢符『封魔陣』」

霊夢が初めてスペルを唱えた。

青白い結界が、霊夢の周りに展開され、リグルの弾幕から身を守る。

「うそ…でしょ…？」

自分の弾幕が全て、結界一つで防がれた事にリグルは驚く。

そして霊夢は、弾幕が止むのを確認すると、結界を解除した。

「今のは中々良かったわよ」

「…」

霊夢に褒められたリグルは何も言う事が出来なかった。

「…で、今のが全力なの？」

続けて言う霊夢。

それを聞いたリグルの表情が険しくなる。

「…そんな訳…ないでしょうがぁ!!」

リグルが力強くカードを取り出し、スペルを唱える。

「『季節外れのバタフライストーム』!!」

リグルを中心に台風の渦のような軌道で米粒弾を全方位に飛ばし、それを蝶々弾に変えて拡散させた。
カラフルに弾幕の色が変わり、とても綺麗だ。

（符名も何も付かないスペル…！ 私の夢想天生と同じ、強力なスペル…！）

霊夢がリグルのスペル名を聞き、少し驚く。

スペルカードには符名の次にカード名が付く。

例えば、霊符『夢想封印』、黒斬『月牙天衝』。

だが、稀に符名の付かないスペルカードが存在する。

そのスペルカードは、自分の持つ全てのスペルカードを超越した最

強のスペルで、このスペルを使う者は最後の手段で使う事が多い。
霊夢が昔、咲夜戦に使った『夢想天生』が、それに当たる。

「流石のあなたも、このスペルには歯が立たないようね」

何もしようとしない霊夢を見て、リグルが言う。

「どうやらリグルには、霊夢があまりにも強力過ぎるスペルを前に、諦めたと思っているようだ。」

「確かに驚いたわ」

霊夢は小さく呟く。

「けど、私には通じないわよ」

そう言うと、カードを取り出した。

「あなたとは踏んだ場数が違い過ぎるのよ。霊符『夢想妙珠』！」

霊夢がスペルを唱える。

その瞬間、霊夢の周りに光弾が展開され、一斉にリグルの弾幕を掻き消しながら、リグルに殺到する。

「何…!?!」

リグルはその光景を驚愕の眼差しで見る。

「そういえば、あなた。私がどうして虫を嫌っているかを聞きたがっていたわね」

あの時の事を思い出す。

リグルが現れた時、「あなたがどうして虫を嫌っているのかを」と言っていた。

その質問に霊夢は今、答えようとしている。

「私が虫を嫌っている理由はね、一言で言つと…」

霊夢のこのセリフに、観戦していた紫も、耳を傾ける。

さっき聞きそびれた事を、霊夢が言おうとしているからだ。

「…外見が気持ち悪いから」

霊夢が清々しい程の笑顔で答えた。

そして、それを聞いたリグルは同時に、霊夢の光弾に被弾した。これにより、リグルは完全にノックアウトする。

弾幕ごっこは霊夢の勝利で幕を閉じた。

第60斬 【虫嫌い】（後書き）

<次回予告>

紫「あなたが虫を嫌っている理由って、外見が嫌なのね」

霊夢「そうよ。何か悪い？」

紫「蝶なんかは、外見も綺麗で良いんじゃない？」

霊夢「…蛾は好き？ 紫」

紫「いえ、あまり好きじゃないわね」

霊夢「私からしたら、蛾も蝶も似たような物なのよ」

〔東方図鑑〕

霊夢は今、地面に下りて地に足を付いている。

そして、一つ不可解な事がある。

「何で、紫はこっちに来ないのかしら」

紫は少し霊夢から離れた空中にいる。

「…ねえ、紫！ 何でこっちに来ないの!？」

霊夢が紫の方に叫んで言う。

何故かは分からないが、紫が気持ち悪い物を見るような目で霊夢を見て答える。

「気持ち悪いからよ!」

目と同じ気持ちのことを、霊夢に言った。

「ハア!？ 何が気持ち悪いのよ!？」

それに少し、イラツときた霊夢は怒り交じりに言った。

自分の事を気持ち悪いと言われたような気がしたからだ。

「だってそこ、さっきの弾幕ごっここの弾幕の明かりで、沢山の虫が集まっているもの!」

それを聞いた霊夢の顔が青ざめる。

虫は明かりによって来る。

つまり…

「ぎゃあああああああああ！！！！」

恐る恐る自分の下を見た霊夢は、凄まじい悲鳴を上げた。

そう、下には沢山の気持ちの悪い虫がいたのだ。

「中々良い悲鳴ね」

紫が霊夢の悲鳴の感想を言った。

その悲鳴はかなり離れた場所にいる一護とフランにまで聞こえた。

「な、何だ…この怪獣のような叫び声は？」

どうやら、霊夢の叫び声は、一護からしたら怪獣のように聞こえたようだ。

第61斬 【暗闇】（前書き）

ニコ動の実況肝試しを見ていたら、書くのを忘れてしまっ、少し遅れてしまいました。

第61斬 【暗闇】

幻想の結界チームが、自分たちの前に立ち塞がったりリグルを倒した。霊夢は一護と違って、倒れた敵を介抱する程優しくはない。だから気絶したりリグルは放置して、先に進んでいた。

その頃、幽冥の住人チームの妖夢と幽々子は、夜の森林の上を飛んでいた。

何故か幽々子の片手には鳥肉の串焼きが握られている。どうやら晩飯の後のおやつと言う形で食べているようだ。

「妖夢うゝ、串焼きが残り一本になっちゃったよおゝ」

幽々子が哀愁を漂わせて言う。

さっきまで団子を食べていたのに、今は串焼き。

これ程食べているのに、どうして太らないのだろうか？

「異変が解決するまで我慢してください」

尤もな事を言う妖夢。

異変解決中に気の抜けた事を言われると、やる気を無くしてしまう。幽々子の場合は日常の殆どが、気の抜けた感じだから関係ないが…

「えゝ、妖夢のけちいゝ」

と、幽々子が小声で言うてくるが、無視する。

そして、幽々子が最後の鳥の串焼きを、口に入れようとした瞬間、幽々子の手から串焼きが無くなった。まるで、誰かに一瞬で取られた感じた。

「あれ…私の串焼きは？」

「幽々子様！ 敵です！」

呆然とする幽々子を前に、妖夢が言う。

妖夢は楼観剣を抜き構える。

妖夢の見据える先には、一人の少女が幽々子の串焼きを持って居る。背中に妙な羽が生えており、頭にはナイトキャップを被っており、それに背中の羽の飾りが付いている。

ジャンパースカートは雀のようにシックな茶色だが、曲線のラインにそって蛾をイメージしたような、紫のリボンが多数あしらわれている。

「あなたは、見たところ夜雀ですね」

妖夢が少女を確認して言う。

夜雀とは妖怪の一種だ。

「そうよ。よく知っているわね」

夜雀の少女が口を開いた。

「私は夜雀の怪 ミスティア・ローレイ。あなた達は？」

少女は二つ名と共に名乗り、次に妖夢達の名を尋ねてくる。

「私は半人半霊 魂魄妖夢です」

それに答える為に、妖夢も自分の二つ名と共に名乗る。
だが幽々子は…

「ちよつとく、私の串焼き返してよ」

と、ミスティアに奪われた胃袋補給材の串焼きを指差して言う。
そして、それを聞いたミスティアの表情が、少し険しくなる。

「…この串焼きは何で出来ているのかな？」

ミスティアが串焼きを前に突き出して言う。

「え、鳥だけど」

普通に答える幽々子。

「鳥だけど…じゃないわよ！ さっきも言ったけど、私は鳥なの！
鳥の妖怪！」

ミスティアが声を荒げて言う。

「だから何？」

「鈍いわね。今あなたは私の目の前で、私の同族を食べようとしているのよ。それを黙って見ていられると思う？」

「よく分からないけど、私の串焼き返してくれないかしら」

「…嫌だね」

そう言つて、ミスティアは串焼きを何処かへ放り投げた。

「ああー！ー！ー！」

それを見た幽々子が、期待通りの反応をする。

「な、何するのよおおおおお！！？」

幽々子が森林に落ちていった串焼きを拾いに行こうとする。それを妖夢は、幽々子の着物の襟を掴み、制止した。

「幽々子様、一度落ちた食べ物を拾いに行かないで下さい」

「妖夢！ 離して！ あれは私の生命線なの！！」

（いえ、既にあなた様は死んでいます！）

幽々子のポケ？に、妖夢は心の中でツツコミを入れる。

「…仕方ないわ」

幽々子は一言呟き、落ちた串焼きを追うのを止めた。諦めたと思つた妖夢は、掴んでいた襟を離す。

「妖夢…一つお願いを聞いてくれるかしら」

幽々子が表情を曇らせながら妖夢に言う。

「？はい、何でしょうか」

「…あの雀を…捕まえてちょうだい！」

唐突の幽々子のセリフに、妖夢は少し戸惑う。

「ど、どうしてですか…？」

「良いから捕まえなさい。それとも、私の命令が聞けないの？」

お願いから命令に早変わりした。

しかも、命令と変わると同時に、言葉に殺気が込められた。

「は、はい。分かりました…」

妖夢は幽々子に半脅され感覚でする事となった。

そして妖夢は、ミステリアに向き直る。

「そういう事で、あなたを一度捕縛させて頂きます」

ミステリアにそう言って、臨戦態勢に入る。

「私を捕縛…出来るものならやってみなさい」

ミステリアもそれに答えるように、臨戦態勢に入る。

こうして、一本の鳥の串焼きが原因で起きた弾幕勝負が始まる。

(あんまりやる気は起きないけど、これからの準備運動くらいにはなるかな)

「行くよ！ 声符『木菟咆哮』！」

ミスティアが先手でスペルカードを唱えた。

ミスティアを中心に全方位に、無数の弾幕がばら撒かれる。

「…捕縛するのは、思ったより大変そうですね」

妖夢は刀に、自分の霊力を込める。

そして、向かってくる弾幕を刀で斬り落としていった。

「けど、捕縛出来ないレベルではありません」

妖夢が鋭い視線で、ミスティアを見据えて言う。

その視線にミスティアは、少し恐怖を覚えた。

「直ぐに終わらせます！」

「きゃああああー！！ 妖夢格好良いー！」

妖夢がセリフを決めた後、幽々子がまるで妖夢のファンのような声を上げた。

「口を閉じていてください幽々子様」

注意する妖夢。

「…次は私から行きますよ。幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

妖夢はスペルを唱えた。

そして刀を横に一振りした瞬間、その軌跡から無数の弾幕が放たれた。

このスペルは昔、一護との弾幕ごっこに使用したスペルだ。

「そんなスペル喰らわないよ！ 毒符『毒蛾の鱗粉』！」

妖夢のスペルに対抗するように、ミステリアがスペルを唱えた。

ミステリアの周りに光の球体が幾つか現れ、その球体が動き始める。球体が動き出すと同時に、球体から弾幕が放たれた。

その弾幕が妖夢の弾幕を相殺していく。

「成程。この程度のスペルは効きませんか。では、これなら…」

そう言い、妖夢はカードを取り出し、スペルを唱える。

「獄炎剣『業風閃影陣』」

妖夢から複数の大弾が放たれ、それを妖夢が横一閃に斬る。

それにより、斬られた大弾から小さい弾幕が無数に発生した。そして妖夢はその弾幕に紛れ込んだ。

これにより妖夢の姿が確認できなくなった。

「弾幕に紛れ込んで、私に接近する魂胆ね」

ミステリアは妖夢の行動を推測する。

その推測は大正解だ。

妖夢の狙いは、弾幕と共にミステリアに近づき、人符『現世斬』で決着をつける事。

だが、それはミスティアに推測されてしまった。

「けど、私に通じるかな」

ミスティアは不敵な笑みをこぼし、カードを取り出す。

「暗闇に誘え。鷹符『イルスタードダイブ』！」

そしてスペルを唱えた。

刹那、妖夢の周りが真っ暗になる。

「！！」

妖夢は目を見開き、動きを止める。

その瞬間、妖夢に向かって暗闇から弾幕が飛んできた。

それを避け切る事が出来ず、被弾してしまう。

「ッ！」

被弾すると同時に、妖夢は真剣な眼差しで暗闇を見据え、構える。

そうしたお陰で、暗闇からの弾幕は避けれるようになった。

だが、ミスティアの位置が分からない。

「どう？　これが私の本当の力よ。あなたに、このスペルを破れるかな？　と言っても、その様子じゃ無理でしょうね」

どうやらミスティアには妖夢の姿が手に取るように分かるようだ。

「それじゃあ、そろそろ終わらせようかしら」

そうやって、ミステリアはカードを取り出し、スペルを唱える。

「これで終わりよ。夜雀『真夜中のコーラスマスター』！」

その瞬間、さっきの闇が更に侵食し、妖夢の視界をほぼ完全に奪った。

そして、放たれる弾幕の数も全てが上がった。

「く…ッ！」

流石の妖夢も、それを全て躲し切れず、何発か被弾してしまう。

(このままだと、負けてしまう…！)

休む事無く飛んでくる無数の弾幕。

そして暗闇に奪われた視界。

圧倒的に不利な状況だ。

(…だったら、この手で)

妖夢は攻略法を考えたのか、諦めず弾幕を避け続ける。ただ、それでも何発かは被弾する。

「そろそろ諦めたら？」

ミステリアは何の変わった動きも見せない妖夢に向かって言った。だが、妖夢は何も答えない。

「まったく、諦めの悪い」

仕方なくミスティアは、妖夢を撃ち落とすまで佇む事にした。

「……」

妖夢は黙ったまま弾幕を避け続ける。

そして、妖夢は何かが分かったのか、一瞬目を見開いた。

(…見つけた)

心の中で一言呟くと、カードを取り出した。

その光景にミスティアは、妖夢を凝視する。

「人符『現世斬』！」

妖夢がスペルを唱えると、刀に霊力が込められる。

「何をするつもりか知らないけど、私の居場所が分からなければ、何をしようと無駄よ」

「確かに、そうですね。けど、もし居場所が分かったら、どうでしょうね」

「……」

瞬間、妖夢は目にも留まらない速さで、ミスティアを完全に斬り抜けた。

「な……に……!?!?」

ミスティアは妖夢の攻撃を受けた。
そのせいか、暗闇が綺麗に消え去った。

「何で、私の位置が分かったの!？」

ミスティアは直ぐ様、妖夢の方に向き聞く。

「…簡単ですよ。私の半霊が、あなたの居場所を教えてくれたの」

「半霊…?」

ミスティアはそれを聞くと、妖夢の周りをフワフワ浮いている白い魂を見る。

「そうです。私と半霊は一心同体。つまり、あなたが人間の方の私に気を取られている間に、幽霊の方である私があるあなたの居場所を探ったの」

「反則ね…それ」

妖夢は半分が人間で、半分が幽霊。

即ち、妖夢の半身である幽霊が、ミスティアの位置を探り教え、人間である妖夢が、それを元にミスティアに攻撃を与えた。

「どうです? これでああなたの暗闇による攻撃法は、もう効きませんよ」

「…まだ、私には奥の手があるのよ」

ミスティアは最後のスペルを取り出す。

「さあ、再び暗闇に誘え。『ブラインドナイトバード』!!」

(符名の付かないスペルカード!)

ミスティアは符名の付かない最強のスペルを唱えた。

再び、妖夢の周りが暗黒に塗りつぶされた。

そして、今までの弾幕の速度、パワー、数が圧倒的に違った。その凄まじい弾幕が妖夢を襲う。

「今なら間に合う! 人鬼『未来永劫斬』!!」

妖夢はミスティアがスペルを唱えた後、直ぐにスペルを唱えた。

今ならまだ、ミスティアの位置が分かるからだ。

妖夢は向かってくる全ての弾幕を撃ち落とす。

「何!!!?」

ミスティアが自分の最強のスペルを軽々と撃ち落としていつている、妖夢の姿を見て驚愕する。

「どうして、私の最強のスペルが…こんな簡単に!?!」

迫り来る妖夢の姿を見て叫ぶ。

「日々の鍛錬の成果です!」

それに答えるように妖夢は言う。

そして、答えると同時にミスティアに一閃の刃を与えた。

これにより、ミステリアは完全に気を失った。

「これで捕縛完了です」

こうしてミステリアとの弾幕勝負は、妖夢が勝利を修め幕を閉じた。

第61斬 【暗闇】（後書き）

<次回予告>

妖夢「幽々子様、言われたとおりに捕縛しましたが、どうするのですか？」

幽々子「え、勿論食べるのよ」

妖夢「ええー！！！」

幽々子「冗談よ。私が人型の鳥妖怪なんて食べる訳ないじゃない」
妖夢「幽々子様が言ったのでは冗談に聞こえませんか」

〔東方図鑑〕

「そういえば、幽々子様のお腹ってどうなっているんですか？」

「…いきなり何を言い出すの妖夢」

「いえ、夕飯をあれだけ食べた後に団子と串焼きを食べられて、一体幽々様様の胃袋はどうなっていると思いませんか」

そう、幽々子は自分が食べた量より、食べた体積の方が多いのだ。

「私の胃袋はね、簡単に言うブラックホールなのよ」

真剣な表情で答える幽々子。

「え、あ…そ、そうだったんですか！」

完全に信じ込んでしまう妖夢。

（本当に妖夢は騙されやすいわね。退屈しないわ）

そんな妖夢を幽々子は微笑んで見ていた。

第62斬 【消えた人里】

幽冥の住人チームはミステリアを倒した。

何故、幽々子がミステリアの捕縛を妖夢に命令したかと言うと、ミステリアを食べる為だったらしい。

けど妖夢に止められて諦めてくれた。

そして現在、幽冥の住人チームは怪しい力を感じる方に向かって先に進んでいる。

その頃、夢幻の紅魔チームのレミリアと咲夜は人里に向かって飛んでいた。

なぜ人里かと言うと、フランが人里から帰って来ないからだ。

だから人里に行き、フランの手掛かりを探し出そうとしているのだ。

「妹様は人里にいるでしょうか？」

咲夜が隣を飛ぶ、レミリアに言う。

「分からないわ。けど、フランを見掛けた人間くらい居るでしょう。何たって、あの二人は目立つから」

一護は外来者で有名で、その上服装は周りとは全く違う。

フランは吸血鬼で、嫌でも目立つ。

この二人が一緒に人里になど歩いていたら、見掛けて忘れない人は居ないだろう。

そんな訳で、人里に着かないと何も出来ないのが現状なのだ。

同時刻、人里では。

夜がいつまでも明けない事に気付いた慧音は、外に出ていた。

「…おかしいな。夜が一向に明ける気配が見えない」

歪に欠けた月を見ながら呟く。

（月が欠けているのは、恐らくあいつの仕業だろうけど、夜が明けないのはおかしいな）

どうやら慧音は満月の異変の犯人を知っているようだ。

だが夜が明けない異変は、全く検討がつかないみたいだ。

それもそのはず。

何たって夜を明けないようにしているのは、幻想の結界チームの八雲紫の仕業なのだから。

すなわち、現在二つの異変が幻想郷で起こっている事になる。

満月が欠けている事。

紫の能力で夜が明けなくなっている事。

もう、どっちが悪役か分からない。

そして突然、慧音の前に一人の男が現れた。

「…お前は…」

慧音は男の方に視線を移す。

そこには白い死覇装を着た男…ウルキオラが立っていた。

「ウルキオラか」

慧音はウルキオラの名を言う。

どうやら慧音はウルキオラの事を知っているようだ。

「上白沢慧音、今すぐ貴様の能力で人里を消せ」

ウルキオラは慧音の名を言い、いきなり命令する。

「突然、何を言い出すんだ？」

突然、意味の分からない命令をされたので、少し戸惑う慧音。

「…俺は警告しに来ただけだ」

「何？」

「…直ぐに俺の言った意味が分かる」

ウルキオラはそう言い、慧音に背を向け歩き出す。

「ま…」

「今すぐ人里を消せ…俺が言いたいの、それだけだ」

慧音がウルキオラを止めようと、声を掛けたが、ウルキオラが慧音の声を遮り、一言言い残し、その場から消えた。

突然来て、直ぐに帰ってしまったウルキオラ。

人里を消せ。

警告だ。

(一体、何なんだ…あいつは?)

ウルキオラは会った時から、よく分からない人間?だった。

それは今でも変わらない。

けどウルキオラの言葉は、どうにも無視しておく訳にはいかない…
ように感じる。

「仕方ない」

慧音はウルキオラの言われた通り、行動を起こす事にした。

……

レミリアと咲夜は人里の前まで到着した。

だが、そこには…

「人里が…無い!」

そう、人里が無いのだ。

そこにある筈の民家、人間達…人間の里そのものが、忽然と姿を消してしまっている。

まるで最初から、そこには何も無かったかの様に。

「…咲夜、本当にここが人里なの？ ただの空き地のように見えるんだけど」

「間違いありません。私はあまり外出なされないお嬢様と違って、よく人里に来ますから、間違える訳がありません」

あまり外に出ないレミリアは兎も角、咲夜はよく里に買出しに来る為、今日の当たりになっている光景に訝しさを感じている。

その時、二人の目の前に一人の女性が現れた。

「やはり、ウルキオラの警告を聞いていて良かったようだ」

現れると同時に女性は口を開く。

「…あなたは誰？」

レミリアが女性に話しかける。

「私か？ 私は知識と歴史の半獣 上白沢慧音だ」

女性は二つ名と共に名乗る。

そう、そこには上白沢慧音が二人の前に立っていた。

「で、そんなお二人さんは？」

慧音が二人の事を聞く。

恐らく慧音はレミリアの事は知っているだろう。

何たって紅霧異変を起こした張本人で、新聞にも載っていたから。

「私はお嬢様に仕える紅魔館のメイド 十六夜咲夜です」

「私は紅魔館の主の紅い悪魔 レミリア・スカーレットよ」

二人も二つ名と共に、名乗る。

どうやら咲夜は人里にはよく来るが、慧音とは初対面のようだ。

「紅魔館の者か…」

慧音が呟くように言う。

「成程、ウルキオラの言った意味が分かったよ。貴様らが人里を狙う輩だな」

慧音が二人に向かって言う。

そのセリフに二人共、頭に？を浮かべている。

「あなたは、何か勘違いをしているのでは…」

咲夜が言う。

「人里を消しておいて正解だった」

慧音が一人事のように言ったセリフを、二人は聞き逃さなかった。

「…あなたが人里を消したのですか？」

「そうだ。私の能力、？歴史を食べる程度の能力？でだ」

「歴史を食べる程度の能力…？」

慧音の能力…歴史を食べる程度の能力。
能力だけを聞いただけでは、全く理解できない。

「そもそも、人間は居なかった事にした。今、このこの里の歴史は全て私が保護している。ここには元々何も無かった。人間も人間の里もだ。だから今すぐここから立ち去れ！」

「態度がムカつくわね。咲夜なんとかしなさい」

レミリアが慧音の態度にイラツと来たらしく、頭に怒りマークを付けている。

「はい、お嬢様。では、ここは幻想郷らしく…弹幕勝負で白黒つけましょう。私が勝てば、人里を戻す事。私が負ければ、素直に立ち去ります」

咲夜が提案する。

それに対し、慧音は少し思索する。

「…分かった。受けて立とう」

そして慧音はそれに乗った。

「それでは勝負ルールはお手軽に…一発でも弹幕に被弾した方の負け…それで宜しいでしょうか？」

「異論は無いわ」

咲夜が続けて勝負ルールを決めた。

一発でも被弾したら負け。
これで弾幕勝負は直ぐに決着がつくだろう。

「それでは、紅魔のメイド長のお見せ差し上げます」

「ああ…来い」

両者の弾幕勝負の幕が開いた。

「先手はもらいます。幻符『殺人ドール』」

咲夜が最初にスペルを唱えた。

無数のナイフの弾幕が慧音に殺到する。

「危険な弾幕だな。野符『GHQクライシス』」

慧音も咲夜の後にスペルを唱える。

弾幕が歯車のように回転しながら、咲夜の弾幕を撃ち落としていく。
そして、その慧音の無数の弾幕が一気に咲夜を襲う。

「強力なスペルね。だったら、こっちも強力なスペルで行くわ。幻葬『夜霧の幻影殺人鬼』」

咲夜が新たにスペルを唱える。

無数のナイフが現れ、それら全てが慧音の弾幕を相殺しながら、慧音に殺到する。

幻符『殺人ドール』の強化版のようなスペルだ。

「一発でも当たっては駄目なら、出し惜しみは無しだな。国体『三種の神器 郷』」

慧音も新たにスペルを唱える。

慧音から中弾が全方位に放たれた後、咲夜の方に無数の弾幕が放たれた。

最初の中弾が咲夜の弾幕を掻き消していき、その後から無数の弾幕が咲夜を狙う。

「強力なスペルを続けて使うのは結構キツイのですが…仕方ありませんね」

咲夜は新たにカードを取り出し、スペルを唱える。

「幻幽『ジャック・ザ・ルドビレ』!」

咲夜から大弾が前方に幾つか放たれる。

その大弾が慧音の弾幕を掻き消していく。

それだけじゃあ無い。

その後、咲夜は時間を止め、無数のナイフを慧音の周りに展開させる。

そして時間を動かす。

「!?!?何!」

慧音は目を見開く。

いきなり自分の周りにナイフの弾幕が展開されていたのだ。

驚いても仕方ない。

咲夜の展開しておいたナイフの弾幕が、一気に慧音に襲い掛かる。

「虚史『幻想郷伝説』！」

透かさず慧音はスペルを唱えた。

慧音から全方位に無数の弾幕とレーザーが放たれる。

「チツ」

咲夜が舌打ちする。

自分の弾幕が全て慧音のスペルにより、撃ち落とされたのだ。

「終わりだ、紅魔の従者！ 未来『高天原』！」

慧音がスペルを唱える。

全方位にほぼ隙間無くレーザーが放たれ、そして全方位に続けて米粒弾が発射される。

「これは不味いですね。流石の私も本気のスペルで行かないと、勝ち目は無い様です」

咲夜が額から汗を流して呟く。

一発でも被弾したら負け。

相手が本気のスペルで来たら、それ対応のスペルで対抗しないと、直ぐに被弾してしまう。

「『デフレーションワールド』！」

咲夜が符名の付かない強力なスペルを唱えた。

(あのスペルは…ヤバい!!)

慧音が咲夜の符名の付かないスペルを唱えたのを見て、身構える。瞬間、咲夜から単独で飛ぶ青と黄のナイフが放たれる。

そして咲夜がその次に時間を止め、どこからか無数のナイフの弾幕が一気に現れた。

それらが時間を動かすと同時に一気に放たれ、慧音の全ての弾幕を掻き消していく。

「やはり、無理か…」

慧音が消されていく自分の弾幕を見て言う。

「私の『デフレーションワールド』は時空を収縮させることで、投げたナイフの過去と未来を具現化させるスペルです。そう簡単には敗れませんよ」

咲夜が自分のスペルの説明をした。

そして咲夜が第二の攻撃をしようとする。

「成程、強力過ぎるスペルだ。なら、こっちも」

慧音が最後のカードを取り出す。

「見せてやろう。私の最強のスペルを」

慧音は自分の最強のスペルを宣言する。

「『日出づる国の天子』!」

慧音を中心に全く隙間の無いレーザーが全方位に放たれる。

これにより、咲夜は身動きが取れなくなった。

そして、その状態で咲夜狙いの弾幕が発射される。

このままだと咲夜が負ける。

だが、咲夜はその前に『デフレーションワールド』の第二撃を放った。

両者の最強のスペルが激突する。

そして…お互いに弾幕が行き届いた。

第62斬 【消えた人里】（後書き）

<次回予告>

慧音「私の歴史を食べる程度の能力は、特定の場所、人物、事象に對しての認識を操作する、一種の催眠や暗示のようなものなんだ。これにより一時的に人間の里を存在しなかったように見せかけているんだ。ここ、次のテストで出すからよく憶えて置くように」

霊夢「はい先生！ 歴史って美味しいんですか！？」

慧音「お前は何を聞いていたんだ…」

〔東方図鑑〕

「そういえば一護って、寺子屋に行った事があるのよね」

霊夢が一護に言う。

「ああ。あるぜ」

一護は慧音に寺子屋に来てくれと頼まれていたので、何度か顔を出した事がある。

「寺子屋の子が、生徒の中に額にごぶを作る人が居るって聞いたんだけど…何でなの？」

「…それは、慧音さんに頭突きを喰らってるからだ」

「え…？」

慧音さんに頭突き…？

どういう事だろう。

「慧音さんは宿題を忘れた生徒に頭突きを喰らわす癖があるんだ。それも、かなり痛いな」

「癖なの？」

「癖だ」

「癖で済まないわよ…それ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351t/>

東方幻想斬

2011年12月21日23時51分発行